九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告
—29—

朝倉郡朝倉町大字菱野所在妙見墳墓群・堤古墳の調査

1994

福岡県教育委員会

九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告
— 29 —

朝倉郡朝倉町大字菱野所在妙見墳墓群・堤古墳の調査

平成５年度

福岡県教育委員会

妙見墳墓群俯瞰

序

本書は、福岡県教育委員会が日本道路公団から委託を受けて、昭和５４年度から実施している九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査の記録であります。

今年度の報告書は、昭和５８年・６２年度に実施しました妙見墳墓群・堤古墳の調査結果を「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告」の第２９集としてまとめ刊行したものであります。本報告書をとおして文化財の愛護思想の普及活動の一資料および遺跡研究の一助となれば幸甚に存じます。

なお、発掘調査に際しまして多大のご尽力とご協力をいただきました地元の皆様方をはじめ、関係された各位に対して心より深く感謝いたします。

平成６年３月３１日

福岡県教育委員会

教育長　光　安　常　喜

例　　言

1　本書は、昭和58年・62年度に福岡県教育委員会が日本道路公団から委託を受け発掘調査を実施した福岡県朝倉郡朝倉町大字菱野に所在する妙見墳墓群・堤古墳の調査報告書で、「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書」の第29冊目にあたる。

2　本書の執筆分担は下記のとおりである。

Ⅰ……（佐々木隆彦・小池史哲）
Ⅱ……（佐々木）
Ⅲ－1.1･2･3……（　〃　）
Ⅲ－1.4……（土肥直美）
Ⅲ－2.1･2･3･4……（小　池）
Ⅲ－2.5……（土肥直美）

3　発掘調査における実測は、佐々木・小池・小田和利（県文化課）、日高正幸（現・小石原村教育委員会）のほか、高瀬セツ子・本石セツ子・後藤カミヨ・牟田サエ子の協力を得た。

4　妙見墳墓群・堤古墳出土人骨の鑑定及び執筆は、琉球大学医学部医学科解剖学第一講座・土肥直美先生にお願いした。

5　現場での写真は各担当者が撮影し、空中写真はフォト・オオツカに委託した。

6　出土遺物の整理作業は、文化課甘木事務所と九州歴史資料館で実施し、遺物の実測は佐々木・小池・平田春美、製図作業は豊福弥生・原カヨ子が行った。また、鉄器処理については九州歴史資料館の横田義章の指導で政住理英子・坂田ミチヨが行った。

7　出土遺物の写真撮影は、九州歴史資料館の石丸洋の指導で北岡伸一が行った。

8　挿図の方位はすべて座標北である。

9　本書の編集は、妙見墳墓群を佐々木、堤古墳を小池が担当した。

本 文 目 次

頁

Ⅰ　発掘調査の経過…… 1

Ⅱ　遺跡の位置と環境…… 7

Ⅲ　発掘調査の記録

1　妙見墳墓群の調査

1　遺跡の概要…… 9

2　遺構と遺物…… 10

(1) 墓　　地…… 10

(2) 落し穴遺構…… 67

(3) 貯蔵穴…… 70

(4) その他の遺物…… 71

3　小　　結…… 78

4　妙見墳墓群の出土人骨について…… 86

2　堤古墳の調査

1　はじめに…… 100

2　遺構と遺物…… 101

(1) 墳　　丘…… 101

(2) 主体部…… 102

3　遺物出土状況…… 102

4　おわりに…… 106

5　堤古墳の出土人骨について…… 108

図 版 目 次

巻頭図版　(1) 妙見墳墓群俯瞰

妙見墳墓群

図　版　1　(1) 妙見墳墓群俯瞰（気球写真による）
　　(2) 南側斜面墳墓群（北から）
図　版　2　(1) 7号墓付近墳墓群（東から）
　　(2) 1号墓（箱式石棺墓）目張粘土除去後の状態
図　版　3　(1) 1号墓石蓋除去後の状態（北から）
　　(2) 2号墓（箱式石棺墓）（東から）
図　版　4　(1) 3号墓（石棺系石室墓）（北から）
　　(2) 3号墓石蓋除去後の状態（東から）
図　版　5　(1) 3号墓側壁石積状態
　　(2) 4号墓全景（北から）
図　版　6　(1) 4号墓（箱式石棺墓）（北から）
　　(2) 5号墓（石蓋土壙墓）（北東から）
図　版　7　(1) 5号墓石蓋除去後の状態（南から）
　　(2) 6号墓全景（主体部は削平・南から）
図　版　8　(1) 7号墓全景（南から）
　　(2) 7号墓（箱式石棺墓）（北から）
図　版　9　(1) 7号墓周溝内集石遺構
　　(2) 7号墓周溝内土器出土状態
図　版　10　(1) 8号～10号墓（南から）
　　(2) 8号墓（箱式石棺墓）目張粘土除去後の状態（北から）
図　版　11　(1) 8号墓石蓋除去後の状態（北から）
　　(2) 11号墓全景（主体部は削平・北から）
図　版　12　(1) 11号墓周溝内土器出土状態
　　(2) 11号墓周溝内土器出土状態
図　版　13　(1) 12号墓全景（南西から）
　　(2) 12号墓（石蓋土壙墓）石蓋除去後の状態（東南から）

図　版　14　(1) 12号墓棺内鉄器出土状態
(2) 12号墓周溝内土器出土状態
図　版　15　(1) 13号墓全景と周溝内の18号墓（北から）
(2) 13号墓（箱式石棺墓）（大半が破壊・南から）
図　版　16 (1) 14号・28号墓付近（北から）
(2) 14号墓（石蓋岩盤刳貫墓）（北から）
図　版　17　(1) 14号墓人骨出土状態
(2) 14号墓人骨の指骨出土状態
図　版　18　(1) 14号墓棺内鉄器出土状態
(2) 15号墓全景（南から）
図　版　19　(1) 15号墓（石蓋土壙墓）石蓋除去後の状態（北東から）
(2) 16号墓（箱式石棺墓）目張粘土の状態（東から）
図　版　20　(1) 16号墓（箱式石棺墓）目張粘土除去後の状態（東から）
(2) 16号墓石蓋除去後の状態（東から）
図　版　21　(1) 16号墓粘土枕出土状態
(2) 17号墓全景と35号墓（南から）
図　版　22　(1) 17号墓（木棺墓）（北から）
(2) 17号墓周溝内土器出土状態
図　版　23　(1) 17号墓周溝内土器出土状態
(2) 18号墓（石蓋岩盤刳貫墓・13号墓周溝内）（南から）
図　版　24　(1) 18号墓石蓋除去後の状態
(2) 18号墓小口部掘削痕（頭位部）
図　版　25　(1) 19号・33号墓全景（西から）
(2) 19号墓（石蓋岩盤刳貫墓）石蓋除去後の状態（西から）
図　版　26　(1) 19号・33号墓周溝内土器出土状態
(2) 20号墓（箱式石棺墓）目張粘土状態
図　版　27　(1) 20号墓（箱式石棺墓）目張粘土除去後の状態
(2) 20号墓石蓋除去後の状態（西から）
図　版　28　(1) 20号墓粘土枕下の鉄器出土状態
(2) 21号墓（石蓋岩盤刳貫墓）（北東から）
図　版　29　(1) 21号墓石蓋除去後の状態（北西から）

(2) 22号墓（木蓋土壙墓）(南から)
図　版　30　(1) 23号墓（箱式石棺墓）（北から）
(2) 23号墓石蓋除去後の状態（東から）
図　版　31　(1) 24号墓（箱式石棺墓）目張粘土の状態（東から）
(2) 24号墓（箱式石棺墓）目張粘土除去後の状態（東から）
図　版　32　(1) 24号墓石蓋除去後と人骨出土状態（東から）
(2) 24号墓人骨除去後と石棺掘方の状態
図　版　33　(1) 24号墓粘土枕出土状態
(2) 25号墓（石蓋土壙墓）（北から）
図　版　34　(1) 25号墓石蓋除去後の状態
(2) 26号墓（木蓋土壙墓）（北から）
図　版　35　(1) 27号墓（木蓋土壙墓）（南から）
(2) 28号墓（箱式石棺墓）目張粘土の状態（北から）
図　版　36　(1) 28号墓（箱式石棺墓）目張粘土除去後の状態（北から）
(2) 28号墓石蓋除去後と人骨出土状態（東から）
図　版　37　(1) 28号墓棺内鉄器出土状態
(2) 28号墓人骨除去後の石棺
図　版　38　(1) 29号墓（木蓋土壙墓）（北から）
(2) 30号墓（木蓋土壙墓）（東から）
図　版　39　(1) 31号墓の周溝（主体部消滅）（東から）
(2) 32号墓（箱式石棺墓）（北から）
図　版　40　(1) 33号墓（石蓋岩盤刳貫墓）（西から）
(2) 33号墓石蓋除去後の状態（西から）
図　版　41　(1) 35号墓（石蓋土壙墓）目張粘土の状態（西から）
(2) 35号墓（石蓋土壙墓）目張粘土除去後の状態（西から）
図　版　42　(1) 35号墓石蓋除去後の状態（西から）
(2) 35号墓粘土枕の状態
図　版　43　(1) 36号墓（木蓋土壙墓）（西から）
(2) 37号墓（箱式石棺墓）（北から）
図　版　44　(1) 14号・28号墓西側溝内集石遺構（南から）
(2) 1号落し穴遺構（北から）

図　版　45　(1)　2号落し穴遺構（北西から）
　　(2)　3号落し穴遺構（北から）
図　版　46　(1)　貯蔵穴と土器出土状態（北から）
　　(2)　発掘調査風景
図　版　47　4号・6号・7号・11号墓出土土器
図　版　48　12号・14号・17号(27号)・19号墓出土土器
図　版　49　19号・20号墓出土土器、21号・24号墓装身具、4号・12号・14号・17号・20号・28号墓出土鉄器
図　版　50　(1)　28号墓出土鉄器付着の布痕（約2倍）
　　(2)　28号墓出土鉄器付着の布（約2倍）
図　版　51　妙見6・7号墳(?)、貯蔵穴出土土器と表採遺物

出土人骨

図　版　1　14号墓人骨（男性）
図　版　2　16号墓（男性）・23号墓（男性）・24号墓人骨

堤古墳

図　版　52　(a)　調査前の状況
　　(b)　蓋石露出状況
図　版　53　(a)　蓋石除去後の石室（南から）
　　(b)　蓋石除去後の石室（東から）
図　版　54　(a)　人骨出土状況（東から）
　　(b)　人骨出土状況（西から）
図　版　55　(a)　石室南壁
　　(b)　石室北壁
図　版　56　(a)　石室東壁
　　(b)　石室西壁
図　版　57　(a)　遺物出土状況1・2
　　(b)　出土遺物

出土人骨

図　版　1　1号人骨（男性）
図　版　2　2号（女性）・3号（女性）人骨

挿図目次

本文対象頁

第 1 図 九州横断自動車道路線図…… 2
第 2 図 妙見山古墳群配置図…… 3
第 3 図 遺跡周辺地形図(1/1,000) ……折り込み
第 4 図 遺跡と周辺の主要遺跡分布図 (1/50,000) …… 8

妙見墳墓群

第 5 図 妙見墳墓群地形図 (1/200)……折り込み
第 6 図 妙見墳墓群遺構配置図 (1/200)……折り込み
第 7 図 1号墓実測図 (1/60) …… 10
第 8 図 1号墓 (箱式石棺墓) 実測図 (1/30) …… 11
第 9 図 2号墓 (箱式石棺墓) 実測図 (1/30) …… 12
第 10 図 3号墓 (石棺系石室墓) 実測図 (1/30) …… 13
第 11 図 4号墓実測図 (1/60) …… 14
第 12 図 4号墓 (箱式石棺墓) 実測図 (1/30) …… 15
第 13 図 4号墓周溝内出土土器実測図 (1/3)…… 15
第 14 図 4号墓棺内出土鉄器実測図 (1/2)…… 15
第 15 図 5号～7号墓実測図 (1/60) …… 16
第 16 図 5号墓 (石蓋土壙墓) 実測図 (1/30) ……折り込み
第 17 図 6号墓周溝土層断面図 (1/30) …… 17
第 18 図 6号墓周溝内土器出土状態実測図 (1/30) …… 17
第 19 図 6号墓周溝内出土土器実測図 (1/3)…… 18
第 20 図 7号墓 (箱式石棺墓) 実測図 (1/30) …… 19
第 21 図 7号墓周溝内集石遺構実測図 (1/30) …… 20
第 22 図 7号墓周溝土層断面図 (1/30) …… 21
第 23 図 7号墓周溝内出土土器実測図 (1/3)…… 21
第 24 図 7号墓周溝内出土石器実測図 (1/3)…… 21
第 25 図 8号墓 (箱式石棺墓) 実測図 (1/30) …… 22
第 26 図 9号墓 (箱式石棺墓) 実測図 (1/30) …… 23
第 27 図 10号墓 (土壙墓) 実測図 (1/30) …… 24
第 28 図 11号墓実測図 (1/60) …… 25

第 29 図 11号墓周溝土層断面図 (1/30) …… 26
第 30 図 11号墓周溝内土器出土状態実測図 (1/30) …… 26
第 31 図 11号墓周溝内出土土器実測図 (1/3) …… 27
第 32 図 12号墓実測図 (1/60) …… 27
第 33 図 12号墓 (石蓋土壙墓) 実測図 (1/30) …… 28
第 34 図 12号墓周溝内出土土器実測図 (1/3) …… 29
第 35 図 12号墓棺内出土鉄器実測図 (1/2) …… 29
第 36 図 13号・18号墓実測図 (1/60) …… 30
第 37 図 13号墓 (箱式石棺墓) 実測図 (1/30) …… 31
第 38 図 13号墓周溝土層断面図 (1/30) …… 31
第 39 図 14号・28号墓付近墓地群実測図(1/60) …… 折り込み
第 40 図 14号墓 (石蓋岩盤刳貫墓) 実測図 (1/30) …… 32
第 41 図 14号墓出土人骨実測図 (1/20) …… 33
第 42 図 14号・28号墓周溝土層断面図 (1/30) …… 33
第 43 図 14号墓周溝内出土土器実測図 (1/3) …… 34
第 44 図 14号墓棺内出土鉄器実測図 (1/2) …… 34
第 45 図 15号墓実測図 (1/60) …… 35
第 46 図 15号墓 (石蓋土壙墓) 実測図 (1/30) …… 35
第 47 図 16号墓 (箱式石棺墓) 実測図(1/30) …… 36
第 48 図 17号・19号墓付近墓地群実測図(1/60) …… 折り込み
第 49 図 17号墓 (木棺墓) 実測図(1/30) …… 37
第 50 図 17号墓周溝土層断面図(1/30) …… 38
第 51 図 17号墓周溝内土器出土状態実測図(1/30) …… 39
第 52 図 17号墓周溝内出土土器実測図(1/3) …… 40
第 53 図 17号墓棺内出土鉄器実測図(1/2) …… 41
第 54 図 18号墓 (石蓋岩盤刳貫墓) 実測図 (1/30) …… 42
第 55 図 19号墓 (石蓋岩盤刳貫墓) 実測図(1/30) …… 43
第 56 図 19号墓周溝内出土土器実測図(1/3) …… 44
第 57 図 20号墓実測図(1/60) …… 45
第 58 図 20号墓 (箱式石棺墓) 実測図(1/30) …… 46
第 59 図 20号墓北東側溝土層断面図(1/30) …… 47
第 60 図 20号墓北東側溝内出土土器実測図(1/3) …… 47
第 61 図 20号墓棺内出土鉄器実測図(1/2) …… 47

第 62 図 21号墓（石蓋岩盤刳貫墓）実測図(1/30)…… 48
第 63 図 21号墓棺内出土装身具実測図(1/1) …… 48
第 64 図 22号墓（木蓋土壙墓）実測図(1/20)…… 49
第 65 図 23号墓（箱式石棺墓）実測図(1/30)…… 50
第 66 図 24号墓（箱式石棺墓）実測図(1/30)…… 51
第 67 図 24号墓棺内出土装身具実測図(1/1) …… 52
第 68 図 25号墓（石蓋土壙墓）実測図(1/30)…… 52
第 69 図 26号墓（木蓋土壙墓）実測図(1/30)…… 53
第 70 図 25号・26号墓西側溝集石遺構実測図(1/40)…… 54
第 71 図 25号・26号墓西側溝土層断面図 (1/30) …… 55
第 72 図 27号墓（木蓋土壙墓）実測図(1/30)…… 55
第 73 図 28号墓（箱式石棺墓）実測図(1/30)…… 折り込み
第 74 図 28号墓棺内出土鉄器実測図(1/2) …… 57
第 75 図 29号墓（木蓋土壙墓）実測図(1/30)…… 58
第 76 図 30号墓（木蓋土壙墓）実測図(1/30)…… 58
第 77 図 31号墓実測図(1/60)…… 59
第 78 図 31号墓周溝内出土土器実測図(1/3) …… 59
第 79 図 32号墓（箱式石棺墓）実測図(1/30)…… 60
第 80 図 33号墓（石蓋岩盤刳貫墓）実測図(1/30)…… 62
第 81 図 34号墓（木蓋土壙墓）実測図(1/20)…… 63
第 82 図 35号墓（石蓋土壙墓）実測図(1/30)…… 64
第 83 図 36号墓（木蓋土壙墓）実測図(1/30)…… 65
第 84 図 37号墓（箱式石棺墓）実測図(1/30)…… 66
第 85 図 38号墓（石蓋土壙墓）実測図(1/30)…… 66
第 86 図 1号落し穴実測図 (1/20) …… 67
第 87 図 2号落し穴実測図 (1/20) …… 68
第 88 図 3号落し穴実測図 (1/20) …… 69
第 89 図 貯蔵穴実測図 (1/20) …… 70
第 90 図 貯蔵穴出土土器実測図(1/4) …… 71
第 91 図 表面採集土器実測図(1/3) …… 71
第 92 図 頂部西斜面採集土器実測図その1 (1/3)…… 72
第 93 図 頂部西斜面採集土器実測図その2 (1/3)…… 73
第 94 図 南斜面採集土器実測図 (1/3)…… 74

第 95 図 南・西斜面採集石器実測図 (1/2)…… 75
第 96 図 墓の形態と頭位方向図 (1/400)…… 79
第 97 図 石蓋の種類と副葬・供献遺物分布図…… 79
第 98 図 折り曲げた副葬鉄器 (1/2・1/3) …… 83

出土人骨

図 1 頭蓋最大長、最大幅、長幅示数の比較…… 98
図 2 中顔幅、上顔高、上顔示数の比較…… 99
図 3 眼窩幅、眼窩高、眼窩示数の比較…… 99

堤古墳

第 99 図 堤古墳周辺地形図 (1/1,500)…… 100
第 100 図 堤古墳石室実測図1(1/30) …… 103
第 101 図 堤古墳石室実測図2(1/30) …… 104
第 102 図 出土鉄製品実測図1(1/4)…… 105
第 103 図 出土鉄製品実測図2(1/4)…… 105
第 104 図 出土土器拓影図 (1/3)…… 105
第 105 図 調査風景…… 106

出土人骨

図 1 頭蓋最大長、最大幅、長幅示数の比較…… 110

表目次

妙見墳墓群

表 1 各墓地の計測表…… 76
表 2 各墓地の頭位方角表…… 80
表 3 折り曲げた副葬鉄器一覧…… 82

妙見出土人骨

表 1 妙見墳墓群出土人骨一覧…… 86
表 2 頭蓋主要計測値…… 93
表 3 頭蓋非計測的小変異…… 94
表 4 上肢骨主要計測値表…… 94
表 5 下肢骨主要計測値表…… 95

表　6　歯冠計測値表…… 96
表　7　四肢骨主要計測値比較表…… 97
表　8　推定身長の比較表…… 98
表　9　歯冠計測値から求めた被葬者のQ－相関係数…… 98

堤出土人骨

表　1　頭蓋主要計測値…… 111
表　2　頭蓋非計測的小変異…… 111
表　3　歯冠計測値表…… 112
表　4　上肢骨主要計測値表…… 112
表　5　下肢骨主要計測値表…… 113
表　6　四肢骨主要計測値比較表…… 113
表　7　推定身長の比較表…… 114

Ⅰ　発掘調査の経過

九州横断自動車道朝倉工区の菱野地区は、麻底良山（標高294.9m）から西側に派生した低丘陵上や筑後川により形成された河岸段丘上にあり、遺跡の密集する地区である。今回報告する妙見墳墓群は29地点（ＳＴＡ206＋60～210＋90）に相当し、29－Ａ地点は原の東遺跡、29－Ｂ地点が妙見墳墓群である。

また、堤古墳は、本線工事の工事用道路部分で確認された古墳で、当初地点名としては列挙していない遺跡であるが、今回の報告書に掲載することとした。以下、２遺跡の調査経過を遺跡ごとに述べることとする。

妙見墳墓群の調査経過

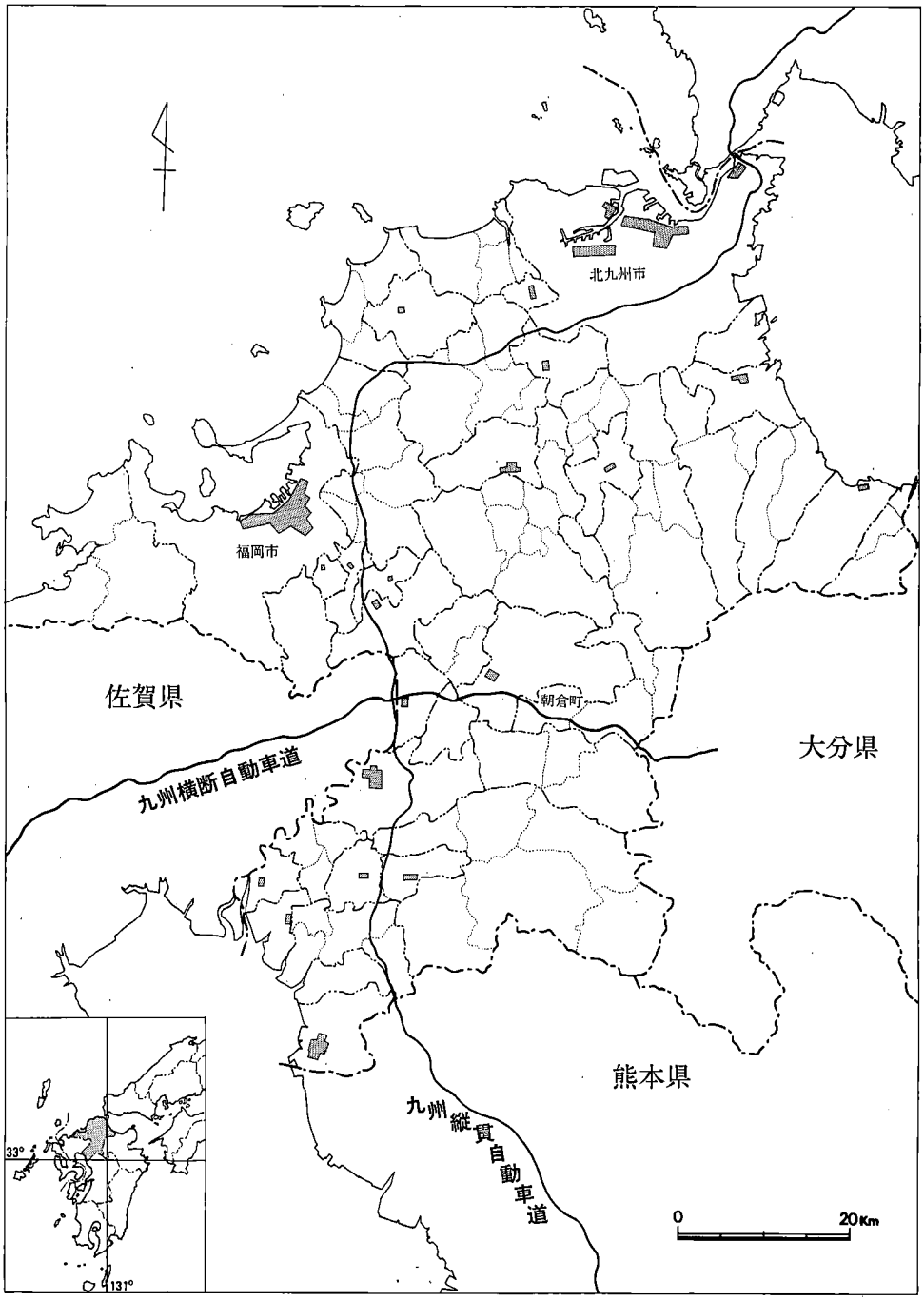
妙見墳墓群の調査は、原の東遺跡（第２次調査、第１次調査は昭和58年度に実施）の途中から開始した。原の東遺跡の第２次調査（昭和62年６月９日～昭和63年３月26日まで実施）では、先土器時代から奈良時代までの遺構が錯綜していた。このため、まず新しい奈良時代（竪穴住居跡）・古墳時代（円墳）・弥生時代（竪穴住居跡・貯蔵穴）までの各遺構の調査を終了させ、下層の縄文時代早期の集石炉を検出した段階で、同年度に29－Ｂ地点も調査を終了する必要性から、作業員を二班に別けて２遺跡を同時並行して調査することとした。

妙見墳墓群は上記の理由で昭和62年８月３日から表土剥ぎを開始し、63年１月14日までの約５ケ月間調査を実施した。発掘調査面積は4,660㎡である。調査は、重機による表土剥ぎから開始したが、調査区内の中央部に高圧線が南北に走っているため、重機の稼働を一時中断し、８月10日に九州電力久留米営業所の担当職員と現地協議を行い、８月17日に表土剥ぎの立ち会いを行うことを決定した。重機による表土剥ぎは９月３日で終了したが、その間調査担当者は、原の東遺跡の弥生時代と古墳時代の遺構実測を並行させ、一部作業員は妙見墳墓群の調査区周辺が柿畑であるため、調査区内にシガラミを組む作業に従事した。

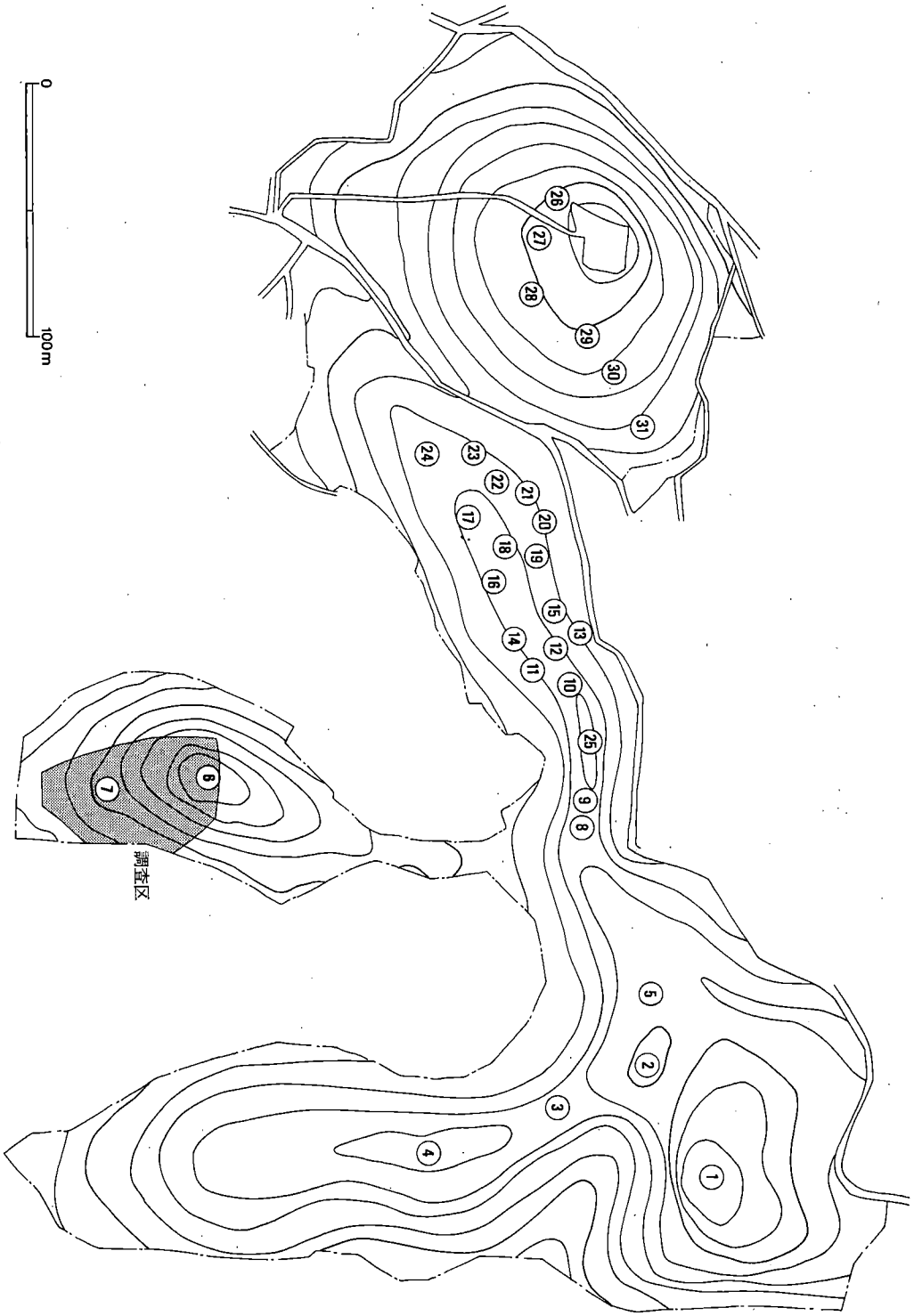
また、８月下旬には昭和62年５月に九州横断道建設予定地内の杷木工区で発掘した「西の迫高地性遺跡」の講演会を予定していたため、その準備などで慌ただしい日々が続いた。

以上のような紆余曲折はあったものの、妙見墳墓群の本格的な作業の開始は、９月９日からであった。

遺跡は舌状丘陵の頂部から南斜面に分布していたが、丘陵全体が柿畑で雛壇状に開墾され旧地形を残すところは少なく、丘陵の裾部付近のみが旧状を保っていた。調査は丘陵頂部から開始したが、頂部西斜面の遺構の存在しない箇所から多数の須恵器が散乱した状態で出土した。この須恵器は６世紀後半から末頃の所産で、調査区内で確認した墳墓群とは無関係の遺物であ



第１図　九州横断自動車道路線図(約1/400,000)



第２図　妙見山古墳群配置図（埋もれていた朝倉文化から）

ることが判明した。つまり、この須恵器の一群は、昭和40年に樹園地造成のため福岡県立朝倉高等学校によって調査がなされた妙見古墳群の中の一古墳の遺物であると理解される。第２図で示した古墳の分布図で判断すると、今回調査した妙見墳墓群は、三叉状に展開する丘陵の中央に突出した丘陵の南斜面に相当すると考えられ、丘陵の頂部には６号墳、南斜面には７号墳がある。丘陵頂部西斜面で採集した須恵器は６号墳の供献遺物であり、南斜面の周溝状遺構内から出土した須恵器は７号墳の周溝に伴う遺物である可能性が強く、今回出土した須恵器は朝倉高校から出版されている『埋もれていた朝倉文化』に掲載されている上記の古墳の出土遺物と年代的には符合する。

調査区内の遺構検出が終了した段階で、前述したように柿畑で地形が変更された部分には遺構は現存していなかったが、丘陵南斜面の尾根線に沿った状態で古墳時代前期の墳墓群が形成されていた。

墳墓群の内訳は方形周溝墓13基（大半が削平され完存しているのは14号・２８号墓を取り巻く周溝のみ）で、この内主体部が削られた墓、あるいは殆ど削平されている墓は６基を数える。30号墓は他の周溝墓とは異なり平面形状が円形を呈している。

また、主体部では箱式石棺、石蓋土壙墓、石蓋岩盤刳貫墓、木棺墓、木蓋土壙墓などがありさまざまな主体部を採用しており、調査した墳墓群の総数は38基を数えるが、調査した区域内では頂部の１号墓が墓域の北限と考えられ、南斜面の31号墓以南は削平を受け不明瞭であるが大きな広がりはないと考えられる。

その他の遺構としては、縄文時代の落し穴３基、弥生時代の貯蔵穴１基などを丘陵の東斜面で検出した。

以上が妙見墳墓群の調査の概略であるが、調査年度は現場担当者が九州歴史資料館内の文化課整理業務の担当も兼ねていたため、度々現場を離れることが多く、その都度他の職員の温かい援助に支えられ約５ケ月間の調査が無事終了したことを申し添えておきたい。

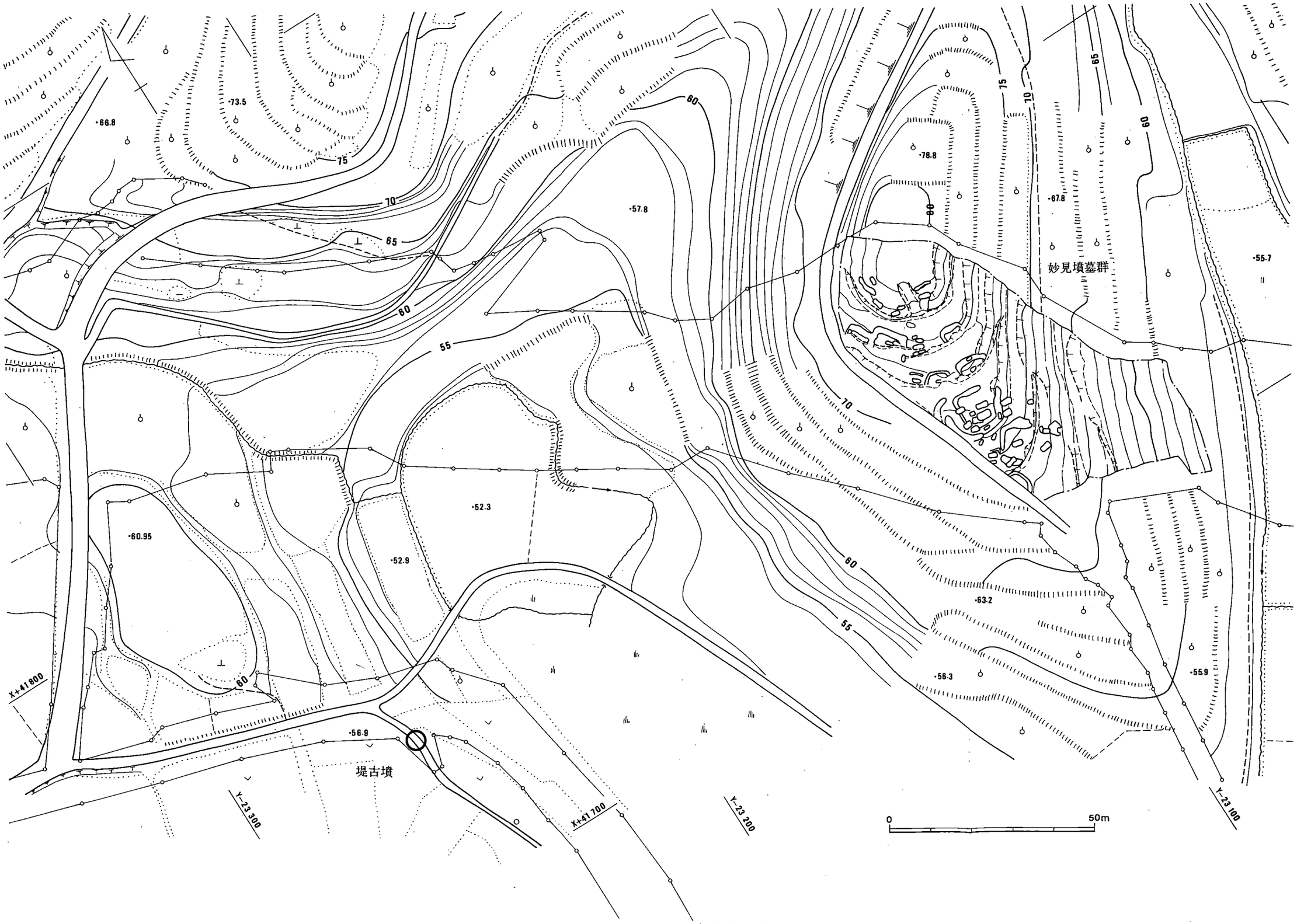
堤古墳の調査経過

堤古墳は、福岡県朝倉群朝倉町大字菱野字堤および小松原に所在する。九州横断自動車道建設に伴う工事用道路を設置する際に発見され、1983年９月13～22日に発掘調査した。

この古墳は、横断道本線用地内の妙見古墳群調査区の南西方向約160ｍにあり、原の東遺跡調査区の南東約120ｍの位置でもある。

発見時の状況

古墳が発見されたのは、もともと柿畑につづく農道になっていた部分で、工事用道路建設に伴って取り付く農道を拡幅・地下げしたためで、第27地点の長島遺跡・第29地点の原の東遺跡



第３図　遺跡周辺地形図(1/1,000)

を調査中の９月８日に工事実施業者から「石棺らしい石がある」と連絡があった。現地では、蓋石とみられる石が少し動いて隙間を生じていて、隙間からは内部が赤色に染まっているのと頭蓋骨などが存在することが確認された。石棺ないし石室であることは確実であった。

このため、道路公団朝倉工事区長および工事実施者と協議し、現状保存するにしても発掘調査を実施すべきであるとの確認に至り、調査の間は工事を中断することとなった。とりあえず土嚢で仮覆いをし、農道利用者の承諾を取り付けるとともに、調査のスケジュール調整を図ることにして、緊急に発掘調査する運びとなった。

実施にあたり、工事施工の株式会社塩見組と担当の後藤良一の協力を得た。

９月13日　蓋石を露呈させて清掃する。蓋石は一部崖面に潜るが、崖面の土層を観察する。清掃終了後、写真撮影する。

９月14日　蓋石を実測した後、蓋を開ける。竪穴式石室であることが分かる。

９月15日　石室内の清掃作業を実施する。

９月16日　石室内の写真撮影をした後、人骨等の出土状況を実測し始める。

９月18日　出土状況の実測終わる。

９月19日　石室の実測をする。

９月20日　実測作業を終了する。

９月22日　土嚢を石室内に詰め込み、蓋をして覆う。

工事は、取付道路の傾斜角度でやや急斜面になったが、石室を破壊せずに埋め込みで舗装処理してもらった。

なお、妙見墳墓群、堤古墳の調査関係者は、下記のとおりである。

	昭和58年度	昭和62年度
日本道路公団福岡建設局		
局　長	今村　浩三	杉田　美昭
次　長		菱刈　庄二
総務部長	落合　一彦	安元　富次
管理課長	梅田　道人	森　宏之
管理課長代理	野口　利夫	三野　徳博
日本道路公団福岡建設局甘木工事事務所		
所　長	乗松　紀三	風間　徹
副所　長	西田　功	西田　功
副所　長（技術）	中村　義治	友田　義則
庶務課長	松下　幸男	徳永　登

用地課長	岩下　剛	松尾　伸男
工務課長	山口　宗雄	後藤二郎彦
朝倉工事区長	平沢　正	上野　満

福岡県教育委員会

総　括	昭和58年度	総　括	昭和62年度
教育長	友野　隆	教育長	竹井　宏
教育次長	安部　徹	教育次長	大鶴　英雄
管理部長	伊藤　宏之	指導第二部長	大平　岩男
指導第二部長		文化課長	窪田　康徳
文化課長	藤井　功	文化課長補佐	平　聖峰
文化課長補佐	中村　一世	文化課長技術補佐	宮小路賀宏
庶務・管理		庶務・管理	
庶務係長	松尾　満	庶務係長	加藤　俊一
事務主査	長谷川伸弘	事務主査	竹内　洋征
調　査		調　査	
九州大学医学部第二解剖学教室		九州大学医学部第二解剖学教室	
	中橋　孝博		中橋　孝博
	土肥　直美		土肥　直美
調査第二係長	栗原　和彦	調査班　総　括	柳田　康雄
主任技師	木下　修	総括補佐	井上　裕弘
〃	新原　正典	技術主査	木下　修
〃	児玉　真一	〃	中間　研志
〃	中間　研志	主任技師	佐々木隆彦(調査担当)
〃	小池　史哲（調査担当）	〃	伊崎　俊秋
技師	伊崎　俊秋	技師	小田　和利
文化財専門員	木村幾多郎	文化財専門員	木村幾多郎
臨時職員	日高　正幸	〃	日高　正幸
調査補助員	平島　文博	調査補助員	高田　一弘
	向田　雅彦		武田　光正
	小田　和利		佐土原逸男
	田中　康信		
整理指導員	岩瀬　正信	整理指導員	岩瀬　正信

Ⅱ　遺跡の位置と環境

妙見墳墓群と堤古墳は、福岡県朝倉郡朝倉町大字菱野にあり、それぞれの字名は妙見と堤・小松原に相当する。

朝倉町の東側の筑後川の右岸に聳える麻底良山（標高294.9m）から派生し南西に延びる丘陵が狭隘な谷水田を伴って幾重にも連なるこの地域は、奈良ケ谷川と妙見川で形成された扇状台地と筑後川によって形成された河岸段丘が広がり、遺跡の密集度の高い地域である。現在確認されているだけでも数多くの群集墳が残っているが、朝倉町から杷木町にかけては柿・葡萄・梨などの果物の産地であり、過去の果物園造成により多数の古墳群とそれ以前の埋蔵文化財が消滅した地域でもある。

この度調査した妙見墳墓群と堤古墳は、麻底良山の西側でほぼ南西に流れる奈良ケ谷川と妙見川とに挟まれた標高200m前後の入り組んだ丘陵の南西端の小丘陵上とその谷部（台地上）に位置し、両者は直線距離にして160mを測る。

妙見墳墓群は、三叉状に展開する標高80m前後の丘陵上の中央の舌状丘陵の南斜面（標高79.0～59.0m）に形成している。前項で述べたように、この墳墓群の丘陵と周辺の丘陵は、昭和39年末～40年にかけて果物園造成のため事前に福岡県立朝倉高校史学部が調査し、箱式石棺墓・石蓋土壙墓・石棺系竪穴式石室・後期古墳など総数31基が発掘されており、妙見古墳群としてつとに有名である。調査結果では基幹丘陵の尾根線上に最も古墳が多く分布していた。

近隣の遺跡を概観すると、九州横断自動車道関係で調査した遺跡は、西側台地上に先土器時代から奈良時代にかけての複合遺跡である「原の東遺跡」がある。この遺跡からは縄文早期の集石炉が多数発掘され注目された。南東隣には奈良時代を中心とした集落跡を検出した「鎌塚遺跡」が（22集）として報告されている。墳墓群の南側500mには三段築成で円筒埴輪を伴う前方後円墳の「剣塚古墳」が東西に墳軸を向け築造されている。この古墳の築造されている台地上は、横断自動車道関係の線上でも数多くの遺跡が発掘されており、面的な広さで見ると無数の遺跡が分布していることは想像に難くない。当然、今回調査した古墳時代前期の墳墓群の背後にはこれを共有した集団の集落が存在することは言うに及ばないが、いまだ発見に至っていない。今後の周辺の調査に期待したい。

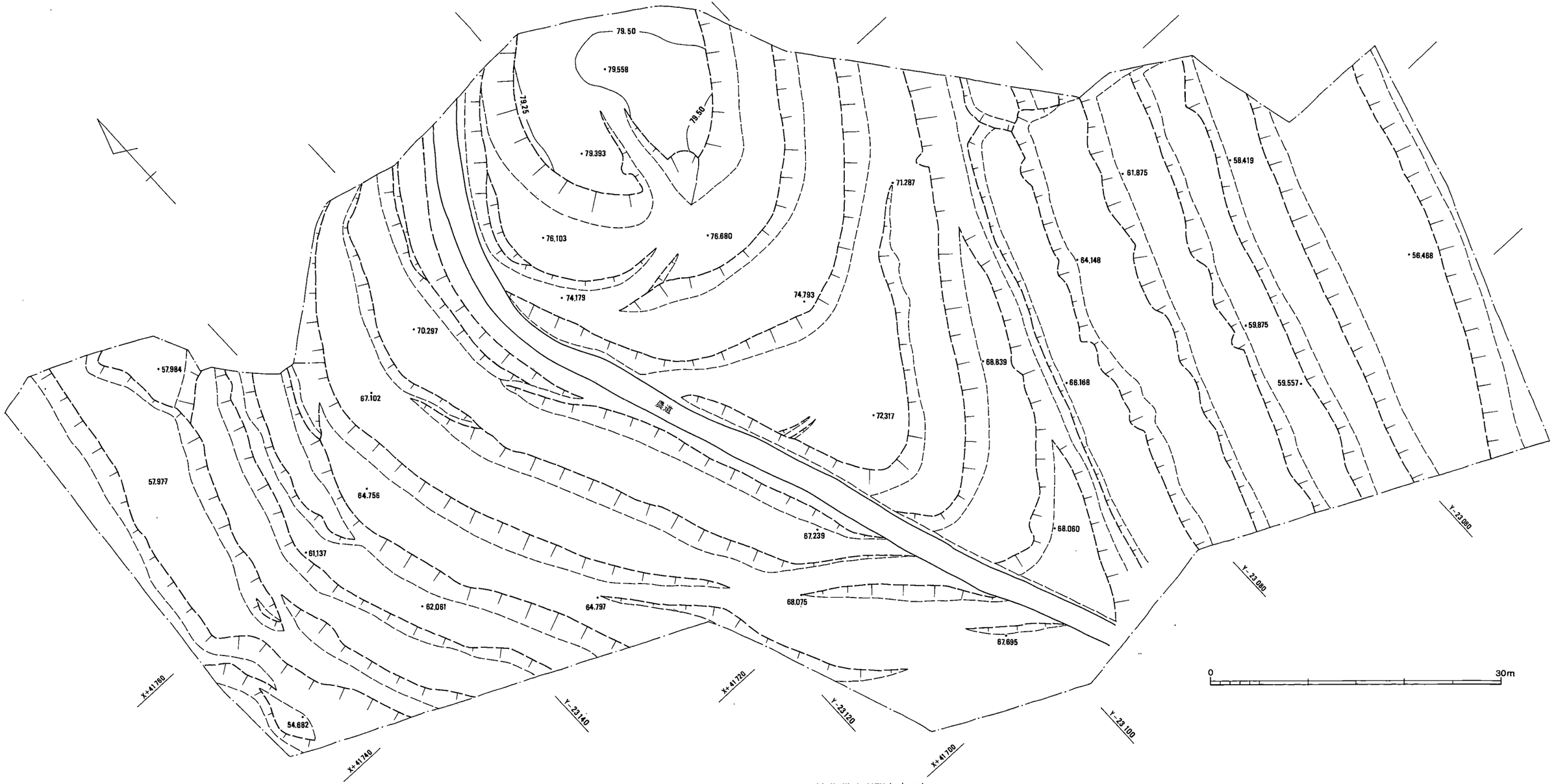
九州横断自動車道関係の朝倉周辺遺跡については、「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告」－24集－に詳細に記述しているのでこの項では簡略に述べることとし、詳しくは報文（24集）を参照して頂きたい。

第４図　遺跡と周辺の主要遺跡分図(1/50,000)

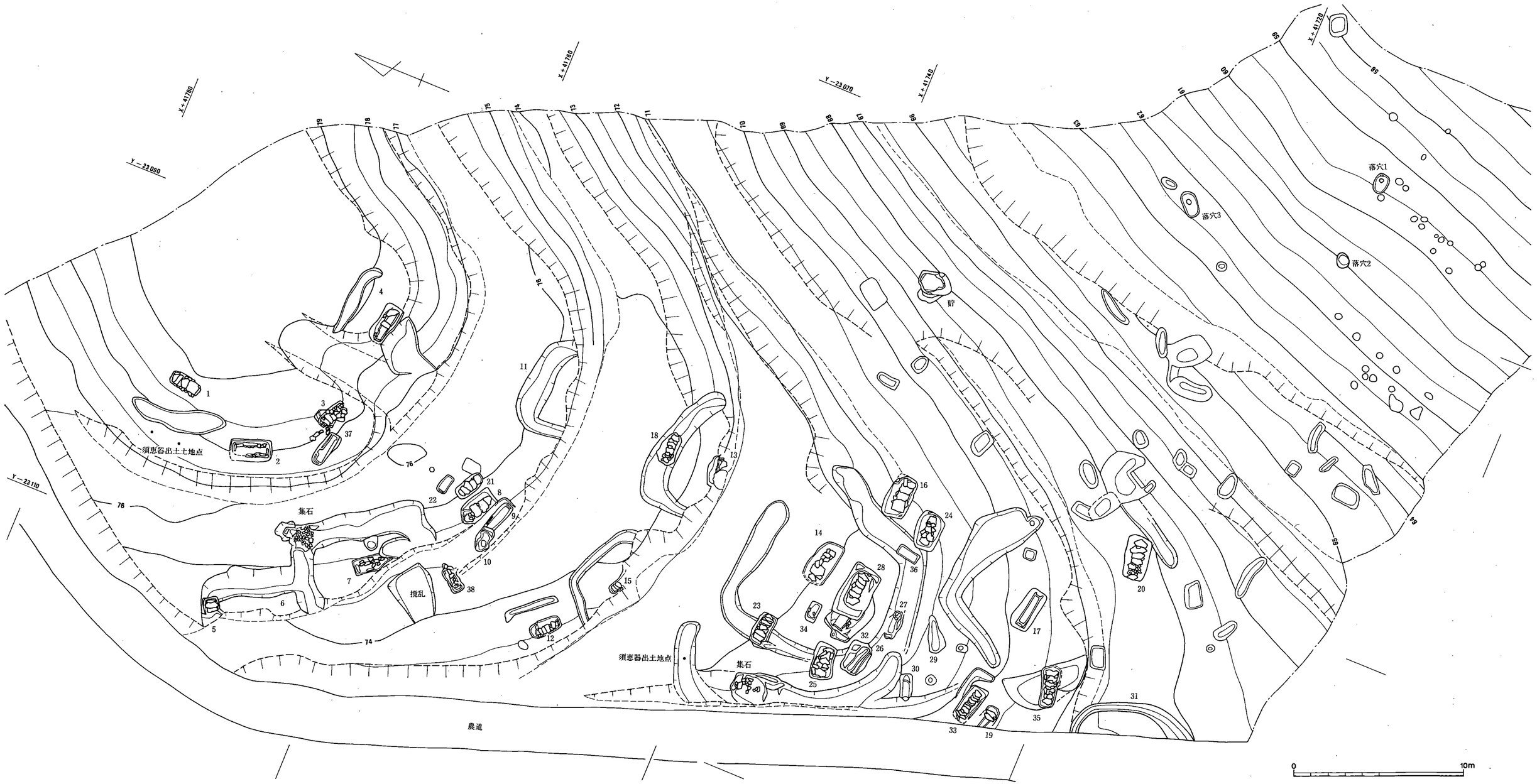
1.妙見墳墓群　2.堤古墳　3.鎌塚遺跡　4.山ノ神遺跡　5.山田古墳群　6.長田遺跡　7.金場遺跡　8.上ノ宿遺跡　9.恵蘇山遺跡　10.稗畑遺跡　11.大迫遺跡　12.外之隈遺跡　13.杷木宮原遺跡　14.中町墓遺跡　15.志波桑ノ本遺跡　16.志波岡本遺跡　17.江栗遺跡　18.上の原遺跡　19.狐塚南遺跡　20.治部ノ上遺跡　21.座禅寺遺跡　22.才田遺跡　23.東才田遺跡　24.長島遺跡　25.中妙見遺跡　26.原の東遺跡　27.狐塚古墳　28.古熊古墳群　29.烏集院１号墳　30.宮地獄古墳群　31.長安寺古墳群　32.須川古墳群　33.剣塚古墳　34.山田長田古墳群　35.本陣古墳　36.恵蘇八幡古墳　37.志波宝満宮古墳　38.月岡古墳　39.日岡古墳　40.塚堂古墳

Ⅲ　発掘調査の記録

1　妙見墳墓群の調査



第５図　妙見墳墓群地形図(1/400)



第6図　妙見墳墓群遺構配置図(1/200)

1　遺跡の概要

妙見遺跡は、前述したように妙見川と奈良ケ谷川とに挟まれた南西に延びる丘陵の先端部に形成された古墳時代前期の墳墓群と弥生時代中期の貯蔵穴及び縄文時代と考えられる落し穴遺構からなる遺跡で、調査面積は4,660㎡である。

遺跡は、九州横断自動車道の朝倉工区の一角に当たり、調査区内は昭和40年１月～４月の間に福岡県立朝倉高校史学部によって古墳群が調査されており、横断道の調査以前から周知の遺跡であることが分かっていた。

昭和40年の調査結果によると、三叉状に展開する丘陵上（比高差36m）には「東側頂部には箱式石棺墓と石蓋土壙墓があり、西側頂部には石棺系竪穴式石室が築造され、前期古墳に占有されていた。後期古墳は東西に延びる丘陵の尾根線上と南側に延びる丘陵山頂に築造されていた。また周辺には弥生時代の遺物が多く採集され、丘陵の麓の畑にも土師器・須恵器の破片が散布していた」らしい。出土遺物の記載では、「古墳時代前期の墳墓からは出土遺物はなく、後期古墳からは土師器・須恵器のほか、玉類・耳環などの装身具、武器・工具・農具・馬具などの鉄器が数多く出土」している。

その後、柿畑の造成により当時の面影は残っていないが、造成時にかなりの墳墓群が破壊されたらしく、調査時点にも柿畑の所々に石棺に使用した石材が積まれていたことを記憶している。

路線の調査区内では、妙見６号墳の築造された頂部は完全に削平され古墳の面影はないものの、これに伴う供献土器を採集し、標高79.0mから67.0mの間の尾根線上で古墳時代前期の墳墓群を確認し、標高68.0m付近で弥生時代中期の貯蔵穴１基を検出した。貯蔵穴はこの１基のみで、他に弥生時代の遺構は検出できておらず、なぜ１基だけ貯蔵穴を掘ったのか不明な点が多い。また、標高61.0mから58.0mの間で縄文時代の所産と考えられる落し穴状遺構３基を検出したが、獣道に沿った設営ではないようだ。

古墳時代の墳墓群は、前述したように総数38基を数えるが、柿畑造成による削平を考えると総数は増加するであろう。墳墓は方形周溝墓の形態をなす墓と周囲を区画しない墓とがあり、周溝の規模・形態・深さなどもバラエティーに富んでいる。さらには、６号・7号墓のように周溝の一部を共有する墓や、周溝内に随葬か追葬状に墓を掘るタイプ。14号・２８号墓周辺のように当初の方形周溝墓を無視した形で墓域を拡張し、更にその周囲に一部周溝を巡らし、数基の墓地を囲繞する形態の墓地など様々なタイプがある。

また、墓の形態も箱式石棺墓・石蓋土壙墓・石蓋岩盤刳貫墓・石棺系竪穴式石室・木蓋土壙墓などがあり、墓の主軸もほぼ東西方向にあるが頂部付近は等高線に沿った形をとる。さらに方形周溝墓においては、削平を受け不明瞭な点はあるが、接近した状態で設営された墓がありお互いの新旧関係があると思われるので後で検証したい。

2　遺構と遺物

(1)　墓　　地

1号墓 [箱式石棺墓]　(図版2－(2)・3－(1)、第7・8図)

丘陵頂部の西側暖斜面に営まれた墓で標高78.0m 付近にあり、他の墓地との重複はない。主体部の西側1.0mには幅広の溝が掘られ周溝の片鱗を残しているが、北・南と東側は削平され遺存していない。周溝は南側が幅広となり、全長が5.70m、北側の狭い所で60cm、広い所で1.70m、深さは20cm前後を測る。

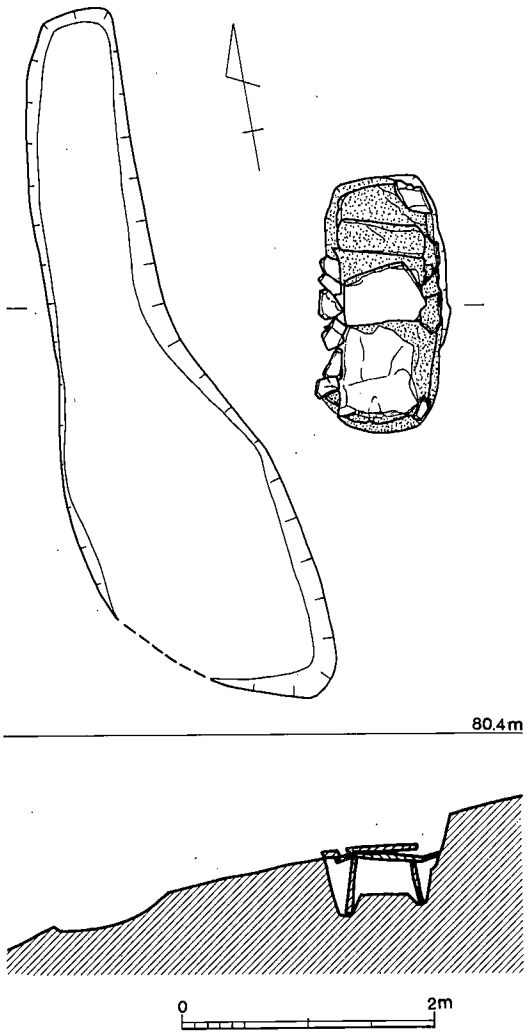
内部主体

主体部は箱式石棺を採用し、墓壙は石蓋に接する形で掘られているが、一部西側の石列と目張り粘土が墓壙の外側になることから西側の墓壙は僅かな二段掘りであったと考えられる。

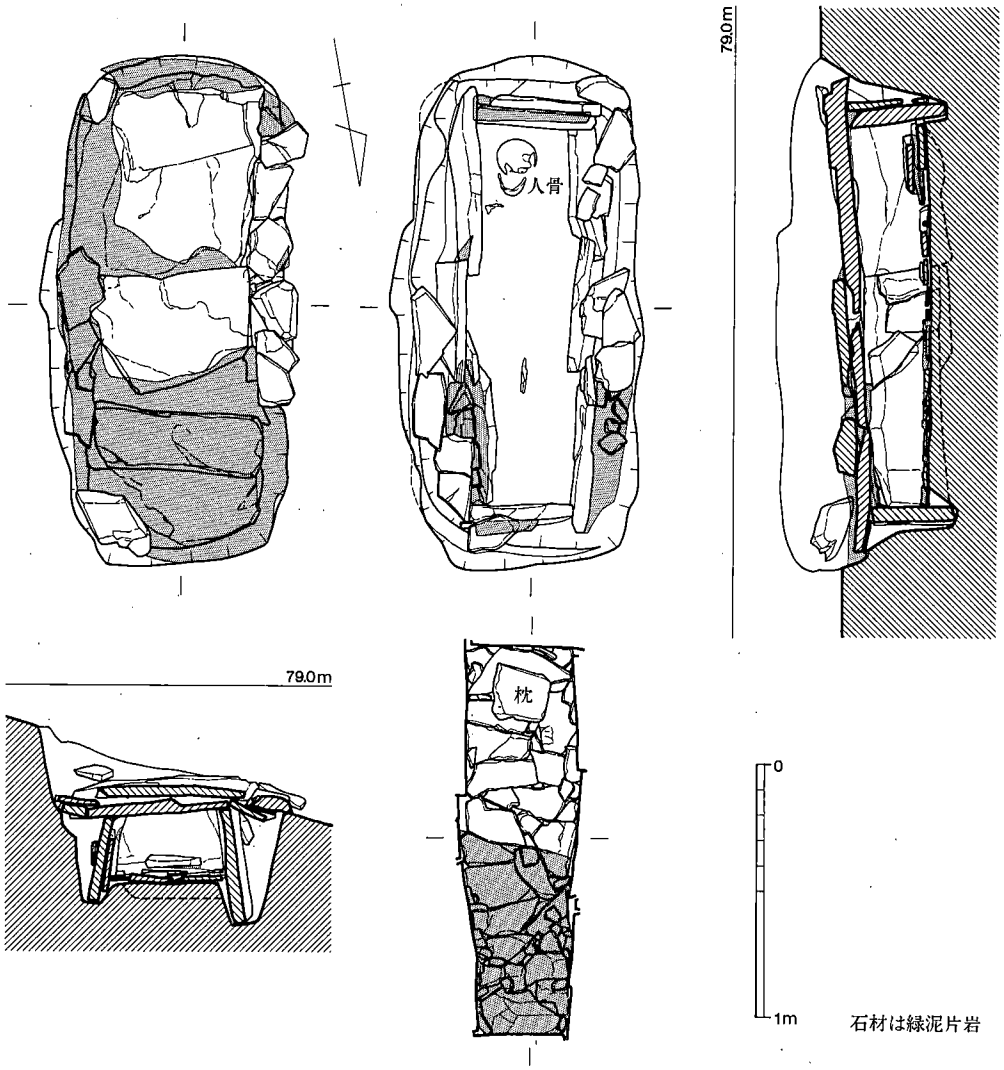
墓壙の規模は長軸が2.02m 、短軸が95cmを測る。石蓋には一部を除いて、ほぼ全面に黄色粘土で目張りを施している。蓋石は頭位に大きめの板石を使い、相接する形で並べてその隙間に別の板石で覆っている。西側の蓋石沿いには小ぶりの板石を並べている。棺材は緑泥片岩と絹雲母片岩を使用し、南側の小口は2枚の板石を立てている。また、床面には上記の2種類の板石を全面に敷き詰め、脚位方向の1／2には黄色粘土を薄く貼るが、頭部側は施していない。

棺内の法量は長さが1.54m 、頭位側の幅が42,0cm、脚位側の幅は36.0cmを測り、脚部側が狭くつくられている。主軸方位はS－10°－Wを示す。

棺内には頭蓋骨及び大腿骨の破片が遺存しており、頭蓋骨の下には緑泥片岩の板石枕が据えてあった。その他の副葬遺物はない。



第7図　1号墓実測図 (1/60)



第８図　１号墓［箱式石棺墓］実測図（1/30）

２号墓［箱式石棺墓］（図版３－(2)、第９図）

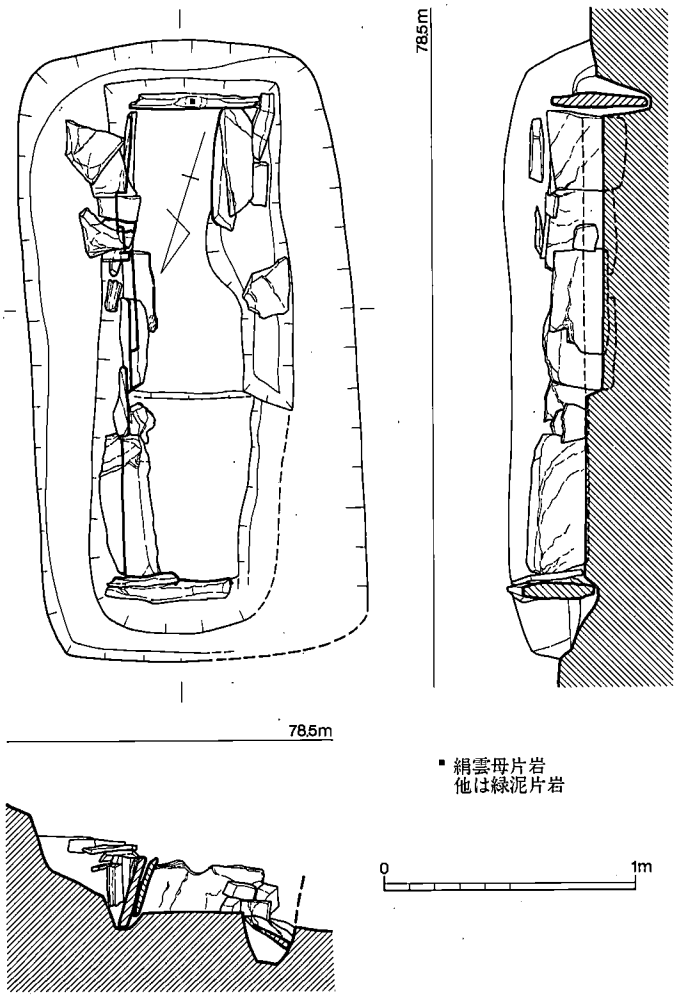
１号墓（方形周溝墓？）の南傍の標高78.0m の所に掘られた墓で、箱式石棺を採用している。墓壙の形態は隅丸長方形を呈するが、後世の樹園造成のため西側の墓壙は削られ、石棺の蓋石と側壁の石材は大半が抜かれている。墓壙の規模は、長軸が2.45m、短軸は1.30mを測る。棺材は南側の小口が絹雲母片岩の他は緑泥片岩が使用されている。また、東側の側壁には一部小ぶりの石材が積まれているが、これは石蓋をする時の面合わせのためと考えられる。南側の小口の石は上端中央に凹面があり、この部分の表面は平滑であることから作為的な打ち欠きで

あろうが、何のためかは不明である。

この部分の地山は岩盤に起伏があり、所どころに岩盤が露呈しているため、床面の1／2が岩盤からなり、調査時に若干掘り過ぎた感がある。

棺内の法量は、長さが1.85ｍ、幅は南側では50.0cmを測る。頭位については人骨が遺存していないためはっきりしないが、１号墓の出土例から南側の可能性が強い。主軸方位はＳ－17°－Ｅを示す。

床面及び棺材には朱を塗布した痕跡はなく、棺内からの副葬品もない。



第９図　２号墓［箱式石棺墓］実測図（1/30）

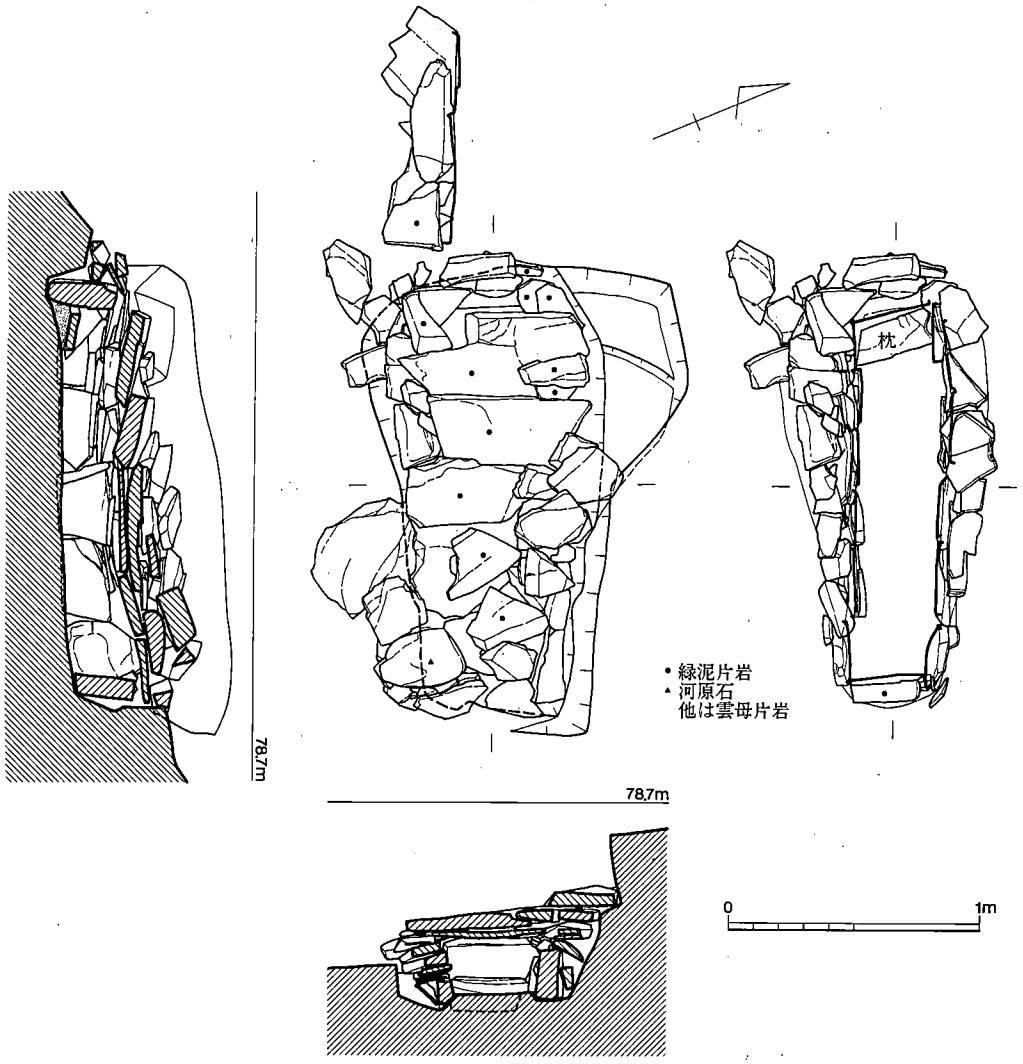
３号墓［石棺系石室墓］

(図版４－(1)・(2)、５－(1)、第10図)

２号墓の東側に位置する墓で、37号墓と接する状態で掘られ、標高78.0m付近に位置するとともに主軸を等高線と平行に向けている。

主体部は箱式石棺の形態であるが、石の積み方が他の箱式石棺墓とは若干様相を異にし、石棺系竪穴式石墓の形状を呈する。墓壙は遺存状況の良好な北側では二段掘りであるが、南側は削平を受け上端は残っておらず、積上げた石材が石棺の掘方の外部にあるため、墓壙の規模は不明である。墓の西側には絹雲母片岩母片岩と緑泥片岩とで直線的な２乃至３段の石積みがみられ、積上げた面は石棺の南側壁と面を揃えているが、何のための石積みなのかは不明である。

蓋石には目張り粘土は施しておらず、西側の天井石は撹乱により一部が除去されている。頭位の天井石は鎧蓋状に重ね、脚位天井石は平面的につくり、その上をやや小ぶりの板石と一部を河原石で覆っている。棺材は絹雲母片岩と緑泥片岩を使用しているが、蓋石は緑泥片岩、壁石は絹雲母片岩（一部緑泥片岩）で構築し、使い分けがみられる。両小口は厚手の緑泥片岩を



第10図　3号墓［石棺系石室墓］実測図（1/30）

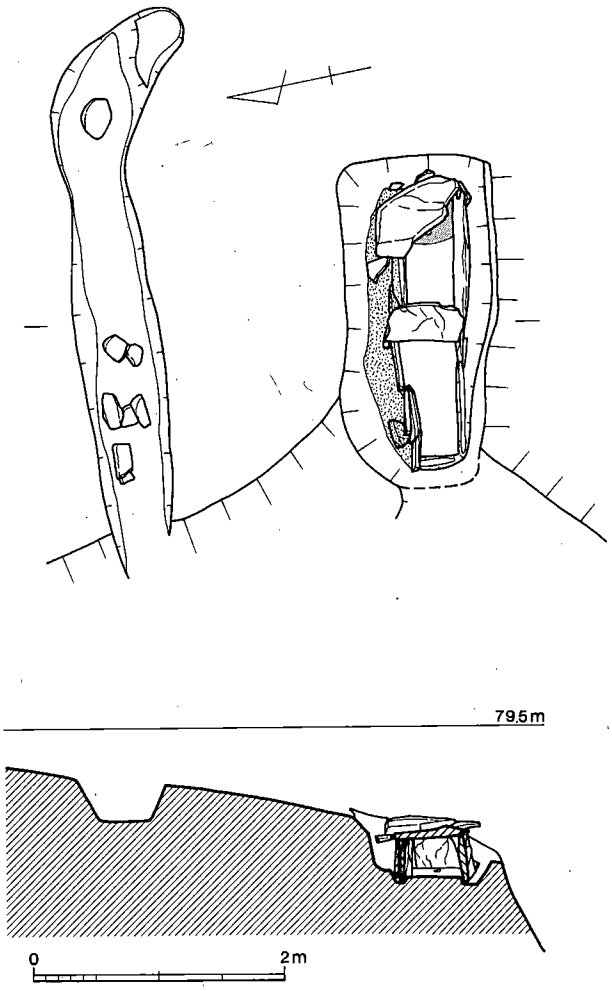
立て、北側壁は基底部に5枚の板石を立てその上に3段乃至4段の板石を小口積みし、南側壁は4枚の板石を立て上に4段から6段の絹雲母片岩を小口積みする。棺内には朱の散布や塗布は認められない。

床面は岩盤からなり、西側小口部分には岩盤を若干掘り下げ、暗褐色土の土を僅かに斜めに盛りその上に絹雲母片岩の板石を枕としている。

棺内の法量は、主軸長が1.45m 、幅は30cm、天井から床面までの深さは20cm強を測る。主軸方位はN－67°－Wを示す。棺内からの出土遺物はない。

4号墓 [箱式石棺墓] (図版5－(2)・6－(1)、第11・12図)

丘陵の稜線上にあり、標高78.5m 付近に位置する墓で、主軸を3号墓と同一方向に向けている。主体部の南側は後世の撹乱で大きく抉られている。また、北側1.40mには、現存長4.30m 幅70cm、深さ30cmの平面形状が「L」字状の周溝が掘られ、東西と南側が削平されているので主体部を囲繞した方形周溝墓か否かは不明である。周溝内からは7個の絹雲母片岩の板石と土師器の壺の破片が出土した。



第11図　4号墓実測図 (1/60)

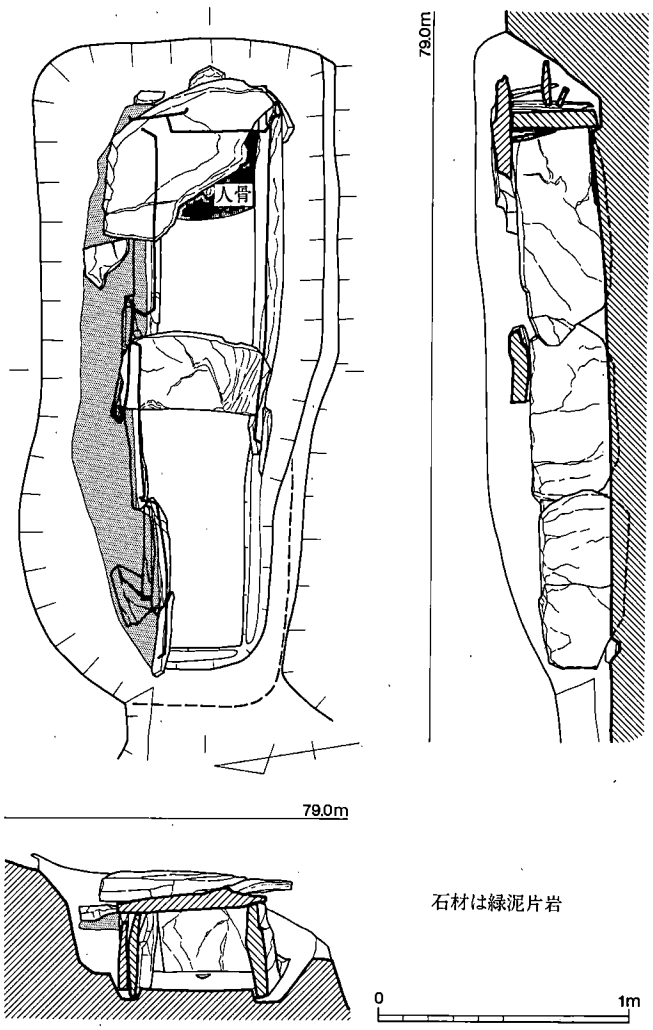
内部主体

主体部は箱式石棺であるが、蓋石の大半と南側の側壁、西側小口石が除去されている。墓壙は南・西側が削平され不明瞭であるが、長軸が2.65m 前後を測る。目張り粘土は北側壁沿いに灰白色粘土が残存しており、本来は全面に施されていたであろう。

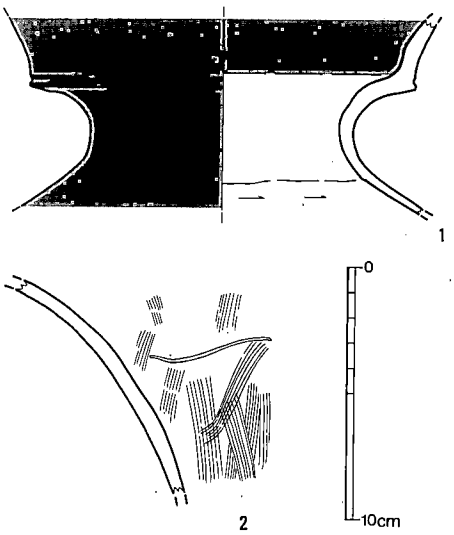
蓋石は2枚が残存しているのみで、側壁の棺材は頭位側に大きめの板石を使用し、脚部に従って小ぶりの板石を使っている。使用した棺材はすべて緑泥片岩で、検出した箱式石棺の中では整美な棺材で構築しており、すべての棺材の内面は朱を塗布している。

床面は岩盤まで掘り込み、東側の床面には朱を散布しており、頭位部分は若干床面を盛り上げている。

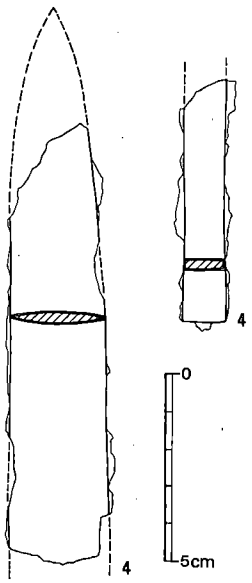
棺内の法量は長さが2.03m,幅は頭位部分で45cm、脚位側で30cm、天井から床面までの深さは32cmを測り、検出した箱式石棺の中ではやや大型である。墓の主軸方位はS－81°－Eを示す。棺内からは朱を散布した部分から頭骸骨片が出土した。その他、棺内の撹乱土内から鉄剣の破片が出土している。



第12図　4号墓［箱式石棺墓］実測図（1/30）



第13図　4号墓周溝内出土土器実測図(1/3)



第14図　4号墓棺内出土鉄器実測図（1/2）

出　土　遺　物

土　器（図版47. 第13図）

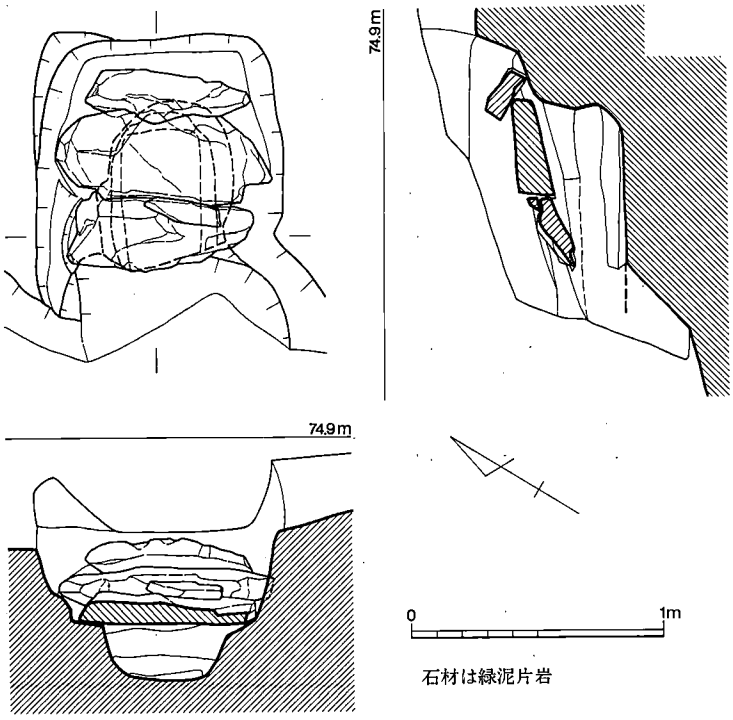
土師器　周溝内から出土した布留式並行期の壷の口縁部片（1）と胴部片（2）があるが、器壁の厚さや胎土・色調などが異なり同一個体ではないと考えられる。1の壷は複合口縁壷で、口唇部を欠損する。擬口縁部には細い沈線を巡らす。調整は外面がヘラ磨きのようであるが不明瞭で、外面と口縁内面に一部に丹が残っており、丹を塗布していたのであろう。2は外面に細かいハケを残し、肩部には部分的に沈線を刻んでいる。

鉄　器（図版49、第14図）

棺内の攪乱土から出土した鉄剣の破片がある。切っ先部及び刃部の基部を欠損しており、柄部とは接合しない。刃部には鎬は見られず薄造りである。刃部幅は2.5cm、厚さは4.0mm、柄の幅は1.1cm、厚さは2.5mmを測る。

5号墓［石蓋土壙墓］（図版6－(2)・7－(1)、第15・16）

丘陵の南西斜面の標高75m付近に掘られた6号墓（方形周溝墓）の周溝内の底面を掘り込んだ形で検出した石蓋土壙墓で、6号周溝内に並行に掘られていることから同時期の所産と考えられる。しかも、墓は約1／2強が後世の樹園造成で大きく削平され、西側は完全に破壊されている。



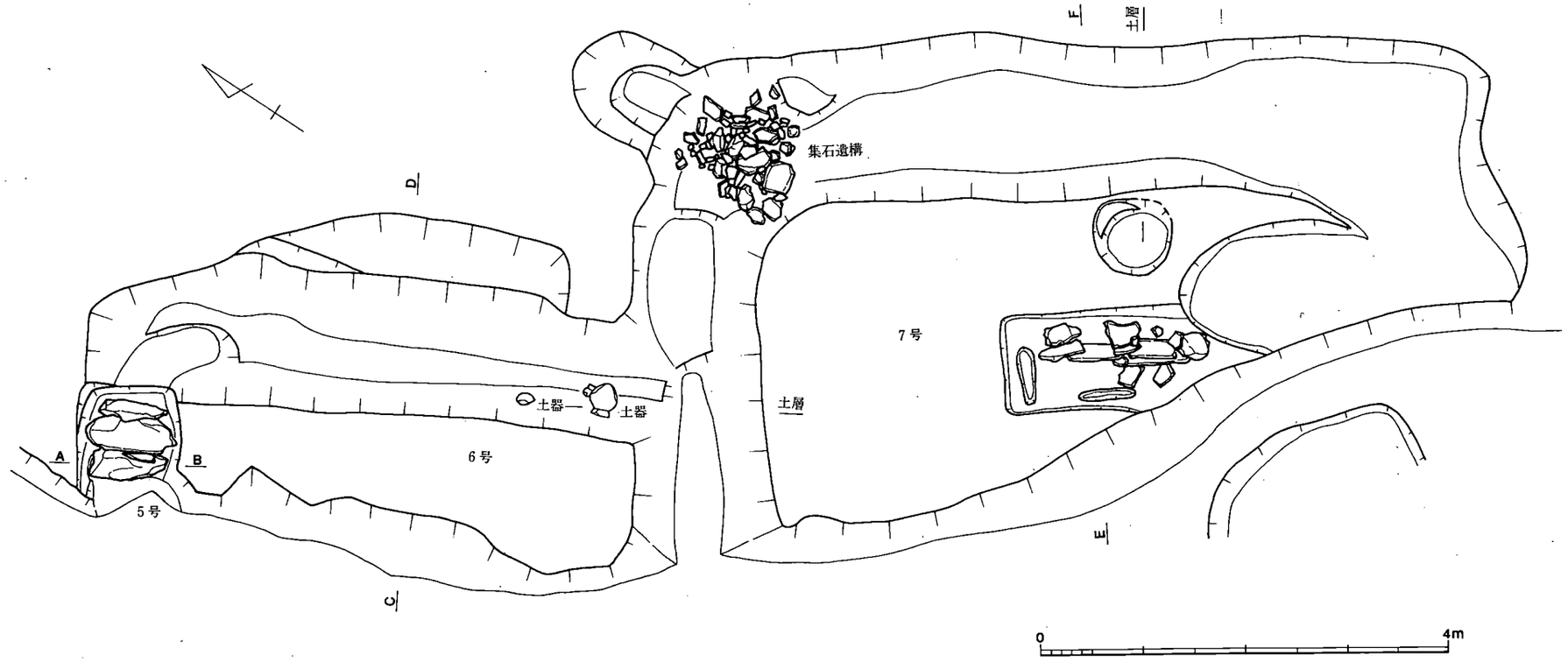
第15図　5号墓［石蓋土壙墓］実測図（1/30）

墓壙は二段掘りで、緑泥片岩を使用した3枚の石蓋が残っているが、東側の蓋石は重ね積みし、他の2枚は接する形で覆っている。現存での目張り粘土は見あたらない。

床面は舟底状の断面を呈し、東側小口部は若干掘り込んだ形態をなす。埋葬土壙の上端の幅は45cm前後、床面の幅は30cmを測る。主軸方位はN－59°－Eを示す。棺内からの人骨及び副葬遺物はないが、頭位は東側と思われる。

6号墓（図版7－(2)、第16図）

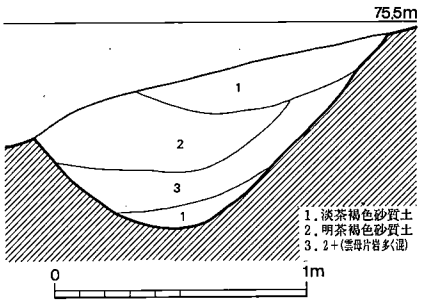
7号墓（方形周溝墓）と周溝の一部を共有する方形周溝墓であるが、約2／3以上が削平を受け主体部は完全に消滅している。調査時点で共有する周溝部分の新旧関係を土層で観察したが同時併存であることが判明した。方形区画の内法は、東側で4.40m、外法は7号の内側上端部



第16図　5号～7号墓実測図(1/60)

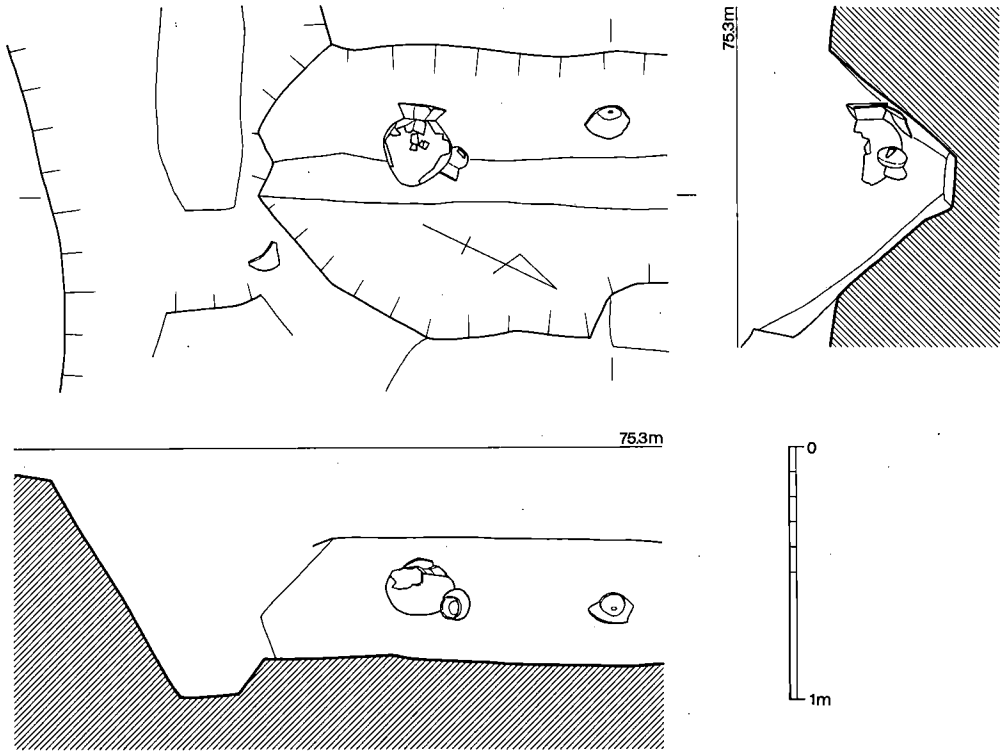
で計測すると6.50m を測る。周溝の東側壁の上面はやや崩壊し変形しているが周溝幅は1.40m 前後、底面幅は40cmを測り、断面が逆台形を呈している。

図示した土層図でみると全体にレンズ状の自然堆積が認められるが、最下層の１層（淡茶褐色砂質土）と３層（明茶褐色砂質土に絹雲母片岩混入）は外からの流れ込みで、２層（明茶褐色砂質土）は内区方向からの流入が観察でき、２層は内区の盛土の流入と考えられる。



第17図　６号周溝土層断面図（1/30）

周溝の東側では、床面から15,0cm上層から供献遺物と考えられる古式土師器の壷・小型壷が相接する状態で出土し、少し離れた場所から高坏の坏部が同レベル（土層図の３層）で壁に密着して出土した。出土状態から推考すると、周溝がある程度埋没した段階で副葬土器を供献したか、または内区に供献していた土器がある段階で流入したと理解される。２個の壷にはいずれにも底部に孔が穿たれていた。

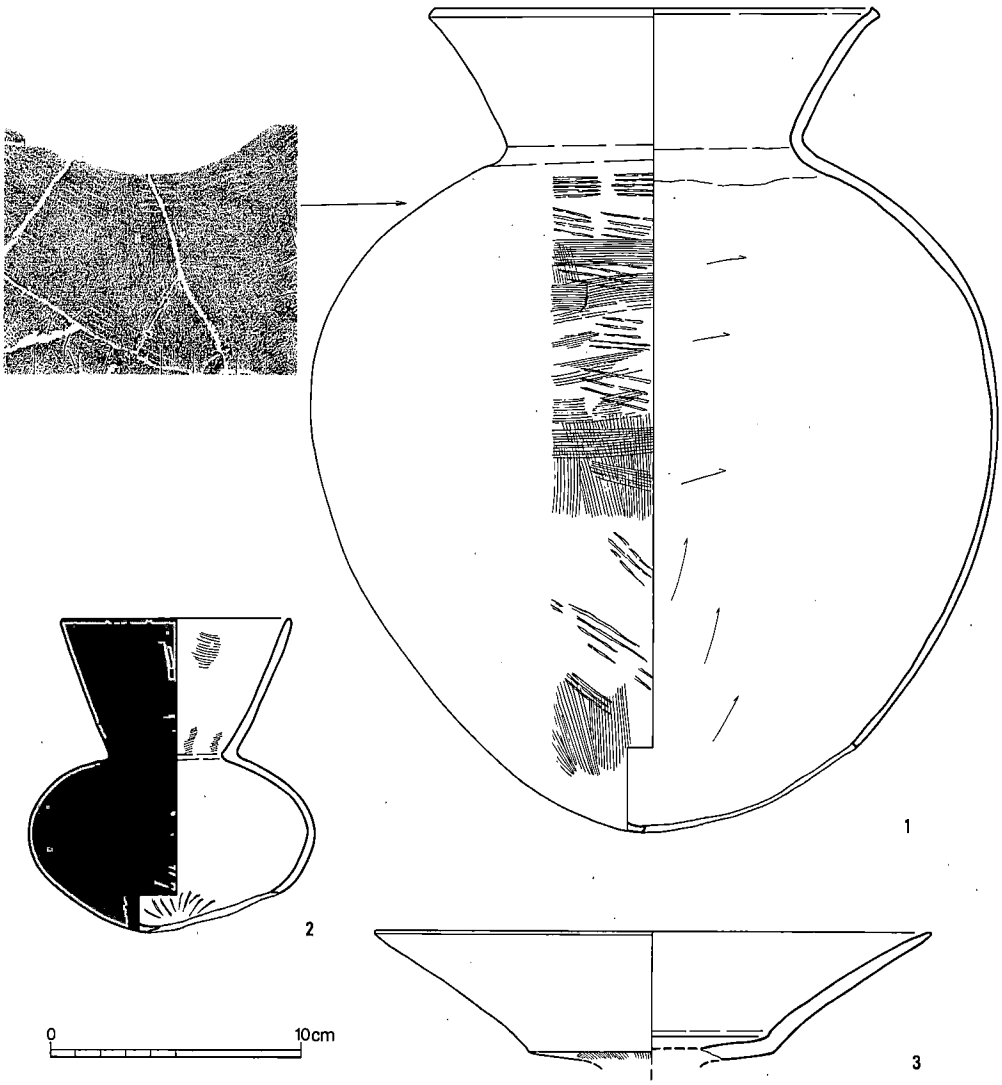


第18図　６号墓周溝内土器出土状態実測図（1/30）

出　土　遺　物

土　器（図版47.第19図）

土師器　周溝内から出土した壷と高坏がある。1は完形の壷で、口唇部は撮みあげ僅かに肥厚させる。肩部は大きく張り倒卵形の胴部を有す所謂「布留式並行期」特有の壷である。総体的に器壁は薄くつくり、調整は口縁部が横ナデ、胴部外面はやや細かい叩きの上から横ハケと縦ハケを施すが、この類の土器に叩きを残す例は稀である。内面は単位が不明瞭なほど丁寧にヘラ削りしている。底部から僅かにずれて径が8.7cmの孔を内側から穿っており、その際に断



第19図　6号墓周溝内出土土器実測図（1/3）

面を整えている。胎土には細砂粒と雲母を含み、胎土の地色は灰白色を呈するが、器表面に赤橙色の化粧土を塗布する。口径は17.8cm、器高は32.8cm、器壁の厚さは3.0mm～5.0mmを測る。

2は小型壷の完形品で、1の壷の傍から出土した。頸部から口縁部にかけて長くつくり、僅かに内傾する。胴部は玉葱状を呈する。調整は口縁内面から外面にかけては、水びきで内面には部分的に極細のハケが残る。外面は極細のハケの上から横ヘラ磨きを丁寧に施し、丹を塗布するが殆ど剥落し丹塗り磨研のように見えない。底部にはやや大きめの不定形な孔を内側から穿つ。胎土は頗る緻密で茶橙色を呈する。口径は9.2cm 、器高は12.6cmを測る。

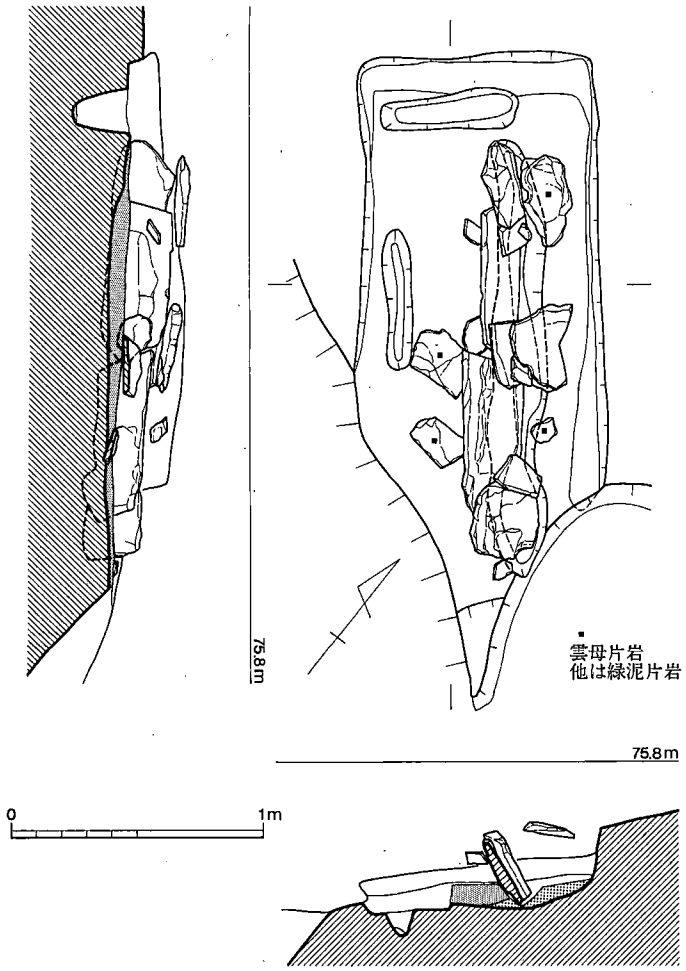
3 は高坏の坏部片で約1／2が残存する。体部から口縁にかけては反りながら長く延び、底部は小さい。底部の割れの断面は整えられており、孔を穿つための作為的な打ち欠きの可能性が考えられる。調整は風化著しく不明瞭で、底部外面に若干ハケが残る。明茶褐色を呈し、復原口径は22.2cmを測る。

7号墓 [箱式石棺墓]

(図版8－(1)・(2)、9－(1)・(2)、第15・20 ～22)

6号方形周溝墓と周溝の一部を共有する方形周溝墓で、南西側約1／2が著しく削平されている。

周溝の規模は調査した方形周溝墓としては規模が大形で外側の周溝の一辺は8.10m、深さは北側で82.0cmを測る。6号と一部共有する北側の周溝の底面は段状をなし、北側隅には突出した箇所がある。その傍には絹雲母片岩・緑泥片岩・河原石の集石遺構があり、大半は絹雲母片岩からなっていた。集石遺構の間からは甕形土器片が出土し、その表



第20図　7号墓［箱式石棺墓］実測図（1/30）

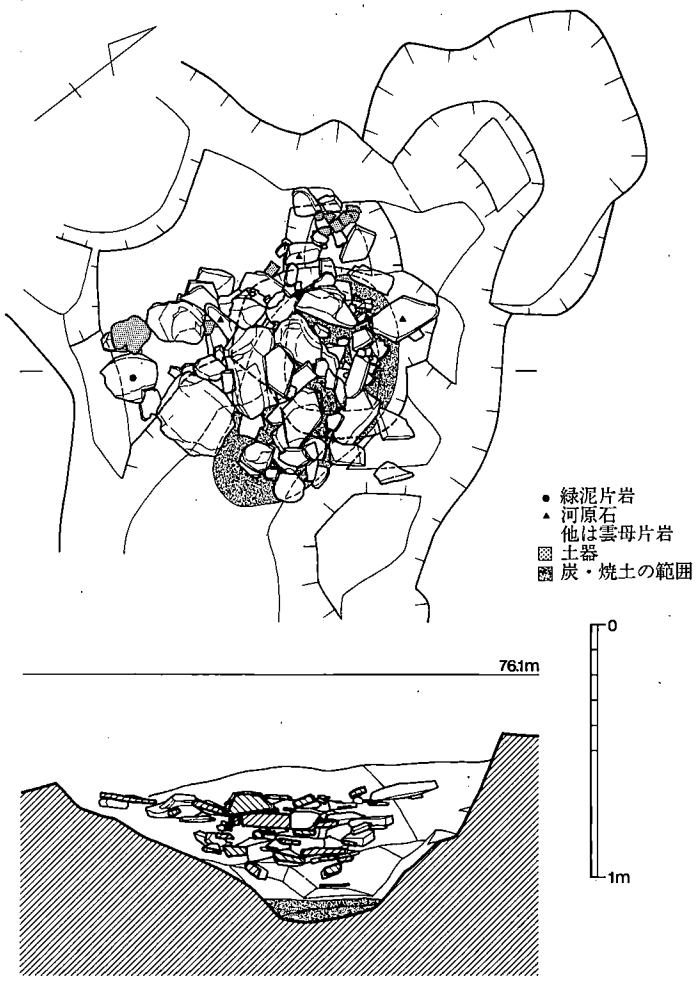
面には多量の煤が付着していた。しかも、集石の下の周溝の底面直上からは炭化物と焼土が堆積していた。この事実から推考できることは、埋葬時における飲食を伴う葬送儀礼の祭祀を行い、後に板石で覆ったと理解されよう。

また、周溝の東隅からは小型丸底土器が出土している。

内部主体

主体部は箱式石棺を採用しているが、南側は削平を受けており、しかも大半の石材が除去されているため実態は不明な点が多い。現状での墓壙の幅は92cmを測り、東側の板石が僅かに立っている。

棺材は絹雲母片岩と緑泥片岩を使っている。北東側の側壁は墓壙に対してやや余裕があり小口と北西側は部分的に棺材の掘方が残るに過ぎない。



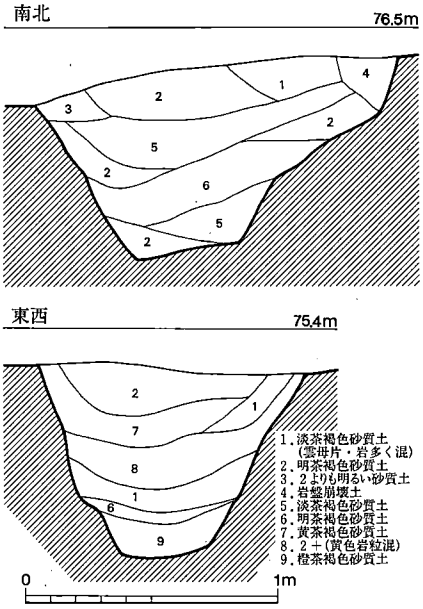
第21図　7号周溝内集石遺構実測図（1/30）

側壁の外側の墓壙の床面には細砂礫混じりの明茶色粘土を敷き、棺内床面は細砂礫混じりの黄褐色系の粘土を敷き詰めている。棺材及び床面には朱の塗布は見られない。頭位は周辺の墓から南東側と推測され、頭位での主軸方位はＳ－38°－Ｅを示す。棺内からの副葬遺物及び人骨はない。

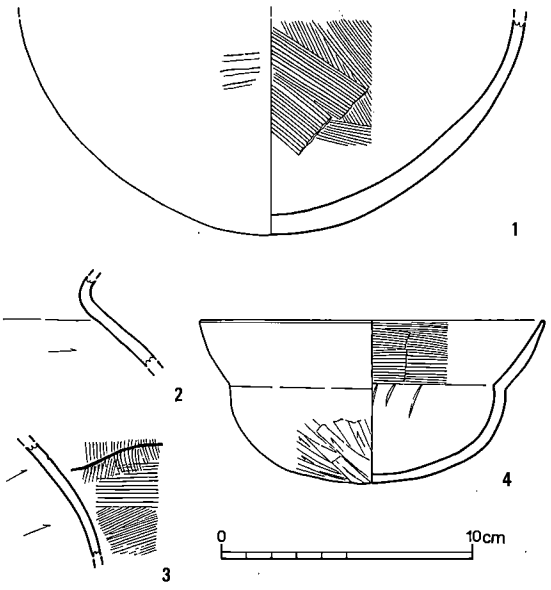
出　土　遺　物

土　器（図版47.第23図）

土師器　甕は集石遺構内から出土した１～３の破片がある。１は在地系の甕の底部片で、丸底を呈する。調整は外面が風化し凹凸が激しく不明であるが、一部在地系の荒い叩きが残っている。内面はハケとナデで仕上げる。２・３は布留式並行期の甕の小片で、緻密で雲母を多く含



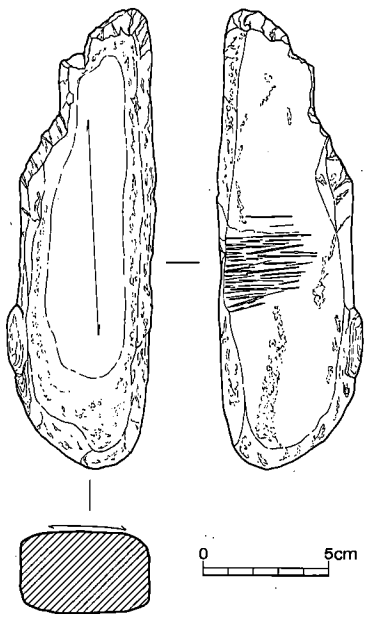
第22図　7号墓周溝土層断面図（1/30）



第23図　7号墓周溝内出土土器実測図（1/3）

む胎土を有す。3の器表面には縦と横ハケで仕上げ、細い沈線を巡らす。2の色調は淡灰白色を呈し、3は黄褐色で外面に多量の煤が付着する。

4は小型丸底土器のほぼ完形品である。周溝の東隅から出土した。調整はハケ、ナデ、ヘラ削りなどで仕上げ、胎土は小型丸底土器にしてはやや粗く、つくりも雑である。淡橙色を呈し、口径は13.8cm、器高は6.5cmを測る。



第24図　7号墓周溝内出土石器実測図（1/3）

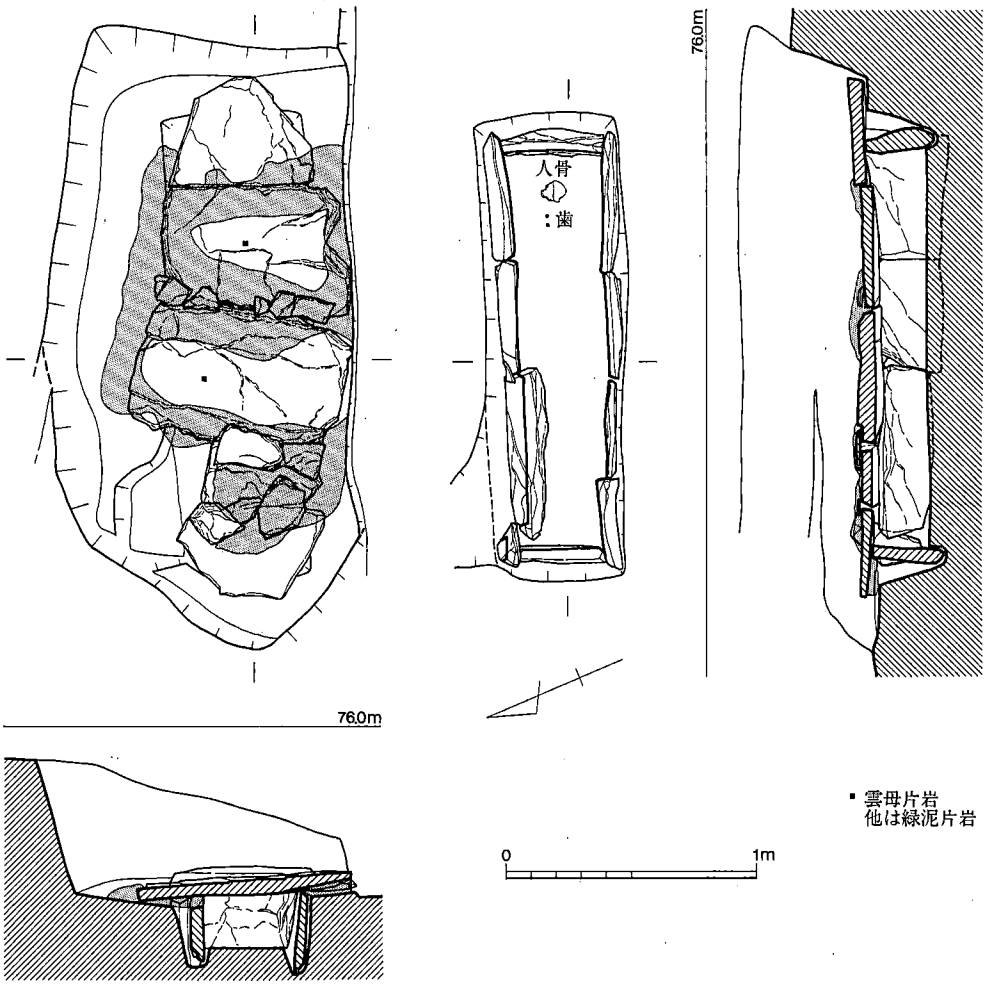
石　器（第24図）

絹雲母片岩の質の悪い石材のを使用した不明石器がある。図示した表面は磨きをかけ平滑である。この面は砥石として使用した可能性がある。側面と裏面は自然面を残しているが、裏面の中央部には鋭利な刃物による切痕が無数にあり、その部分が凹面をなす。全長は18.3cm、厚さは3.3cm を測る。集石遺構内から出土したが、用途は砥石なのかはたまた他の目的に使用したのかは不明である。

8号墓［箱式石棺墓］（図版10－(1)・(2)、11－(1)、第25図）

7号墓（方形周溝墓）の南東側に位置する墓で、この周辺は6基の墓が主軸を同方向に向け群をなす。標高は75.5m 付近で丘陵の尾根線上にある。現状でのこの一群は周囲に周溝は巡らさず、単独墓が群をなす形であるが、墓地群が形成されている周囲は削平が激しく、周囲に浅い周溝を巡らしていたとすれば完全に消滅している。

主体部はつくりの整美な箱式石棺墓で、墓壙は南側の側壁が完全に削平されている。形態は不整長方形で西側の短辺が張り出す。規模は長軸で2.40m を測る。目張り粘土は両端の天井石部分と天井石の中央には貼っておらず、石の接合面に施している。北西隅は樹木で撹乱を受け粘土は残っていない。目張り粘土は黄色粘土を使用している。



第25図　8号墓［箱式石棺墓］実測図（1/30）

蓋石は個々の側面が接する形で水平に覆い、所謂「鎧蓋」の形態は取らない。各々の石材は加工され、中央の3枚はほぼ同じ大きさであるが西側の1枚が攪乱で破壊されている。両端の石材は形を揃えている。天井石の石材は絹雲母片岩と緑泥片岩を使用している。

石棺は小口板石を側板で挟む形態のつくりで、棺材はすべて緑泥片岩を使っている。また、北側の側板は攪乱で内側に傾斜している。天井石の内面と棺材の内面には僅かに朱が残っていた。床面には敷石や粘土貼り、枕の設置などはしておらず、朱の散布も認められない。直接被葬者を埋葬したと考えられる。棺内の法量は長さが1.58m 、頭位幅は39.0cm、脚位幅は28.0cm、天井石からの深さは20.0cmを測る。墓の主軸方位はS－67°－Eを示す。

棺内の東側床面から頭蓋骨の破片と歯が若干出土したが、他の副葬遺物はない。

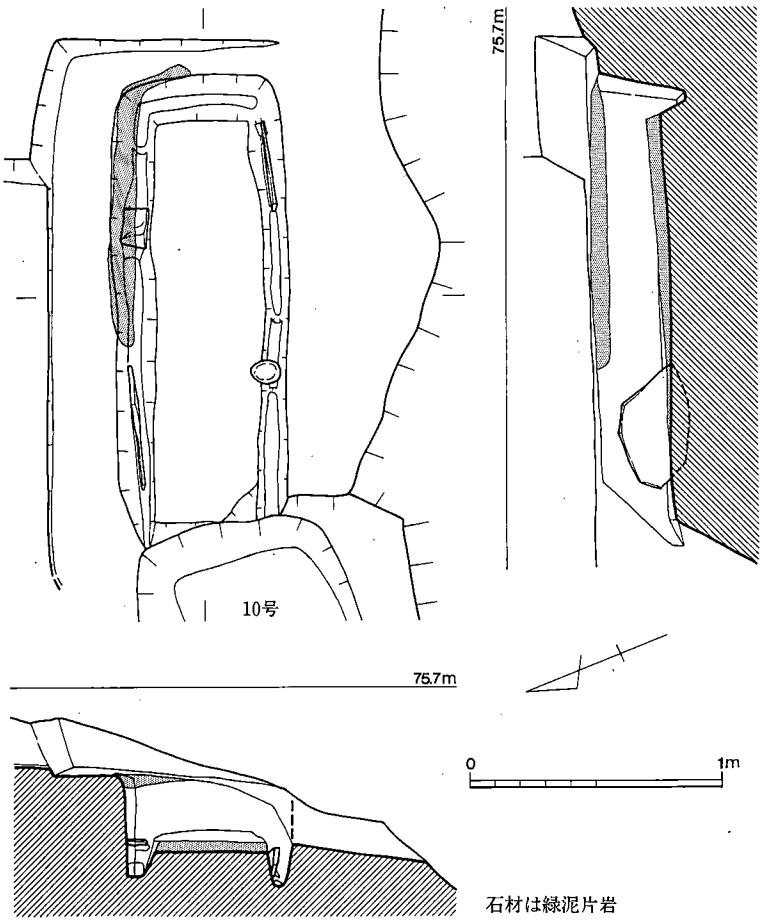
9号墓［箱式石棺墓］（図版10－(1)、第26図）

8号墓の南傍に並行して掘られた墓であるが、削平が著しく墓壙の大半が消滅し、西側小口部分は10号墓（当該遺構は墓地でない可能性もある）により破壊されている。

主体部は箱式石棺墓であるが、天井石、小口石は完全に抜かれ、僅かに石棺の掘方内に緑泥片岩の板石片と補修石が遺存していたに過ぎない。

黄色粘土を使った目張りは北側の側壁沿いから小口部分に残っている。

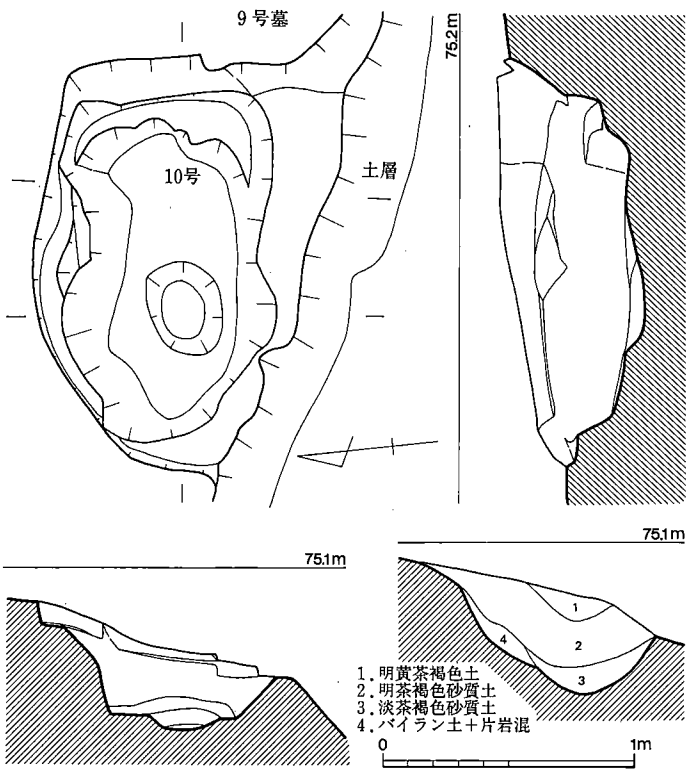
床面には頭位と考えられる東側に厚さ6.0cmの黄色粘土を貼り、脚



第26図　9号墓［箱式石棺墓］実測図（1/30）

位方向に向かって薄くなり西端は貼っていない。棺内の法量は現存長が1.60m、頭位・脚位幅とも40.0cm前後を測る。主軸方位はS－68°－Eを示す。

棺内からの人骨及び副葬遺物はない。



第27図　10号墓［土壙墓］実測図（1/30）

10号墓［土壙墓］（図版10－(1)、第27図）

標高75.0m 付近で9号墓の一部を切った状態で検出した遺構であるが、墓壙の形態から墓とするにはやや疑問が残るが、ここでは墓として説明する。

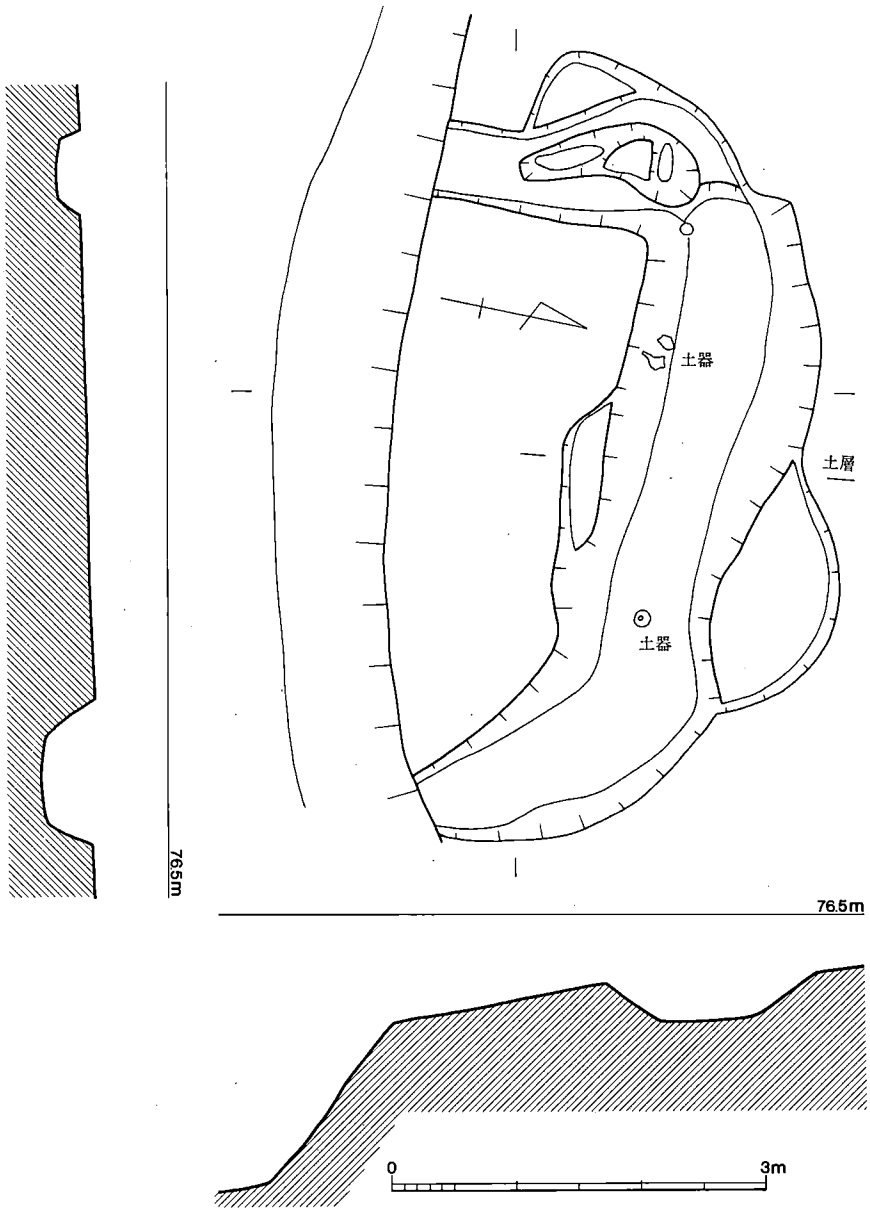
調査した区域内での土壙墓は少なく、当該土壙墓と22号・26号・27号・29号・30 号・34号・36号の8基を数える。これらは木蓋土壙墓としたが、調査時点で実際に木蓋の痕跡を確認した訳ではない。

墓壙の形態は不整楕円形を呈し、両小口部と北壁側にテラスを設ける。規模は長軸が1.63m、短軸は90.0cm前後である。底面も不整楕円形で、中央に径35.0cm、深さ5.0cmの浅いピットがある。図示した土層図は断面図とは異なった箇所を図示したため形が違っているが、堆積状況は自然堆積を示している。主軸方位はS－83°－Eを示す。中からの出土遺物はない。

11号墓（図版11－(2)・12－(1)・(2)、第28～30図）

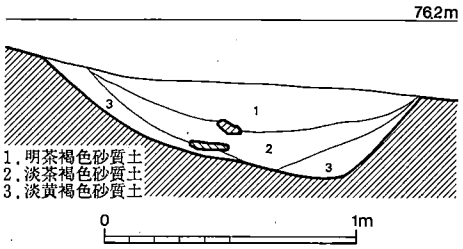
8号墓を中心とした墓地群の東側に位置し、丘陵の尾根線上（標高76.0m）で検出した方形周溝墓である。樹園造成で削られた2段目と3段目の境部分にあり、その落差が1.10mあるため墓全体の1／2強が完全に削られて消滅している。

内部主体は遺存している範囲内には見当たらないが、周辺の例から箱式石棺墓の可能性が高い。周溝は絹雲母片岩の岩盤を掘り込み、平面形態はほぼ方形を呈するが、北外側の辺はやや胴張りで全体に丸みを有す。これに対して内区の壁辺は直線的で北西側のコーナーは直角に屈



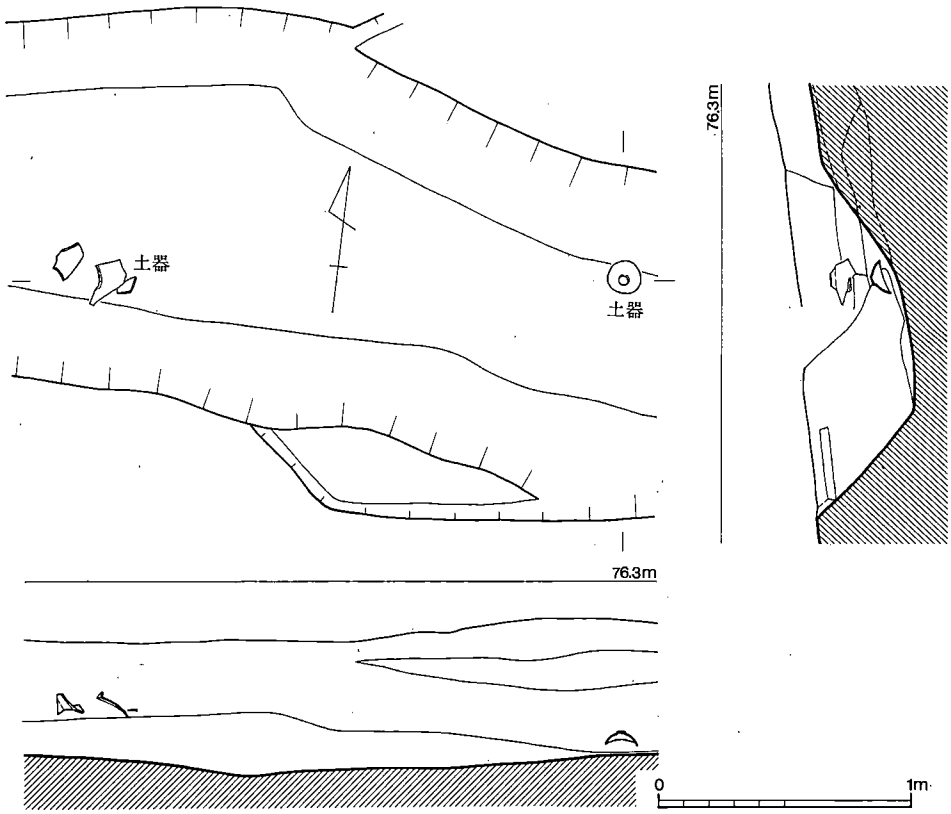
第28図　11号墓実測図（1/60）

曲しているが、東側は鈍角のカーブを描く。規模は北側辺で6.0m前後を測る。周溝の幅は北側が最も広く1.55m、東西は60.0cmで、深さは15.0cmから40.0cmと幅がある。周溝の断面は逆台形であるが、北外側の壁は傾斜が緩い。図示した土層図で見ると黄褐色土と茶褐色土が自然堆積し、下層からは数個の絹雲母片岩が出土している。



第29図　11号墓周溝土層断面図（1/30）

また、北側の周溝内からは土師器の壷形土器の口縁から肩部にかけての破片（1／2残存）が底面から若干上層で出土し、北東側からは鉢形土器の完形品が底面に伏せた状態で出土した。壷については周溝墓の副葬遺物か否かははっきりしないが、鉢は当該墓の副葬遺物と理解される。



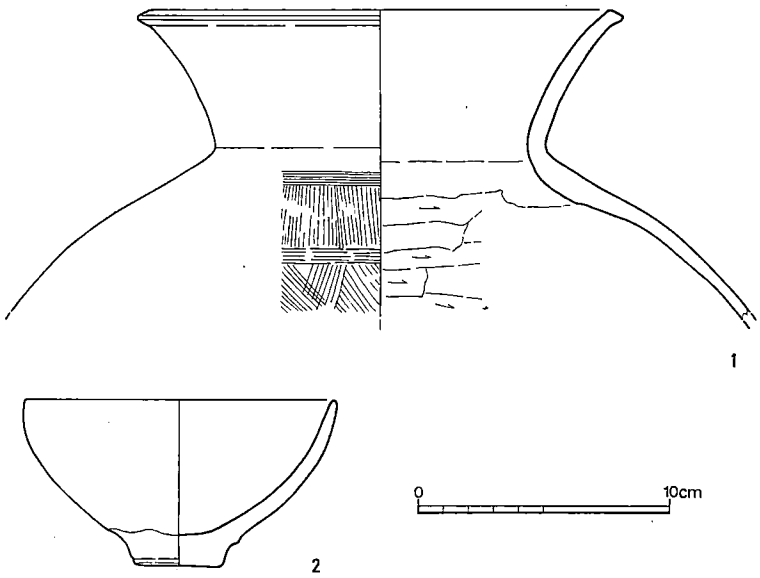
第30図　11号墓周溝内土器出土状態実測図（1/30）

出　土　遺　物

土　器（図版47、第31図）

土師器　1は口唇部を外側に肥厚させる壷で、肩部は大きく張る布留式並行期特有の形態である。調整は口縁から頸部内外面はハケで仕上げ、頸部より若干下部から丁寧な右回りのヘラ削りである。外面は2種類のハケを使用し、上下2段の横ハケとその間のハケは同一で、下段のハケはやや荒い。細砂粒と雲母を含む。黄灰白色を呈する。復原口径は19.4cmを測る

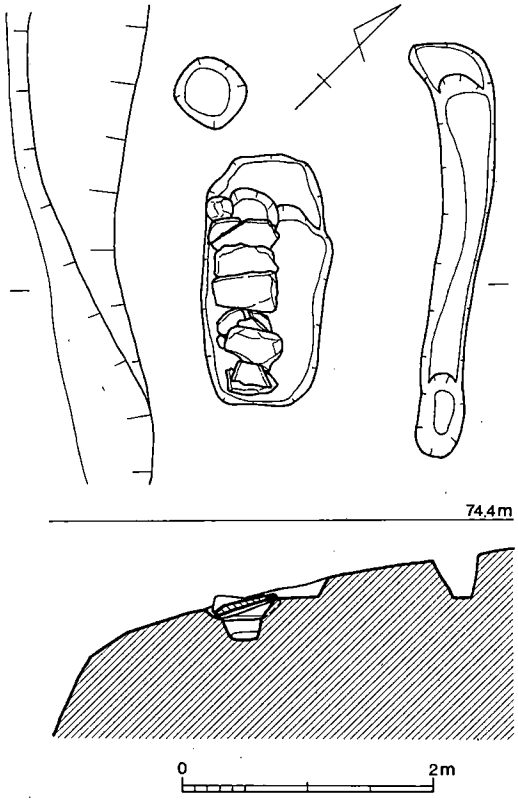
2は鉢形土器の完形品で、胴部から口縁部にかけては僅かに丸みを有し、底部は厚みのある小さな平底をなす。調整はナデで仕上げ、胎土は精製された粘土を使用し茶褐色粒子と雲母を多く含む。淡褐色の色調を有す。口径は12.6cm、底径3.4cm、器高は6.5cmを測る。



第31図　11号墓周溝内出土土器実測図（1/3）

12号墓［石蓋土壙墓］（図版13-(1)・(2)、14-(1)・(2)、第32・33）

丘陵の尾根線上にあり、標高73.5mに位置する。主体部の北東側90.0cmには僅かに湾曲した両端が完結する溝を掘っている。溝は周溝とするには適切ではなく、単なる区画であろう。周囲の削平を考慮しても現存の溝の深



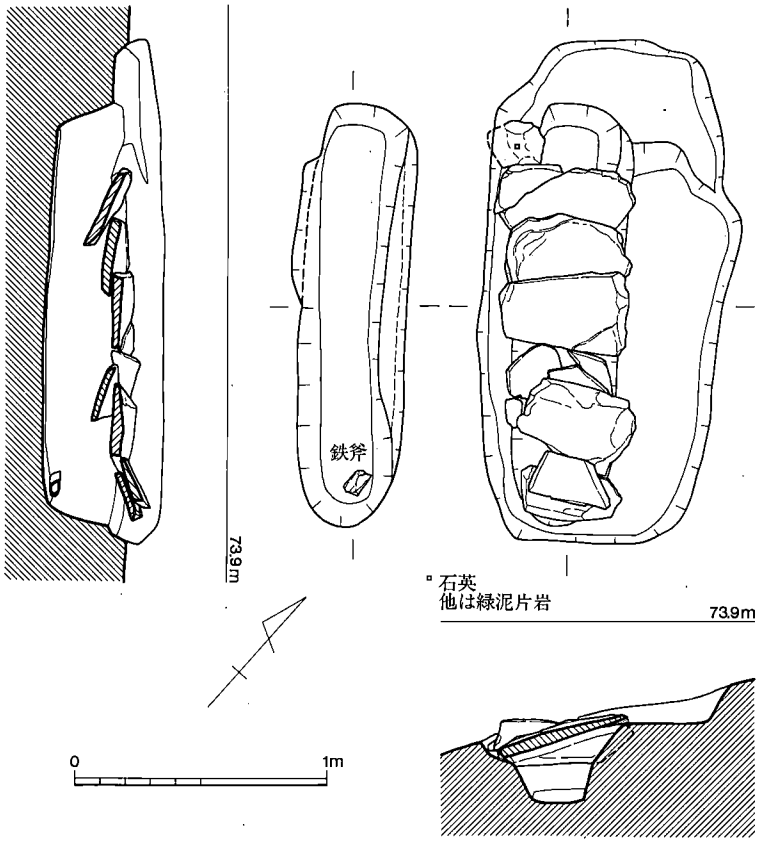
第32図　12号墓実測図（1/60）

さが30.0cmあり、周囲に巡っていればその形跡が残っているはずである。

溝内からは土師器の甕の破片が供献遺物として出土した。

内部主体

主体部は石蓋土壙墓を採用している。墓壙は2段掘りで北西側の小口部分はテラス状をなすが、全体的に削平され、調査時点では既に天井石が露出していた。墓壙の形態は不整楕円形を呈し、その規模は長軸が2.00m、短軸は1.00m弱である。目張り粘土は見当たらないが、蓋石と埋葬土壙の間に黄色粘土を詰めていた。



第33図　12号墓［石蓋土壙墓］実測図（1/30）

埋葬土壙は墓壙の一方に片寄せて掘り込み、その上の北西側が鎧蓋状に被せ、その反対側はやや乱れた被せ方をしている。このことから頭位は北西側と理解される。使用した石材は北西端の石塊が石英の他はすべて緑泥片岩であるが、端の天井石は抜かれていた。埋葬土壙は両側壁の上端とも崩壊しているが、形状は長楕円形を呈する。長さは上端で1.68m、床面で1.50mを測り、幅は40.0cm、床面は頭位側で24.0cm、脚位側で20.0cmである。床面と蓋石の裏面には朱の散布は認められない。頭位と思われる方が脚位よりも約5.0cmほど高い。主軸方位はN－42°－Wを示す。

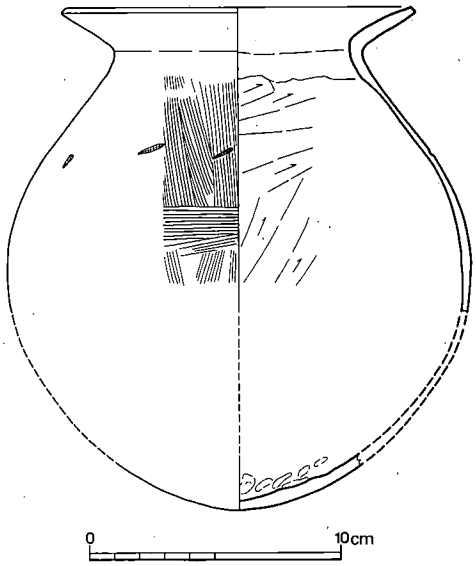
棺内の人骨は遺存しておらないが、脚部側から副葬遺物として鉄斧が出土した。

出　土　遺　物

土　器（図版48、第34図）

土師器　図示した甕は溝内から出土したが、溝が削平を受けているので出土した土器も口縁

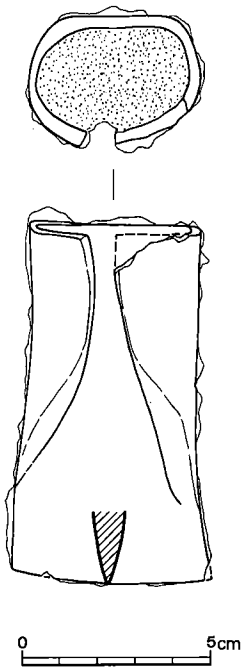
から胴部にかけて1／2と底部しか残存しておらず図上復原図である。所謂「布留式並行期」の甕で、口縁部から口唇部にかけては直線的で、肩部は撫で肩状を呈する。胴部は球形で、底部が若干尖り気味でやや古相の感がある。調整は口縁が横ナデ、肩部から胴部にかけては縦ハケと横ハケ、内面は丁寧なへら削りで仕上げ、底部には指頭圧痕が見られる。また、肩部には板状工具による刺突文を配する。胎土は細砂粒と雲母を含み、黄灰褐色を呈する。器表面には赤茶色の化粧土を塗布する。復原口径は14.2cm、器高は19.9cmを測る。



第34図　12号墓周溝内出土土器実測図（1/3）

鉄　器（図版49.第35図）

埋葬された被葬者の足下から出土した小型の鍛造鉄斧がある。袋部の一部を欠くがほぼ完形である。袋部には錆着した土が詰まっており、木質は遺存しない。出土状態から判断すると副葬時に柄は着装していなかったと考えられる。刃部の両側は対称ではなく、図示した右側は若干撥形となる。頭部の幅は4.5cm、刃部幅は5.3cm、長さは9.4cmを測る。



第35図　12号墓棺内出土鉄器実測図（1/2）

13号墓［箱式石棺墓］（図版15－(1)・(2)、第36図）

丘陵の稜線上（標高74,0m）にあり、西に隣接する15号墓（方形周溝墓）と12号墓とが等間隔に配置されている。墓の南側約1／2が著しく削平され消滅している。主体部の周囲には不整方形の周溝が巡り、方形周溝墓の形態をとる。周溝の規模は東西辺が7.50m、最大幅は1.65m 、最深部で63.0cmを測る。周溝は絹雲母片岩の岩盤を掘り込んでおり、周溝の内区は11号墓の形状と酷似する。西側隅は直角に近い状態で屈曲し、東側は鈍角に屈曲する。また、北側周溝内には当該墓と同時併存か後出する石蓋岩盤刳貫墓が配されている。おそらく6号墓と5号墓との関係と同様、13号墓の被葬者と何らかの血縁関係にあった人物の墓であろう。

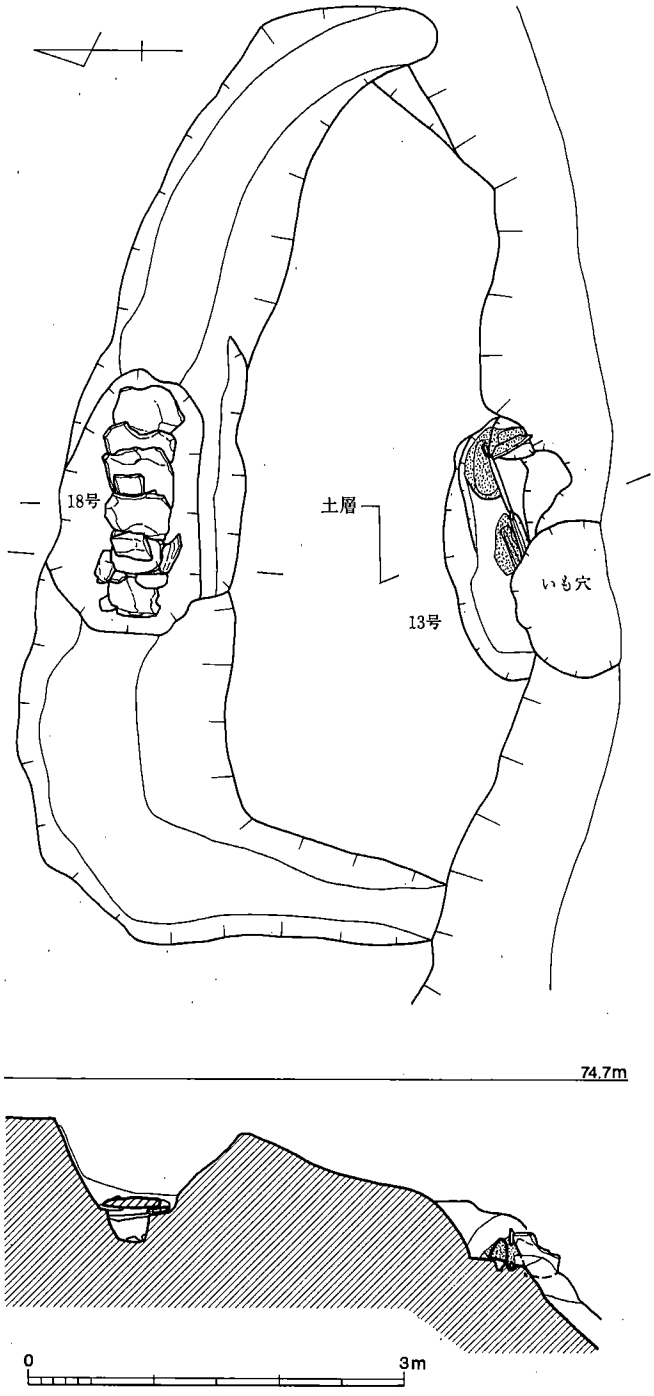
しかし、図示した土層図と18号墓との関係を観察すると、18号墓の上層の明るい黄色や茶色

系の堆積土は自然堆積を示し、18号墓の直上の堆積土は暗茶褐色でこれも自然堆積のように見えるが、18号墓内に被葬者を埋葬した時点で封土をする必要があり、図示した土層図の最下層が周囲の周溝底面とほぼ同じ高さを示すことから、この層を封土と考え意識的に周溝断面の形状に合わせた盛り土を施したと理解することが可能であろう。

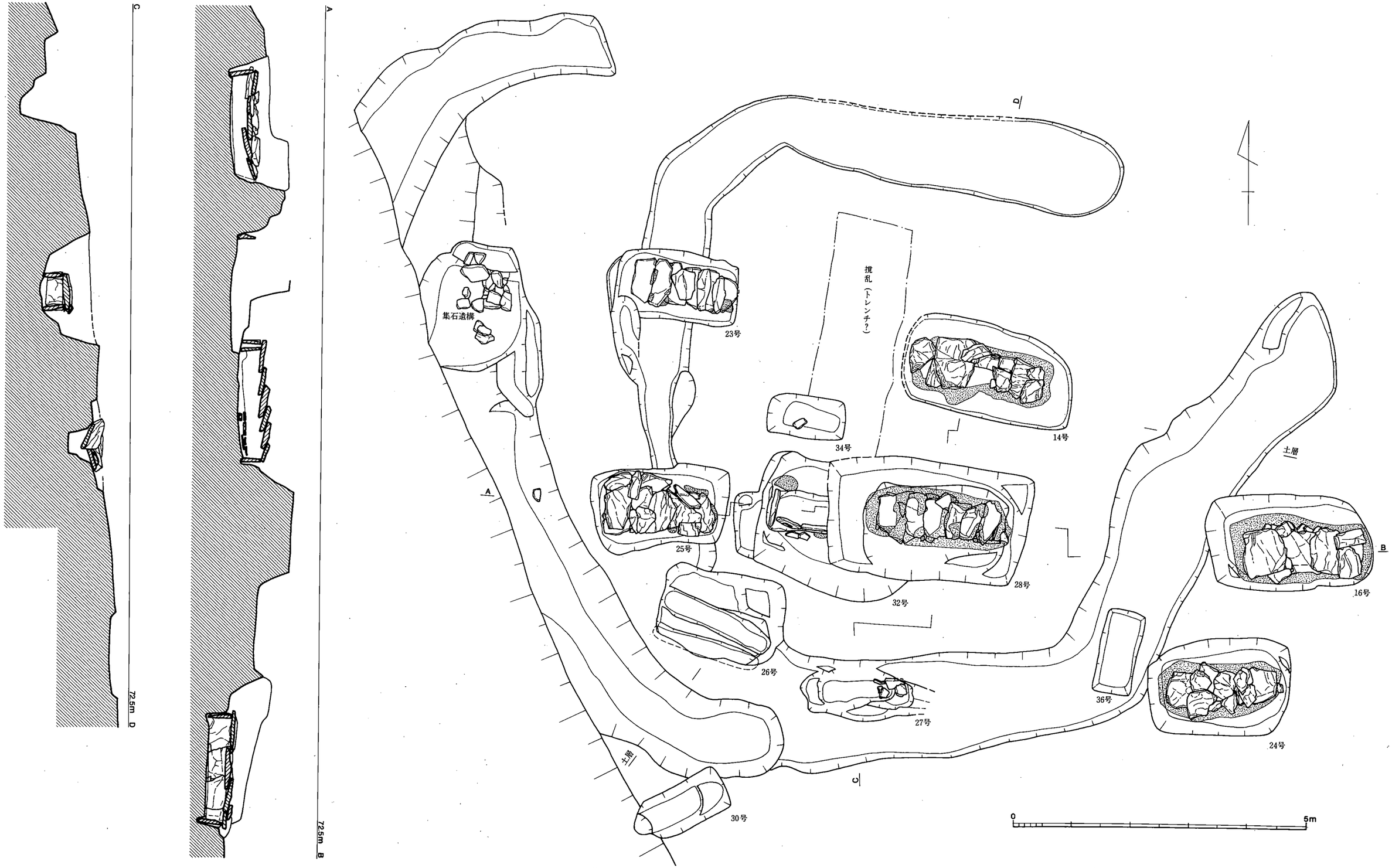
内部主体

主体部は箱式石棺である。南側と西側は後世の樹園造成と芋穴により著しく削平を受け、墓の約2／3が消滅している。墓壙は東・西側の一部と北側が遺存しているのみである。現存での墓壙形状は胴張り隅丸長方形で、箱式石棺の側板に対して墓壙の側壁は平行につくられていない。墓壙の深さは上端から44.0cmを測り、周囲の墓のような顕著な埋葬土壙を掘っておらず、墓壙を掘り下げた後に石棺の掘方を掘り、石材を立てその裏を所々に粘土で石材を固定した後に裏込めの土を充填する方法で構築している。

箱式石棺は1／4程度が遺存しているのみで、東側の小口



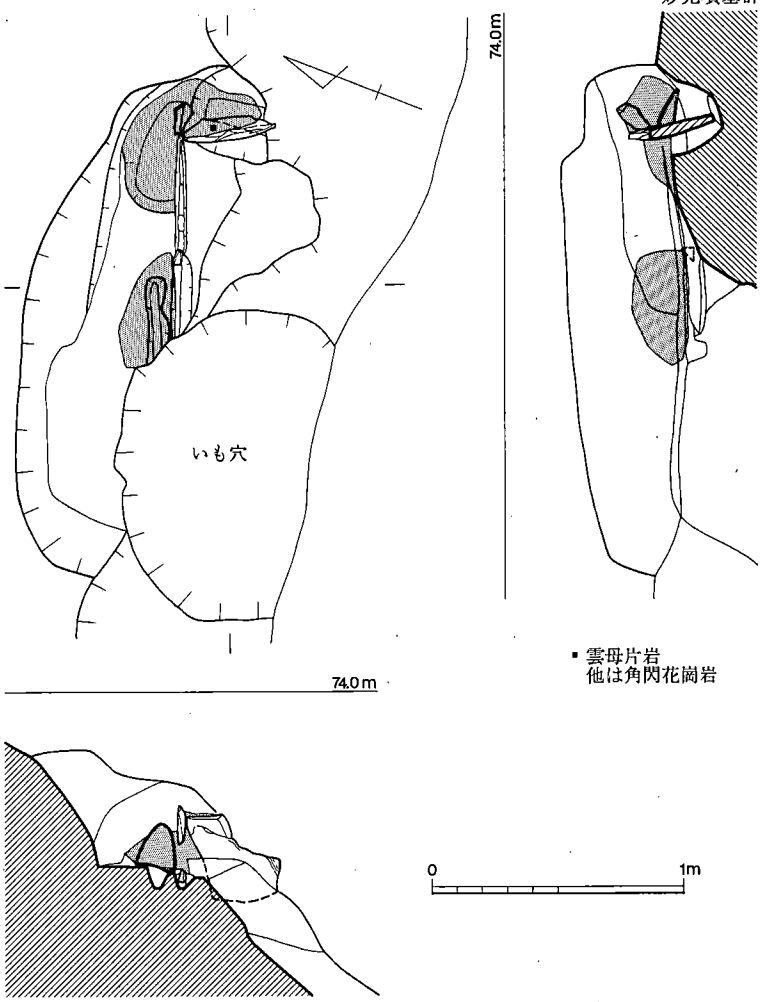
第36図　13号・18号墓実測図（1/60）



第39図　14号・28号墓付近墓地群実測図(1/60)

石が残存する。側板は1枚も残っていない。北側の側板の一部は掘方が2列に掘られ、その一方は粘土の下で検出されたことで当初のプランをやり直したことが考えられる。残存する石材は小口が絹雲母片岩、掘方内の小石塊は花崗岩である。現存の床面からは朱の散布は見られない。主軸方位はN－69°－Eを示し、石棺の主軸が周溝の対角線上にあり、調査区内で同例には17号墓があるに過ぎない。

棺内からの出土遺物はない。



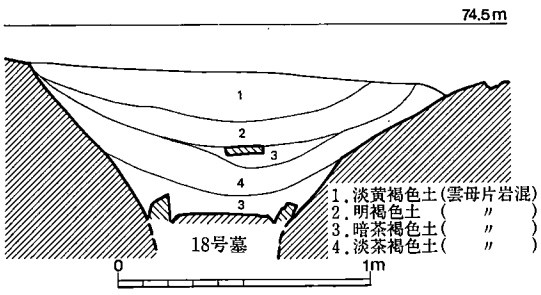
第37図　13号墓［箱式石棺墓］実測図（1/30）

14号墓［石蓋岩盤刳貫墓］

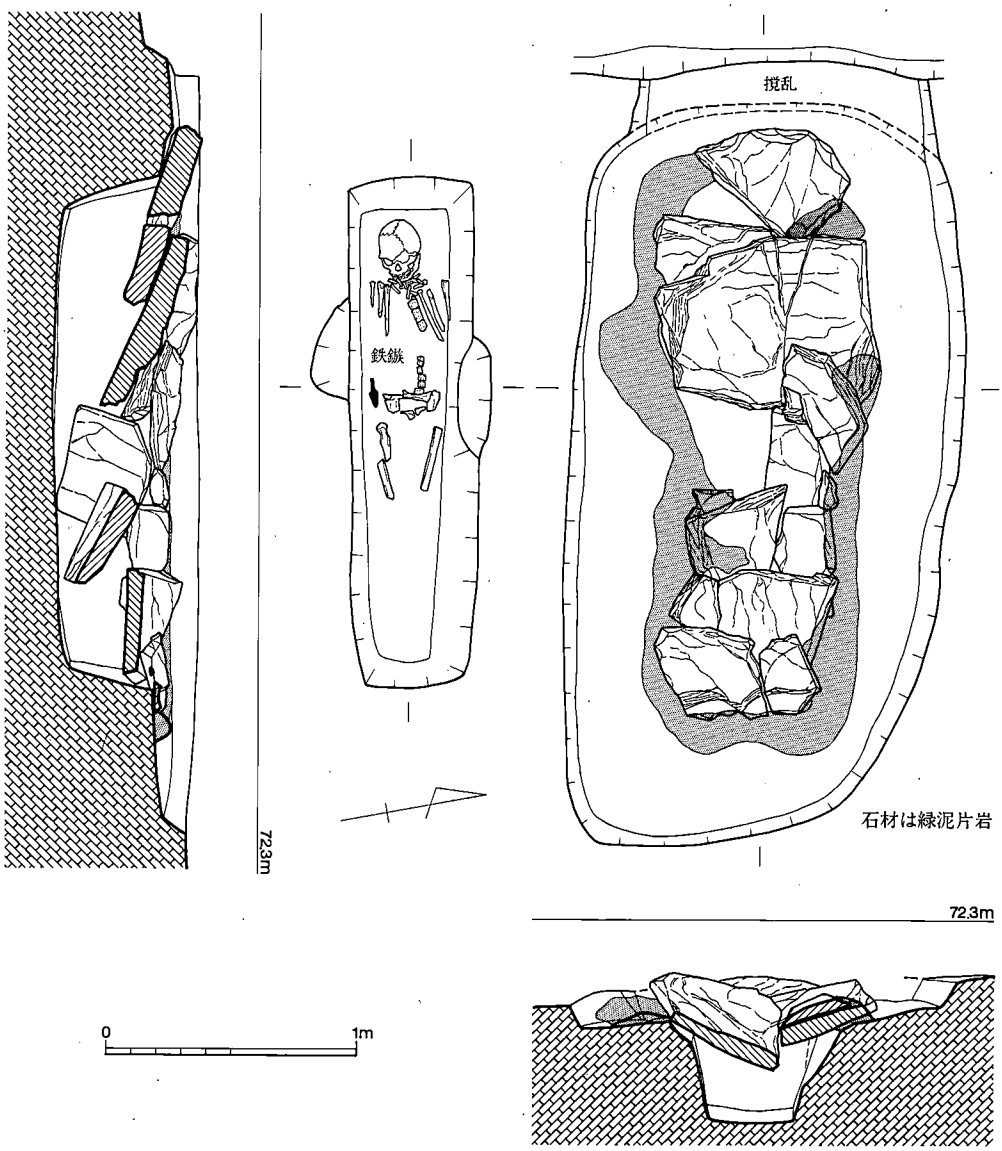
（図版16－(1)・(2)、17－(1)・(2)、18－(1)、第39～42）

調査した墓地群の中では最も遺存状態の良好な墓である。丘陵の尾根線上に位置し、標高72.0m付近の比較的緩斜面につくられている。この付近の墓は調査区内では密集した状況を示し、墓地が重複関係にあるものが存在する。

当該墓地の周囲には方形の周溝が巡り、その規模は南北辺で8.50m、東西辺で6.50・



第38図　13号墓周溝土層断面図（1/30）



第40図　14号墓［石蓋岩盤刳貫墓］実測図（1/30）

4.80m、周溝の幅は1.50m～1.70mを測るが、西側は狭く40.0cmである。深さは東側の最深部で80.0cm前後、浅い箇所では北側で4.0cmを測り、北側が著しく削平を受けている。また、周溝の東側を僅かに屈曲させ北東側に幅3.30mの陸橋部を設けている。

方形周溝墓の内区に掘られた墓は当該墓の他28号墓・32号墓・34号墓があり、この内の28号墓と32号墓は新旧関係がある。周溝の設置状況から32号墓はこの周溝とは無関係の単独墓と考えられる。また、直接重複する墓は16号墓・24号墓～27号墓・36号墓であるが、この中で27号

墓と36号墓は周溝に添った形でつくられ、５号墓・18号墓と同様の形態の墓であると考えられる。つまり、当該方形周溝墓に伴う墓は14号墓・28号墓・34号墓であり、これに付随する形で27号墓・36号墓が設営されたと理解される。

周溝の土層図で見ると粘質土と砂質土が交互に堆積し、丘陵の高所から低い方向に流れた状態に読み取れる。

周辺の墓と周溝の配置については後述する。

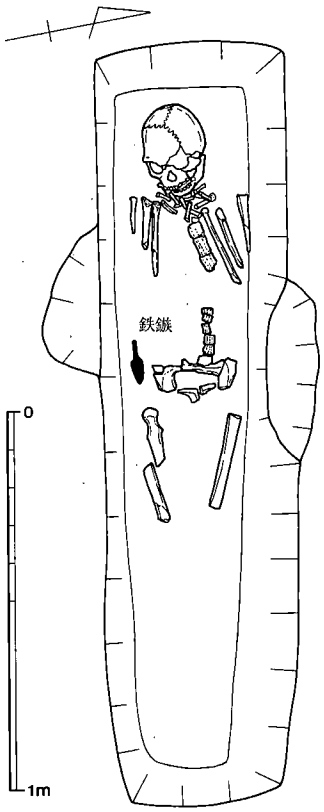
内部主体

当該墓の周辺は絹雲母片岩が露頭した部分で、結果的に石蓋岩盤刳貫墓の形態をとる。墓壙の形状は不整隅丸長方形で、西側小口が撹乱により破壊されている。規模は長軸を復原すると2.95m 、短軸は1.55m、現存での深さは10.0cmを測る。

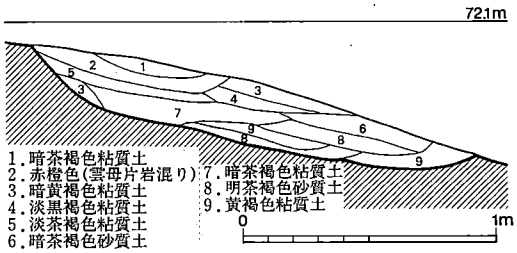
墓壙の西側にはトレンチ状の撹乱があり、この痕跡が昭和40年に朝倉高校が調査した妙見７号墳と考えられ、7.0m西側で周溝状遺構（大半が農道で破壊されている）を検出したが、７号墳に伴う遺構と考えられ須恵器と土師器が出土している。

目張り粘土は黄褐色粘土を使用し天井石と埋葬土壙の接触部分に施している。天井石はすべて緑泥片岩を用い、西端の石材と中央部分の石材は表土剥ぎの時点で移動したが、所謂鎧蓋で頭位の西側から被せている。天井石の裏面には朱が塗布されていた。

埋葬土壙は長方形のプランを有し、床面脚位の小口は隅丸である。床面には人骨が遺存していたが、肋骨と下腿骨以下は遺存していない。埋葬土壙の法量は、床の長さ1.79m、頭位幅36.0cm、脚位幅25.0cmを測る。



第41図　14号墓出土人骨実測図 (1/20)



第42図　14号･28号墓周溝土層断面図 (1/30)

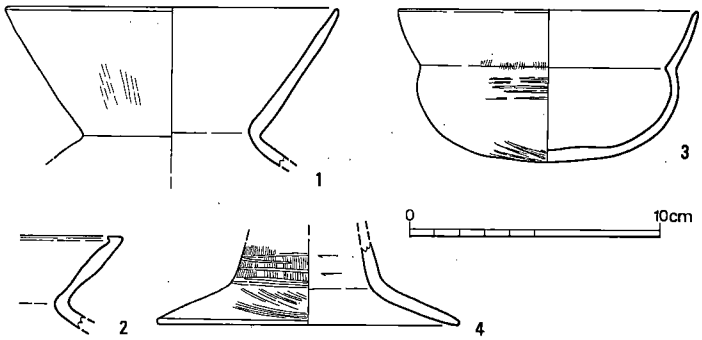
人骨は仰臥伸展葬で前腕を強屈し、左右の親指を外側にして屈し、手をさらに内側へと屈して、下顎の下で合わせている。つまり、指を組んだ所謂「合掌」ではなく、中手骨が上に、基節骨から先が下に位置することから、拳を合わせたような姿勢であったと推定される。頭蓋骨には朱が付着していたが、床面には認められない。主軸方位はＮ－80°－Ｗを示す。

棺内からは被葬者の右傍に置かれた状態で鉄鏃１本が副葬され、墓壙から鉇が出土した。

出　土　遺　物

土　器（図版48. 第43図）

土師器　すべて破片であるが、壷・甕・小型丸底土器・高坏が周溝内から出土している。1は小型壷の口縁部片で口縁部を長くつくり、口唇部は尖り気味である。調整は風化が著しく不明瞭である。胎土は精製され、茶褐色を呈する。復原口径は13.4cmを測る。周溝の南側から出土した。

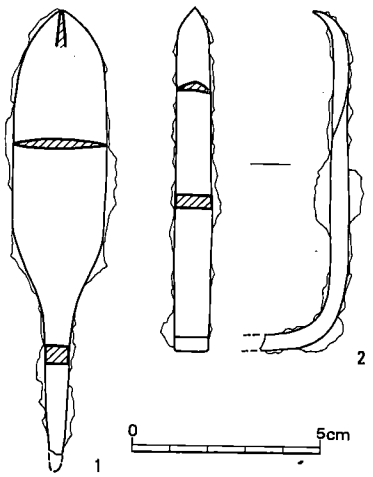


第43図　14号墓周溝内出土土器実測図（1/3）

2は布留式並行期の甕の小破片で、胎土に雲母を多く含む。灰黄褐色を呈する。周溝の東側から出土した。

3は小型丸底土器で2／3が残存する。調整は胴部にヘラ磨きと底部に極細の擦過が残り、他は丁寧にナデる。胎土は頗る緻密で、茶褐色粒子・雲母を含む。淡い黄橙色を呈する。復原口径は12.0cm、器高は6.0cmを測り、つくりの良質な土器である。周溝の南側で出土した。

4は精製品の高坏の脚部片で、極細の縦ハケの上からヘラ磨きを施す。胎土は緻密で茶褐色粒子を含み、橙黄色である。復原裾部径は12.0cmである。周溝の東側からの出土である。



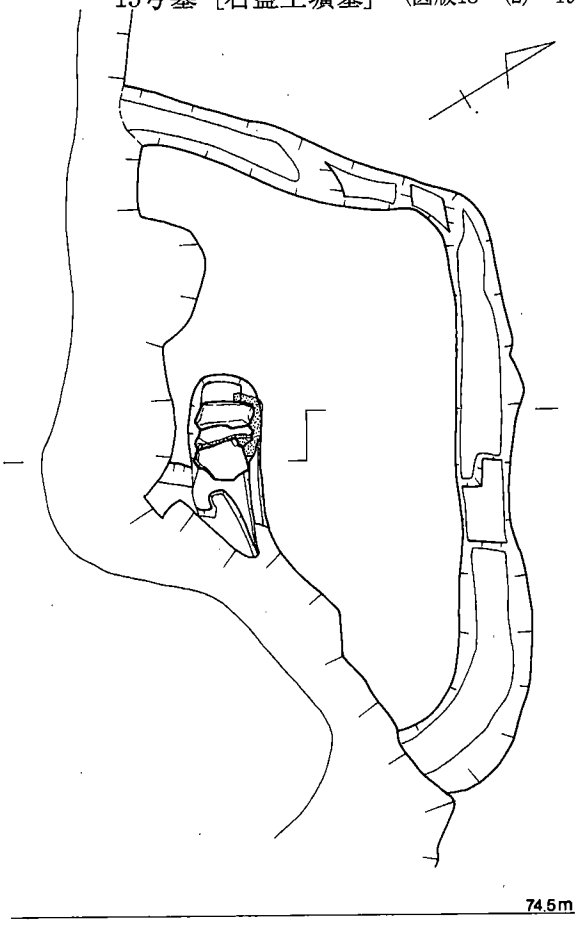
第44図　14号墓棺内外出土鉄器実測図（1/2）

鉄　器（図版49. 第44図）

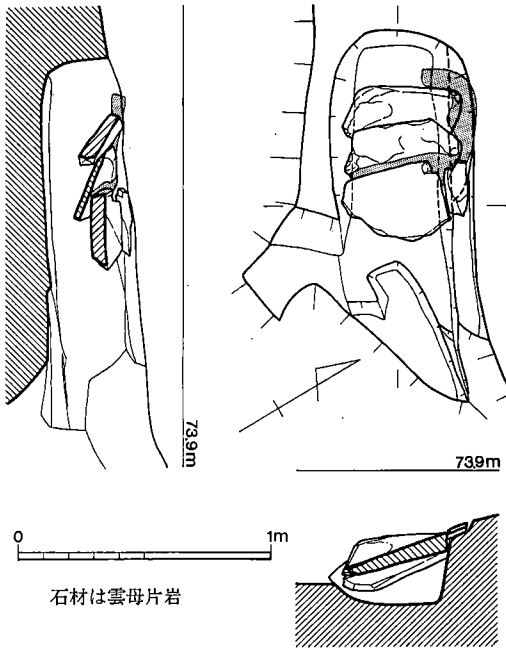
1は広根系柳葉式に属する両丸造の鉄鏃のほぼ完形品で、茎の基部を欠く。関部の屈曲は鈍くスムーズな曲線を描く。茎部の断面は方形を呈し、現存長は11.7cm、鏃身の幅は2.50cm、長さは6.0cm、厚さは2.0mmである。

2は棺外の墓壙内から出土した鉇の破片で茎部を欠損しており、切っ先と茎が折れ曲がっている。おそらく、この鉇は墓をつくる段階で、目張り粘土内に棺外副葬した鉄器と考えられる。刃部は不明瞭な鎬を有し、茎の断面は長方形である。刃部幅は9.0mm、茎幅は1.0cm、厚さは3.5mmを測る。

15号墓［石蓋土壙墓］（図版18－(2)・19－(1)、第45図）



第45図　15号墓実測図（1/60）



第46図　15号墓［石蓋土壙墓］実測図（1/30）

丘陵の尾根線上に位置し、12号墓と13号墓の間に構築された墓地で所謂「方形周溝墓」である。標高では74.0m付近に当たる。12号・13号墓とは等間隔にあり、この３基は同時併存であろう。

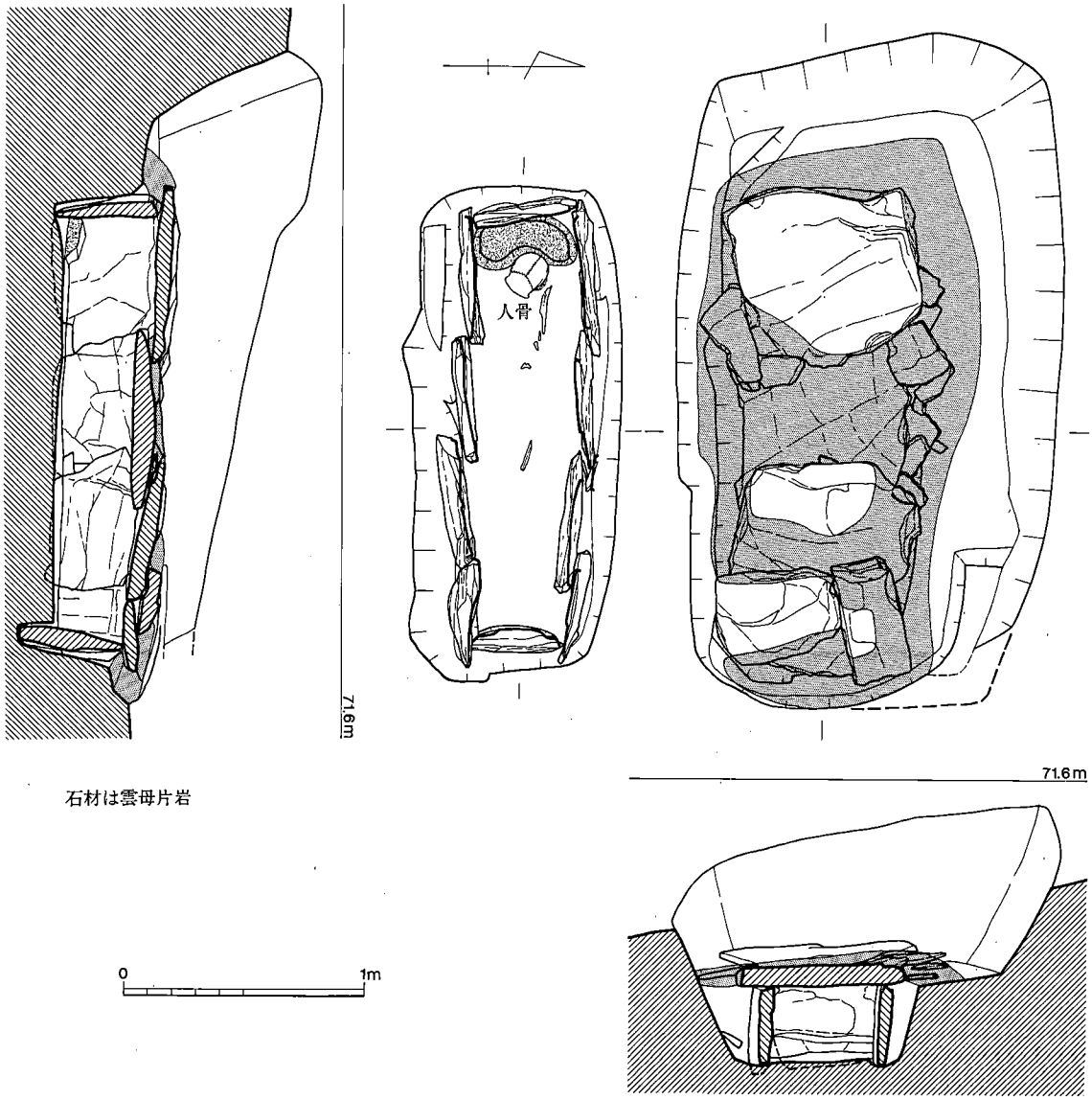
当該墓の周溝は他の方形周溝墓の溝と比べ幅が狭い。南側の約1／2が著しく削平を受けており、全容は把握できない。周溝の規模は、北側辺が4.70m、内区辺で3.90mを測る。幅は広い箇所で60.0cm、狭い箇所で20.0cm、深さは30.0cm弱である。周溝内からは絹雲母片岩の板石が出土したが、供献遺物の出土はない。

内部主体

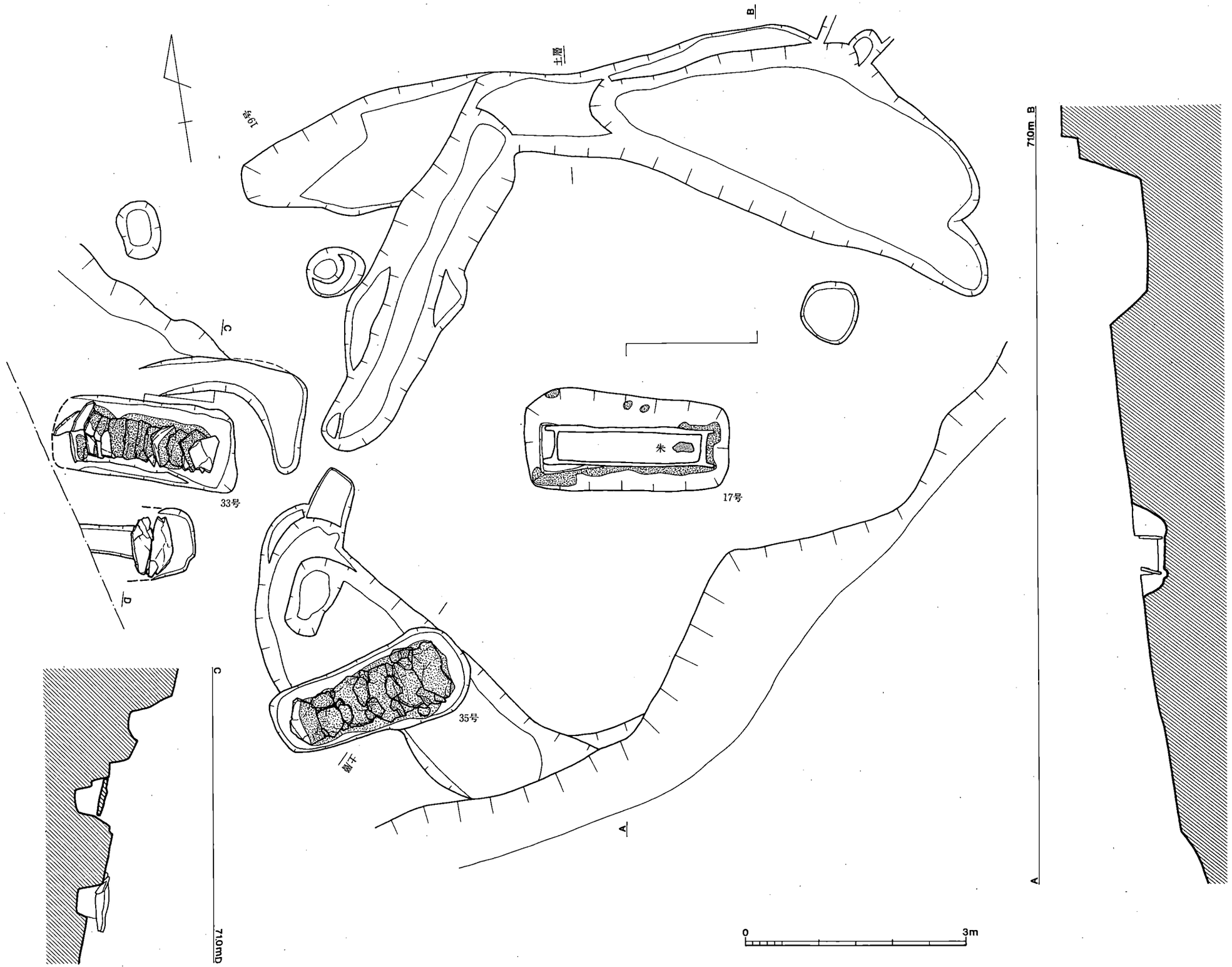
主体部は石蓋土壙墓であるが、東側の約1／3が削平されている。墓壙は北側に２段掘りの面影を残しており、本来は２段掘りであったろう。埋葬土壙の形状は現存する西側で見る限りで

は隅丸長方形と推測され、その幅は57.0cm、底面での幅は33.0cm、深さは25.0cmを測る。目張り粘土は黄褐色粘土を使用し、天井石は西側端と東側が抜かれているが残りは鎧蓋状に被っており、このことから頭位が西側であったことが分かる。石材は絹雲母片岩を使用し、床面での朱の散布は認められない。主軸方位はN－59°－Wを示し、棺内からの人骨や副葬品はない。

16号墓［箱式石棺墓］（図版19－(2)・20－(1)・(2)・21－(1)、第39・47図）



第47図　16号墓［箱式石棺墓］実測図（1/30）



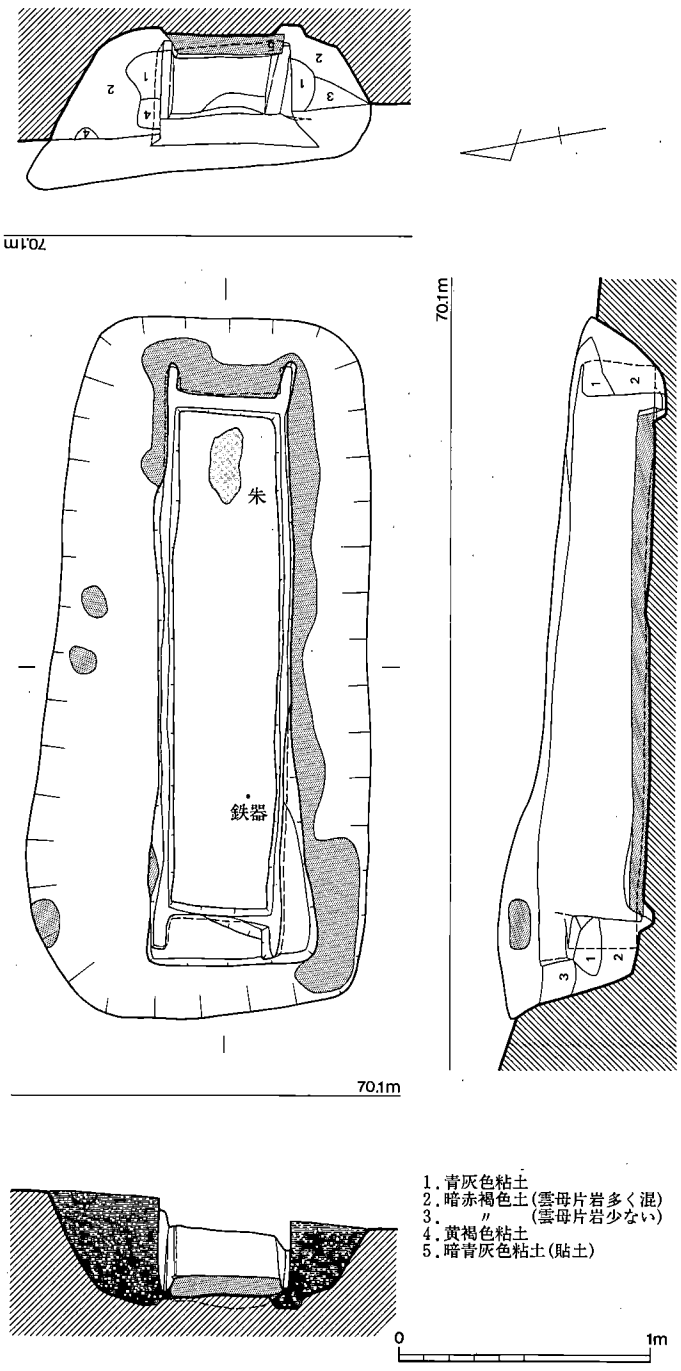
第48図　17号・19号墓付近墓地群実測図(1/60)

丘陵の尾根線上の東側斜面で検出した墓で、14号墓・28号墓を主体部とする方形周溝墓の東側周溝の一部を切っている。標高では71.0m付近に当たる。

埋葬形態は箱式石棺墓で、墓壙形状は不整長方形を呈し、絹雲母片岩混りの粘土層を掘り込んでいる。墓壙の規模は、長軸が2.75m、短軸は1.60mを測り、東西と北側は2段掘りでテラスをなすが、南側は掘方の底面まで掘り込み裏込めに岩盤混じりの赤褐色土を充填している。

目張り粘土は天井石の上面一部を除いて全面に施しており、灰青色粘土を使用している。石蓋はすべて絹雲母片岩の板石を使い、隙間には割り石を詰め込んでいる。蓋の方法は中央の蓋石をまず載せ、その後に頭位と脚位の板石を載せ架け、この墳墓群で多く見受けられる「鎧蓋」は採用しない。

棺材もすべて絹雲母片岩を使用し、頭位側の小口石の掘方は浅く、脚位側の小口石は深く掘り込み、蓋石のレベルは頭位を高く脚位を低く調整している。側板の設置方法は



第49図　17号墓［木棺墓］実測図（1/30）

割りと雑で、小口部分を挟み込む形で構築するが、西側の小口石と側板が接する部分は段をなしかみ合わせている。使用している石材の内面のすべてには朱が塗布されていた。

床面は岩盤の状態のままで、頭位側の小口部分には若干の盛土をし目張り粘土と同じ粘土で枕をつくっている。棺内の法量は長さが1.70m、頭位側幅は43.0m、脚位幅が37.0cm、天井までの深さは脚側で30.0cm、頭位側で37.0cmを測る。主軸方位はN－90°－Wを示し、東西に主軸をとる。

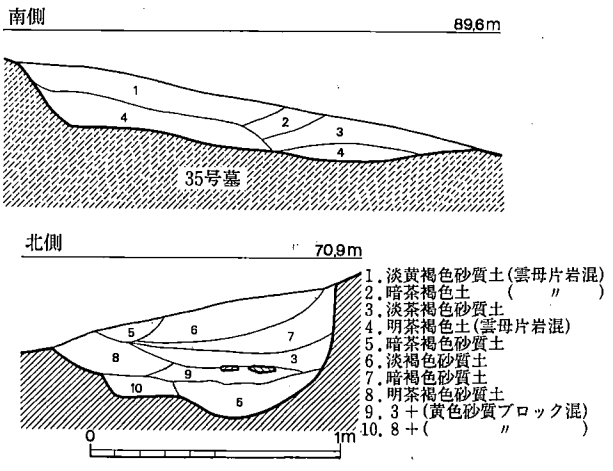
棺内からは頭蓋骨と左上腕骨、脚骨の一部が遺存していたが、副葬遺物は出土していない。

17号墓［木棺墓］（図版21－(2)・22－(1)・(2)・23－(1)、第48～51）

丘陵の尾根線上より若干東斜面に築かれた方形周溝墓で、14号・28号墓を主体部とする方形周溝墓の南隣に位置する。この付近の地形は東側を除いて樹園造成による雛壇状の削平を受けておらず、旧地形に近い状態と考えられ傾斜も緩やかであるため、主体部の遺存状態も良好である。

周溝は東側が70.0cm前後の落差があり消滅しているが、北側と南西側の周溝は幅広に掘られており西側は狭く、不揃いの周溝の感がある。南西側の周溝内には新たに35号墓が掘られている。また、西側のコーナーには陸橋部がつくられている。規模は幅広の箇所で2.60mの幅があり、西側の狭い箇所で90.0cm前後、深さは70.0cm前後を測る。内区の西側辺は5.90mである。

周溝内からの出土遺物は、土師器の壷・甕・小型丸底土器・高坏などがあるが、この中の二重口縁壷は頸部から胴部にかけては当該周溝内から出土し、口縁部片は14号・28号墓の周溝内と27号墓壙内から出土している。図示した胴部の出土状態から判断すると内区方向から転倒した状態を示唆しており、しかも底面から60.0cm上層から出土している。この事実から内区に供献された土器が周溝がある程度埋没した段階で流れ込んだと理解される。また他の墓からの出土は分散供献とは考え難く、単なる流れ込みであろう。



第50図　17号墓周溝土層断面実測図（1/30）

内部主体

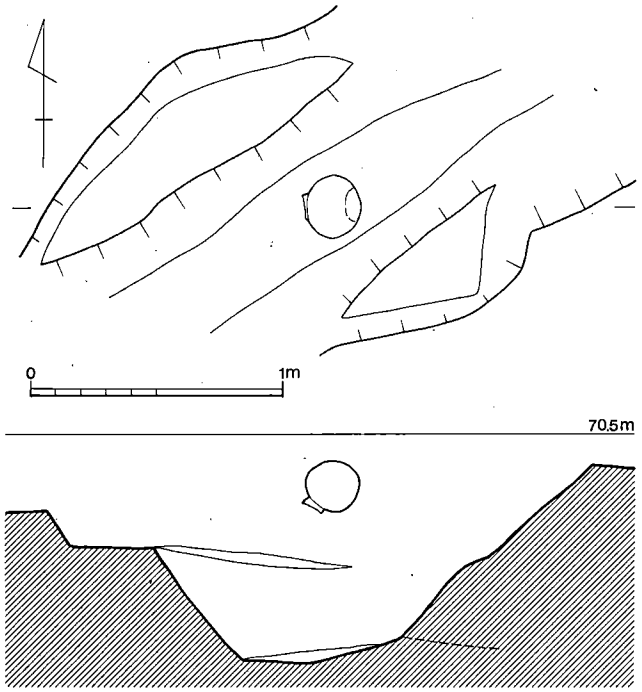
主体部は墳墓群の中では唯一の木棺墓である。墓壙の形状は隅丸長方形であるが、北西隅がやや張り出した形である。規模は長軸が2.75m、短軸は中央部分で1.27mを測る。

木棺の形態は小口板を側板で挟み込む「H」型の類で、板の痕跡が非常に良く遺存していた。木棺内の法量は長さが1.95m、幅は西・

東側が40.0cmとほぼ同一である。

木蓋の痕跡は確認できていないが、北側と西側を除く木棺沿いには灰青色粘土による目張りが施されていた。

断面図でも分かるように北側の側板とその掘方の位置がずれており、当初墓壙を掘削した段階での計画線と一致せず西側が一回り広くつくられている。側板の裏込めには、灰青色粘土・暗赤褐色土（雲母片岩多い）・黄褐色粘土などで充填している。



第51図　17号墓周溝内土器出土状態実測図（1/30）

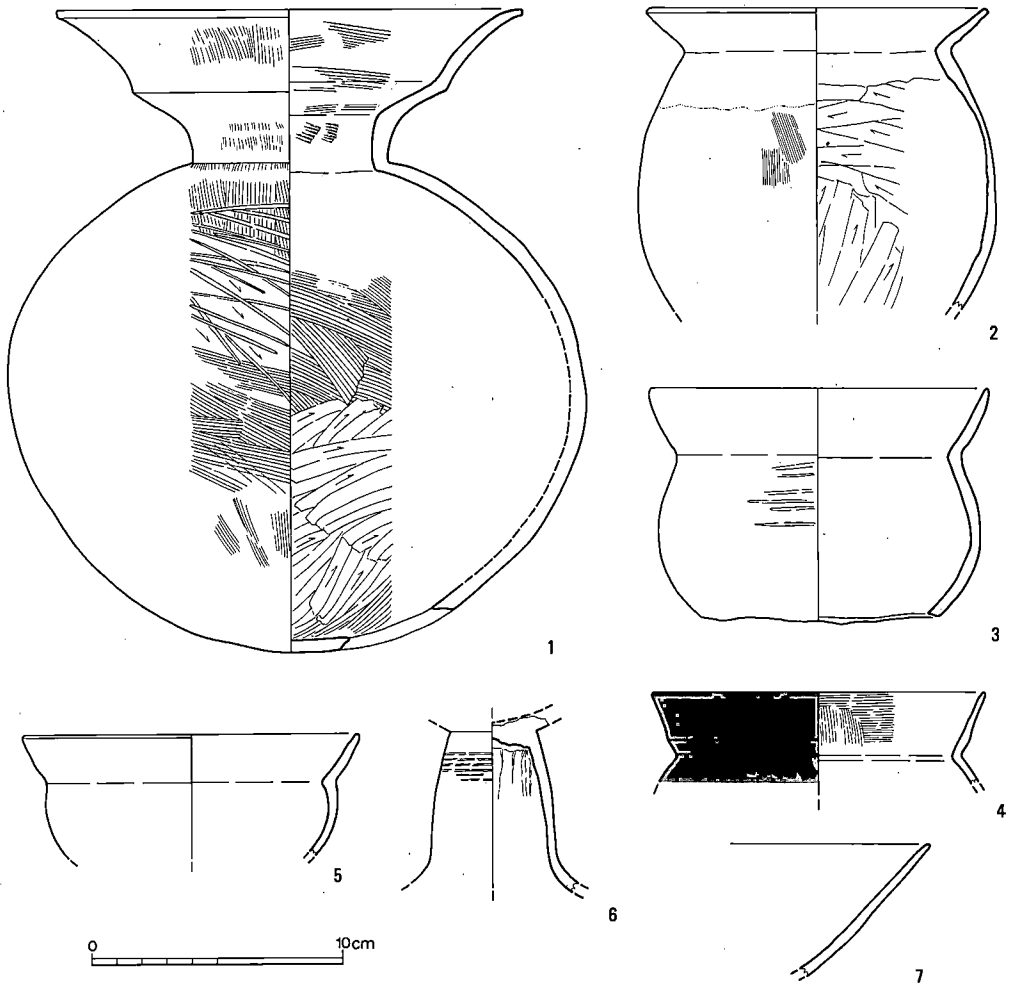
床面は全面に暗赤褐色土を約7.0cmほど盛り上げ死床をつくり、レベル的には西側が若干高くなり頭位の可能性があるが、東側の小口部分に楕円形状に朱が認められ、人骨の出土がないため何とも断言できないが、東側を頭位と考えざるを得ない。

主軸方位はS－81°－Eを示し、13号墓と同様主体部が周溝の対角線上に位置する。床面には枕はなく、棺内からの出土遺物は鉄器（刀子・鉇）があるが、両者とも折れ曲がり貼り床内から出土した。このような出土例を副葬品と考えるか否かであるが、14号墓壙内から出土した折れ曲がった鉇（棺外副葬品）や後述するが20号墓の粘土枕の下から出土した鉄鏃などの例から、副葬の一形態と考えられる。

出　土　遺　物

土　器（図版48、第52図）

土師器　1は周溝の北側から出土した二重口縁壺の完形品である。前述したように頸部から胴部にかけては17号墓から出土し、口縁片は14号墓周溝内と27号墓壙内から出土した土器片が接合した。頸部から擬口縁にかけては開き気味に立ち上がり、口縁部は更に大きく開く。胴部から底部にかけては球形をなす。調整は口縁と頸部がハケの上から横ナデで仕上げ、外面肩部がハケの上をヘラ磨き、胴部中央がヘラ削りの上を荒いヘラ磨き、下半はヘラ削りの後横ハケ、底部はヘラ削りの後ナデている。内面は肩部がナデ、胴部上半はハケ、下半から底部は丁寧な



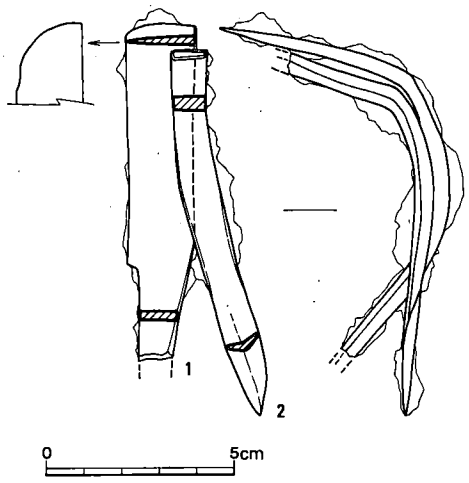
第52図　17号墓周溝内出土実測図（1/3）

ヘラ削りで仕上げている。底部付近には径が3.5cmの孔を内側から穿っている。胎土は砂粒子を若干含むが緻密である。明茶褐色の色調をなし、口径は18.6cm、胴部径は23.1cm、器高25.3cmを測る。

2～4は甕の破片で、2は直線的な口縁部に張りの鈍い胴部を有す。調整は胴部には部分的にハケが残るが、全面をナデている。内面は肩部から丁寧なヘラ削りで仕上げる。胎土には砂粒が多く布留式並行期の甕としては悪い。口縁の一部と肩部から胴部にかけて煤が付着し、二次火熱を受け変色する。この煮沸用具は、7号墓周溝内で確認した甕同様、葬送儀礼時に飲食に使用したか、日常被葬者が使用した甕を供献した可能性が考えられる。復原口径は13.6cmである。北東側から出土した。3・4は小型の甕で、3は内湾口縁を有す。胴部は扁平なつく

りで、外面に横磨きが僅かに残る。底部は破損のため不明瞭であるが、大きく穿孔している可能性がある。胎土は精製され、明茶褐色を呈する。復原口径は13.6cmを測る。北側周溝からの出土である。4は口唇部を尖らせ、器壁を薄くつくる。頗る精製された土器で、調整は内外面に極細のハケが残るが、外面に丹を塗布した痕跡がある。復原口径は13.2cmを測る。周溝の西側から出土した。

5は小型丸底土器の小破片で器面が風化し調整は不明瞭である。胎土は大粒石英粒と茶褐色粒を含み、淡い黄褐色を呈する。復原口径は13.4cmで、周溝の西側から出土した。



第53図　17号墓棺内出土鉄器実測図（1/2）

6は高坏の脚部で精製品である。柱状部はエンタシス状を呈し、上半に薄く沈線が残る。胎土は非常に緻密で茶褐色粒子を含む。淡橙色を呈する。7は6の坏部片で胎土・色調とも6に酷似する。両者とも周溝の北側から出土した。

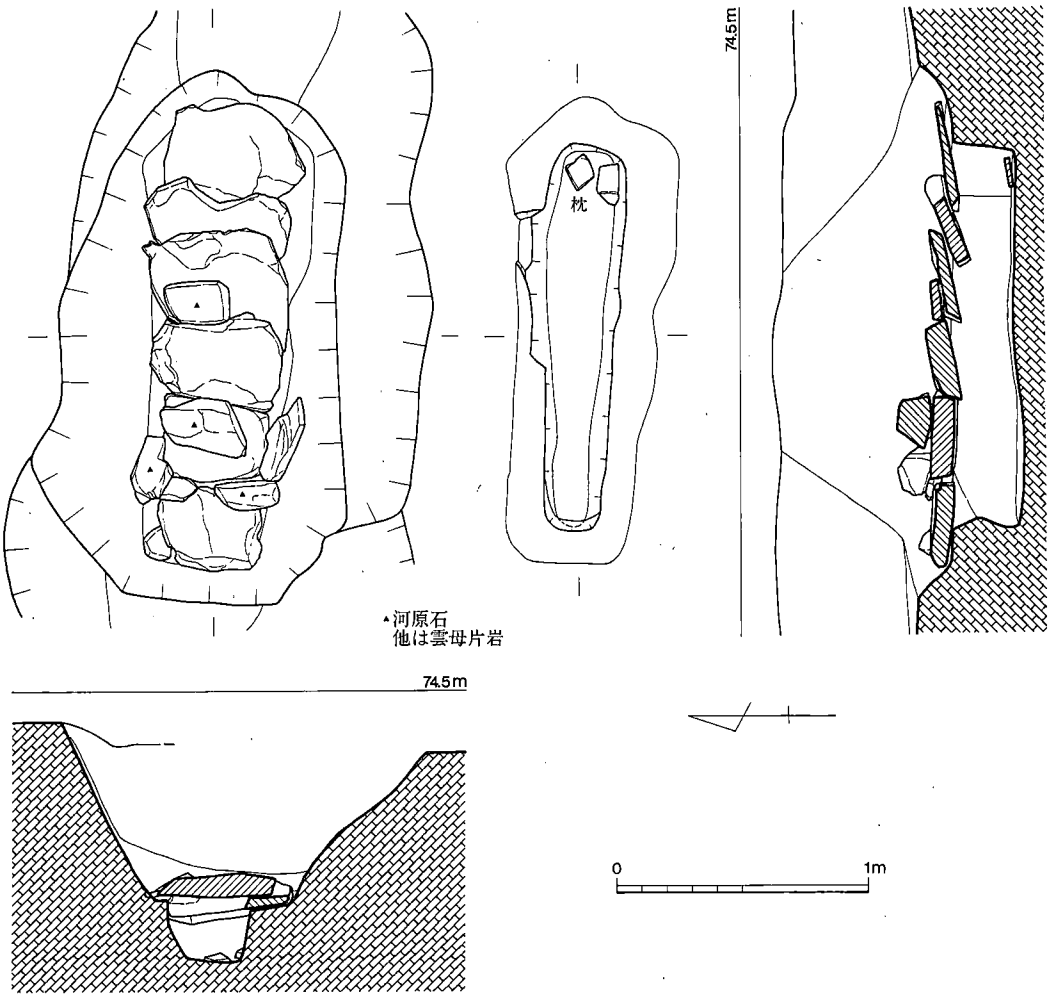
鉄　器（図版49.第53図）

1・2は床面の客土内から両者の刃部を逆にし錆着して出土した。1は刀子で茎の基部を欠損する。復原した刃部の長さは10.5cm、幅は1.9cm、背の厚さは3.0mmを測り、現存する茎は3.0cm、厚さは2.5mmである。切っ先は丸みを有し、研ぎ減りなどは認められず使用期間の短いことを物語っている。

2は鈍で刀子同様茎の基部を欠損している。刃部の断面は三ケ月状を呈し、表裏の中央に稜を有す。刃部は片減りしている。現存の長さは11.5cm、刃部・茎幅とも9.0mmを測る。両者の屈折状態を観察すると同一箇所で鋭く曲がっていることが分かる。この事実から両方の鉄器は重ねられて同時に強い衝撃を受けたと推測され、明らかに作為的に折り曲げられたと理解される。しかも、出土状況が通常の棺内副葬とは異なり、死床内に埋め込まれた異例の副葬の仕方を示唆しているようにも看取できる。

18号墓［石蓋岩盤刳貫墓］（図版15－(1)・23－(2)・24－(1)・(2)、第36・54図）

標高76.0mの所に築かれた13号墓（方形周溝墓・箱式石棺）の北側周溝内に掘り込まれた石蓋岩盤刳貫墓である。墓壙は周溝に添って掘り込まれ、形状は不整楕円形を呈する。墓壙の底面は周溝の底面より14.0cmほど深く掘られ、墓壙の長さは2.10mを測る。目張り粘土は施して



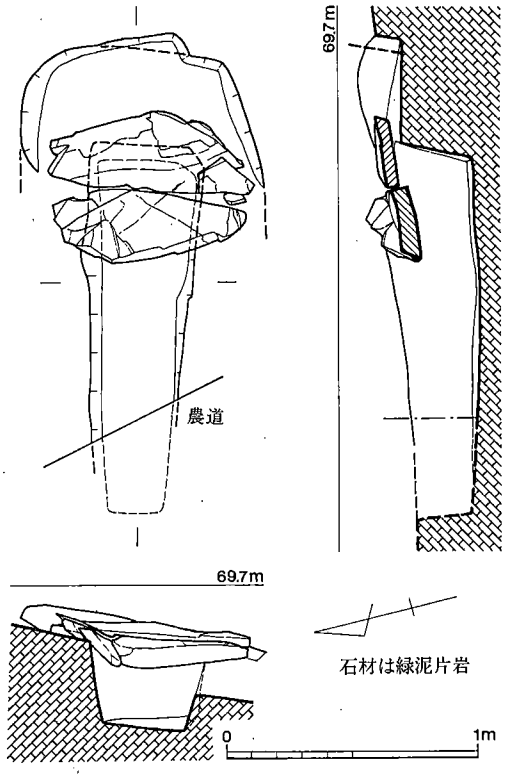
第54図　18号墓［石蓋岩盤刳貫墓］実測図（1/30）

おらず、周溝の底面の高さまで封土をしている（第38図参照）。

蓋石は絹雲母片岩の板石を東側1／2まで鎧蓋状に架構し、西側半分は平側が接する形で被っている。その隙間を4個の河原石で塞いでいる。埋葬土壙は、絹雲母片岩の岩盤を隅丸長方形に刳り貫き、その規模は上端で長軸が1.53m、頭位幅は32.0cm、脚位幅は23.0cm、床面では長さ1.49m、頭位幅は23.0cm、脚側は14.0cmを測り、埋葬土壙としては狭く身長が1.35m前後の被葬者を埋葬したと推測される。また、脚位部分の小口は僅かに抉っており、頭位部には緑泥片岩の板石2個を枕として置いている。頭位側の小口部の壁には小型の鉄斧で掘削したと考えられる痕跡が多く残っている（図版24－(2) 参照）。主軸方位はＳ－87°－Ｅを示し、ほぼ東西方向に主軸をとる。棺内からは人骨及び副葬品はなく、朱の散布も見られない。

19号墓［石蓋岩盤刳貫墓］（図版25－(1)・(2)・26－(1)、第48・55図）

丘陵の尾根線上に掘られた墓で、標高69.5m付近に位置する。当該墓は33号墓と平行して掘られ、その北東側傍には「L」字状の周溝が残っているが、周溝が一周していたか否かは削平を受け不明である。この周溝が19号墓に伴うのか2基の墓に伴う遺構かははっきりしないが、33号墓の位置と西側周溝の先端とが接近し過ぎていることから、19号墓に伴う周溝の可能性が高く、33号墓は19号墓より後出すると理解される。周溝の幅は50.0cm前後で、深さは30.0cmを測る。



第55図 19号墓［石蓋岩盤刳貫墓］実測図（1/30）

周溝内の東側からは供献土器が底面より若干上層で集中して出土した。器種は土師器の壷・甕・高坏・器台がある。

内部主体

主体部は、周囲が絹雲母片岩の露頭した箇所のため必然的に石蓋岩盤刳貫墓となる。墓壙は2段掘りであるが、大半が削平され東側に残っているのみである。

天井石は2枚しか遺存しておらず、緑泥片岩を相接するように架構している。埋葬土壙は西側1／3が農道建設で消滅しているが、遺存の状況から東側が幅広く47.0cm、西側では36.0cmを測り、頭位が東側であることが分かる。

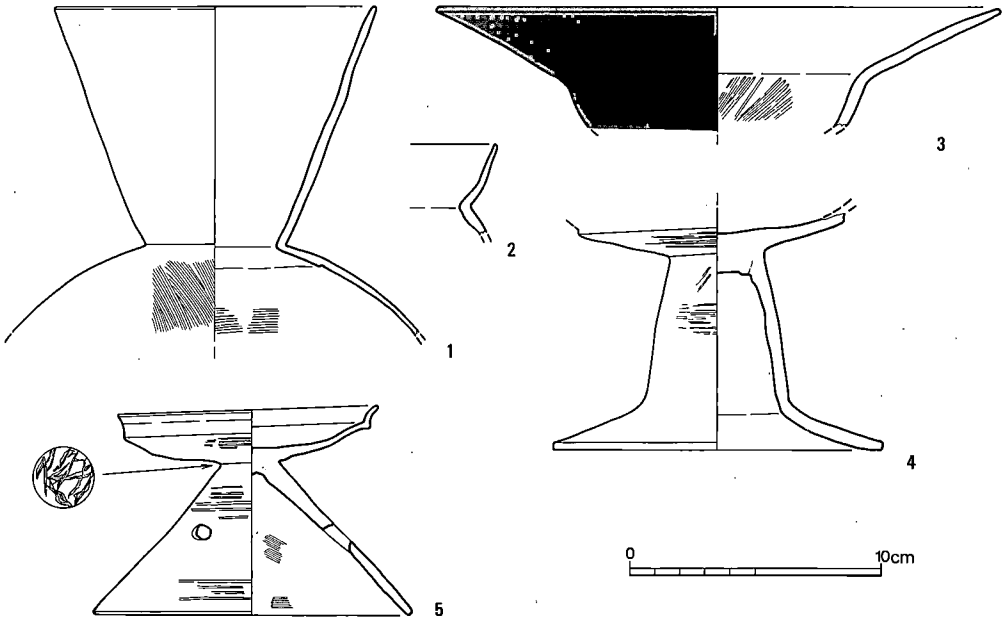
床面には枕は設置しておらず、人骨及び副葬遺物はない。主軸方位はＳ－76°－Ｅを示す。

出　土　遺　物

土　器（図版48・49、第56図）

土師器　1は頗る良質の細頸壷で、頸部から口縁部が一直線につくられる。肩部は球状に張り、胴下半が欠損しているが球形を呈すると思われる。全体に器壁を薄くつくり、調整は頸部上半が丁寧なナデ、肩部外面は極細のハケ、内面はヘラで削った後ナデている。胎土は精製した粘土を使用し、黄褐色を呈する。復原口径は12.8cmを測る。

2は小型甕の口縁部片である。口縁部を僅かに内湾させ、17号出土の甕に酷似する。つくりは良質で、胎土に茶褐色粒子を含む。淡い橙色を呈する。



第56図　19号墓周溝内出土土器実測図（1/3）

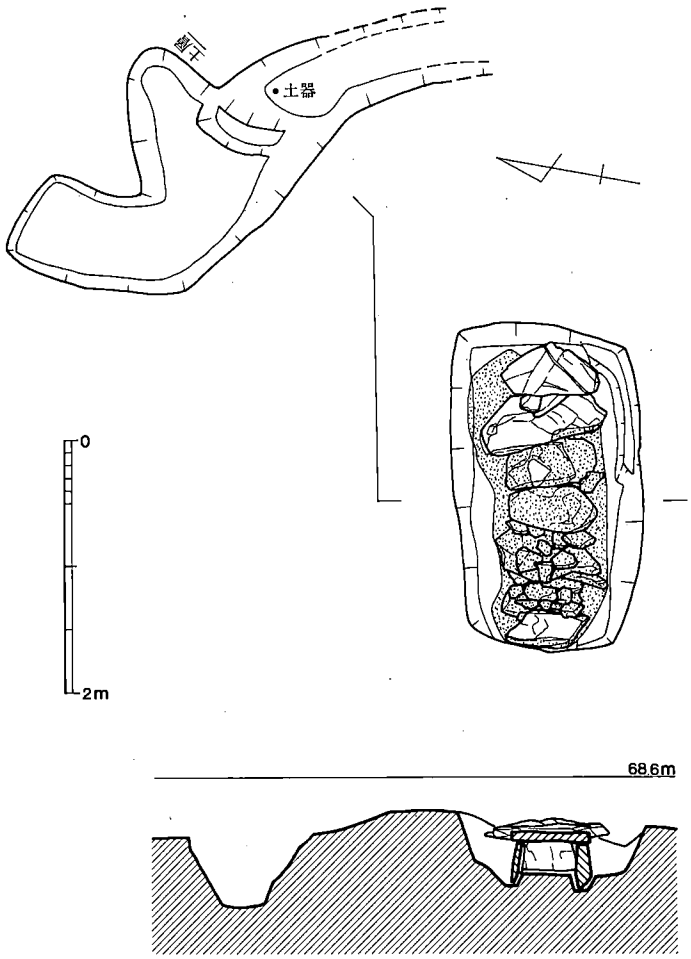
3・4は精製品の高坏である。3は小ぶりの体部から外反する長い口縁部を有す。脚部は欠失しているが、4の脚とは同一タイプではない。調整は口縁内外面とも水びき、体部内面はヘラ磨きと横ナデで仕上げ、外面は横方向のヘラ磨きで一部に丹塗り痕が残ることから、本来丹塗り磨研の可能性がある。胎土は非常に緻密で茶褐色粒子を含む。灰黄褐色を呈し、復原口径は22.6cmを測る。4は口縁部を欠く高坏で、柱状部はエンタシス状を呈する。体部と底部の境には有段をなす。調整は底部外面から柱状部にかけては横方向のヘラ磨きが僅かに残る。裾部は横ナデで仕上げる。この高坏は底部が17号墓の北西側周溝内から出土し、脚部が19号周溝から出土した。胎土は3に酷似し、淡い黄橙色を呈する。裾部の径は13.2cmを測る。

5は器台形土器で、坏部が1／2、脚部が2／3ほど残存している。坏の体部は僅かに丸みを有し、口縁は反りながら外反する。脚部は直線的に開き、中央付近には3個の不揃いの孔を穿っている。調整は風化が著しく坏部外面と脚の一部に横ヘラ磨きが残る。脚内面は極細のハケの上からナデている。坏部と脚部の接合面には不揃いの凹凸面をつくり接合しやすくする。この器台も4の高坏同様坏部が19号墓周溝内、脚部が17号墓周溝内から出土している。復原口径は10.4cm、裾部径が12.8cm、器高は8.1cmを測る。

20号墓［箱式石棺墓］（図版26－(2)、第57～59図）

17号墓の東側で検出した墓で、標高が68.0m付近に位置する。主体部の北側2.0mには形状の

はっきりしない土壙状の掘り込みがあり（第6図参照）、主体部の東傍には深さ40.0～50.0cmの溝が走る。溝については主体部と近過ぎるため当該墓には伴わないと考えられるが、土壙状の遺構については中（中層）から古式土師器の高坏が出土しており、墓に伴う周溝状遺構（東側は流れて消滅している可能性がある？）とも考えられる。図示した土層断面図では砂質土が20号墓側から堆積しており、盛土の存在も否定できない。



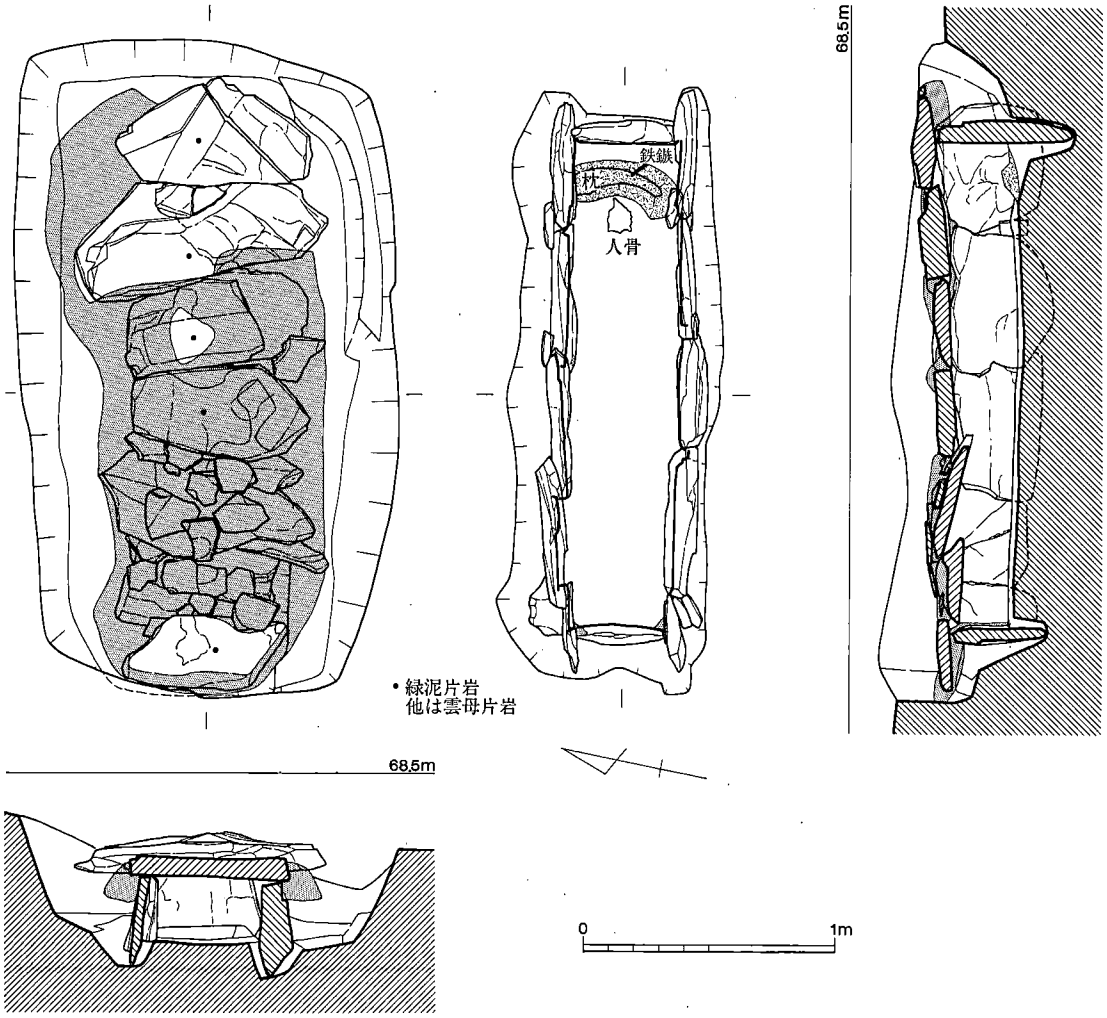
第57図　20号墓実測図（1/60）

内部主体

主体部は箱式石棺で、墓壙は不整胴張り長方形の形状をなす。その規模は長軸が2.60m、短軸は1.50mを測る。目張り粘土は東側を除くほぼ全面に施しており、灰青色粘土を使っている。

天井石は緑泥片岩と絹雲母片岩を架構しているが、1個を除いて平側を接して構築し、東側に大振りの板石を使っている。棺材はすべて絹雲母片岩を使って構築し、小口石を側板で挟み込む形である。側板は5枚の板石を立て、全体に整美な箱式石棺をつくっている。天井石と棺材の内面には赤色顔料を塗布している。石棺の裏込めには暗褐色土を充填している。

棺内の法量は長さが1.92m、幅は45.0cm、蓋石からの深さは頭位方向が深く30.0cm、脚側が20.0cmである。床面の東側小口部には黄色粘土を用いた幅15.0cm前後、高さ6.0cmの枕を付設しており、頭位が東側であったことが分かる。



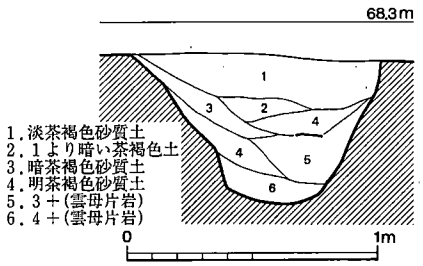
第58図　20号墓［箱式石棺墓］実測図（1/30）

主軸方位はＮ－78°－Ｅを示し、棺内の枕の傍から頭蓋骨片と歯が４個出土した他、粘土枕内から鉄鏃が埋められた状態で出土した。この鉄鏃を副葬品と理解するかは、前述した１７号墓（木棺墓）の棺内床面の客土内から出土した鉄器（刀子・鉇）と同様の出土状態を示しており断言できないが、棺内副葬とするならば特異な出土例と言えよう。

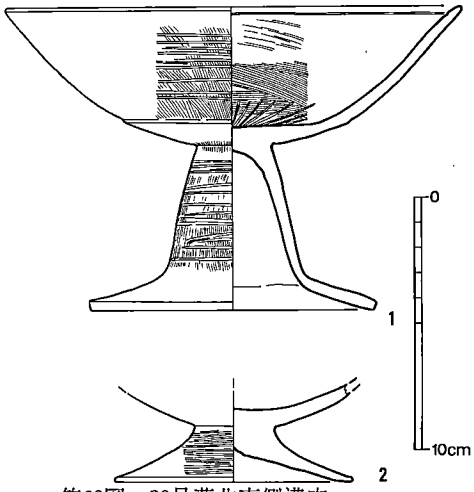
出　土　遺　物

土　器（図版49.第60図）

土師器　当該墓の北東側溝から出土した1・２の二種類のタイプの異なる高坏がある。１は布留式並行期の普遍的な高坏で完形品である。坏の底部は小さく直線的に延びる口縁部を有す。



第59図　20号墓北東側内
土層断面図 (1/30)



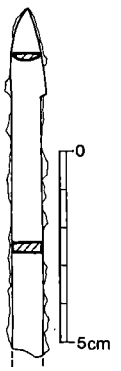
第60図　20号墓北東側溝内
出土土器実測図 (1/3)

坏部は深くつくられ、底部と胴部の境は僅かに屈曲する。口唇部には細い沈線が巡る。脚の柱状部は短いエンタシス状を呈す。調整は坏部の内面が上からハケの上をナデ、その下が渦巻き状の極細のハケ、底部がハケの上から放射状にヘラ磨きする。外面はハケの後粗い横ヘラ磨き、底部は不明瞭であるが横ナデで仕上げている。柱状部は坏部外面と同じ調整で、裾部と内面は横ナデで仕上げる。胎土は頗る緻密で、未火熱部分は橙褐色を呈する。所々に二次火熱を受け赤黒くくすんでいるが、坏内底部はまったく火を受けておらず接合した破片ごとに火の受け具合が違うとともに火を受けない破片と二次火熱された破片が接合した。このことから、坏内底部に何か物を載せた状態で二次火熱されたか、破砕した後に二次火熱を受けたかのどちらかであろう。口径は18.1cm、裾部径は11.4cm、器高は12.0cmを測る。

2は坏上半部を欠損する脚部の低い高坏である。調整は坏底部が摩耗し不明瞭である。脚外面は丁寧な横ナデの上からヘラ磨きを施し、内面はナデる。頗る良質な土器で、胎土に茶褐色粒子を含む。淡い茶褐色を呈し、裾部径が9.40cmを測る。

鉄　器（図版49.第61図）

粘土枕内から出土した茎の基部を欠損した片関片丸造の鉄鏃がある。刃部の長さは2.3cm、厚さは2.0mm、茎の幅は8.0mm、厚さは3.0mmを測る。



第61図　20号墓棺
内出土鉄器
実測図 (1/2)

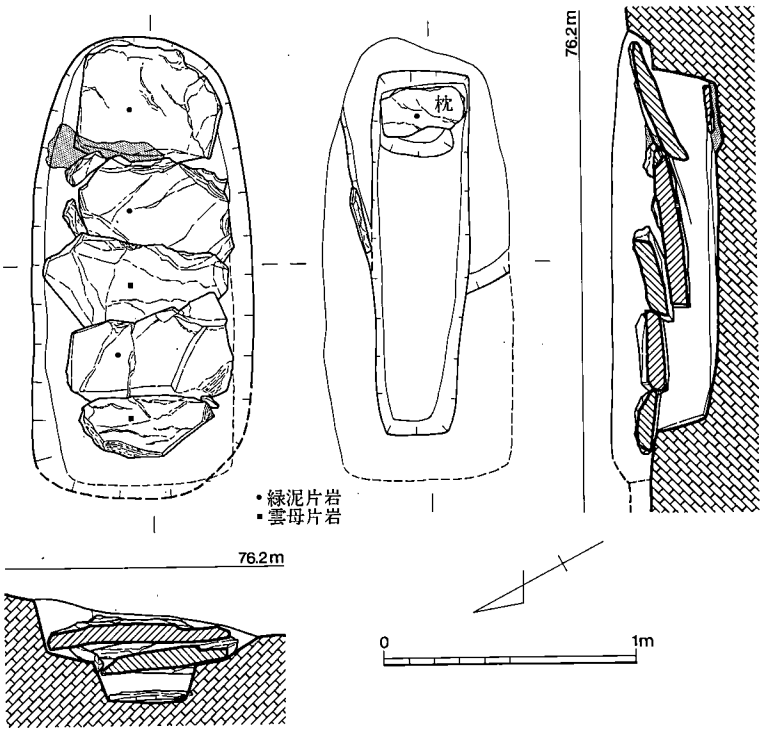
21号墓［石蓋岩盤刳貫墓］（図版28－(2)・29－(1)、第62図）

丘陵の尾根線上に等高線に添った形で掘られた墓で、標高76.0m付近に位置する。この付近は5基の墓地が群を構成し、墓地形態は箱式石棺墓・石蓋岩盤刳貫墓・土壙墓などである。すべてが同一方向に主軸を向けている。

当該墓は小型の石蓋岩盤刳貫墓で、墓壙形態は西側が削平されはっきりしないが、楕円形を呈するようだ。その推定規模は長軸が1.85m、短軸は88.0cmを測る。目張り粘土は黄色の質の悪い粘土を使っていたため、調査時点

で気づかずに除去したらしく、一部分しか残っていない。

蓋石は東側から鎧蓋状に架構しているが、西側では相接した方法で被せている。石材は緑泥片岩と絹雲母片岩が使われているが、中央部分が土圧で沈下している。埋葬土壙は長方形で、長軸が1.44m、幅は頭位側で38.0cm、脚位側で30.0cmを測り、土壙の長さから推測すれば被葬者の身長は約1.15m前後であろう。頭位側の小口部には床面を若干掘り込み、客土してその上に緑泥片岩の板石を置き枕にしている。枕の周辺や蓋石の裏面の朱の散布はない。



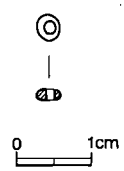
第62図　21号墓［石蓋岩盤刳貫墓］実測図（1/30）

主軸方位はS－66°－Eを示し、棺内での人骨は遺存していなかったが、ガラスの小玉1個が出土した。小玉1個の副葬に疑問を感じたため、棺内の覆土すべてを篩いにかけたが1個しか検出されなかった。

出　土　遺　物

装身具（図版49.第63図）

小玉　棺内の覆土から出土した扁平なスカイブルー色のガラス製の小玉がある。径は2.7mm、厚さは1.4mm、孔の径は1.5mmを測り、径の割りには孔が大きい。

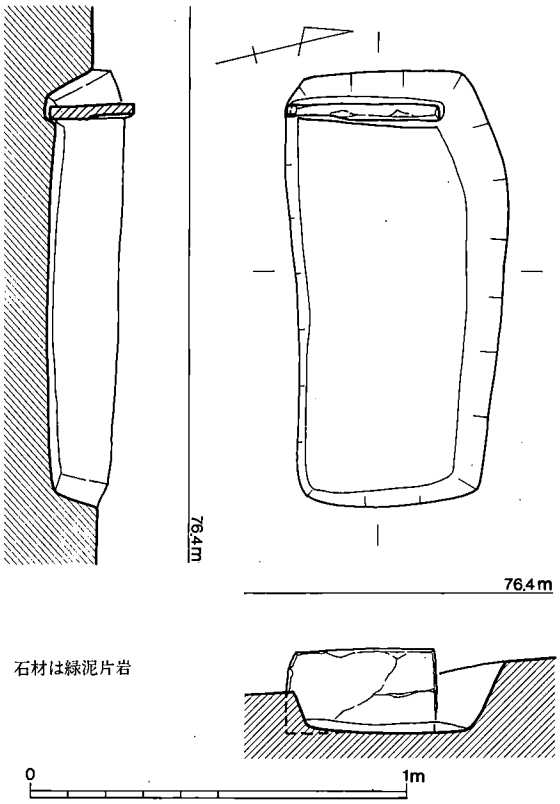


第63図　21号墓
棺内出土装身具
実測図（1/1）

22号墓［木蓋土壙墓］（図版29－(2)、第64図）

21号墓の北側傍に掘られた土壙墓である。この付近は丘陵が雛壇状に削られ、墓の遺存状態は悪い。埋葬土壙は不整長方形で、その規模は長軸が1.15m、短軸は55.0cm前後、現存の深さ

は20.0cm弱を測る。西側の小口部には床面を約5.0cm掘り込み緑泥片岩の板石を立てている。この方向が頭位と考えられるが、8号墓～10号墓、21号墓はお互いに接近して掘られ、関連性のある一群と推測され頭位が東側にある。しかし、当該墓は西側に位置し頭位が逆になる。床面の長さは95.0cmで、被葬者は身長が80.0cm前後の若年であったと推測される。朱の痕跡や人骨及び副葬遺物はない。主軸方位はN－76°－Wを示す。



第64図　22号墓［木蓋土壙墓］実測図（1/30）

23号墓［箱式石棺墓］（図版16-(1)・30-(1)・(2)、第39・65図）

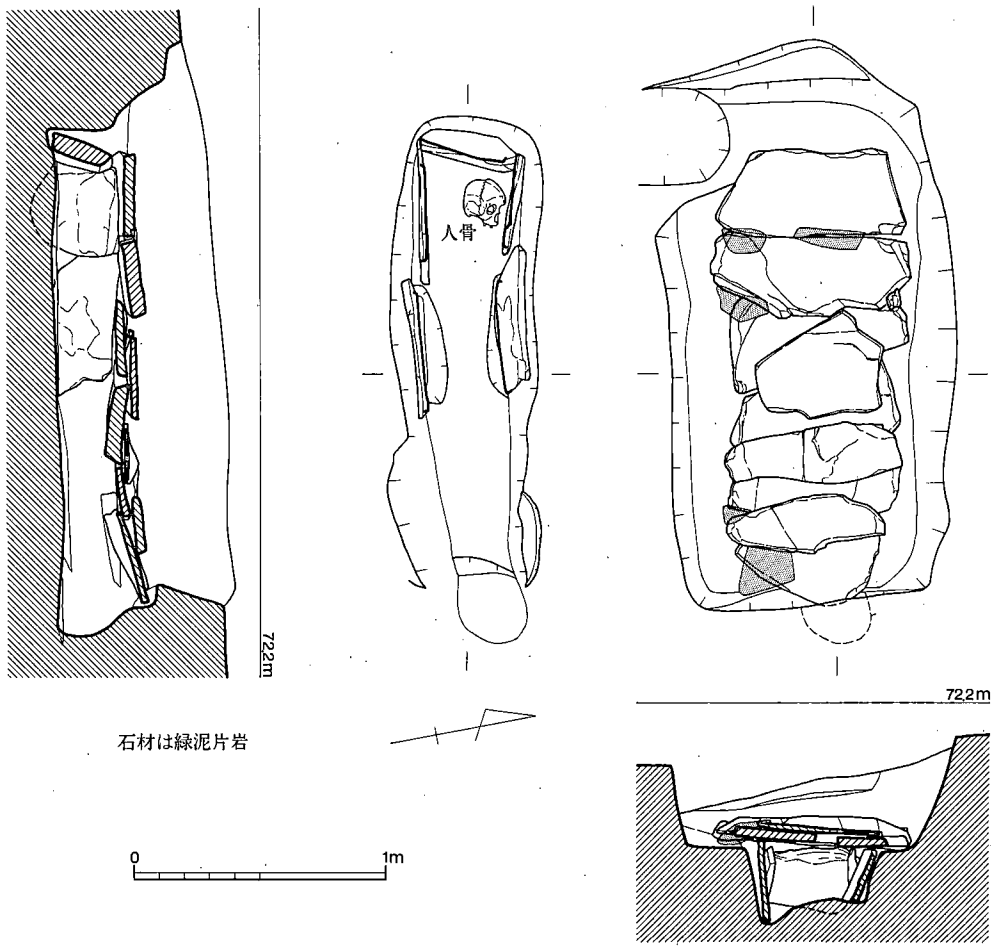
14号墓・28号墓の方形周溝墓の一群であるがこれらの墓より新しく、周溝を切った状態で掘られている。この一群の墓（14号・16号・23号～28号・32号・34号・36号墓）は若干の時期あるいは時間差があり、概略するとまず32号墓が構築され、それに後出する14号墓・28号墓・34号墓（小児墓）がある。32号墓の段階では周溝は掘られていないことは周溝と墓の位置から判断される。周溝に伴う墓は14号墓・28号墓・34号墓で、これに随葬する墓として24号墓・36号墓がある。後にこの周溝は無視され16号・23号～26号墓が間隙を縫って形成され、初期の周溝墓の西側に新たに弧状の溝を掘り込み区画する。この溝は西側が農道で破壊されているが、長さが11.10m、幅は1.60m、深さは80.0cm前後を測る。

内部主体

主体部は箱式石棺墓と石蓋土壙墓の折衷様式で稀な類である。墓壙形態は長方形を呈し、南西側隅が一部破壊を受けている。墓壙の規模は長軸が2.24m、短軸が1.13mを測る。目張り粘土は部分的にしか残っていないが、黄褐色粘土を使用している。質の悪い黄褐色粘土のため調査時に除去した可能性がある。

蓋石はすべて緑泥片岩を使い架構の方法はかなり乱れており、個々の天井石が接する形で被っている。天井石の隙間には別の板石を被い間隙を埋めている。

埋葬土壙は不整隅丸長方形を呈し、規模は長軸で2.10m、短軸は一様ではなく55.0cm前後、



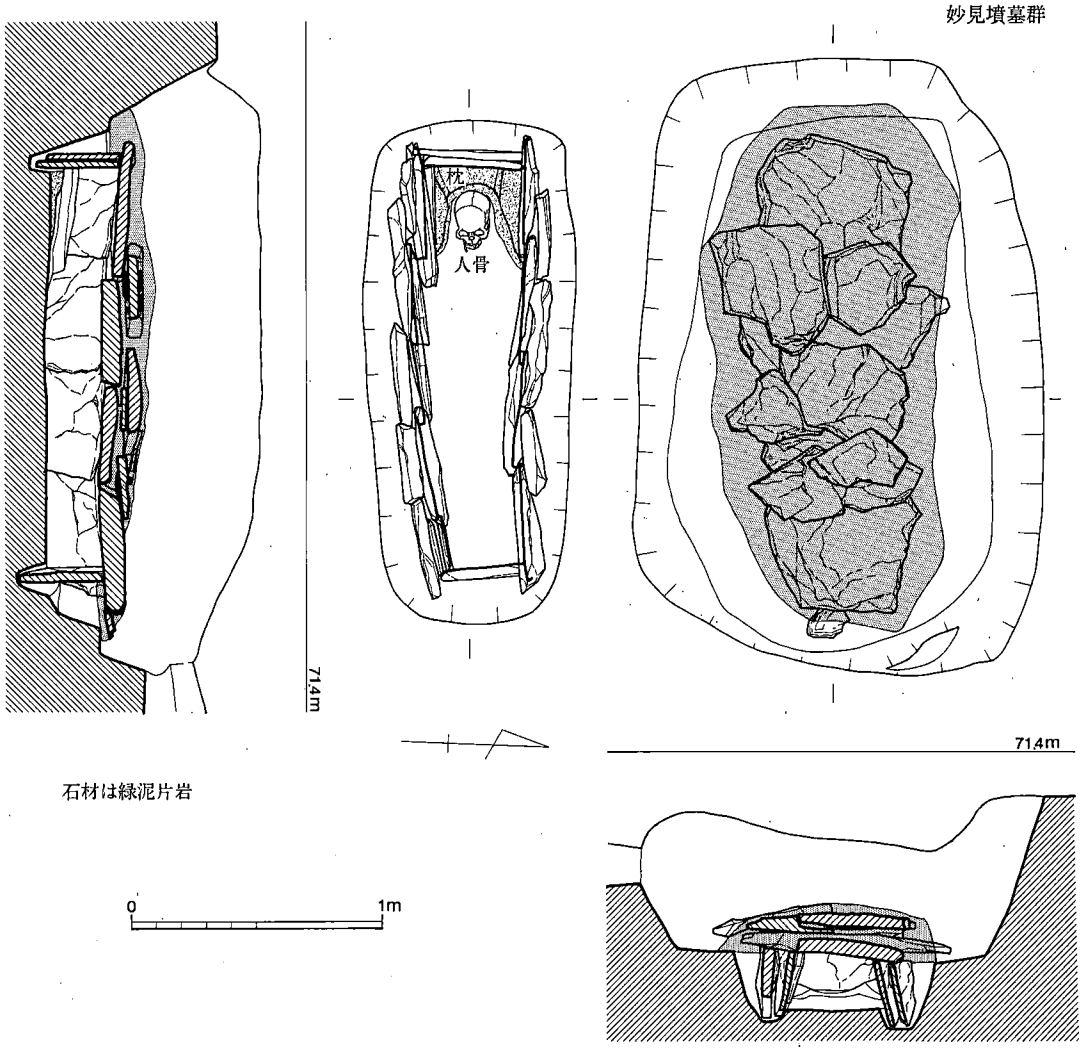
第65図　23号墓［箱式石棺墓］実測図（1/30）

天井からの深さは20.0cm～25.0cmを測る。土壙内には西側（頭位側）1／2に小口部と側壁部に5枚の緑泥片岩を使い箱式石棺状につくり、東側（脚位側）は石蓋土壙状につくるなど、折衷的な埋葬施設にしている。また、脚位側は小口壁部分を抉り、床面は円形状に深さ5.0cmほど掘り込んでいる。小口の抉った部分を考慮すると埋葬された被葬者の身長は1.70m前後の高身長となるが、脚部の骨が遺存していないので断言できない。

棺内の西側床面には頭蓋骨のみが遺存しており、枕などの付設は認められない。その他、副葬遺物もなく、主軸方位はN－80°－Wを示す。

24号墓［箱式石棺墓］（図版31－(1)・(2)・32－(1)・(2)・33－(1)、第39・66図）

前述した14号墓と同じ一群の墓で、16号墓と並列して掘られている。丘陵の尾根線上より東



第66図　24号墓［箱式石棺墓］実測図（1/30）

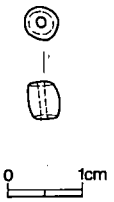
側に位置し、標高では71.0m付近に当たる。

埋葬形態は箱式石棺墓で、墓壙の一部と14号・28号墓の周溝との重複があり当該墓の方が新しい。墓壙の形態は胴張り隅丸長方形で、規模は長軸が2.42m、短軸が1.60mを測り、二段掘りである。

目張り粘土は黄色粘土を全体に厚く被い、特に西側は厚い。蓋石は緑泥片岩を4枚使用して平蓋状に架構している。各々の石蓋が接する箇所には一段小さめの板石を被せていた。棺材も蓋石と同じ緑泥片岩で構築し、西側の小口と側板には2枚の板石を使用し、側板は鱗状に組んでいる。箱式石棺としては頑強なつくりである。

床面は頭位とする西側が若干高くつくられ、小口部分には「U」字状に黄色粘土で枕を設置

していた。赤色顔料の塗布は認められない。棺内の法量は長さが1.60m、幅は頭位側が39.0cm、脚位側が31.0cmを測り、主軸方位はS－87°－Wを示す。棺内からは頭蓋骨が遺存しており、その他、ガラスの小玉が1個副葬されていた。

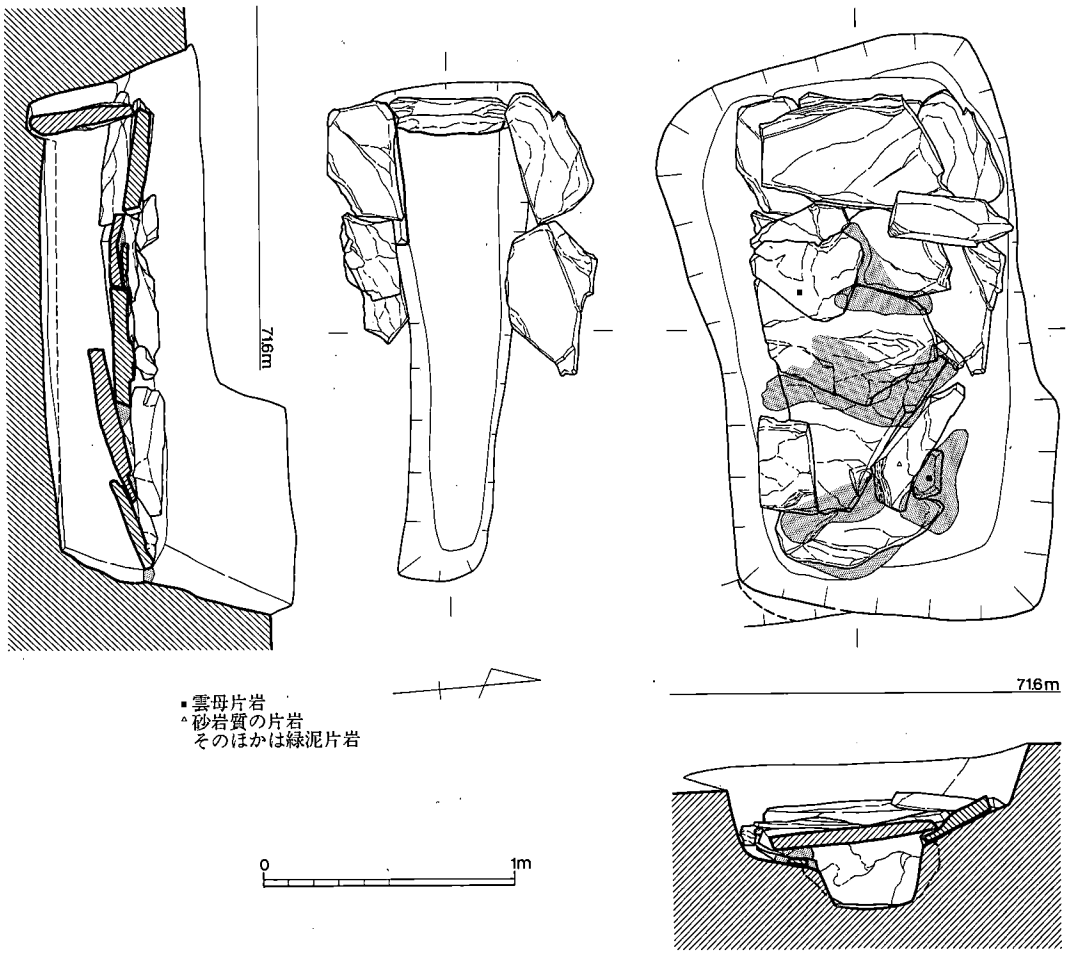


第67図 24号墓棺内出土装身具実測図 (1/1)

出 土 遺 物

装身具（図版49.第67図）

小玉 棺内の床面から出土した厚みのあるスカイブルー色のガラス製小玉がある。径は4.0mm、厚さは4.5mm、孔の大きさは1.0mmを測る。



第68図 25号墓［石蓋土壙墓］実測図 (1/30)

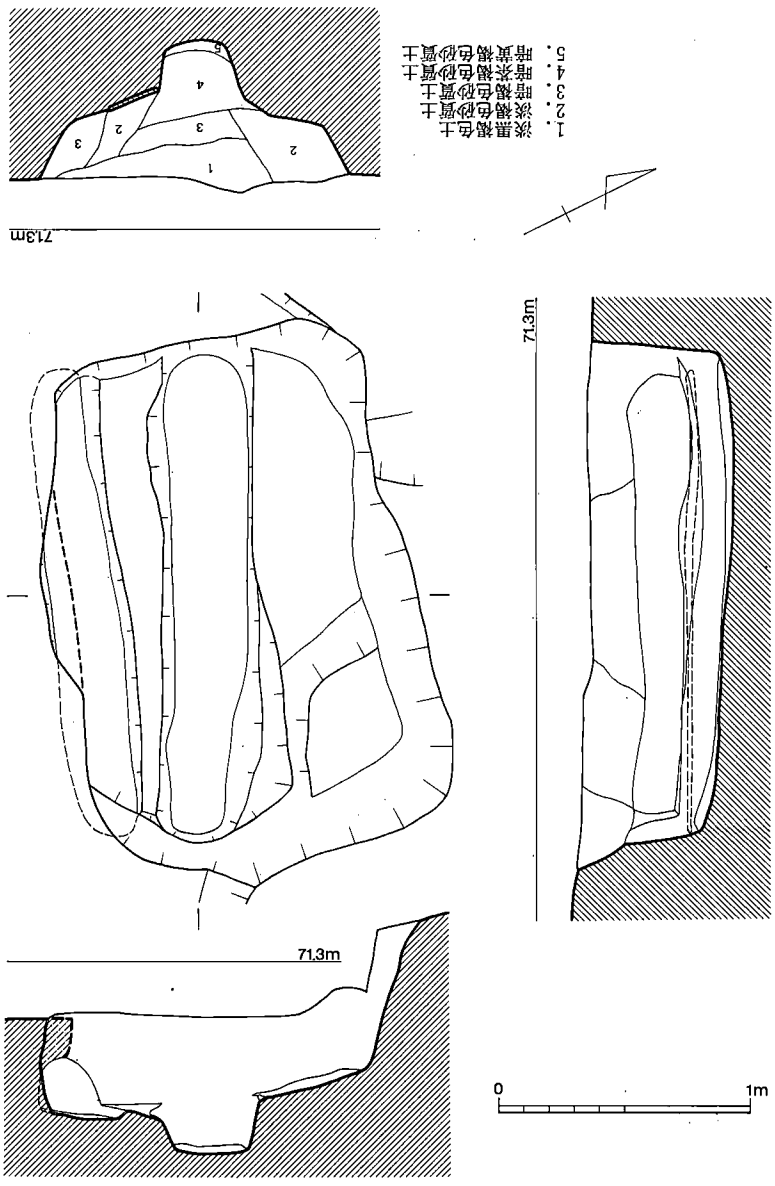
25号墓［石蓋土壙墓］（図版33－(2)・34－(1)、第39･68図）

丘陵の尾根線上に掘られた14号・28号を主体部に持つ方形周溝墓と一連の墓地で、一群の中で最も西側に位置する。当該墓の西側30.0cmには新たに掘られた周溝が巡っているが、この溝に関しては既述したのでここでは割愛する。

この墓は14号・28号墓の周溝を切った状態で検出されたが、墓どうしの重複はない。埋葬形態は石蓋土壙墓である。墓壙形態は不整隅丸長方形で、その長さは2.25m、幅は1.30m前後を測る。目張りは全体に黄色粘土を使い、図示した粘土は灰色粘土で、黄色粘土は調査時点で気づかずに除去したらしい。

天井石は１個の絹雲母片岩・砂岩を除いてすべて緑泥片岩を使用している。蓋石の架構方法は、東側が鎧蓋状に被い、西側を平蓋で被っている。蓋石の裏面には朱を塗布している

埋葬土壙は西側の頭位側の小口に緑泥片岩の板石を立て、それに続く南側壁には１枚の板石を立ててこの部分は箱式石棺風につくる。しかも、埋葬土壙の上面



第69図　26号墓［木蓋土壙墓］実測図（1/30）

には脚部方向に対して若干高くするため４枚の板石を置いている。中央から東側は素掘りの土壙である。埋葬土壙の法量は床面の長さが1.65m、頭位側の幅は40.0cm、脚位側は18.0cmを測る。

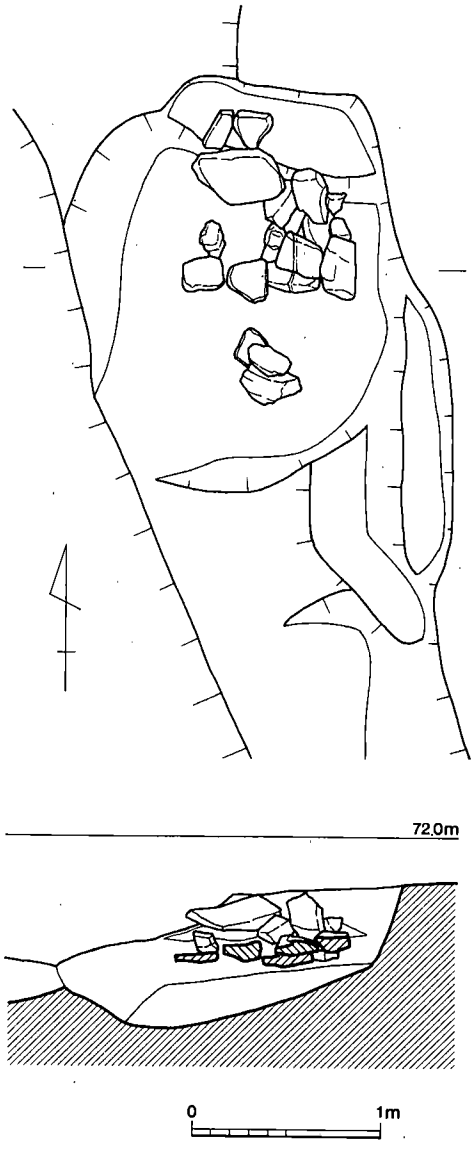
床面には枕などの付設はなく、朱の散布もない。また、人骨の出土及び副葬遺物は認められない。主軸方位はＮ－85°－Ｗを示す。

26号墓［木蓋土壙墓］（図版34－(2)、第39・69～71図）

当該墓も上記の墓の一群で、25号墓・32号墓の南傍に掘られた墓である。この墓も14号・28号の周溝より新しく周囲の墓の間隙を縫って掘られた感があり、西側に巡る周溝に伴うと理解される。周溝の北側端には一段深く掘られた土壙様の穴があり、その中には十数個の絹雲母片岩が集石された状態で検出された。この集石は７号墓（方形周溝墓）の周溝内で検出された集石遺構（葬送儀礼の祭祀遺構）とは異なり、火の使用・飲食の痕跡である煮沸用具の出土などは認められず、単なる棺材の破片を投棄した跡と理解される。

埋葬形態は木蓋土壙墓である。墓壙の形態は不整隅丸長方形を呈し、その規模は長さが2.15m、幅は1.40mを測る。この墓は通常の木蓋土壙墓とは異なり一墓壙に中央と南側壁沿いに２基の埋葬土壙が掘られている。中央部は通常の埋葬土壙で２段掘りを呈するが、南側の土壙は側壁を抉り込みオーバーハング状に掘られ、所謂「横口式木蓋土壙」の形態をとる。

埋葬土壙の規模は中央土壙の長さが床面で1.90m、幅は頭位と推測される西側で33.0cm、東側では20.0cm、南側の土壙の長さは1,85m、幅が西側で20.0cm前後、東側で25.0cmを測り、中央土壙とは逆に東側が広くなる。枕や朱の散

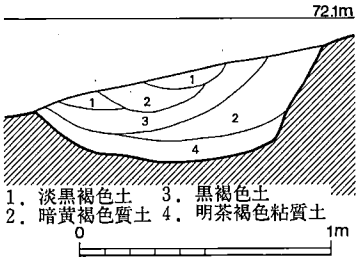


第70図　25号・26号墓西側溝集石遺構実測図（1/40）

布が見られないため断言できないが、計測数値のみから判断すると両者の被葬者は頭位を逆にして埋葬された可能性も否定できない。

図示した土層断面図で層位を見ると、まず南側の土壙に被葬者を埋葬し木蓋を立てかけた後に新たに中央部に埋葬土壙を掘り込んだとしか理解できない堆積状況を示唆している。

主軸方位はN－64°－Wを示し、土壙内には人骨及び副葬遺物は出土していない。



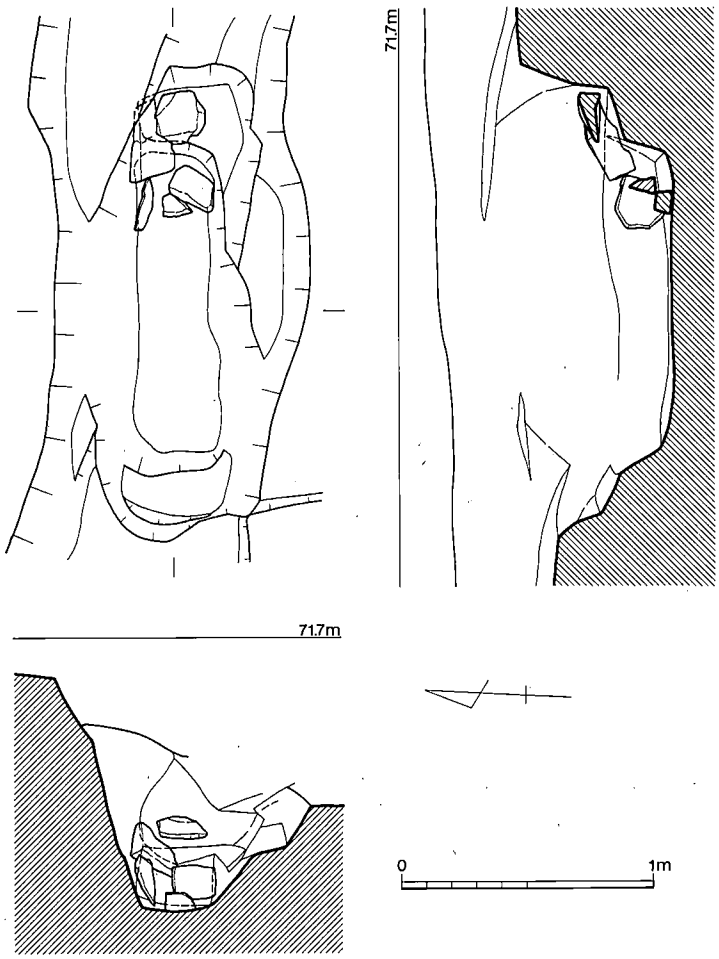
第71図　25号･26号墓西側溝土層断面図（1/30）

27号墓[木蓋土壙墓]

（図版35－(1)、第39・72図）

14号・28号方形周溝墓の周溝内に並行して掘られた木蓋土壙墓である。上記の墓と同時併存か後出する随葬墓のどちらかであろう。

墓壙は両小口が2段掘りで、平面プランが楕円形を呈する。規模は上端の長軸が1.90m、床面で1.18m、床面幅は西側が34.0cm、東側で30.0cm、周溝底面からの深さは55.0cm前後を測る。東の小口部のテラスと床面には絹雲母片岩の板石があり、テラス上の板石は木蓋の押さえに使用し、床面の板石は枕の可能性がある。この事実から頭位が東側と推測される。主軸方位はN－87°－Eを示す。



第72図　27号墓［木蓋土壙墓］実測図（1/30）

棺内からは人骨、副葬遺物はない。

28号墓［箱式石棺墓］（図版35－(2)・36－(1)・(2)・37－(1)・(2)、第39・73図）

14号墓（石蓋岩盤刳貫墓）とともに方形周溝墓の中心的な存在の墓であるが、方形区画内で中心よりやや南側にずれており、設置場所から考慮すると当初の方形周溝の主体となる墓は14号墓と考えられる。また、当該墓は32号墓と重複し28号墓が新しいことから、32号墓はこの一群墓地内では方形周溝とは無関係の最も古い墓となる。しかも、墳墓群の中では唯一大きく重複する墓で、墓の設置当初から32号墓の存在を認知していなかったのか、何か別の要因で故意に破壊したかははっきりしないが、14号墓と並列して埋葬する理由、たとえば14号墓の被葬者と近親関係にあった人物と解釈することが可能であろうが、人骨の鑑定結果では類似度は高くないとの結果がでている。

内部主体

主体部は箱式石棺墓であり、墓壙は絹雲母片岩の岩盤を長方形に掘り込む。その規模は当該墳墓群の中では最も大きく、長さが3.40m、幅は1.95m～2.00mを測り、断面図で見ると北側の側壁側と西側の小口側はテラスを設け、特に西側は余裕を持った掘方である。

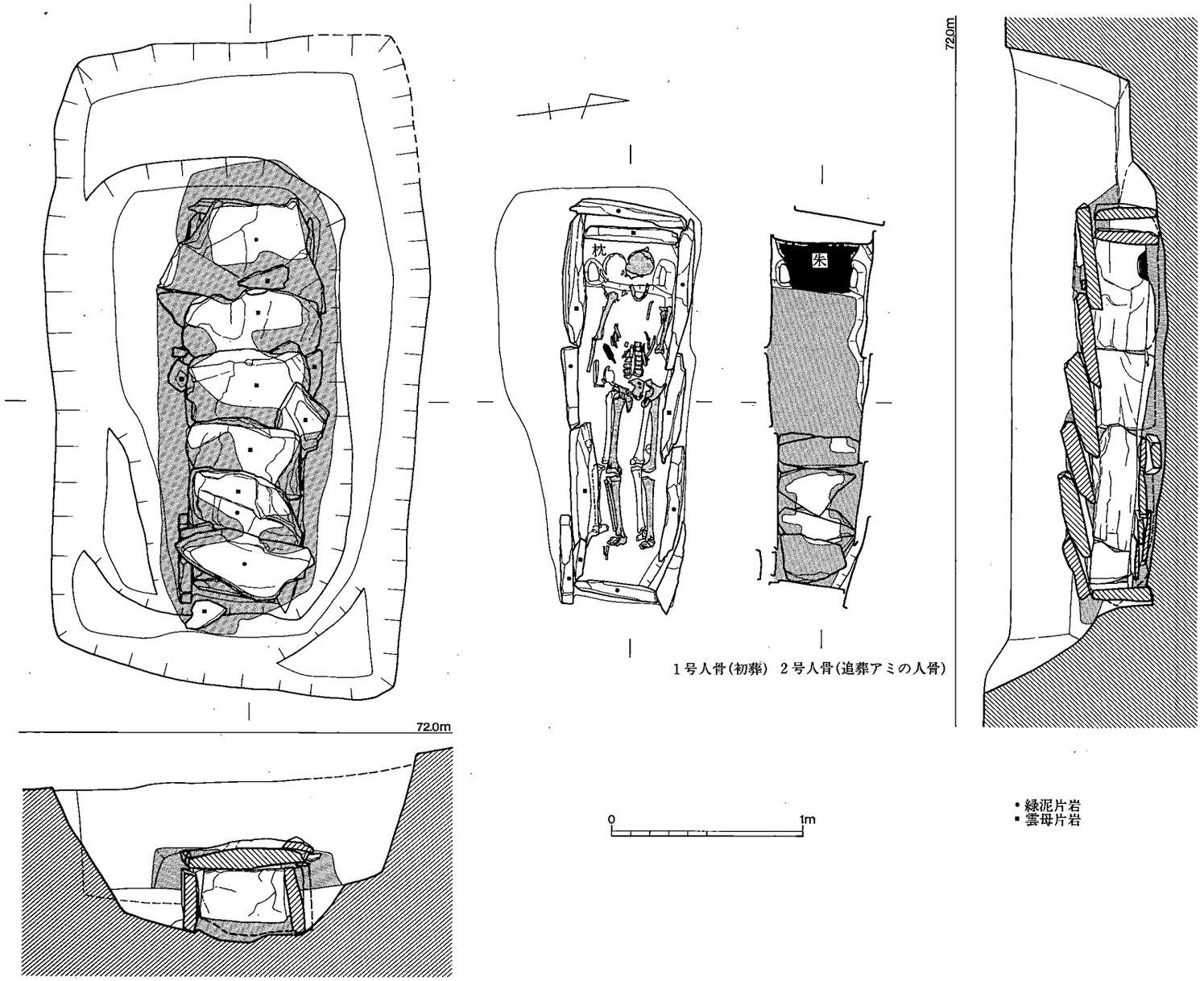
目張り粘土は石蓋の表中央部を除くほぼ全面にテラスのレベルまで厚く施し、暗黄褐色の粘土を使用している。

石蓋は両端に緑泥片岩、中央に絹雲母片岩を架構し、西の頭位側から脚位側にかけて順次小さめの石材を使っている。石材は頭位側から架構し所謂「鎧蓋」状に被っている。

棺の掘方は南側板側が突出し幅広につくる。これは棺材をセッテングする際の配慮と理解される。また、石棺は墓壙の北側に片寄せて構築し、棺材の種類は絹雲母片岩と緑泥片岩をほぼ半々に使ってわりと整美な箱式石棺を組んでいる。石棺は小口板を側板が挟み込む形態で、頭位側の小口は２枚の板石を使っている。すべての棺材の裏面には赤色顔料を塗布している。石材の裏込めにはテラスのレベルまでが目張り粘土で、その下層は岩盤混じりの褐色土を充填する。

棺内の法量は、長さが1.80m、頭位側の幅が53.0cm、脚位側の幅が40.0cmを測る。棺内からは３体の被葬者（初葬人骨は歯牙のみ出土）が仰臥伸展葬で合葬され、人骨の出土状態及び遺存状態などから判断して同時埋葬とは考えにくく、１号人骨（アミの被ってない人骨）が２号人骨（アミのかかった人骨）の下になった状況で検出され、２号人骨よりも遺存状態が悪いことから２回目の埋葬人骨である。２号人骨は１号人骨と完全に重なり合った状態で出土し、２回目の被葬者を埋葬してある程度期間を置いて追葬したことが分かる。

頭蓋骨の下には棺の幅全部に粘土の枕を設置し、その両端には粘土を突起させ一定の幅をつくり、その内部に１号・２号人骨の頭蓋骨を並べている。詳細に観察すると、１号人骨の腰椎と大腿骨は棺内の中央部にあるにも拘らず、頭蓋骨はやや左にずれており、２号人骨は埋葬さ

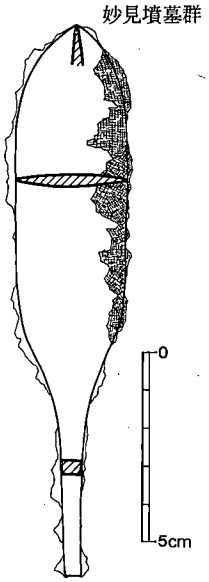


第73図　28号墓(箱式石棺墓)実測図(1/30)

れたままの状態が看取できる。枕の奥行きは25.0cm、高さは5.0cm弱で両端の突起の高さは4.0cmを測る。

床面は絹雲母片岩の岩盤を粗く掘り込み、脚側に2段の絹雲母片岩の板石を計4枚ほど敷き詰めた後、灰青色粘土で固めている。骨盤から頭蓋骨にかけては4.0cm～10.0cmの厚さで灰青色粘土を敷き詰めている。

主軸方位はN－83°－Wを示し、棺内からは大型の柳葉形鉄鏃が出土しているが、出土状態にやや疑問な点が残る。つまり、14号墓の鉄鏃はその出土状態から明らかに副葬遺物と判断されるが、当該墓の出土状況は位置から見ると1号人骨の腹部付近に相当し、14号墓の被葬者の傍に置いた状況とは異なる。また、既述したように1号人骨は集骨した形跡はなく、頭骨を若干左に移したのみで鉄鏃は元位置を保っている可能性もある。この鉄鏃の一方の面の刃部（図示した表の右刃部）のみに粗めの布が付着している。しかも、布が付着した面は出土した時点では表を向けていた。この事実から可能性の問題として次のような考え方ができる。



第74図　28号墓棺内出土鉄器実測図（1/2）

①被葬者の腹部付近に副葬された鉄鏃に着衣していた衣服が錆着し、被葬者が腐乱した段階で転倒し衣服に接していた面が表になった。（1号・2号人骨のどちらかの副葬遺物）

②被葬者の腹部に副葬し布で巻いて埋葬したために付着した。（1号・2号人骨のどちらかの副葬品）

③1号人骨の腹部に嵌入し腐乱した段階で着衣が錆着した。（この場合1号人骨の副葬遺物の可能性が高い）

いずれにしても現状では断言できる確証がないためここでは可能性の問題として留めておく。その他の副葬遺物はない。

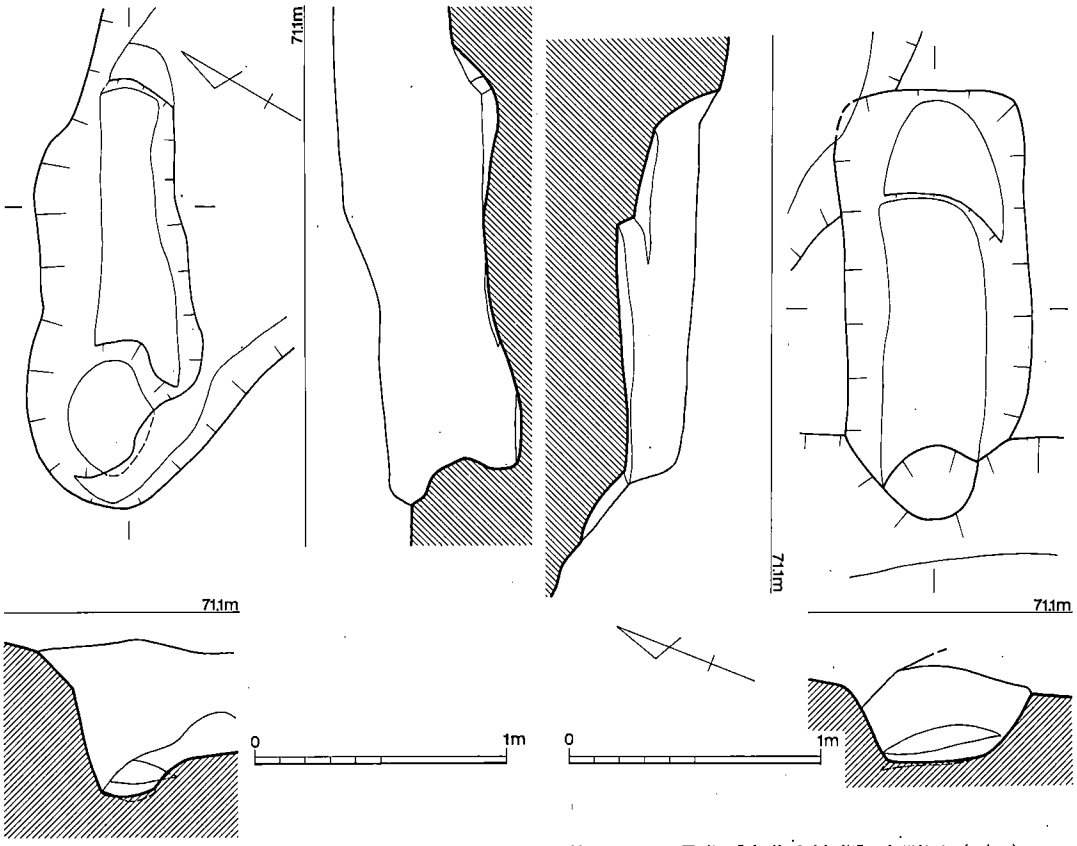
出　土　遺　物

鉄　器（図版49.第74図）

14号墓の鉄鏃と同様の広根系柳葉式に属する両丸造の完形品である。14号墓の鉄鏃に比較して大型品で形は非常に酷似する。前述したように刃部の一方には粗い布が錆着する。全長は14.4cm、刃部の幅は3.0cm、厚さは4.0mm、茎の幅は6.0mm、厚さは4.0mmを測る。

29号墓［木蓋土壙墓］（図版38－(1)、第75図）

丘陵の尾根線上に位置し、14号・28号方形周溝墓と17号方形周溝墓との間で間隙を縫う形で掘られた木蓋土壙墓と考えるが、平面形状が不明瞭なのと南側の側壁がはっきりしないのとで



第75図　29号墓［木蓋土壙墓］実測図（1/30）　第76図　30号墓［木蓋土壙墓］実測図（1/30）

断言できないが、ここでは墓として説明する。墓壙形態は長楕円形を呈し、その規模は長軸で1.83m、上端の幅は東側で40.0cm、西側で70.0cm、床面では22.0cmと32,0cmを測る。床面は若干掘り過ぎの感はあるが緩やかな凹凸があり、西側では底の径が35,0cm×45,0cm、深さ15.0cmのピット状に掘り込んでいる。この形状からすると頭位は東側になるが、朱の散布や人骨が残存していないためはっきりしない。因みに主軸方位はN－60°－Eを示す。

30号墓［木蓋土壙墓］（図版38－(2)、第76図）

当該墓も丘陵の尾根線上に位置し、標高では70.5m付近に相当する。墓壙と23号・25号・26号墓に付随する西側の周溝との若干の重複があり、調査時点で30号墓に気づかず周溝を掘ったため新旧関係は把握できていない。

墓地の形態は木蓋土壙と考えられ、墓壙の形状は西側が削平を受けているため不明瞭であるが、隅丸長方形であろう。土壙内は2段掘りで、東側にはテラスを設けている。土壙の規模は現存での長さが1.45m、上端の幅は74.0cm、底面では40.0cmを測る。主軸方位は、頭位がはっ

きりしないため計測ができないが、東側とすればN－68°－Eを示す。人骨及び副葬遺物はない。

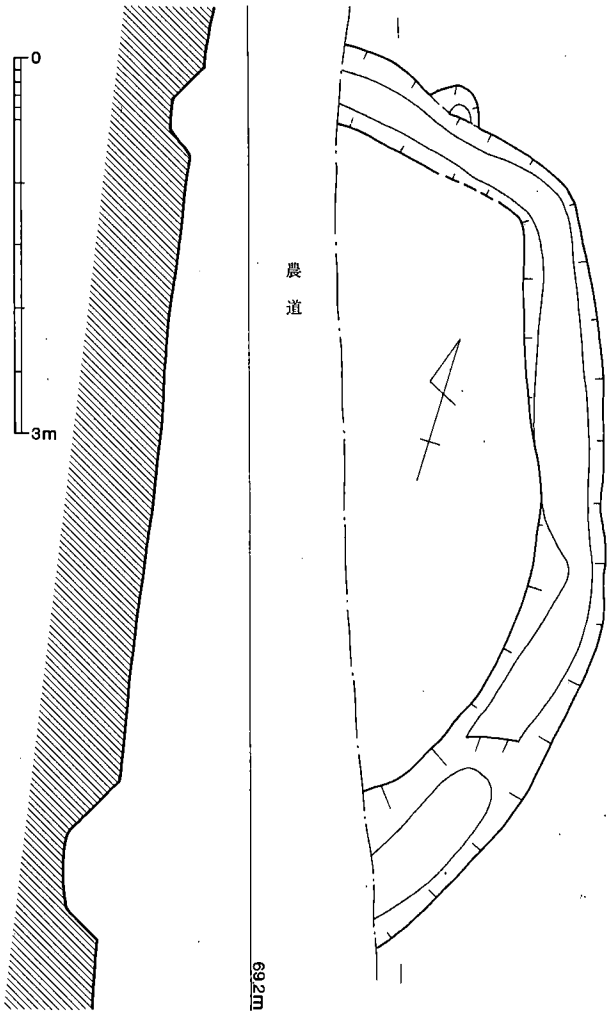
31号墓（図版39－(1)、第77図）

丘陵の尾根線上の調査区の最南端で検出した周溝墓で、標高では68.0m～69.0mの間に当たる。検出した周溝は約1／3ほどで、全容ははっきりしないが現存での平面形状は不整円形を呈している。その規模を復原すると9.60mとなる。

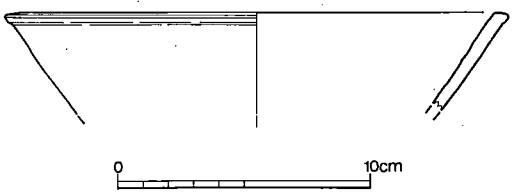
総体的に周溝は浅く、しかも幅が狭いことからかなりの削平を受けているようだ。溝の幅は狭い箇所で40.0cm、広い所で1.00m、深さは20.0cm～40.0cmである。

主体部は農道建設で完全に消滅している。

周溝内からは土師器の壷形土器の破片が出土している。



第77図　31号墓実測図（1/60）



第78図　31号墓周溝内出土土器実測図（1/3）

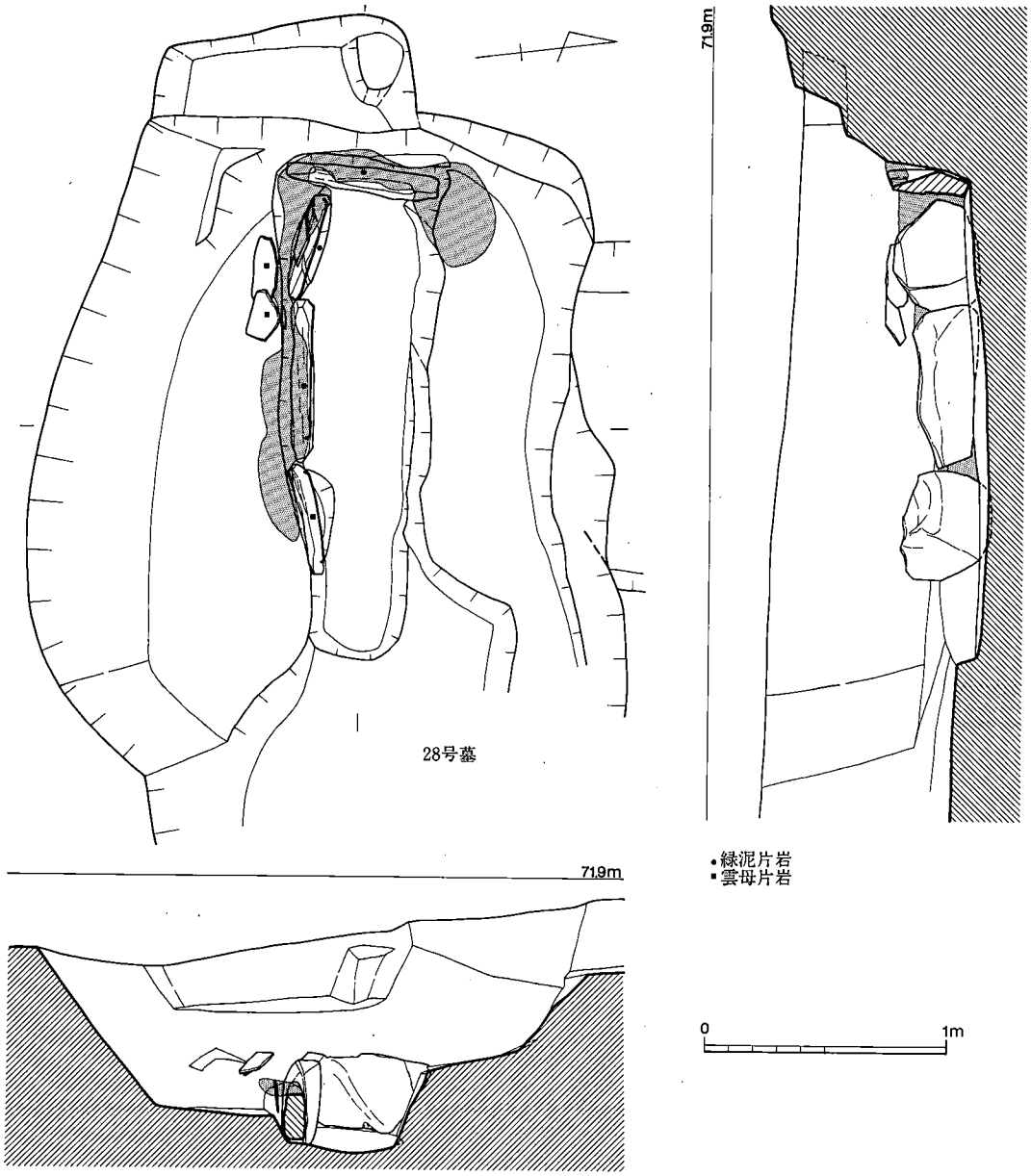
出　土　遺　物

土師器（第78図）

周溝内から出土した壷の口縁部の小片がある。6号墓（方形周溝墓）の周溝内から同タイプの壷の完形品が出土している。口唇部は肥厚させ、調整は横ナデで仕上げている。胎土は石英粒と雲母を多く含む。淡い茶褐色を呈する。復原口径は20.0cmを測る。

32号墓［箱式石棺墓］（図版39－(2)、第39・79図）

14号墓・28号墓を主体とする方形周溝墓の内区内にある墓で箱式石棺の形状をとる。既述したように、当該墓は周溝墓内に位置するが28号墓より古く、方形周溝墓の主体部は周溝との重複関係から周囲の墓地群より古い。つまり、一群の墓地の新旧関係は次のようになる。



第79図　32号墓［箱式石棺墓］実測図（1/30）

16号墓・23号墓～26号墓 → 14号墓・28号墓・34号墓↘
↘ 27号墓・36号墓 ↗ 32号墓

上記の重複関係と32号墓の掘られた位置から推測すると当該墓が最も古くなり、しかも後出する墓に破壊されている理由（他の墓は周溝と墓との重複はあるが、墓対墓の重複はない）などからこの一群に伴わない墓の可能性がある。

墓壙形態は東側が28号墓に破壊されているため不明瞭であるが、不整隅丸長方形で南側の側壁が大きく膨らむ。短軸の規模は2.40m前後である。

埋葬形式は箱式石棺としたが、調査した結果蓋石はまったく遺存しておらず、28号墓を構築する際に除去したことが考えられるが、木蓋の可能性も否定できない。

埋葬土壙内の南側壁は絹雲母片岩と緑泥片岩の板石が3枚立てられ、西側小口壁には緑泥片岩の板石が立てられていた。北側壁には棺材はなく、壁沿いの床面には棺材の掘方の痕跡もない。また、東側の小口は丸みがあり一見土壙状に掘られているし、図示した墓壙の断面図で見ると2段掘りのテラスが南側では一段深く掘り込まれている。このため北側の面とレベルを合わせるために石材を使ったと推測することもできよう。目張りは黄褐色粘土を使い南側と西側から検出した。

埋葬土壙の法量は長軸床面で1.89m、幅は西側が広くつくられており頭位と考えられる。頭位側床面では45.0cm前後、脚位側では25.0cmを測る。主軸方位はN－83°－Wを示し、中からの人骨及び副葬遺物は皆無である。

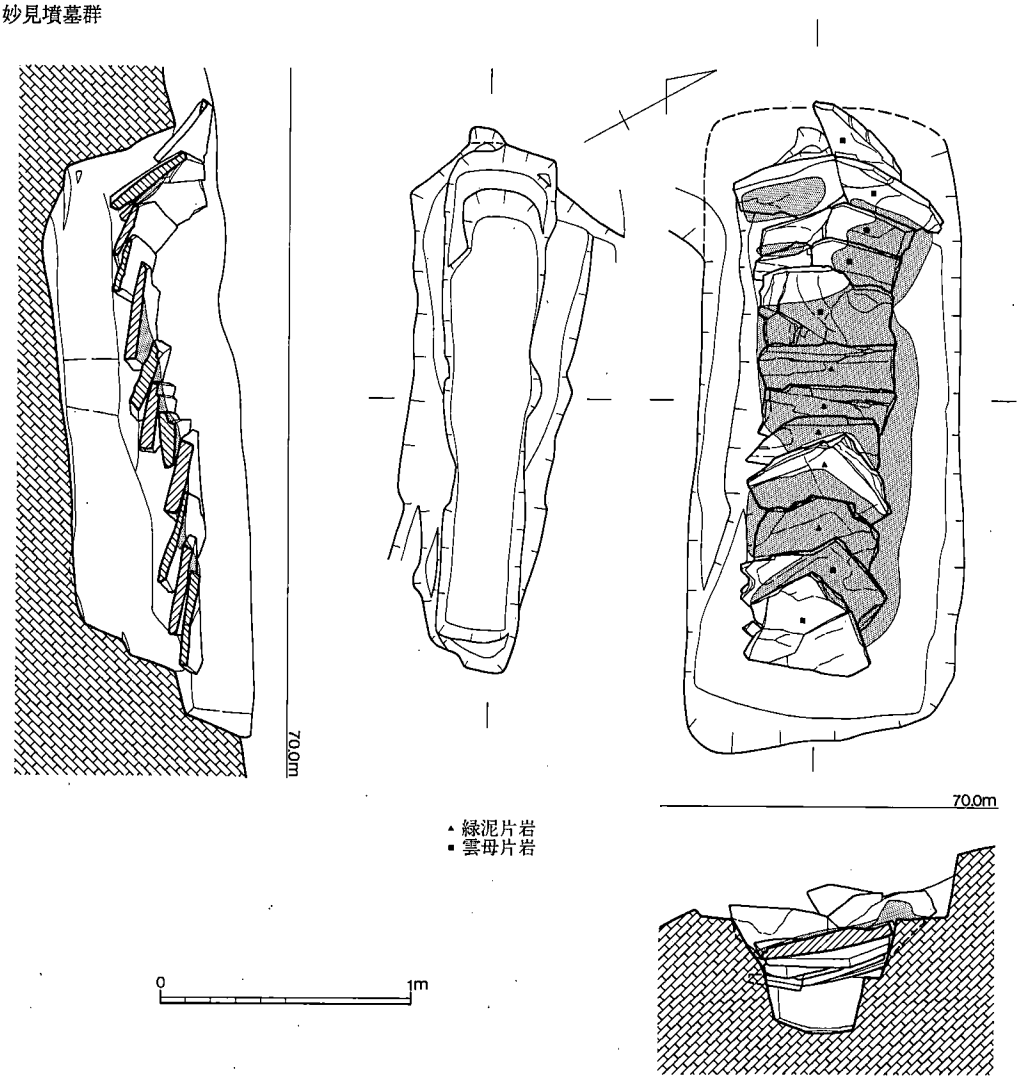
33号墓 [石蓋岩盤刳貫墓] （図版25－(1)・40－(1)・(2)、第48・80図）

19号墓の北側に並列して掘られた石蓋岩盤刳貫墓である。19号墓の項でも述べたように、当該墓の北東隣に「L」字状に周溝が巡るが、周溝の西側は削平を受け途切れている。これを延長すれば33号墓に突き当たることから、この周溝は19号墓に対して掘られた遺構で当該墓には伴わないと考えられる。

墓壙の形状は長方形を呈し、2段掘りである。西側は農道建設の際に破壊され遺存していない。規模は長軸を復原すると2.50m～2.60m前後で、幅は1.05mを測る。

目張り粘土は2種類の粘土を使用し、東側に黄褐色粘土、西側は灰青色粘土を使ってほぼ全面に施している。蓋石の数は多く、12枚の板石を鎧蓋状に頭位側の西から順次架構させているが、西側の頭位部分と脚側の端に絹雲母片岩、中央部分には緑泥片岩を使っている。また、頭位側の先端の蓋は削平時に移動し全体にずり落ちている。

埋葬土壙は脆い絹雲母片岩の岩盤を刳り貫き、長方形の形状をなす。上端での長さは2.15m、床面では1.63m、幅は脚位側で35.0cm、頭位側で45.0cm前後を測る。床面は頭位と脚位で18.0

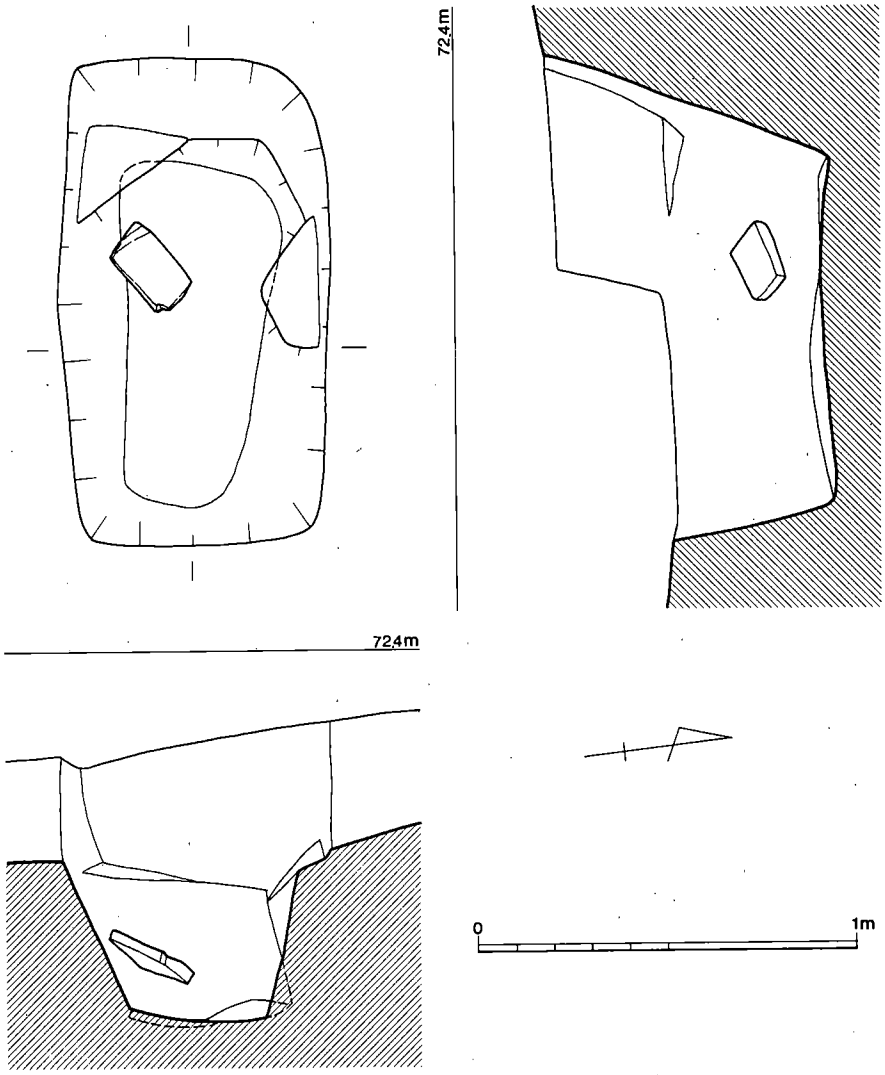


第80図　33号墓［石蓋岩盤刳貫墓］実測図（1/30）

cmの高低差があり頭位が低くなる。西側の小口部には「U」字状に岩盤を刳り貫き頭骨を固定する枕状の掘り込みをつくっている。人骨がまったく遺存していないが、この掘り込みまでの長さから被葬者の身長は1.45m前後と推測できる。主軸方位はN－74°－Wを示し、頭位が並列する19号墓とは反対になり、お互いに規則性はないように思える。また、棺内からの副葬遺物はない。

34号墓［木蓋土壙墓］（図版16－(1)、第81図）

14号・28号墓の方形周溝墓の区画内の西寄りに位置する木蓋土壙墓である。約1／2強がトレ



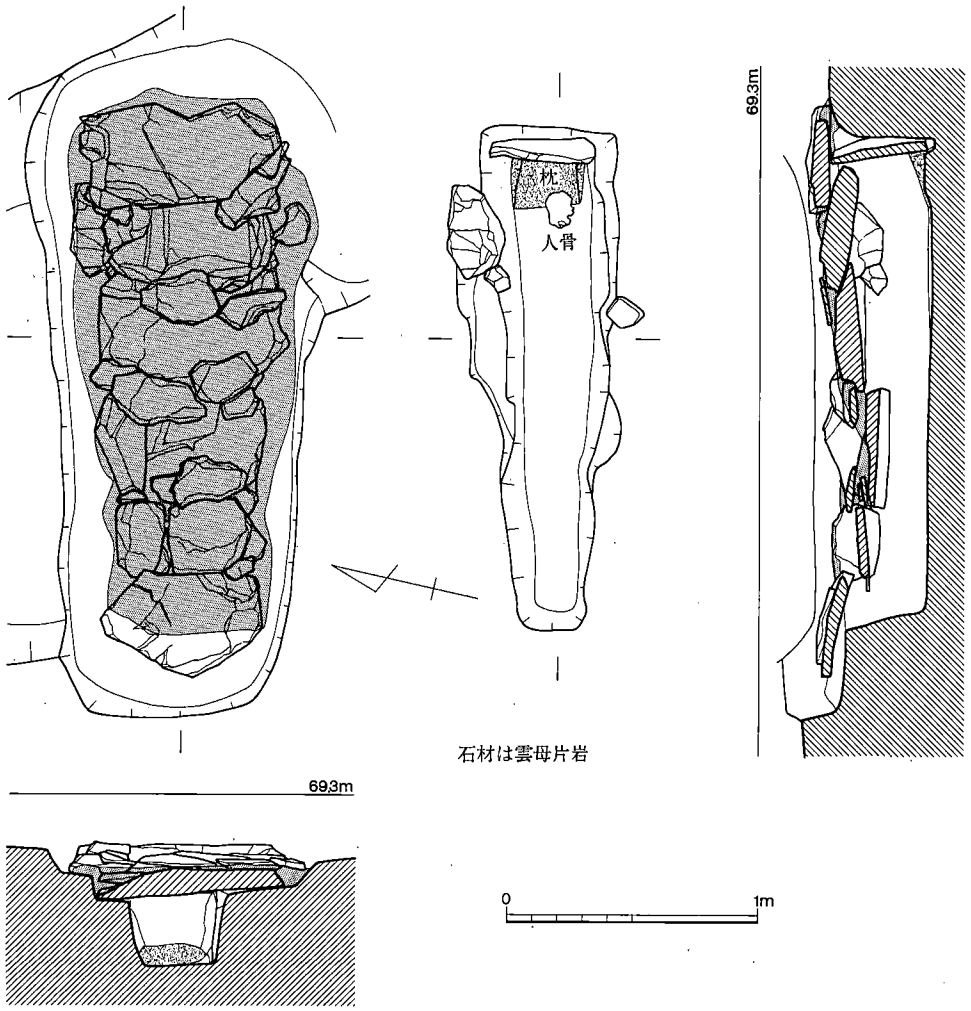
第81図　34号墓［木蓋土壙墓］実測図（1/20）

ンチ状の撹乱で上面が削られている。墓壙の平面プランは隅丸長方形を呈し、規模は上面長軸が1.29m、床面が90.0cm、西側の幅は43.0cm、東側は30.0cm、深さは73.0cmを測り深く掘られている。床面の幅から頭位は西側と考えられ、周辺の墓と符合する。土壙墓の下層には緑泥片岩の板石１個が落ち込んだ状態で検出した。

主軸方位はＮ－83°－Ｗを示し、棺内からは人骨、副葬遺物はない。

35号墓［石蓋土壙墓］（図版21－(2)・41－(1)・(2)・42－(1)・(2)、第82図）

丘陵の尾根線上に位置する墓で、標高69.50m付近に当たる。この墓は17号墓（木棺墓）の



第82図　35号墓［石蓋土壙墓］実測図（1/30）

周溝に完全に重複する形で掘られた墓で周溝などは伴わず17号墓よりは新しい。

墓地の形態は石蓋土壙墓で、墓壙のプランは隅丸長方形を呈する。墓壙の規模は長軸が2.70m、幅は東側が広く1.20m、西側は90.0cmを測る。目張りは黄茶褐色の粘土を蓋石のほぼ全面に被っている。

蓋石はすべて絹雲母片岩を使用し、架構方法は他の墓とやや異なり、脚部側を平積みにし頭部側の半分は脚側から順次架構し頭部側の先端の蓋を最後に被せている。お互いの蓋石が接する部分にはやや小ぶりの板石で被いその上から目張りを施している。

埋葬土壙は隅丸長方形に掘り込むが、掘削する段階で北側の側壁の上端が壊れたらしく、東端と２番目の蓋石と小口に立てられた石材との高さを調節するために大きめの地山石を置きレ

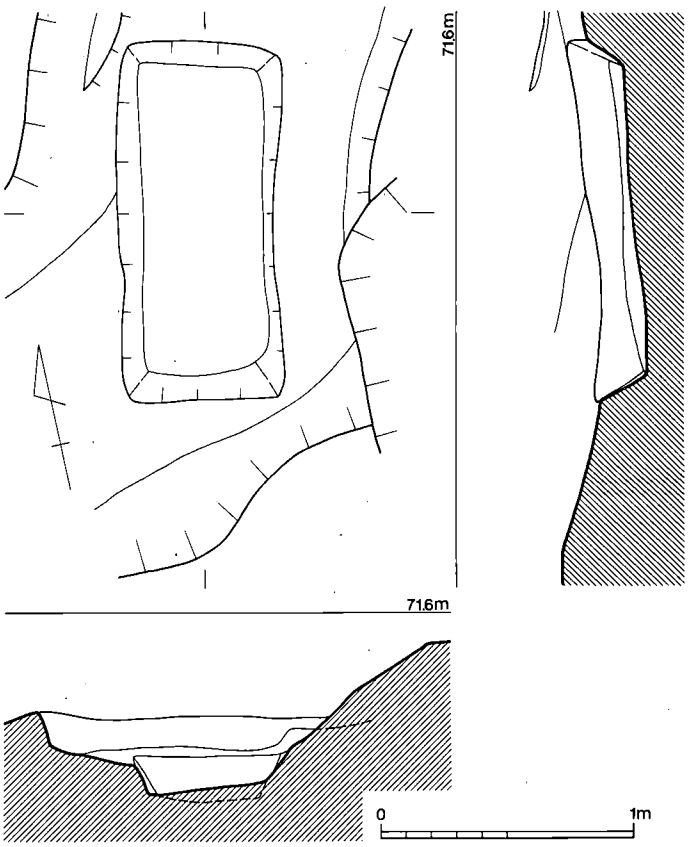
ベルを合わせている。床面はほぼ水平に掘られ、東側の小口部の床面は約3.0cmの高さに削り出されその上に黄褐色粘土で枕をつくっている。石蓋の裏面と壁には赤色顔料を塗布した痕跡があり薄く残存していた。

埋葬土壙の法量は床面での長さが1.80m、頭位側での幅は30.0cm、脚位側の幅は16.0cmを測る。土壙内の粘土枕部には頭蓋骨の破片が遺存していたが、その他の部位の人骨や副葬遺物は出土していない。頭骨の出土した箇所から推測すると被葬者は1.50m前後の身長であったと考えられる。主軸方位はN－77°－Eを示す。

36号墓［木蓋土壙墓］（図版43－(1)、第39・83図）

14号・28号墓の方形周溝内の南東隅で検出した木蓋土壙墓である。この一群の墳墓は、主軸方位をほぼ東西方向に向けているが、当該墓は南北方向である。これは埋葬する時点で周溝を意識した結果で、27号墓（木蓋土壙墓）と同様方形周溝墓の被葬者に対して随葬したと理解され、14号・28号墓の被葬者の近親者を埋葬したと考えられる。

墓壙は周溝に添った形で掘られており、平面プランは長方形を呈する。規模は長軸が1.42m、幅は65.0cm前後、深さは周溝の底面から10.0cm～20.0cmを測る。床面の長さが1.20mで被葬者の身長は1.00m前後の若年を埋葬していたと推測されるが、人骨は遺存していないし、副葬遺物もない。頭位がはっきりしないが主軸方位はN－13°－Eを示す。



第83図　36号墓［木蓋土壙墓］実測図（1/30）

37号墓［箱式石棺墓？］

（図版43-(2)、第84図）

丘陵の頂部南斜面で検出した墓であるが、調査当初3号墓の周溝として認識していたが、調査最終段階で墓である

ことが判明した。

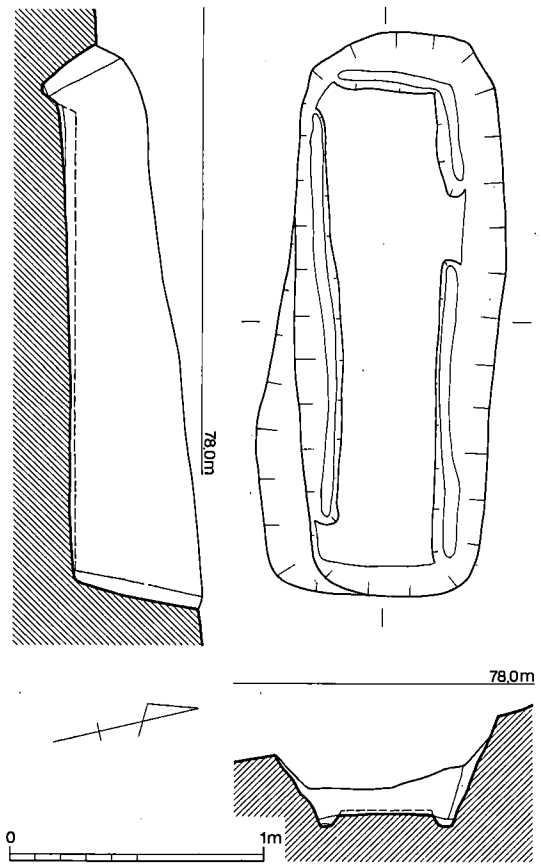
埋葬土壙の覆土上層には1個河原石と2個の緑泥片岩が並べられていたが、用途は不明である。埋葬土壙のプランは隅丸長方形で、規模は上端長軸が2.25m、上端幅は80.0cm前後、最深部の深さは50.0cmを測る。

図示した床面の幅は西側で45.0cm、東側で37.0cmを測り、幅広の西側が頭位と推測される。隣接する3号墓も西側を頭位とする。

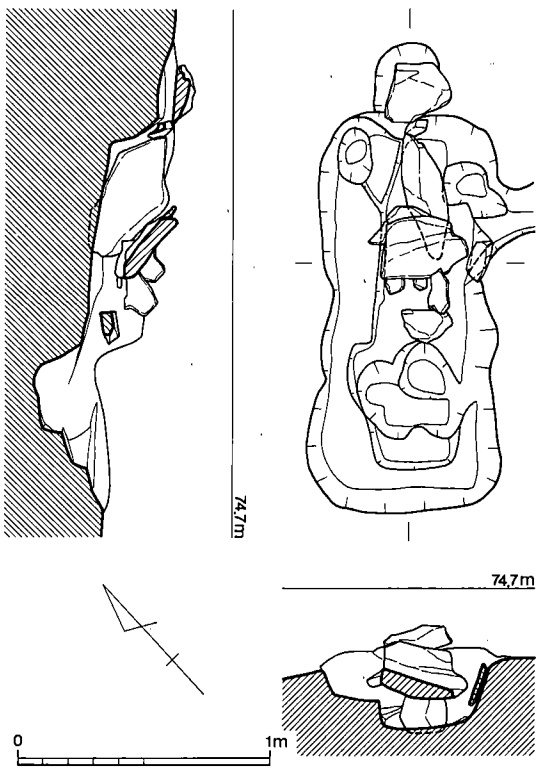
床面には東側の小口部と北側の側壁の一部を除いて細い掘方が巡り、調査時点では箱式石棺の石材が完全に除去された痕跡と考えていたが木棺墓の可能性も考えられる。主軸方位はN－77°－Wを示す。棺内の朱の散布は認められず、人骨及び副葬遺物もない。

38号墓［石蓋土壙墓］（第85図）

樹園造成で著しい削平を受けた箇所で検出した墓で、内部はかなり撹乱を受けていた。墓壙



第84図　37号墓［箱式石棺墓？］実測図（1/30）

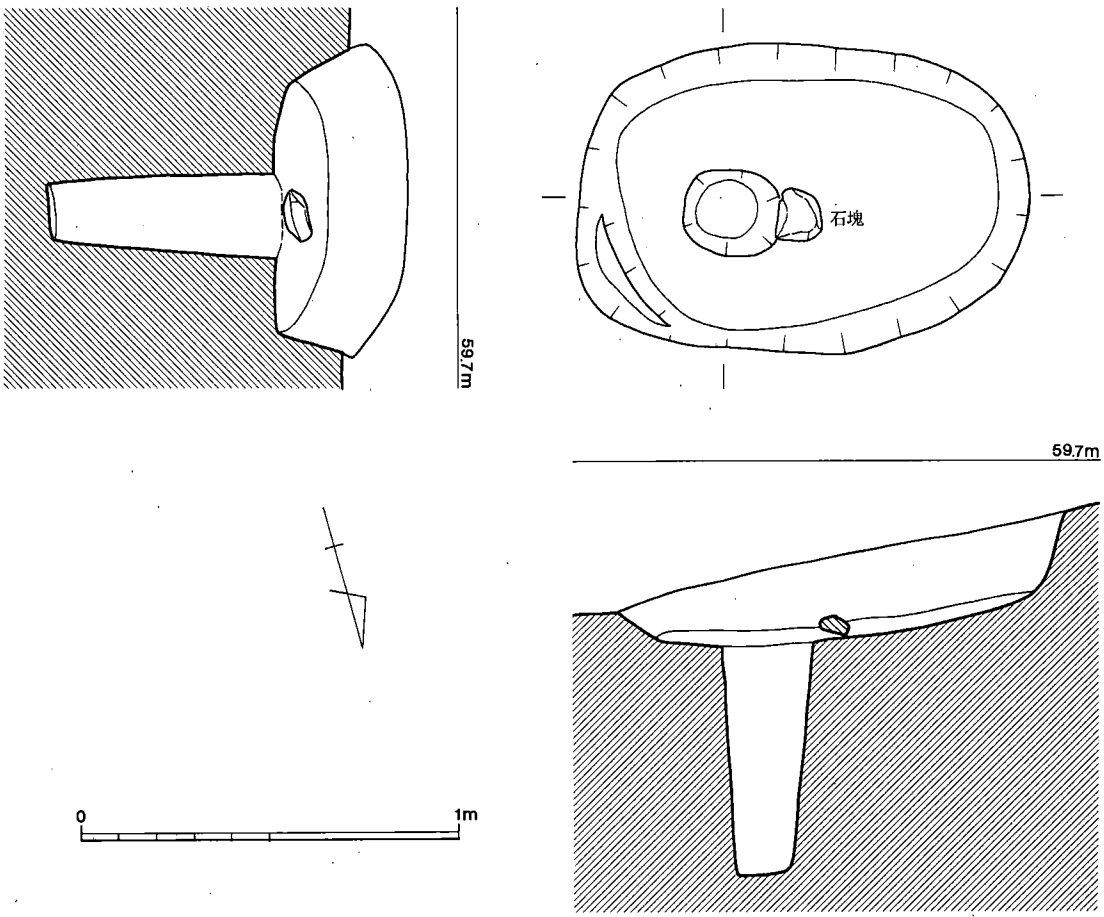


第85図　38号墓［石蓋土壙墓］実測図（1/30）

は隅丸長方形を呈し、その規模は長さが1.60m、幅は70cm前後である。墓壙は２段掘りを呈しており、北西側と南西側がテラス状をなす。墓壙の内部にはピット状の撹乱がある。また、北東側には蓋石の一部と見られる絹雲母片岩と緑泥片岩の板石が乱れた状態で出土した。石材には赤色顔料の塗布は認められない。埋葬土壙の規模は長さが1.30m、幅は南西側が広く35.0cm、北東側は20.0cmを測り、頭位は南西側と考えるが、撹乱により床面が低くなる。

主軸方位はＳ－43°－Ｗを示し、周辺の墓の主軸に対して直交し７号墓の周溝に並行につくられることから、７号墓（方形周溝墓）の周溝内に埋葬された可能性がある。土壙内からの人骨及び副葬遺物はない。

（２）落し穴遺構

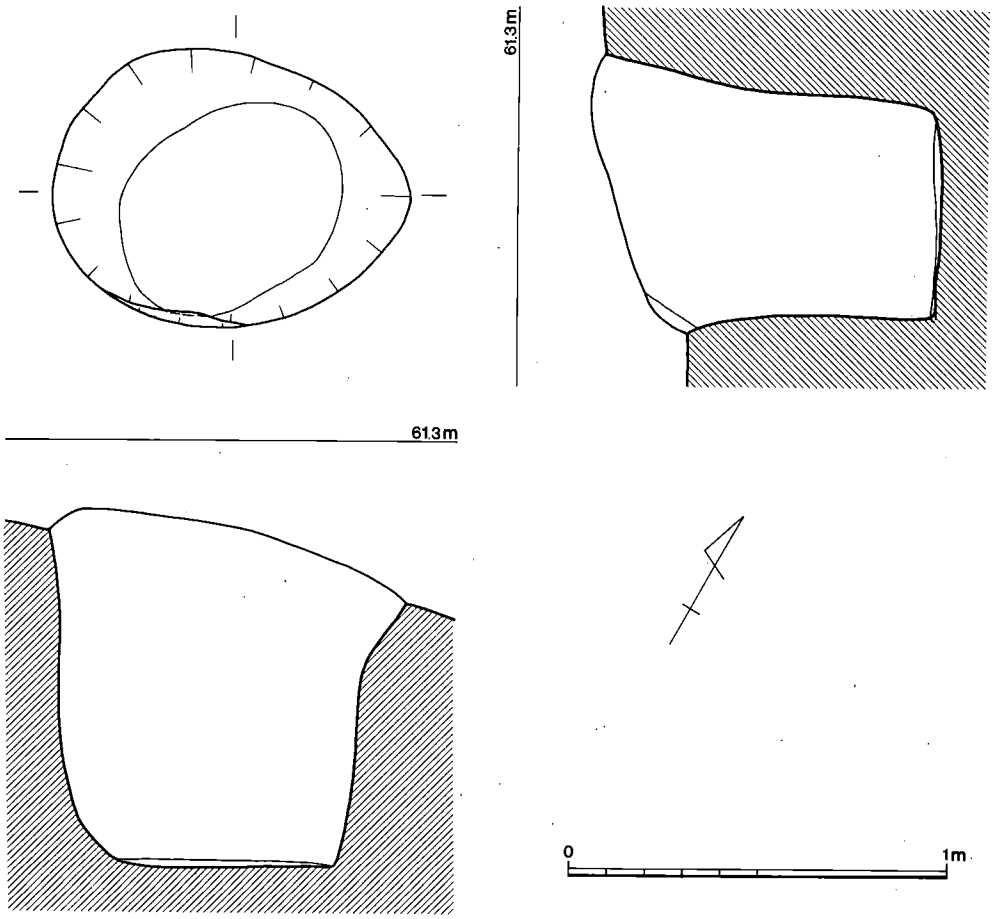


第86図　１号落し穴遺構実測図（1/20）

1号落し穴遺構（図版44－(2)、第86図）

東斜面の標高59.50mの所で検出した落し穴である。平面プランは楕円形を呈し、その規模は長軸が1.20m、短軸が80.0cm、床面までの深さは20.0cm強を測る。床面の東寄りには径が23.0cm、深さが60.0cmの逆刺し杭を埋めたピットが掘られている。また、ピットの傍からは地山石が床面に密着した状態で出土した。

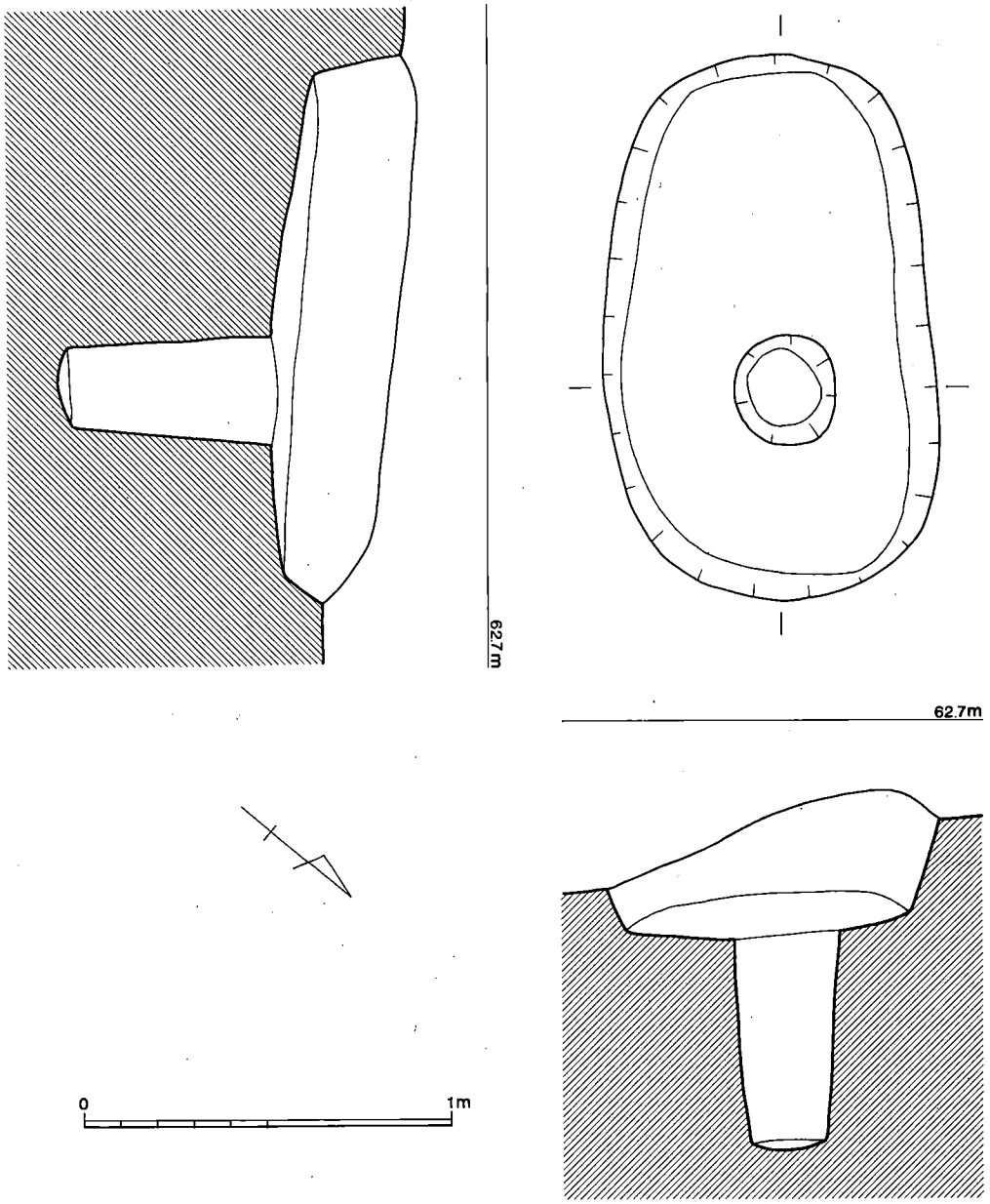
埋土は淡い黒褐色土が堆積しており、通常の落し穴遺構にしては床面までの深さが著しく浅く、かなり削られていると考えられるが、タイプの異なる2号は遺存状態が良いことに若干の疑問を感ぜざるを得ない。しかし、2号の覆土も他の落し穴と酷似した色と堆積状況を示していた。出土遺物はない。



第87図　2号落し穴遺構実測図（1/20）

2号落し穴遺構（図版45－(1)、第88図）

1号落し穴の西側5,0mに掘られた落し穴で、標高では61.0mの所である。既述したように床面にピットを掘らないタイプで、平面形状は不整楕円形を呈し、断面は長方形である。規模



第88図　3号落し穴遺構実測図（1/20）

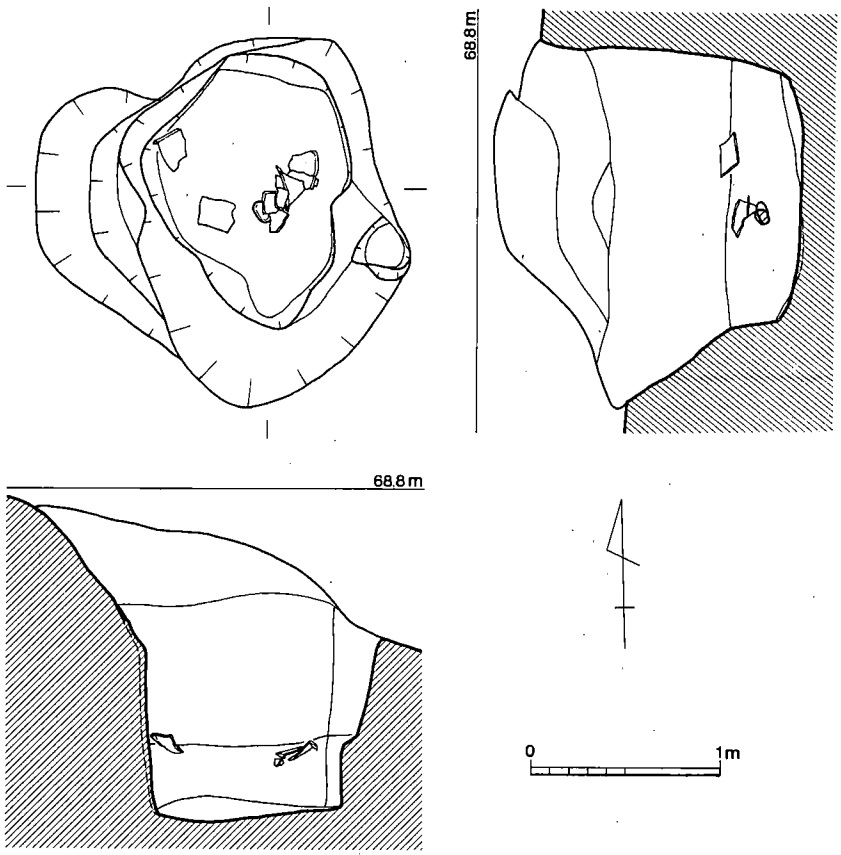
は上面で95.0cm×73.0cm、床面は上面プランとは主軸方向を異にし、65.0cm×48.0cm、深さは90cm前後を測る。中からの出土遺物はない。

3号落し穴遺構（図版45－(2)、第89図）

2号落し穴の北側10.0mに掘られた落し穴で、1号と同タイプである。主軸は120 度前後振れており、獣道に沿って掘られたか否かは分からない。平面プランは楕円形で、規模は長さが1.47m、幅は90.0cm前後、床面までの深さは35.0cm前後を測る。床面には径が30.0cm弱の逆刺し杭を埋めるピットが掘られ、その深さは60.0cmである。出土遺物はない。

（3）貯蔵穴（図版46－(1)、第89図）

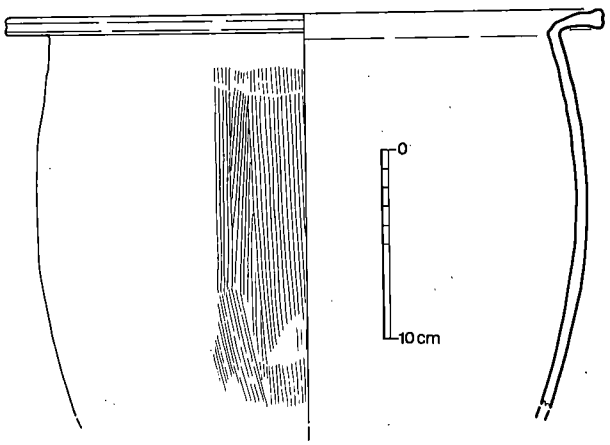
丘陵の調査区内東斜面で検出した弥生時代の唯一の遺構である。標高で言えば68.0m付近に



第89図　貯蔵穴実測図（1/40）

当たる。平面形状は不整形を呈し、上端は崩壊して旧形を保っていない。断面はビーカー状である。貯蔵穴の規模は上端で南北1.95m、床面では1.30m、東西を復原すれば1.25・m乃至1.30m、床面では1.00m、深さは1.50m前後を測る。

床面から30.0cm前後上層から弥生時代中期の甕形土器の破片と花崗岩の円礫が投棄された状態で出土した。



第90図　貯蔵穴出土土器実測図（1/4）

出　土　遺　物

土　器（図版51.第91図）

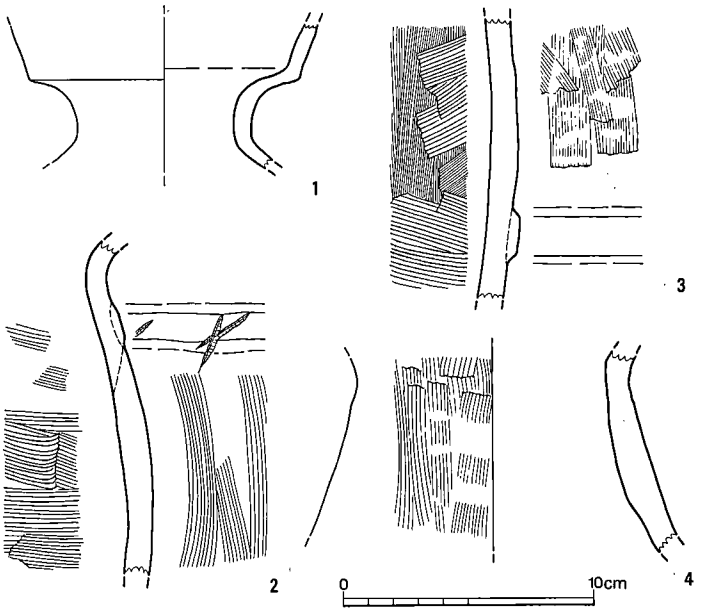
口縁部を逆「L」字状に外反させる甕があり、胴部下半から底部を欠損する。口唇部を肥厚させ横ナデによる凹線が巡る。調整はナデと粗いハケで仕上げる。胎土は砂粒・雲母・石英など多く含む。淡い黄褐色を呈し、口径は31.8cmを測る。

（4）その他の遺物

表面採集土器（図版51.第91図）

図示した4点の土器は表土剥ぎの段階で出土した遺物で、当該墳墓群に伴うものであるが、削平時に散逸した土器であろう。

土師器　1は複合口縁の壺形土器で頸部片の図上復原実測である。頂部から4段目のテラス部（14号・28号



第91図　表面採集土器実測図（1/3）

墓付近に当たる）から出土した。胎土は緻密で極細雲母を含み、黄白色の色調をなす。

2・3は大形の在地系の布留式並行期甕の破片で、形状・調整・色調などから同一個体の可能性がある。通常の供献用土器ではないと思われ、この時期には稀に甕棺墓の存在が考えられるが断定はできない。2は頸部から胴部にかけての破片で、当時期の口縁の外反度は鈍い。頸部下には低い台形状の凸帯を巡らし、板の小口による「×」印の刻み目を付ける。調整は内外面が粗いハケの上からナデている。胎土には大粒砂粒と雲母を含む。黄橙色の色調で、器壁が8.0mm～1.20cmを測る。丘陵の頂部から採集した。3は胴部片で同じく低い台形凸帯を巡らす。内面は細かいハケと粗いハケを使う。頂部斜面で採集した。

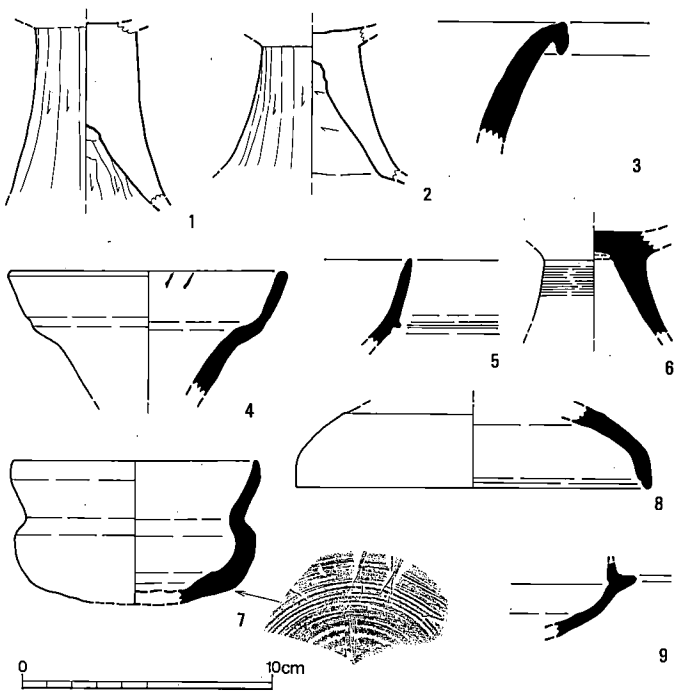
4は在地系の器台の破片で南斜面のⅣ段目テラスから採集した。外面が粗いハケ、内面はナデで仕上げる。胎土は大粒砂粒を多く含む。淡い茶褐色を呈する。

頂部西斜面採集土器（図版51.第92図）

丘陵頂部の西側に掘られた1号墓（箱式石棺墓）に伴うと考えられる溝の西側斜面で採集した土器であるが、当該墳墓群とは大きく時期が異なり6世紀後半頃の所産である。この土器の一群は、既述したように昭和40年に福岡県立朝倉高等学校史学部が調査した妙見古墳群の内の6号墳に関連する遺物であることが想定され、同校による古墳群の測量配置図（第2図参照）とも大方符合することが判明した。

それによると6号墳は「丘陵の最頂部にあり、盛土の高さは2.50m、直径が10.0mほどの規模を持っているが墳頂部は著しく窪み、盗掘の激しさを物語っていた。石室は単室の横穴式石室で、玄室の長さは2.60m、幅は2.30mを測り、側壁は左右対称でなく一方が胴張りに構築されていた」らしい。

出土遺物は須恵器の提瓶・𤭯の他、装身具（管玉・切子玉・丸玉）、鉄器（刀子・鉄鏃）などがある。



第92図　頂部西斜面採集土器実測図その1（1/3）

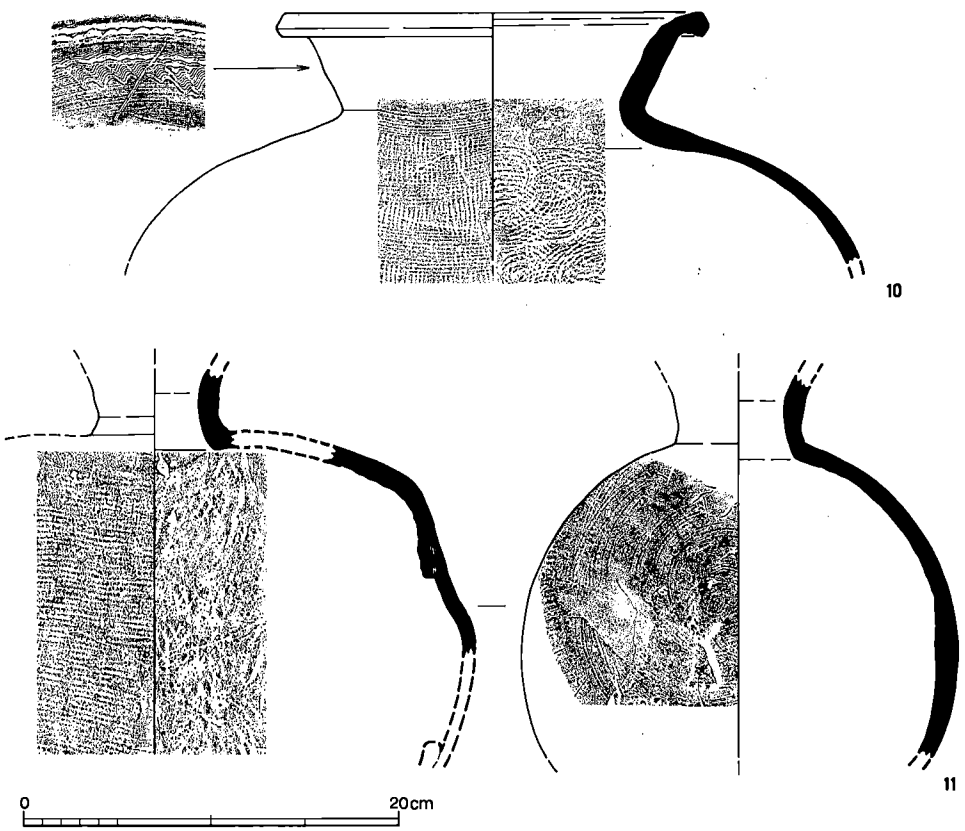
土師器　1・2の高坏の脚部片がある。1は柱状部を充填するタイプで、外面と内面をヘラで削る。胎土には砂粒が少なく黄白色を呈する。2は坏底部からスカート状に開き、調整は1と同じである。茶黄色を呈する。

須恵器　3は甕の口縁部片で、口唇部を嘴状に肥厚させる。調整は横ナデ仕上げである。4・5は甕の口縁部片で、頸部と口縁の境は有段をなす。4の口唇部は丸くつくり内側には2箇所ヘラによる刻み痕がある。5は尖り気味につくり、口縁下には細い台形凸帯を巡らす。4の復原口径は11.2cmを測る。

6は器種の分類としては短頸壷の範疇であろう。口縁部は内湾ぎみにつくり、胴部は扁平である。内面から口縁外面にかけては横ナデ、胴部は粗いカキ目施し底部にはヘラ記号を刻むが全容は分からない。胎土は砂粒を多く含み暗小豆色を呈する。復原口径は9.8cmを測る。

8は坏蓋の破片で器壁をやや厚くつくる。口唇部には段をつくる。胎土は砂粒を多く含み悪い。暗灰色の色調をなし、復原口径は14.2cmを測る。

9は坏身の小破片で坏蓋に対してやや新相を呈する。追葬時の遺物と考えられる。



第93図　頂部西斜面採集土器実測図　その2（1/4）

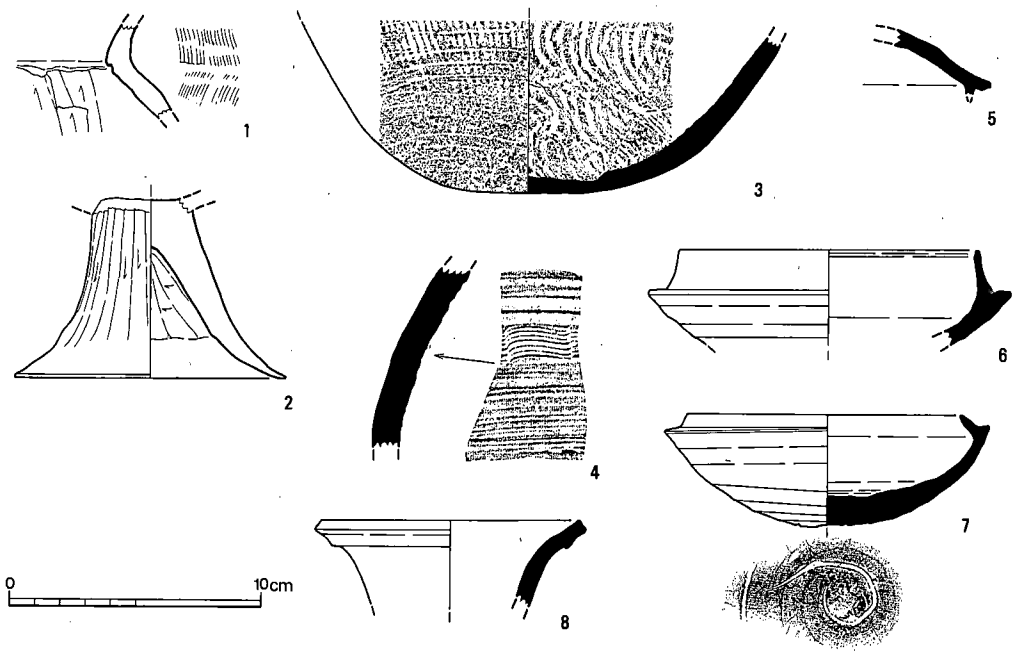
10は中型の甕形土器で胴部以下を欠損している。口縁部の外反度は鈍く、口唇部を肥厚させる。肩部の器壁は口縁から頸部より薄くつくる。調整は口唇部外面が2段の櫛描波状文、口縁部がやや粗い櫛描波状文、頸部付近が横ナデ、肩部が擬格子目の上に一定の間隔をおいて粗いカキ目を施す。肩部内面は青海波の当て具痕が残る。胎土は大粒石英粒を若干含み、暗灰色を呈する。復原口径は23.0cmを測る。

11は横瓮の破片で約1／2が残存する。胴部には平行叩き、小口部には不規則な渦巻き状の細かいカキ目、内面は青海波状の当て具痕の上からナデている。

丘陵南斜面（周溝内）出土土器（図版51.第94図）

この一群の土器は南斜面の23号・25号・26号墓の西側に掘られた周溝の西隣に巡った周溝と考えられる覆土中から出土した。検出した周溝は全長5.0m前後、幅は広い箇所で1.70mほどで大半が農道建設で破壊され遺存していない。出土した土器は土師器の甕・高坏・須恵器の甕・坏蓋・坏身・提瓶などがあり、時期は6世紀後半（一部中頃）から末頃に比定され当該墳墓群とは無関係である。この周溝は昭和40年に朝倉高等学校史学部が調査した妙見古墳群の分布図の中の7号墳の位置とほぼ符号していることから7号墳に伴う周溝の可能性が強い。

朝倉高校の報文で7号墳は「6号墳の南側25mの地点にあり、盛土が崩壊していたため古墳の規模は不明である。石室の石材は殆どが除去され腰石の一部が遺存していたに過ぎない。出



第94図　丘陵南斜面採集土器実測図（1/3）

土遺物は鉄鏃3、刀子1、鎌1」がある。この調査地点からすると14号・28号墓の方形区画内にあるトレンチ状の撹乱は当時の調査の痕跡とも思える。

土師器　1は甕形土器の頸部片である。調整は外面がハケをナデ消している。内面は粗いヘラ削りで仕上げ、胎土は砂粒が少なく緻密である。

2は高坏の脚部で、柱状部からスカート状に開脚し器壁は上部から徐々に薄くつくり裾部では尖り気味である。調整は外面柱状部は縦ヘラ削り、裾部の内外面が横ナデで仕上げる。明黄褐色を呈し、裾部径が10.8cmを測る。

須恵器　3・4は甕形土器の破片である。3は底部片で僅かに平底をなす。調整は外面が擬格子の叩き、その下部は擬格子叩きの上から幅広のカキ目を施す。内面には青海波の当て具痕が見られる。4は頸部片で、上から幅広の沈線状のナデ、櫛描波状文、粗いカキ目で調整し、内面はナデる。

5は身受けの返りを有す坏蓋の破片で、おそらく扁平な摘みを有すであろう。

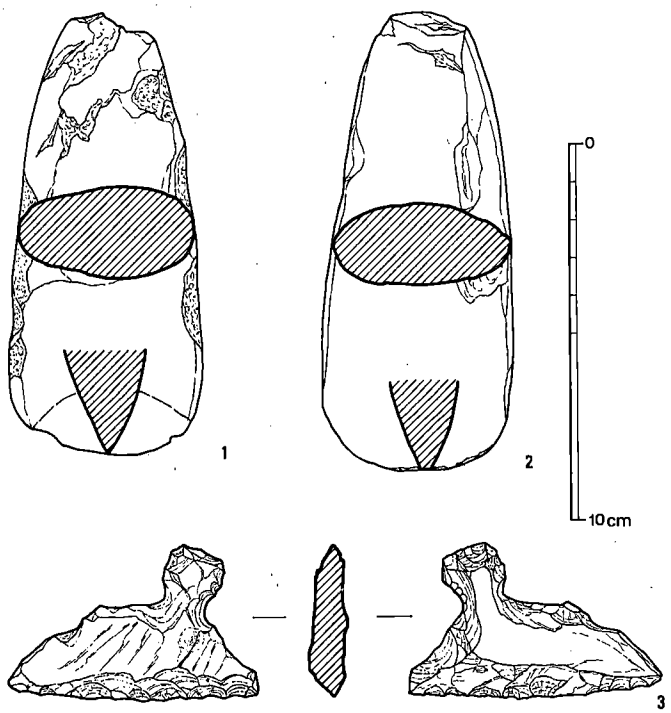
6・7は坏身であるが、両者は時期が異なる。6が初葬で7が追葬時の供献遺物であろう。6は口唇部に有段をなし体部の器壁は厚くつくる。1／3が残存し、復原口径は12.0cmを測る。7は完形の坏身である。底部は器壁を厚くつくり、外面に渦巻き状のヘラ記号を刻む。暗灰色を呈し、口径は10.4cm、器高は4.4cmを測る。

8は提瓶の口縁部片で、口縁部を粘土紐を巻きつけ肥厚させる。全面に灰を被り暗灰色を呈する。復原口径は10.8cmを測る。

採集石器（図版51.第95図）

1・2は丘陵のⅣ段目のテラスで採集した石斧の完形品である。1は蛇紋岩の質の悪い石材を使い、2は砂岩質の石材を使っている。2の刃部は使い減りし刃部が鈍い。

3はサヌカイト製の石匙の完形品である。丘陵頂部の西斜面で採集した。



第95図　南・西斜面採集石器実測図（1/2）

表　1　各墓地の計測表

号数	墓の形態	墓壙の規模(cm)		棺内の法量(cm)			頭　位	枕	主軸方位	副葬遺物 供献遺物	蓋石状況	備　　考
		主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅						
1	箱式石棺墓	202	95	154	42	36	南	板　石	S10° W	――	平　蓋	西側に周溝を伴う、目張り粘土、敷石
2	箱式石棺墓	245	130	185	50		東　南	―	S17° E	――	――	削平が激しい
3	箱式石棺墓	―	―	145			西	板　石	N67° W	――	鎧　蓋	側壁は上部を小口積み
4	箱式石棺墓	265		203	45	30	東	削出し	S81° E	鉄剣・土器	――	目張り粘土、床面に朱、周溝墓
5	石蓋土壙墓	―	―		30		東　北	―	N59° E	――	鎧蓋＋平蓋	6 号墓周溝内に構築、随葬
6	削平され不明	―	―	―	―	―	―	―	――	土　器	――	方形周溝墓、7 号墓と周溝一部共有
7	箱式石棺墓	―	92	―			南　東	―	S38° E	土器・石器	――	主体部削平、周溝内集石遺構
8	箱式石棺墓	240	―	158	39	28	東	―	S67° E	――	平　蓋	棺材に朱、頭蓋骨片と歯、目張り粘土
9	箱式石棺墓	―	―	160	40	40	東	―	S68° E	――	――	目張り粘土、床面黄色粘土を貼る
10	土壙墓	163	90	―	―	―	―	―	S83° E	――	――	墓ではない可能性もある
11	削平され不明	―	―	―	―	―	―	―	――	土　器	――	方形周溝墓
12	石蓋土壙墓	200	100	150	24	20	北　西	―	N42° W	土器・鉄斧	鎧　蓋	「L」字状の溝を有す
13	箱式石棺墓	―	―	―	―	―	―	―	N69° E	――	――	方形周溝墓、溝内随葬、主体部削平
14	石蓋岩盤刳貫墓	295	155	179	36	25	西	―	N80° W	鉄鏃・土器	鎧　蓋	方形周溝墓、人骨、頭骨と石蓋に朱
15	石蓋土壙墓	―	―	―	33	―	西	―	N59° W	――	鎧　蓋？	方形周溝墓、主体部1/3 削平
16	箱式石棺墓	275	160	170	43	37	西	粘　土	N90° W	――	平　蓋	14号周溝を切る、人骨、目張り粘土
17	木棺墓	275	127	195	40	40	東	―	S81° E	土器・鉄器	――	方形周溝墓、目張り粘土、床面頭部朱
18	石蓋岩盤刳貫墓	210	―	149	23	14	東	板　石	S87° E	――	鎧　蓋	13号墓周溝内、小口壁に掘削痕
19	石蓋岩盤刳貫墓	―	―	―	47	36	東	―	S76° E	土　器	平　蓋？	方形周溝墓？、主体部1/3農道で削平
20	箱式石棺墓	260	150	192	45	45	東	粘　土	N78° E	土器・鉄鏃	平　蓋	蓋石と棺材に朱、頭骨、目張り粘土

号数	墓の形態	墓壙の規模(cm)		棺内の法量(cm)			頭位	枕	主軸方位	副葬遺物 供献遺物	蓋石状況	備考
		主軸長	短軸幅	主軸長	頭位幅	脚位幅						
21	石蓋岩盤刳貫墓	185	88	144	38	30	東 南	板 石	S66° E	ガラス小玉	鎧 蓋	石枕の下を掘り込む、目張り粘土
22	木蓋土壙墓	—	—	95	40	38	西	—	N76° W	———	———	西側小口に板石を立てる
23	箱式石棺墓	224	113	210	35	22	西	—	N80° W	———	平 蓋	目張り粘土、人骨、1／2は土壙状
24	箱式石棺墓	242	160	160	39	31	西	粘 土	S87° W	ガラス小玉	平 蓋	目張り粘土、人骨、
25	石蓋土壙墓	225	130	165	40	18	西	—	N85° W	———	鎧蓋＋平蓋	頭位側小口に板石、14号墓周溝より新
26	木蓋土壙墓	215 —	140 —	190 185	33 25	20 20	西 東	— —	N64° W ——	——— ———	——— ———	墓壙内に2基の埋葬土壙 2基の埋葬土壙は頭位が逆か
27	木蓋土壙墓	190	100	118	34	30	東	板 石	N87° E	———	———	14号墓周溝内、随葬墓
28	箱式石棺墓	340	200	180	53	40	西	粘 土	N83° W	鉄鏃・土器	鎧 蓋	人骨3、目張り粘土、床面敷石と粘土
29	木蓋土壙墓	—	—	183	22	32	東？	—	N60° E	———	———	西側にはピットあり、頭位は東か
30	木蓋土壙墓	—	—	145	40	40	東？	—	N68° E	———	———	西側は削平、東側小口はテラスあり
31	削平され不明	—	—	—	—	—	—	—	——	土 器	———	円形周溝墓？、周溝内から土器
32	箱式石棺墓	—	240	189	45	25	西	—	N83° W	———	———	28号と重複、石棺と土壙墓の折衷か
33	石蓋岩盤刳貫墓	260	105	163	45	35	西	刳 貫	N74° W	———	鎧 蓋	目張り粘土、墓壙の一部削平
34	木蓋土壙墓	129	70	90	43	30	西	—	N83° W	———	———	幼児の墓か
35	石蓋土壙墓	270	120・90	180	30	16	東	粘 土	N77° E	———	鎧蓋＋平蓋	頭位が鎧蓋、目張り粘土、東小口板石
36	木蓋土壙墓	142	65	—	—	—	？	—	N13° E	———	———	14号周溝内、随葬
37	箱式石棺墓？			225	45	37	西	—	N77° W	———	———	木蓋木棺墓の可能性あり
38	石蓋土壙墓？	160	70	130	35	20	南 西	—	S43° W	———	———	使った石材が撹乱で散在

3 小　結

妙見墳墓群の位置する丘陵全域は、昭和40年の朝倉高等学校史学部の調査結果（註１）と今回の調査の成果から古墳時代前期と後期の２時期にわたる奥津城であることが判明したが、後期古墳は残念ながら大半が激しい盗掘を受けていた。昭和40年の調査では箱式石棺墓３基、石蓋土壙墓１基、石棺系竪穴式石室１基、小型の竪穴式石室１基などの古墳時代初頭から前期にかけての墳墓と数十基の後期古墳が発掘された。

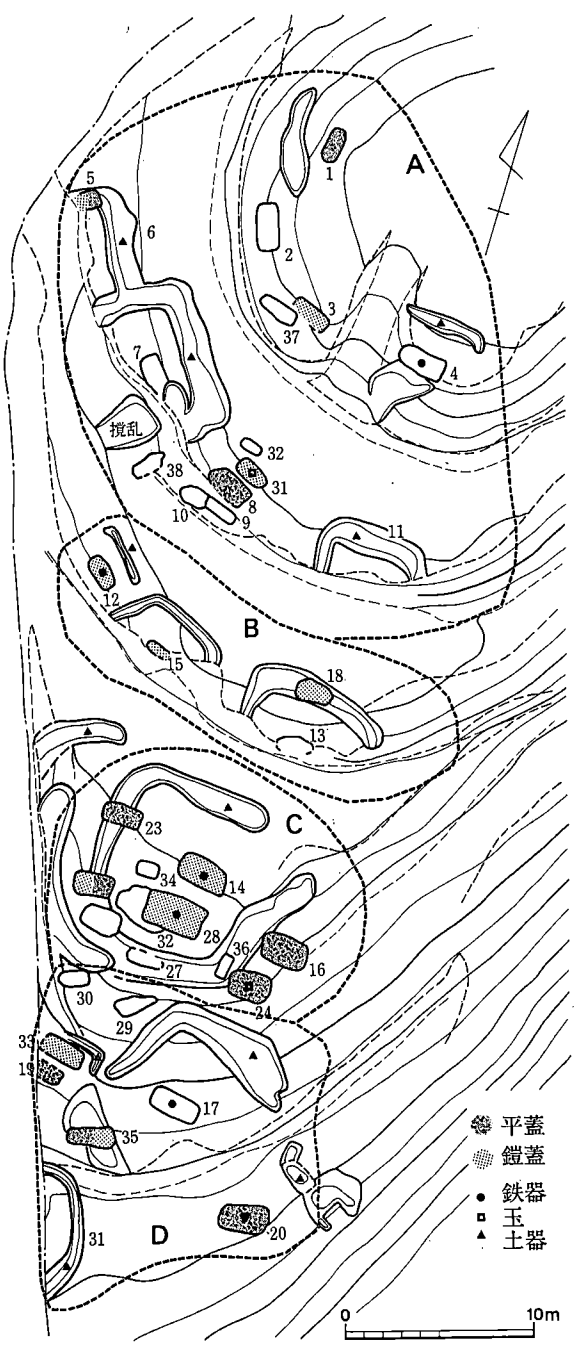
この度調査した墳墓群も樹園造成で著しく削平され主体部が消滅した墓や周溝が破壊を受けた墓地があり、ほぼ南北に延びる農道から西側の丘陵は激しく削られて遺構はまったく遺存していない。しかし、数基の墓は消滅しているものの全容は把握でき、墓地の築造の流れやグルーピングも一定程度可能である。以下調査の成果について若干所見を述べる。

墓の形態

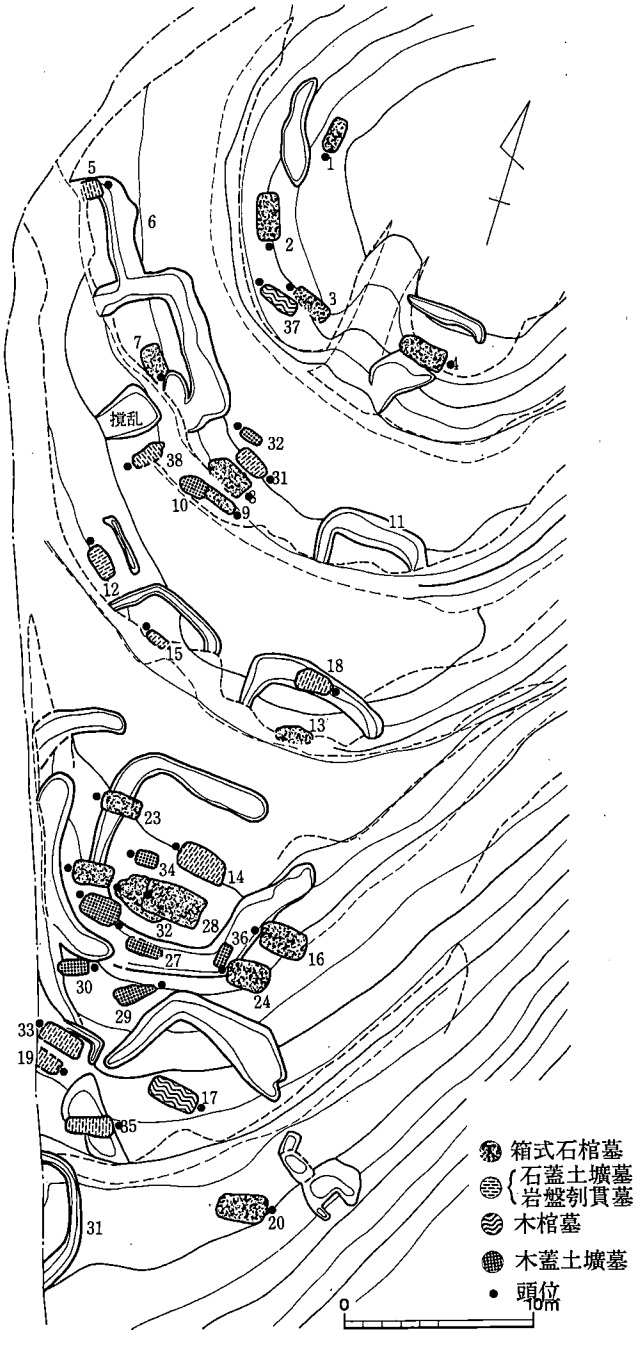
調査区内では総数38基の墳墓群を検出したが、墓地の形態は様々で方形周溝墓（単に溝を伴う墓も含む）の形状をなす墓と単独墓・小単位で群をなす墓などで形成される。個々の墓の形状は箱式石棺墓・石蓋土壙墓・石蓋岩盤刳貫墓・木蓋土壙墓・木棺墓の５形態が存在するが、箱式石棺墓の中には石蓋土壙墓との折衷形式（23号墓・32号墓）や石棺系竪穴式石室の形状を有する（３号墓）墓、また床面に敷石を並べた（１号墓）墓、敷石と粘土の（28号墓）墓、粘土を全面に客土した墓などとバラエティーに富み、総体的に墓の構築方法に一定の規制は認められない。

古墳時代前期頃の箱式石棺墓及び石蓋土壙墓・石蓋岩盤刳貫墓などの石蓋の架構方法は、板石の側面を接するように架構する所謂「平蓋」と魚の鱗状に架構する「鎧蓋」とが存在するが、後者では頭位側から順次被せるのが通例である。同時期の他の墳墓群で見ると福岡県甘木市に所在する立野遺跡の墳墓群（方形周溝墓で主体部が箱式石棺、註2）ではすべて平蓋で鎧蓋はない。また、同県の築上郡大平村に所在する穴ケ葉山遺跡は石蓋土壙墓で構成された墳墓群であるが、この遺跡では大半が鎧蓋で架構している（註3）。県外の例では大分県日田市清岸寺町に所在する草場第二遺跡の墳墓群は弥生時代後期から古墳時代にかけての墳墓群で、古墳時代初頭から前期の石蓋土壙墓と箱式石棺墓では箱式石棺墓に一部鎧蓋が見られ、石蓋土壙墓は鎧蓋を多く採用している（註4）。

本遺跡でも鎧蓋は石蓋土壙墓や石蓋岩盤刳貫墓などに多く見られ、箱式石棺墓は３号墓と28号墓のみである。３号墓の場合被葬者の追葬がなされており、その時点で鎧蓋に架構したことも考えられる。鎧蓋の利点は、各々の石材が接する面を揃える必要がなく石材の加工が容易であること、他の石蓋と重なり合い石蓋の荷重が埋葬土壙の側壁に集中しないため壁の崩壊が少



第97図　石蓋の種類と副葬・供献遺物分布図（1/400）



第96図　墓の形態と頭位方向図図（1/400）

ないことなどが考えられ、石蓋土壙墓に多く採用されると考えられる(註5)。

墓の配置

墓は方形周溝墓の形態を呈する例とそうでない墓、単独墓と群集墓に大別される。方形周溝墓は丘陵が削平を受けているためはっきりしないが、一周する場合と単に区画の目印の機能を有したと考えられる場合とがあり、後者は12号墓、19号墓及び20号墓と23号墓・25号墓・26号墓の西側に弧状に掘られた溝が挙げられる。その他の溝は削平のため不明瞭であるが方形周溝墓の形態をとると考えられる。

各々の墓の配置状況をみると丘陵の最頂部（妙見6号墳の所在推定場所）は削られて墓は遺存していないが、当然墓が掘られていたと考えられよう。遺存している墓は大半が丘陵の等高線に沿った形でつくられている。そこで頭位方向を詳細に見ると最頂部から標高75.0m付近の群の多くが東側を頭位とし一つのグループと理解されるが、その中にあって3号墓と37号墓は頭位が逆方向であるが近接して掘られ近親者の可能性を示唆している。6号墓と7号墓とは周溝の一部を共有し、周溝からの出土遺物では時期差がなく、同時併存と考えられると共にお互いの被葬者の密接な関係が推測される。さらには7号周溝内で検出した集石遺構（葬送儀礼の際の祭祀遺構）内から煤の付着した甕が出土し、最下層には焼土と炭化物が厚く堆積しておりこの場所での火の使用が考えられ、葬送儀礼の際の飲食の痕跡と解釈することも可能であるが、当該時期のこのような類例は知らない。しかし、立野遺跡の方形周溝墓の周溝内から煤が付着した甕形土器が数個体出土している事実もこれを暗示しているのかも知れない。また8号墓を中心としたグループも近親者を想定させる配置を示唆している。

Bグループの12号・13号・15号墓の3基はほぼ均等な間隔で設置され同時併存で18号墓を含めて一つのグループと看取できる。頭位も西側方向である。18号墓の被葬者は13号墓の被葬者と繋りのある人物であろう。これに11号墓が包括されるか否かは分からないが、11号墓は設置場所から考えて7号墓の群に入れるべきであろう。

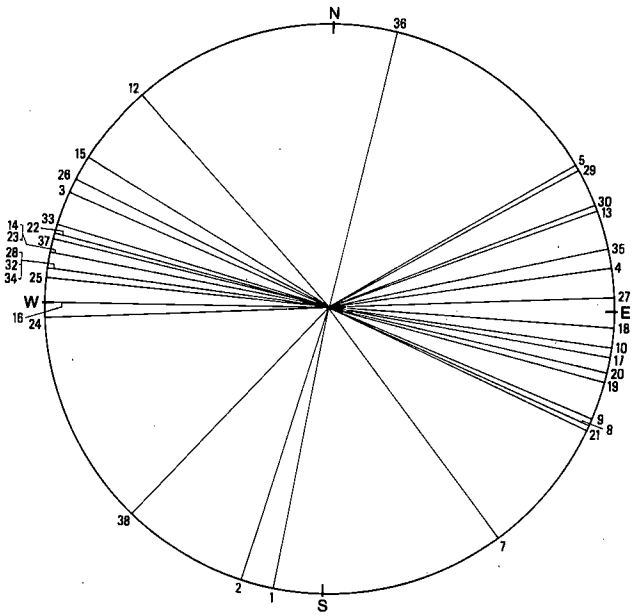


表2　各墓地の頭位方角表

Cグループとした一群は、最も

古い32号墓との直接的な関係が存在する可能性は低いと考える。何故ならば、当該墳墓群の中で重複関係にあるのは28号墓と32号墓で、当時他の墓は別の墓の存在を認知していたため近接することはあっても重複はなく、まして墓を破壊することはないことからも指摘できよう。この一群は大半の墓が頭位を西側にとり、当初の墓は14号の石蓋岩盤刳貫墓を主体部に持つ方形周溝墓が構築され、ほぼ同時かやや後出形で28号墓がつくられる。28号墓は人骨の遺存状態から分かるように後に追葬が行われている。さらに方形の区画内には近親者と思われる子供用の墓も掘られ、周溝内にも関連する近親者の墓が設営される。後には方形の周溝は無視され周辺に頭位を同一方向にした墳墓が隣接して営まれ、その西側には新たに弧状の区画溝を巡らすなど明らかに14号墓と28号墓を意識した埋葬を行っている。

Dグループでは17号墓（主体部は木棺墓）の方形周溝墓が中核的存在を示し、これを中心に周囲に墓を営んでいる。このグループはCグループとは反対の東側が頭位となることから（33号墓のみ西側）Cグループとは異なる一群と理解される。31号墓がこのグループに帰属するか否かははっきりしない。

副葬・供献遺物

副葬遺物は総体的に少なく鉄器（8点）とガラス玉（2点）があるに過ぎない。その内訳は4号墓（箱式石棺墓）から鉄剣1、12号墓（石蓋土壙墓）の棺内から鉄斧1、14号墓（石蓋岩盤刳貫墓）からは棺外に鉇1、棺内から鉄鏃1、17号墓（木棺墓）の棺内から刀子・鉇1、20号墓（箱式石棺墓）の棺内から鉄鏃1、28号墓（箱式石棺墓）の棺内から鉄鏃1、ガラス玉は21号墓（石蓋岩盤刳貫墓）と24号墓（箱式石棺墓）の棺内から各々1点づつ出土している。

この内14号墓・17号墓・20号墓の副葬鉄器の出土状態が通常の副葬とは異なったあり方を示していることが指摘される。つまり、14号墓の鉇と17号墓の刀子及び鉇は副葬時に故意に曲げられた可能性が強い。特に17号墓の鉄器は図上（第53図参照）でも分かるように重ねた状態で一箇所に強い打撃を与えたらしく、刀子の刃部と鉇の茎部が鋭く屈折し全体に「U」字状に折れ曲がっている。しかも出土場所が床面の粘土の客土内からで、あたかも隠匿した形の出土状態を示している。20号墓の鉄鏃は故意に折り曲げてはいないが粘土枕の中から出土し、これも通常の出土状態とは言えない。

二次的に折り曲げた鉄器を副葬した例として手もとの資料で調べた範囲内では当遺跡を含めて表3に掲げた7遺跡11例が知られる。

唐人塚遺跡　九州縦貫自動車道建設に伴い昭和48年に調査がなされた。鉄器が出土した墓は標高47.0mの丘陵上に営まれた方形台状墓形の集団墓で、台状部に8基、裾部に4基の墓が掘られている内の2−4号と5号である。2−4号墓は平蓋の石蓋土壙墓で、東側を頭位とする粘土枕の傍から出土した刀子がある。刀子は鈍く「U」字状に曲がり、報文中では「中央から折り曲げられており、使用の際に使い易さを目的に曲げられた」と述べている。因に布留式（古）

並行期の甕が棺外副葬されている。2−5号は石材の抜かれた箱式石棺墓で床面から鎌が出土している。鎌の先端は背部に対して約50度の角度で内側に短く折り曲げられている。

松ノ尾１号墳　公園建設に伴う発掘調査で出土した方形周溝墓の２基の主体部（箱式石棺墓と木棺墓）の内の木棺墓から出土した鉄剣と碧玉製の管玉がある。鉄剣は被葬者の右手傍から出土し、剣身の1／2の所で折られ茎に近い剣身は曲げられていた。棺内は撹乱などは受けておらず、出土状況から埋葬後に別の力が加わった形跡はないことから埋葬時に故意に折られた可能性が強い。

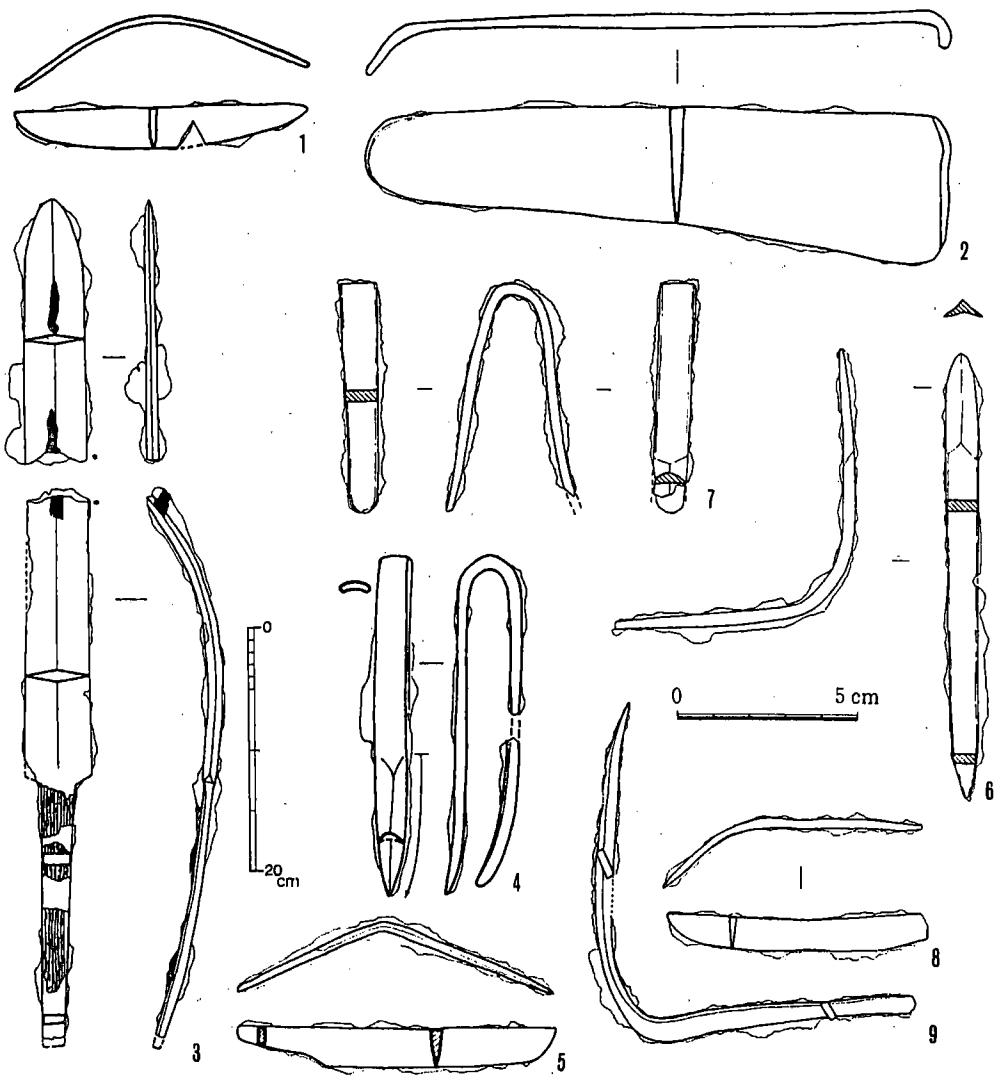
穴ケ葉山遺跡　工場用地造成に伴う発掘調査で確認した80基の内75基が調査された。検出した石蓋土壙墓は頗る謂集状況を呈し、丘陵の狭い東斜面に激しく重複して掘られている。その中の72号墓から床面の10cm上層の被葬者の左肩傍で鉇が出土している。出土状況から判断してこの墓に伴うと考えられる。鉇は中央部分で鋭く折り曲げられ「U」字状を呈し、明らかに二次的に曲げられたと判断される。副葬された39点の鉄器の中で曲げられた鉄器はこの１本のみである。

竹並遺跡　宅地造成事業に伴う発掘調査で昭和49年から51年まで実施された。この中の古墳時代前期の12号古墳（主体部が箱式石棺と粘土槨）の箱式石棺墓の被葬者の足下から「く」字状に曲げられた刀子が副葬されていた。刀子は完形品で中央部分で折れ曲がっている。完全な形で遺存している箱式石棺墓で他の力は加わっておらず、二次的な折れ曲がりと考えられる。

朝日北遺跡　九州横断自動車道建設に伴って佐賀県教育委員会が調査した遺跡で、２区のＳＴ01古墳（２基の主体部を有す方墳）の１号主体部（箱式石棺墓）の棺内足下に副葬された鎌

表３　折り曲げた副葬鉄器一覧

No.	遺　跡　名	墓地の種類	出土鉄器	時　代	備　　考	文献
1	唐人塚・2-4号	石蓋土壙墓	刀子	古墳前期	棺外に甕供献	1
2	唐人塚・2-5号	箱式石棺墓	鎌	〃	石材殆ど除去	1
3	松ノ尾1 号墳	木棺墓	剣	〃	方形周溝墓　剣は破損	2
4	穴ケ葉山72号	石蓋土壙墓	鉇	弥生終末	著しい折り曲げ	3
5	竹並遺跡12号墳	箱式石棺墓	刀子	古墳前期	低墳丘、足下副葬	4
6	朝日北ＳＴ01墳	箱式石棺墓	鉇	古墳前期	鎌・土器共伴、方墳	5
7	朝日北ＳＴ10墳	箱式石棺墓	鉇	〃	棺外副葬、方墳、土器	5
8	草場第二遺跡68	石蓋土壙墓	刀子	古墳前期		6
9	草場第二遺跡72	石蓋土壙墓	鉇	〃	方形周溝墓	6
10	妙見墳墓群14号	岩盤刳貫墓	鉇	〃	棺外副葬、方形周溝墓	
11	妙見墳墓群17号	木棺墓	刀子・鉇	〃	床客土内、方形周溝墓	



第98図　折り曲げた副葬鉄器（1／2・1／3）

1・2 唐人塚遺跡，3 松ノ尾1号墳，4 穴ヶ葉山遺跡
5 竹並遺跡，6・7 朝日北遺跡，8・9 草場第二遺跡

と鉇がある。この内鉇は「L」字状に曲がっており、報文中で「鉄鉇は2つに折れた状態だったが、接合の結果、U字状に曲がっていた。副葬の際に折り曲げたもの」と考えられている。周溝から布留式並行期の土師器が供献されていた。

5区では1辺8.0mの方墳の2基の主体部（両者とも箱式石棺墓）の1号の棺外に鉇が副葬されていた。鉇はほぼ中央から「U」字状に鋭く曲げられ、穴ケ葉山遺跡出土の鉇と同様の曲

げ方である。この状態では本来の機能を果たすとは考えにくく、何らかの原因で故意に曲げられた可能性が強い。周溝内には布留式並行期の甕と高坏・ミニチュア土器の供献遺物が出土している。

草場第二遺跡　九州横断自動車道建設に伴って大分県教育委員会が発掘調査した遺跡で、弥生時代後期から古墳時代中葉にかけての墓地群である。その内訳は甕棺墓（壺棺墓）13、土壙墓171、割竹形木棺墓１、箱式石棺墓７、竪穴式石室２、方形周溝墓17などがあり大規模な墓地群を構成している。その中にあって68号石蓋土壙墓の頭位の右傍から刀子が副葬されていたが、この刀子は切っ先側の約1／3が背部に対して42度の角度で曲げられ、唐人塚遺跡出土の副葬刀子と酷似した形状を呈する。

72号の石蓋土壙墓（方形周溝墓）からは頭蓋骨の右上に鉇が副葬されていた。鉇は一部を欠損しているが「Ｌ」字状に故意に曲げられた状態で副葬されていた。

以上が古墳時代前期を中心とした故意に折り曲げた副葬鉄器の実例であるが、折り曲げの副葬鉄器は、数多くの出土例を調べたわけではないが、弥生時代終末から古墳時代前期の墳墓に集中して出土する感を受ける。しかも表３で示したように、折り曲げられた出土鉄器は鉇と刀子が多いことも指摘できる。特に穴ケ葉山遺跡72号墓や朝日ＳＴ10号墳の鉇が激しく折り曲げられ機能不可の状態で副葬されている。その他の鉇も「Ｌ」字状に曲げられ普遍的に見られる副葬状態でないことは確かであろう。

刀子については機能的に不能なほどの曲がり具合ではなく、使用目的のために故意に曲げた可能性（註6）も残しているが、妙見墳墓群17号墓と竹並遺跡出土の刀子は一箇所に一撃を加え使用不能の状態で、特に妙見墳墓群の場合鉇と一緒に埋葬時に折り曲げたと理解され、使用目的のための折り曲げでないことは明らかである。

松ノ尾古墳の剣については曲げると同時に故意に折った可能性があるなど、総体的に折り曲げた副葬鉄器はその機能を不能にすることが目的であったと考えられる。この目的は周溝内に供献された土器の通常の機能をなくすために穿孔する行為と同等の意味合いを有すと考えることが可能ではなかろうか。つまり被葬者の所有した工具類を使用不能にすることと土器の底部を穿孔して用途を果たさなくすることとは共通の思想背景が内在すると考えられないだろうか。そこには死者の蘇りを恐れる一つの行為、ひいては祭祀の一側面の行為と受け取ることも可能ではなかろうか。しかし、このような副葬遺物は数が少なく普遍的な副葬状態ではないため、他の思想背景が存在する可能性があることも指摘し、今後の類例の増加を待って検討したい。

次に副葬形態であるが、17号墓と20号墓の副葬遺物は客土内と枕内から出土している。このような副葬状態もある種特別な意味合いがあるのかも知れない。形態的には隠匿副葬的な状態を示している。このような類例は、時代は古くなるが、福岡県嘉穂町大字馬見の原田遺跡（弥生時代後期後半から終末）の箱式石棺墓に副葬されていた「長生宜子」銘単夔文鏡と鉄剣があ

る。鏡と鉄剣は石棺内の敷石を分割し一種の箱状につくり鏡と故意に折った剣を粘土で覆った状態で隠匿副葬されていた（註7）。

このような特種な副葬形態の意味する所は現状では断定できないが、集団内での被葬者に対する特別な配慮がなされていたと考えられ、故意に副葬鉄器を折り曲げる行為と共通する思想背景が存在したと推測される。

墳墓の年代

先に妙見墳墓群をＡ～Ｄまでの４グループに大別したが、墓を設営した順序は丘陵頂部からと考えるのが妥当であろう。しかし、Ａ群とＤ群の供献土器を比較して見てもともに布留式（古）並行期の土器で明確な時期差はない。Ｃ群とＤ群は当初営まれた方形周溝墓との重複があり、特にＣ群については14号と28号墓の東西に墓地群を拡張し西側を溝で区画するなど一定の時間的な差はある。先に紹介した立野遺跡の墳墓群も当該墳墓群と同時期の所産で、短期間に営まれた墳墓群であり、布留式（古）段階の時期が付与できる。

近年、当該時期の方形周溝墓を中心とした墳墓群は出土例が増加しているが、一部の方形周溝墓を除くと副葬品の貧弱性が指摘できる。この傾向は近県の佐賀県、大分県の出土例からも言えることで、将来された墓制が地域の一定の階層の集団に多く採用され始め普遍化した現れでもある。立野遺跡の墳墓群を形成した集団は、同甘木市内にある三角縁神獣鏡を副葬した神蔵古墳の被葬者との関係が指摘され、その下部系列の集団との位置付けがなされており（註2）、これと同様妙見墳墓群を営んだ集団を統括した盟主的人物を埋葬した前期古墳が周辺に存在する可能性があるが、近隣にある宮地獄前方後円墳や剣塚前方後円墳はやや時代の下がる古墳である（註8）。現在のところ同時期の盟主的古墳は神蔵古墳が最も近くに存在するが、妙見墳墓群を形成した地域まで統括していたか否かは今後の調査例を待たなくてはならない。

註１　福岡県立朝倉高等学校史学部　「埋もれていた朝倉文化」－1969－
註２　福岡県教育委員会「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告-5-」－1984－
註３　大平村教育委員会「穴ケ葉山遺跡」－1993－
註４　大分県教育委員会「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書1」－1989－
註５　鎧蓋を採用する墓地群は一部筑後と豊前地方から大分県に多くみられ、妙見墳墓群の人骨の鑑定では形質は筑後から南豊前地方の人骨に近い結果がでており判定はできないものの何らかの相関関係があるのかも知れない。
註６　福岡県教育委員会「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告ＸⅧ」－1977－
註７　嘉穂町教育委員会「嘉穂地区遺跡群Ⅳ」－1987－
註８　甘木市史編纂委員会「甘木市史（上巻）」－1982－

文献　１註６に同じ
２志免町教育委員会「松ノ尾古墳群」－1993－
３註３に同じ
４竹並遺跡調査会「竹並遺跡」－1979－
５佐賀県教育委員会「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書15」－1992－
６註４に同じ

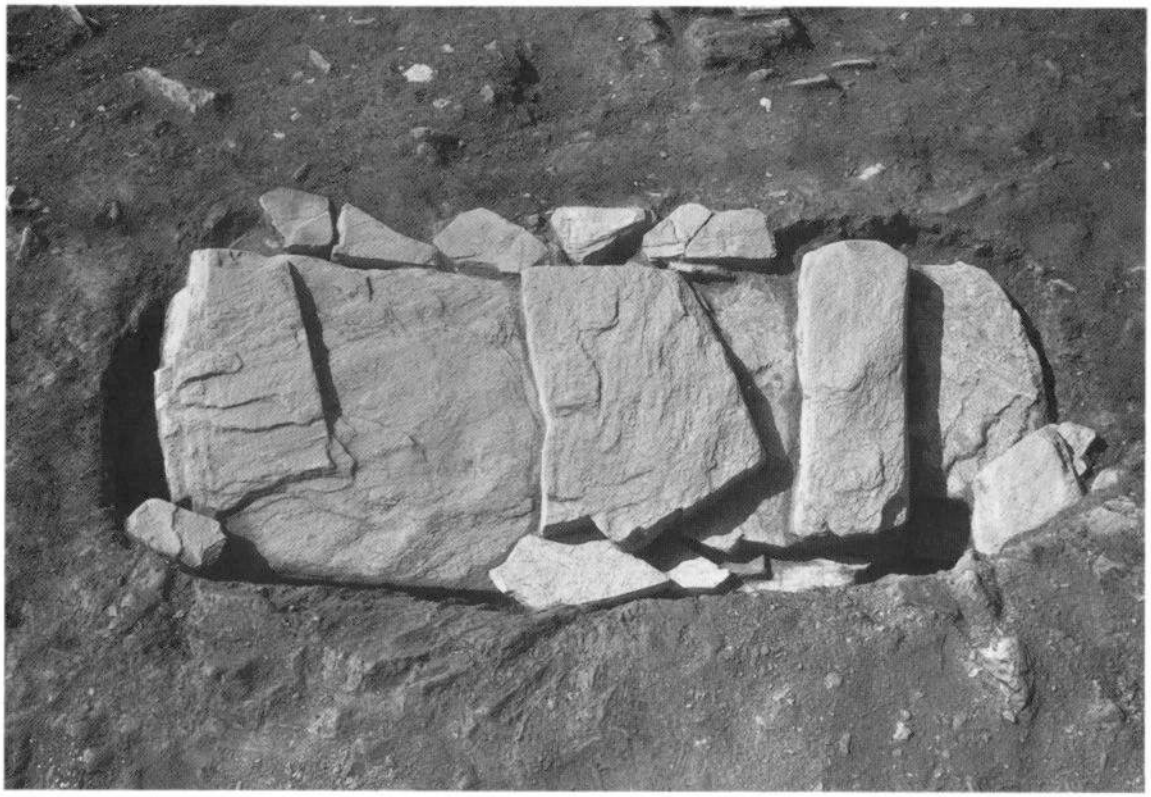
図　　版

(1)　妙見墳墓群俯瞰

(2)　南側斜面墳墓群(北から)

図版 2

(1)　7 号墓付近墳墓群(東から)



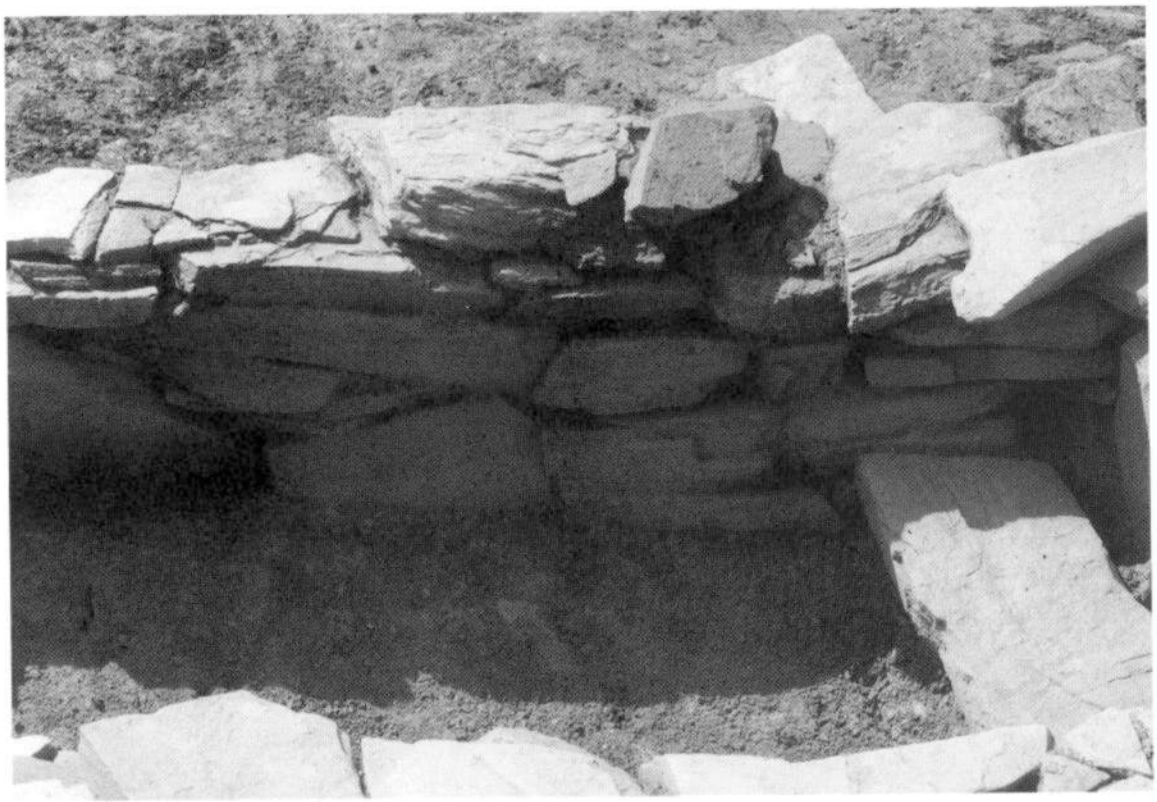
(2)　1 号墓(箱式石棺墓)目張粘土除去後の状態

(1)　1号墓石蓋除去後の状態(北から)

(2)　2号墓(箱式石棺墓)(東から)

(1)　3 号墓(箱式石棺墓)(北から)

(2)　3 号墓石蓋除去後の状態(東から)



(1)　3 号墓側壁石積状態

(2)　4 号墓全景(北から)

(1)　4 号墓(箱式石棺墓)(北から)

(2)　5 号墓(石蓋土壙墓)(北東から)

(1)　5号墓石室除去後の状態(南から)

(2)　6号墓全景(主体部は削平)(南から)

(1)　7 号墓全景(南から)

(2)　7 号墓(箱式石棺墓)(北から)

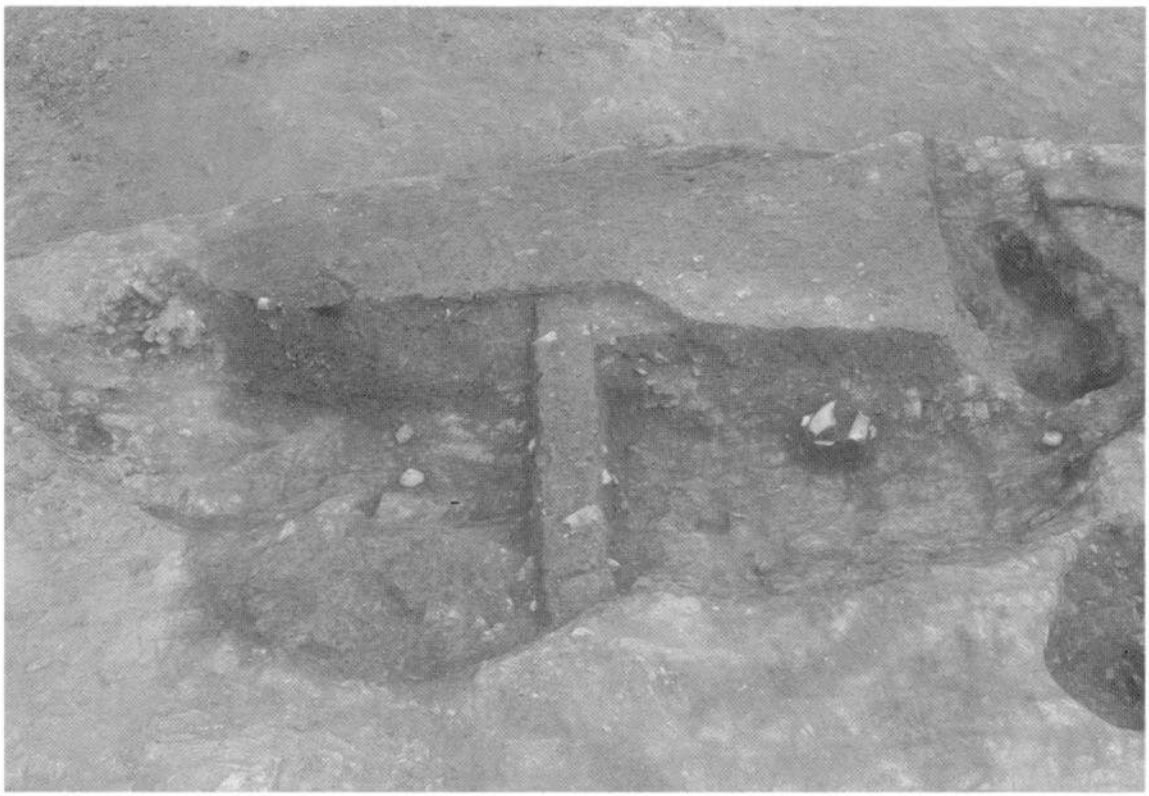
(1)　7 号墓周溝内集石遺構

(2)　7 号墓周溝内土器出土状態

(1)　8号～10号墓(南から)

(2)　8号墓(箱式石棺墓)目張粘土除去後の状態(北から)

(1)　8号墓石蓋除去後の状態(北から)

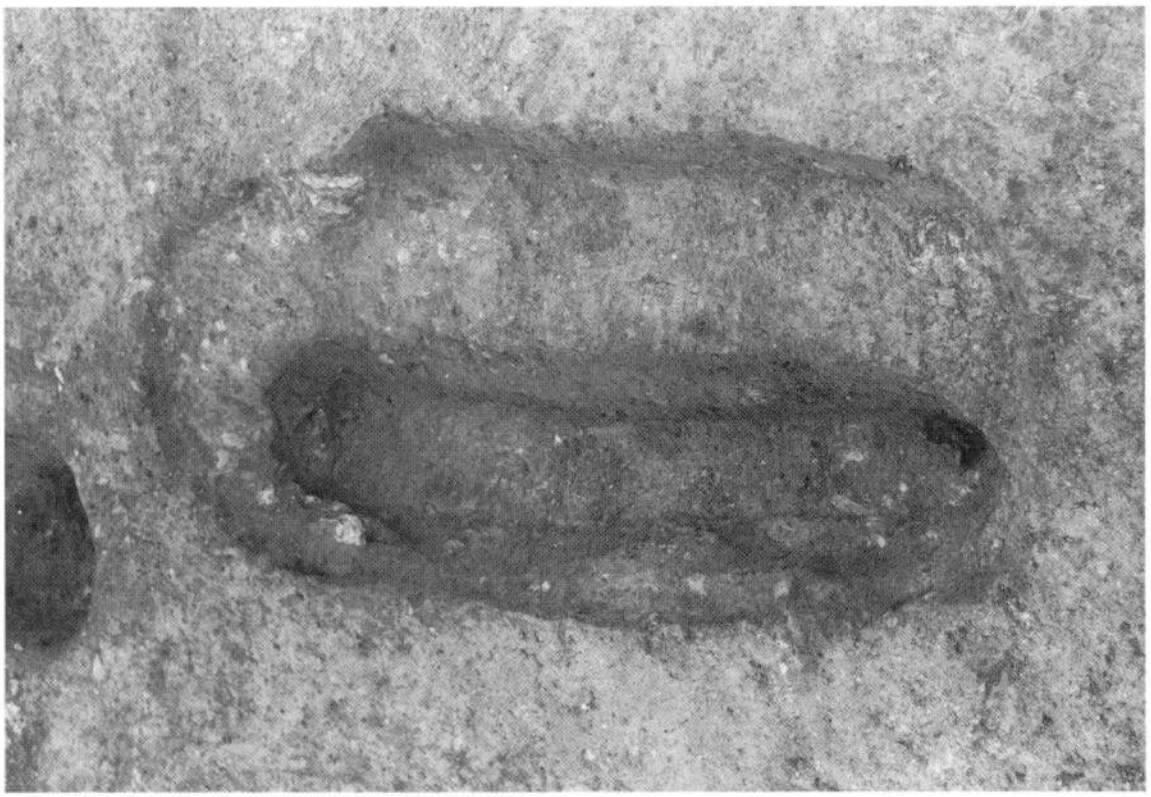


(2)　11号墓全景(主体部は削平)(北から)

(1)　11号墓周溝内土器出土状態

(2)　11号墓周溝内土器出土状態

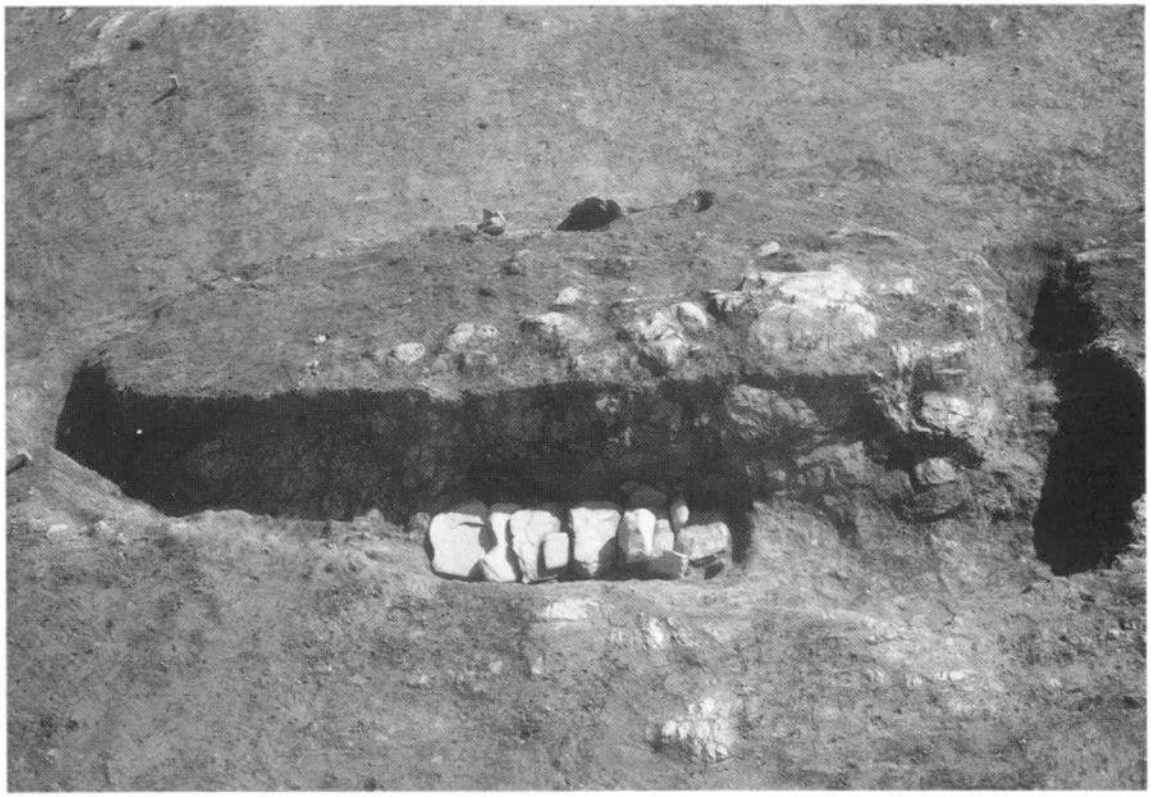
(1)　12号墓全景(南西から)



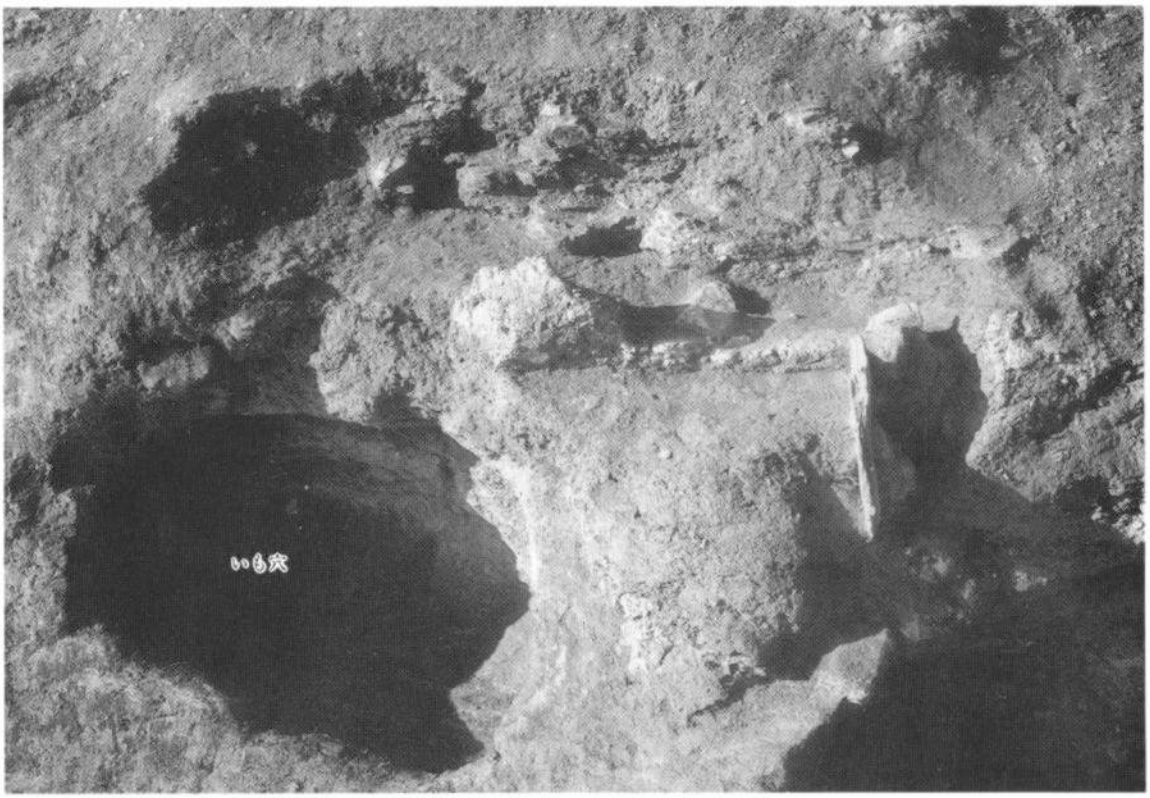
(2)　12号墓(石蓋土壙墓)石蓋除去後の状態(東南から)

(1) 12号墓内鉄器出土状態

(2) 12号墓周溝内土器出土状態



(1)　13号墓全景と周溝内の18号墓(北から)



(2)　13号墓(箱式石棺墓)(大半が破壊)(南から)

(1)　14号・28号墓付近(北から)

(2)　14号墓(石蓋岩盤刳貫墓)(北から)

(1)　14号墓人骨出土状態

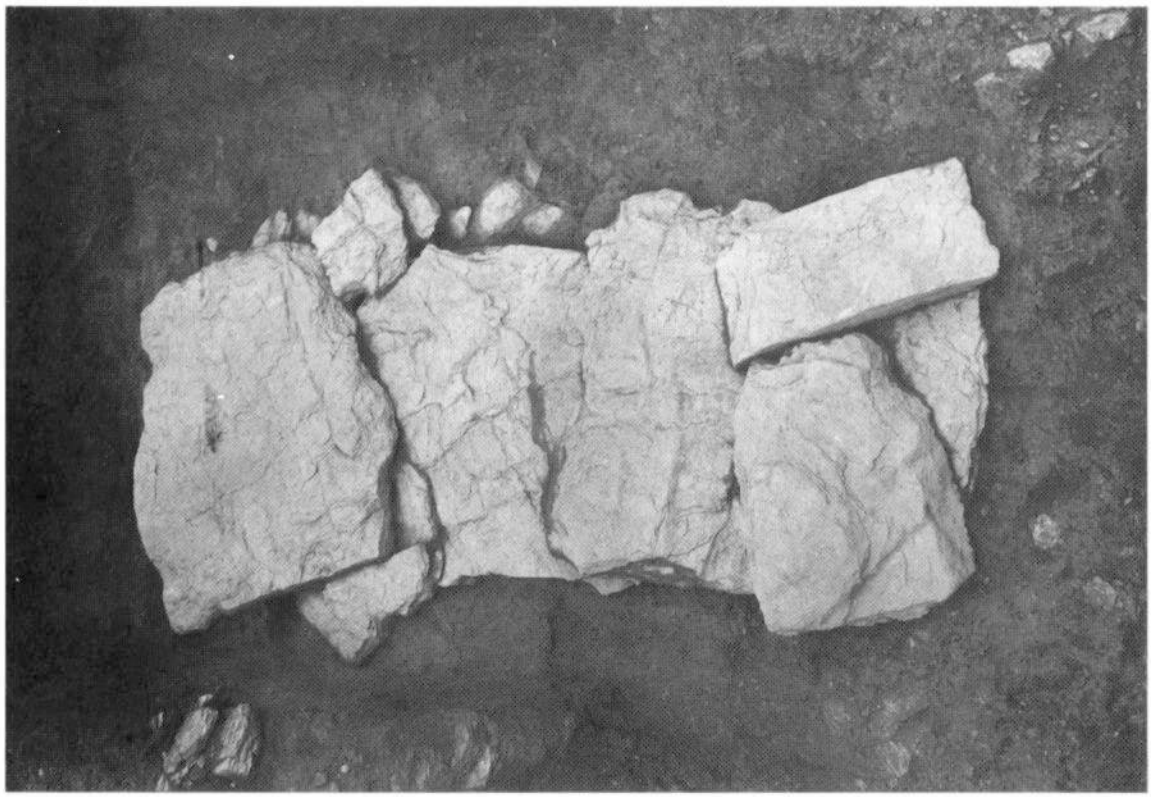
(2)　14号墓人骨の指骨出土状態

(1)　14号墓内鉄器出土状態

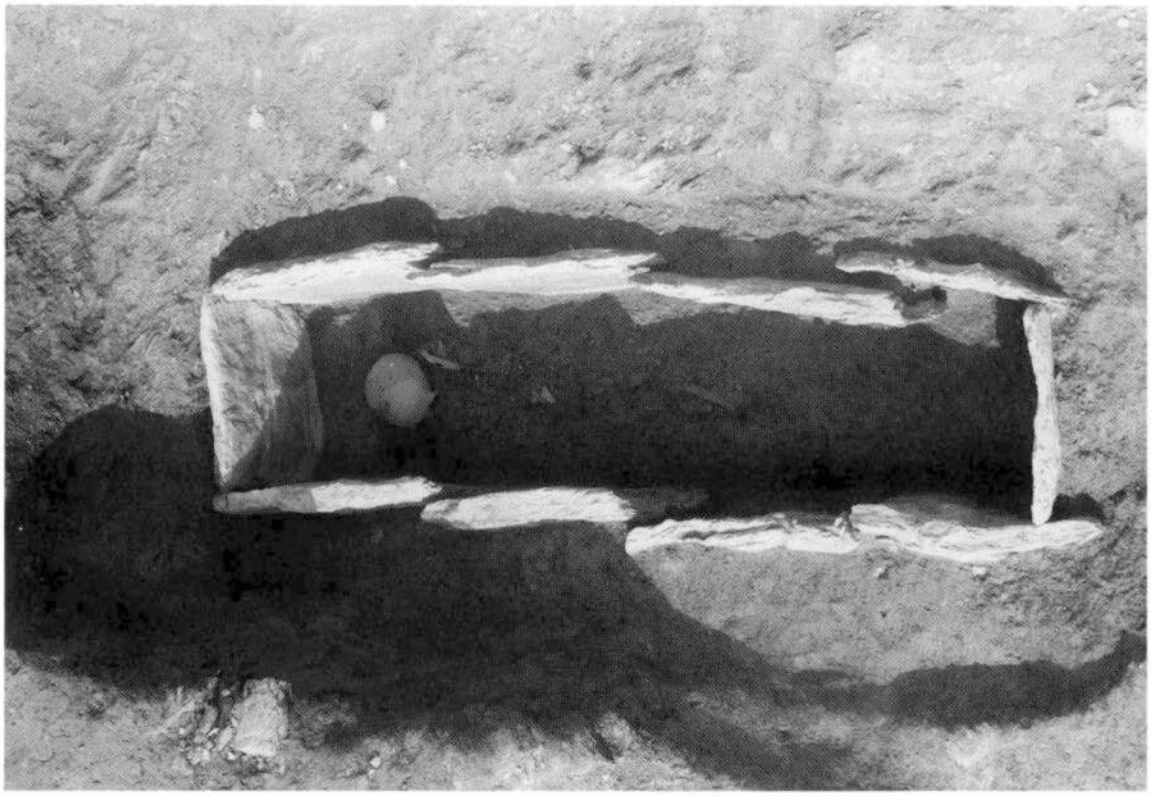
(2)　15号墓全景(南から)

(1)　15号(石蓋土壙墓)石蓋除去後の状態(北東から)

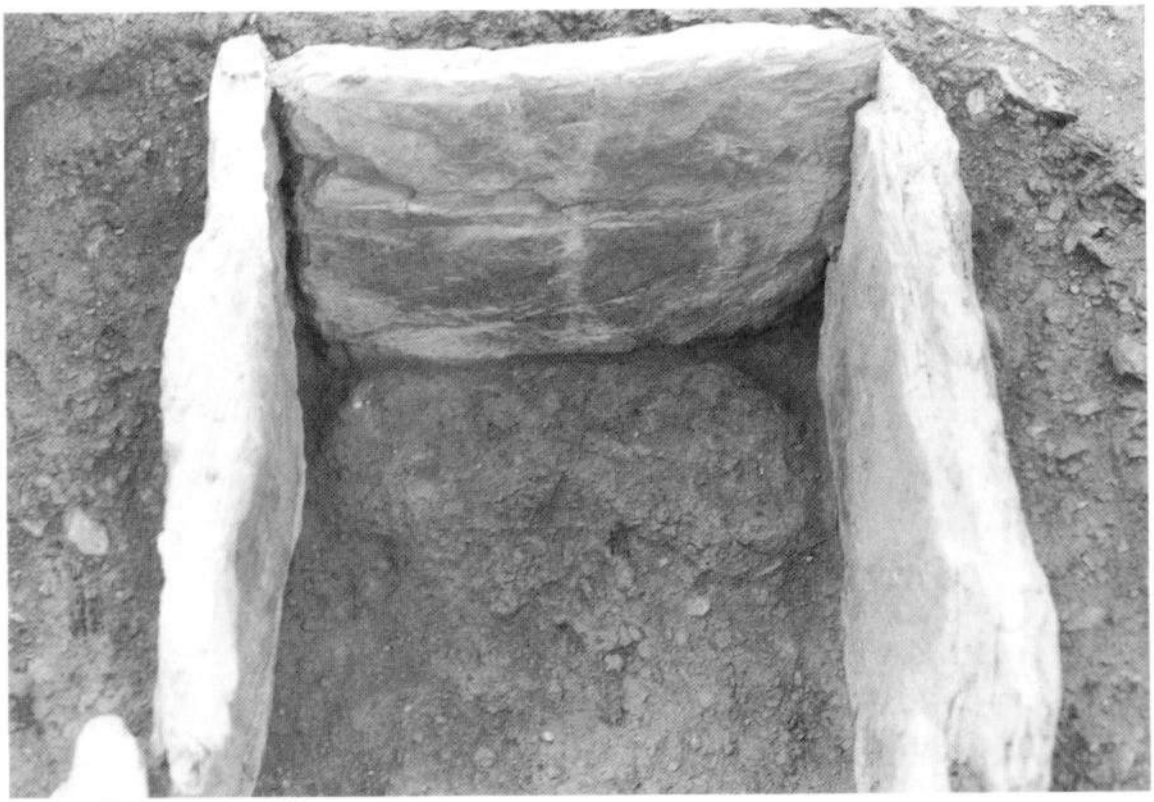
(2)　16号墓(箱式石棺墓)目張粘土の状態(東から)



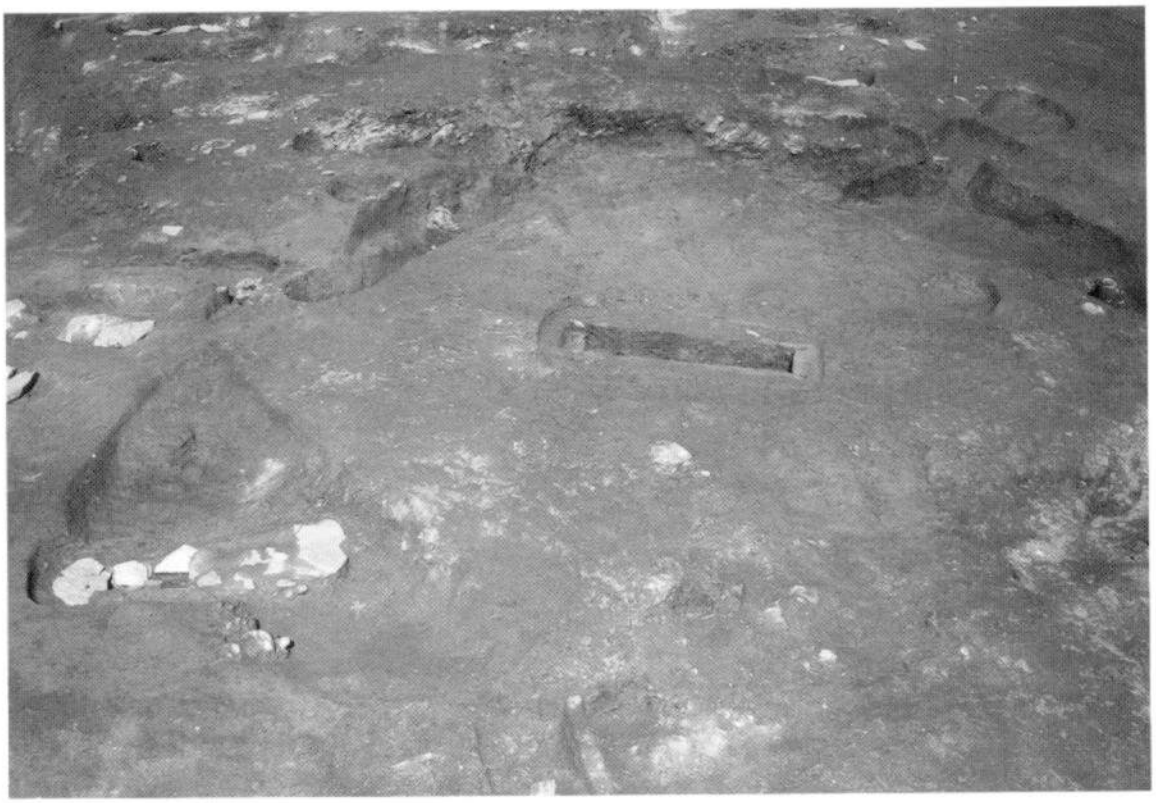
(1)　16号墓(箱式石棺墓)目張粘土除去後の状態(東から)



(2)　16号墓石蓋除去後の状態(東から)

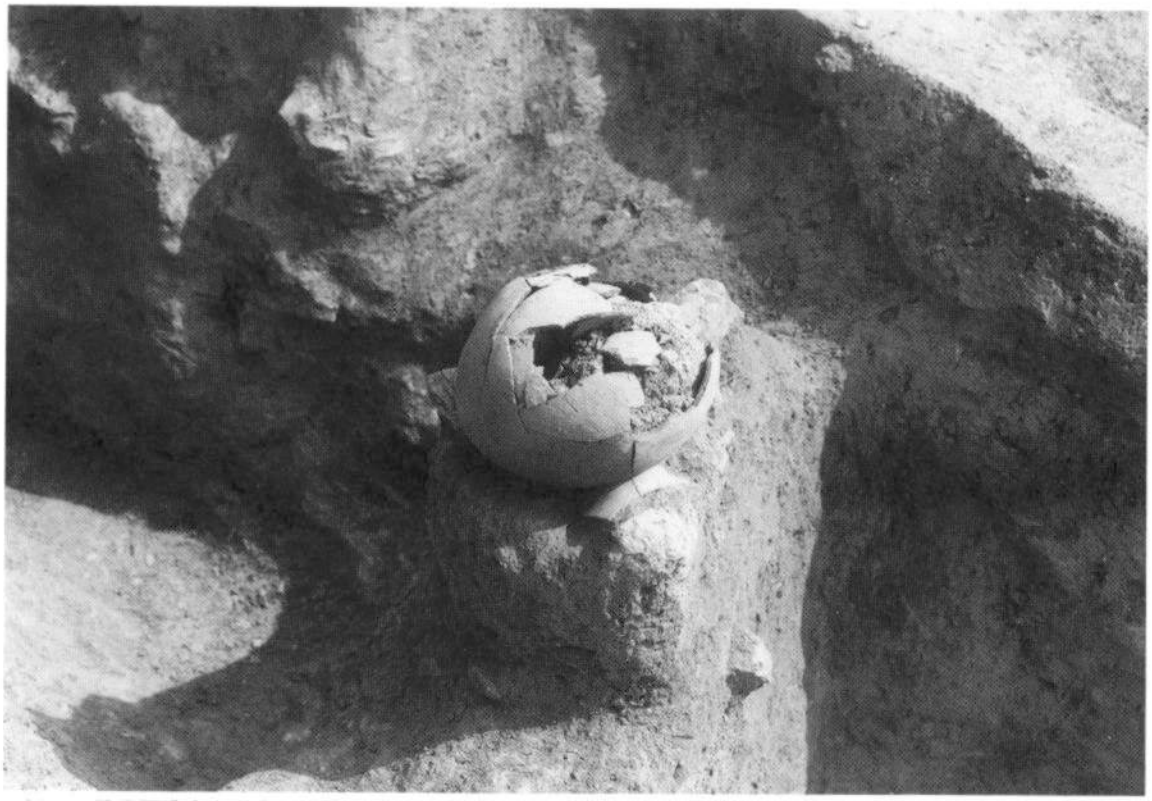


(1) 16号墓粘土枕出土状態



(2) 17号墓全景と35号墓(南から)

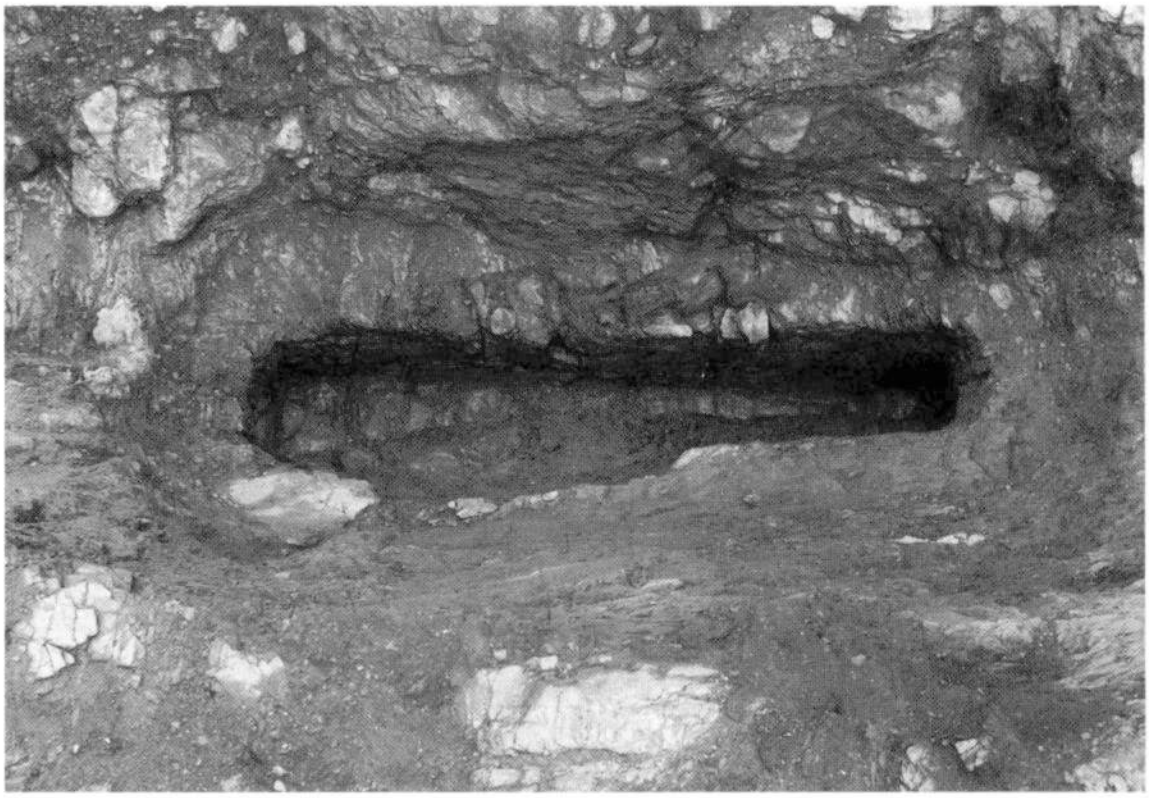
(1)　17号墓(木棺墓)(北から)



(2)　17号墓周溝内土器出土状態

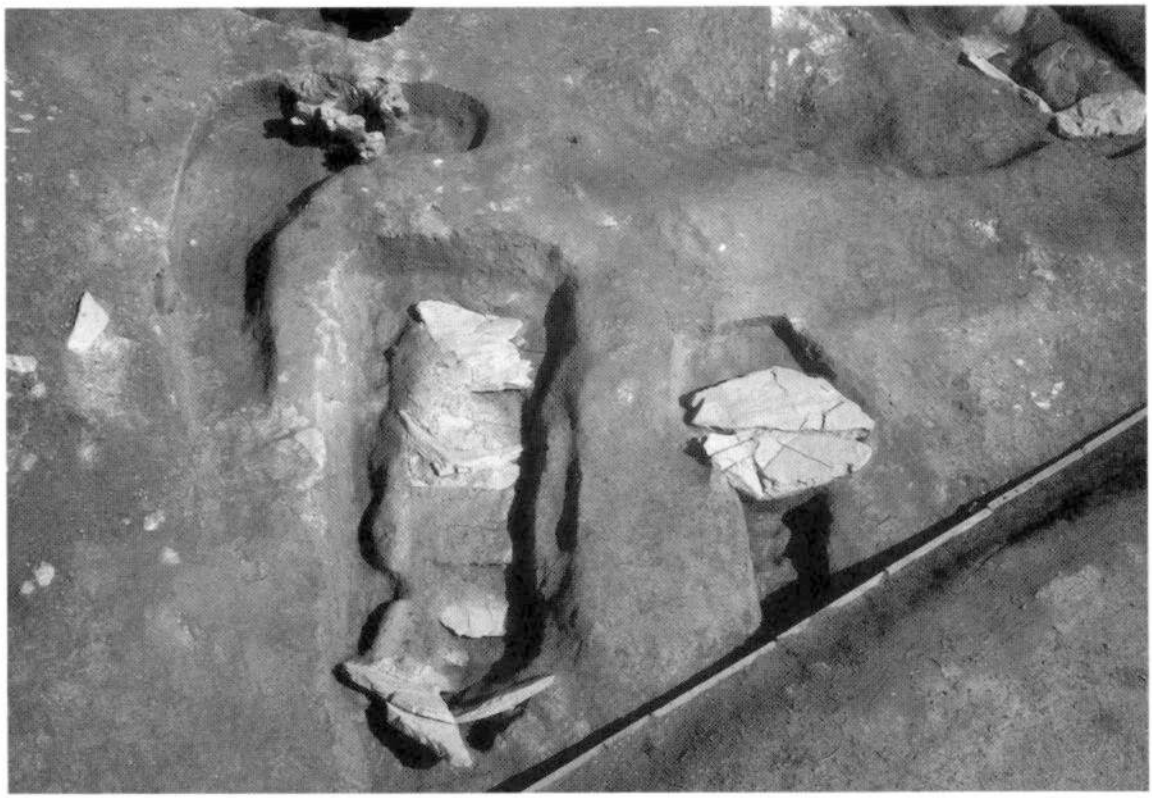
(1)　17号墓周溝内土器出土状態

(2)　18号墓(石蓋岩盤刳貫墓・13号墓周溝内)(南から)

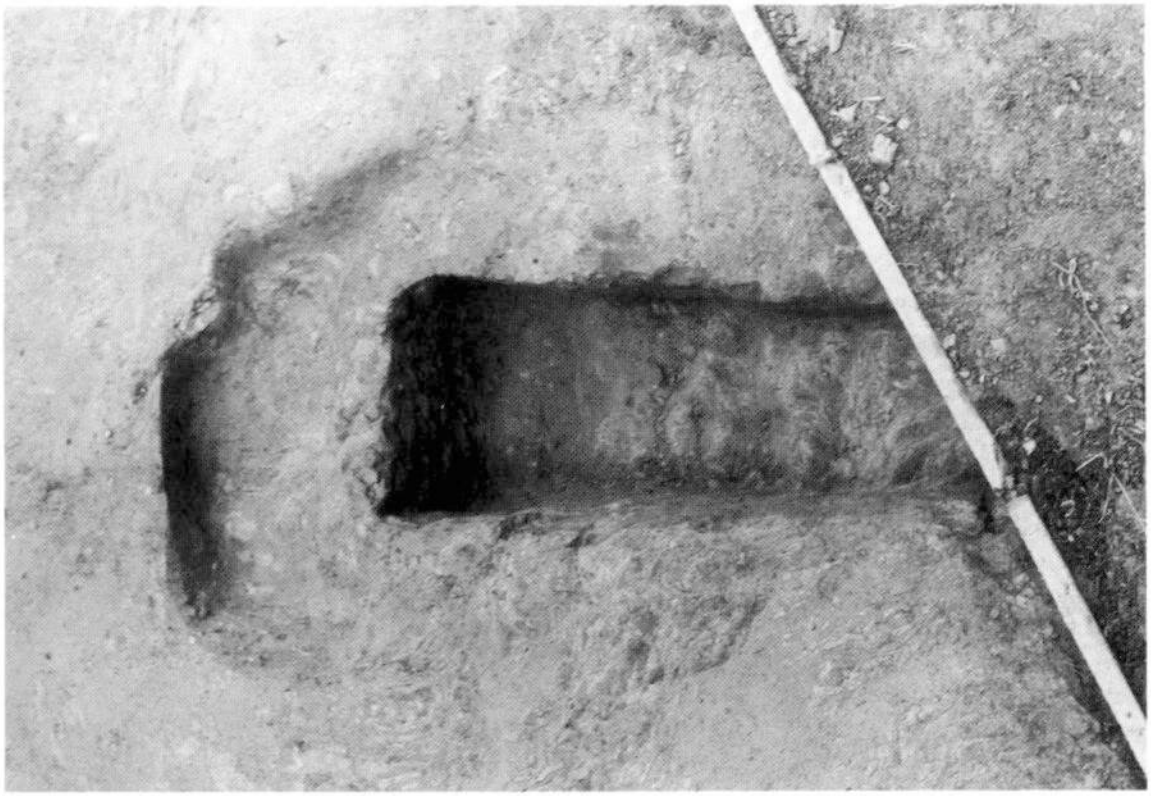


(1) 18号墓石蓋除去後の状態

(2) 18号墓小口掘削痕



(1)　19号・33号墓全景(西から)



(2)　19号墓(石蓋岩盤刳貫墓)石蓋除去後の状態(西から)

(1)　19号・33号墓周溝内土器出土状態

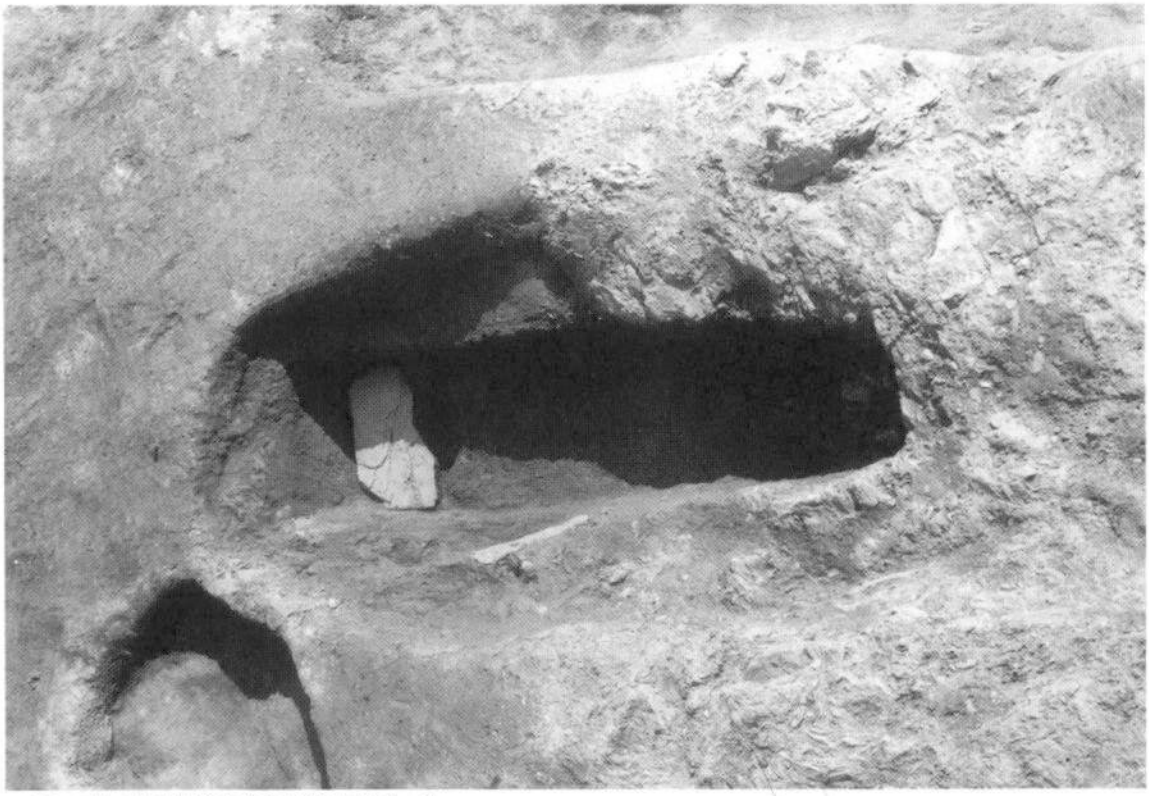
(2)　20号墓(箱式石棺墓)目張粘土状態(北から)

(2)　20号墓石蓋除去後の状態(西から)

(1)　20号墓(箱式石棺墓)目張粘土除去後の状態

(1) 20号墓粘土枕下の鉄器出土状態

(2) 21号墓(石蓋岩盤刳貫墓)(北東から)



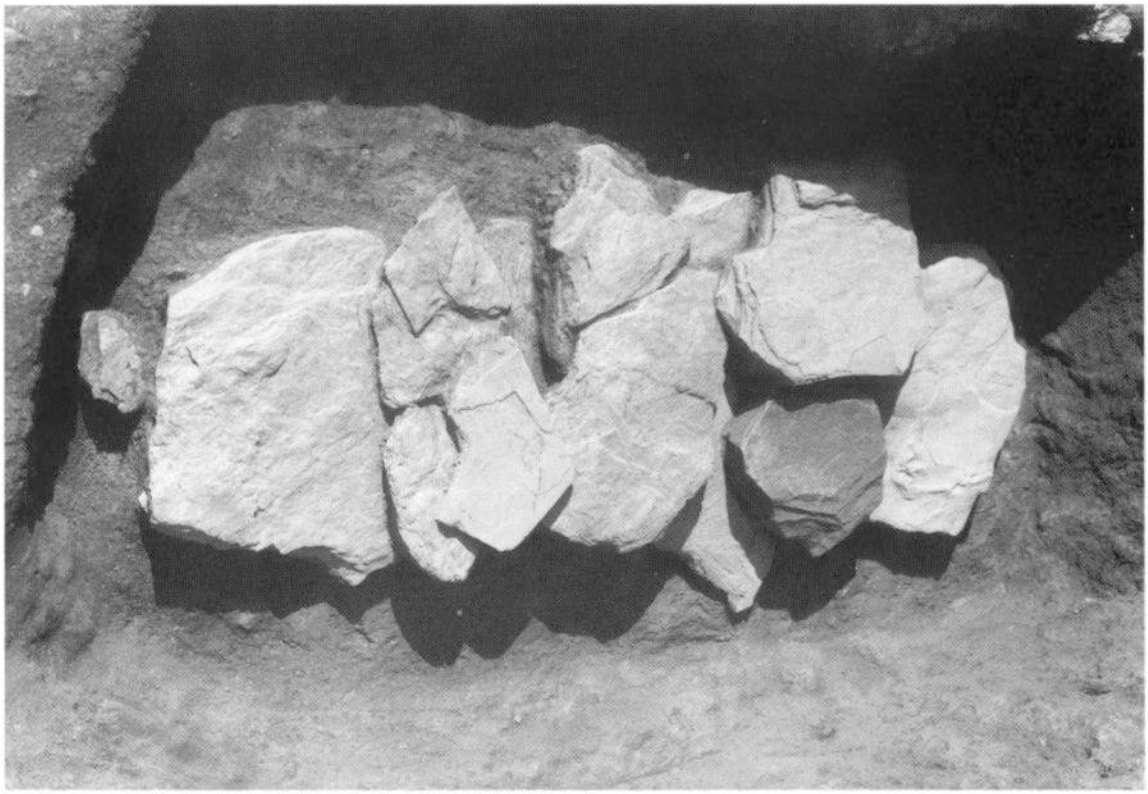
(1)　21号墓石蓋除去後の状態(北西から)

(2)　22号墓(木蓋土壙墓)(北から)

(1)　23号墓(箱式石棺墓)(北から)

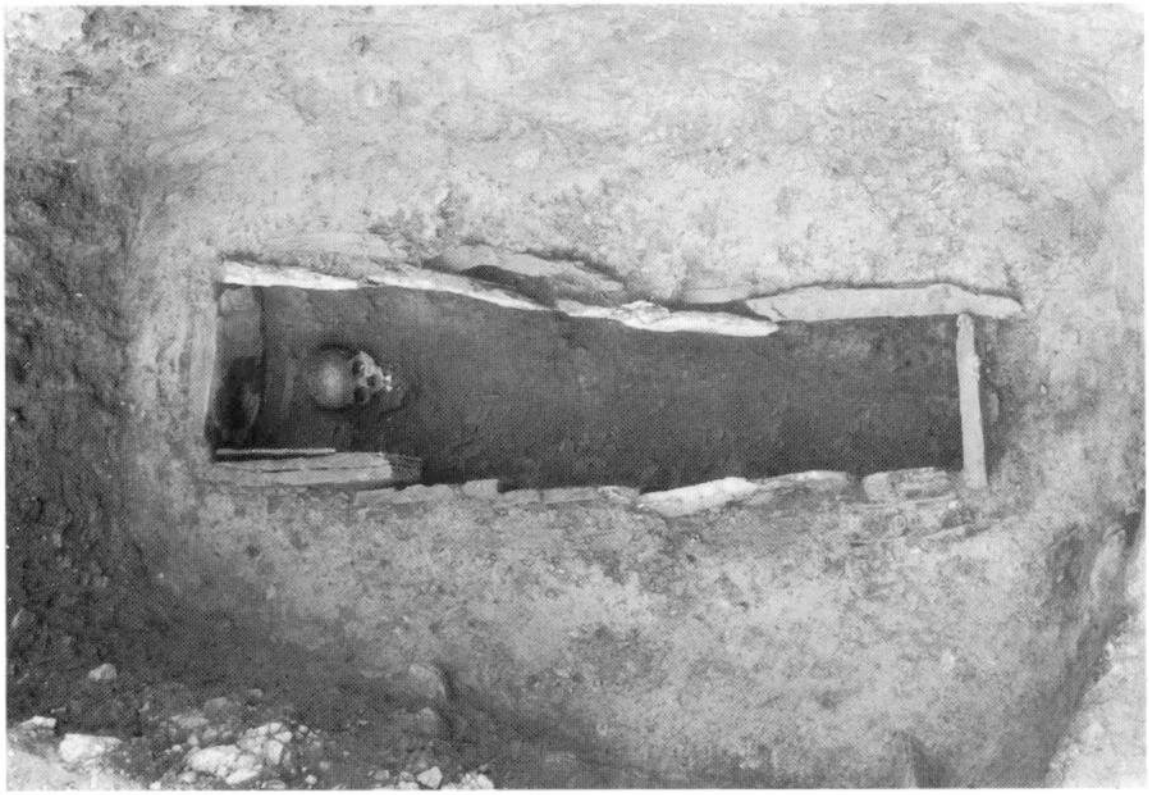
(2)　23号墓石蓋除去後の状態(東から)

(1)　24号墓(箱式石棺墓)目張粘土の状態(東から)

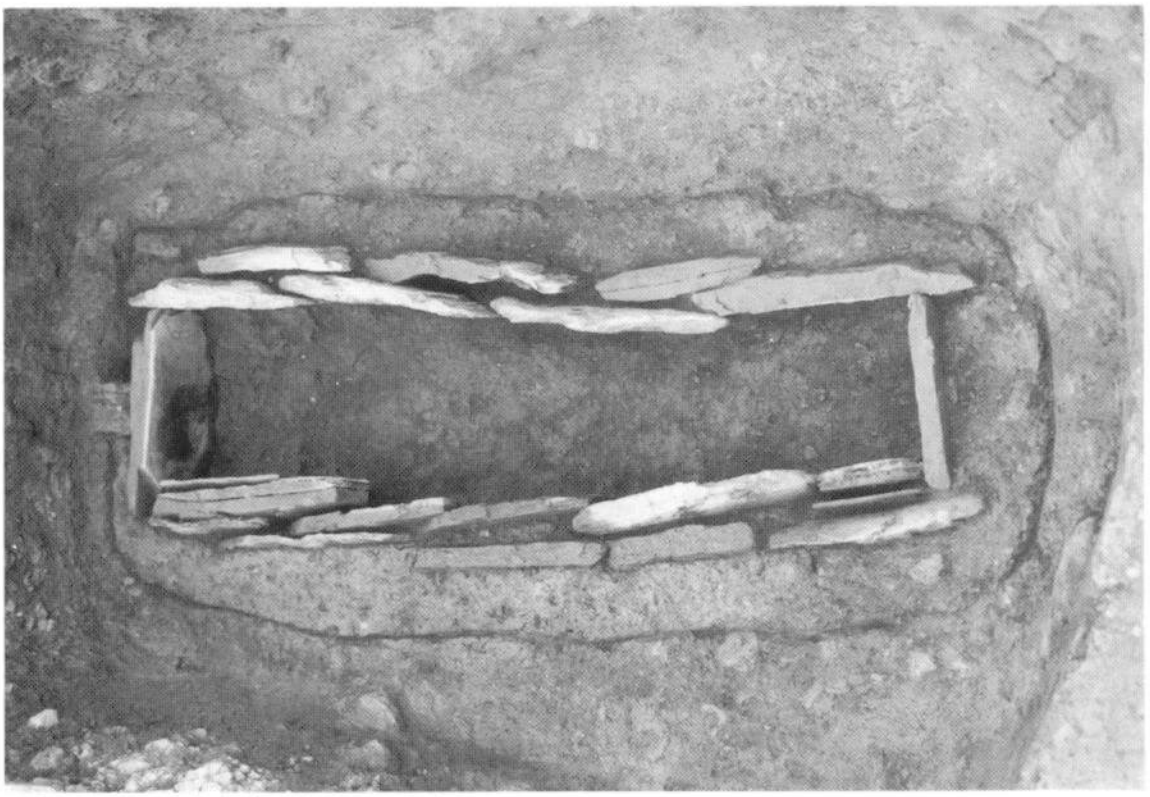


(2)　24号墓(箱式石棺墓)目張粘土除去後の状態(東から)

図版32



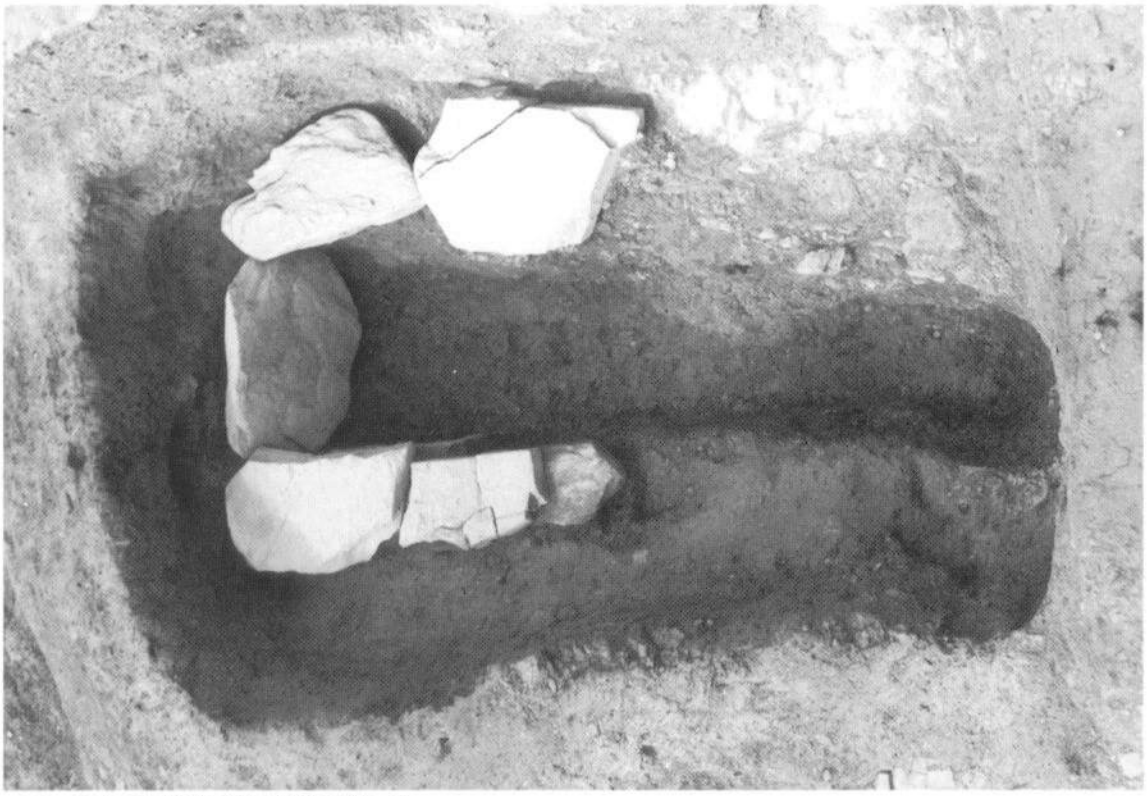
(1)　24号墓石蓋除去後と人骨出土状態(東から)



(2)　24号墓人骨除去後と石棺掘方の状態

(1)　24号墓粘土枕出土状態

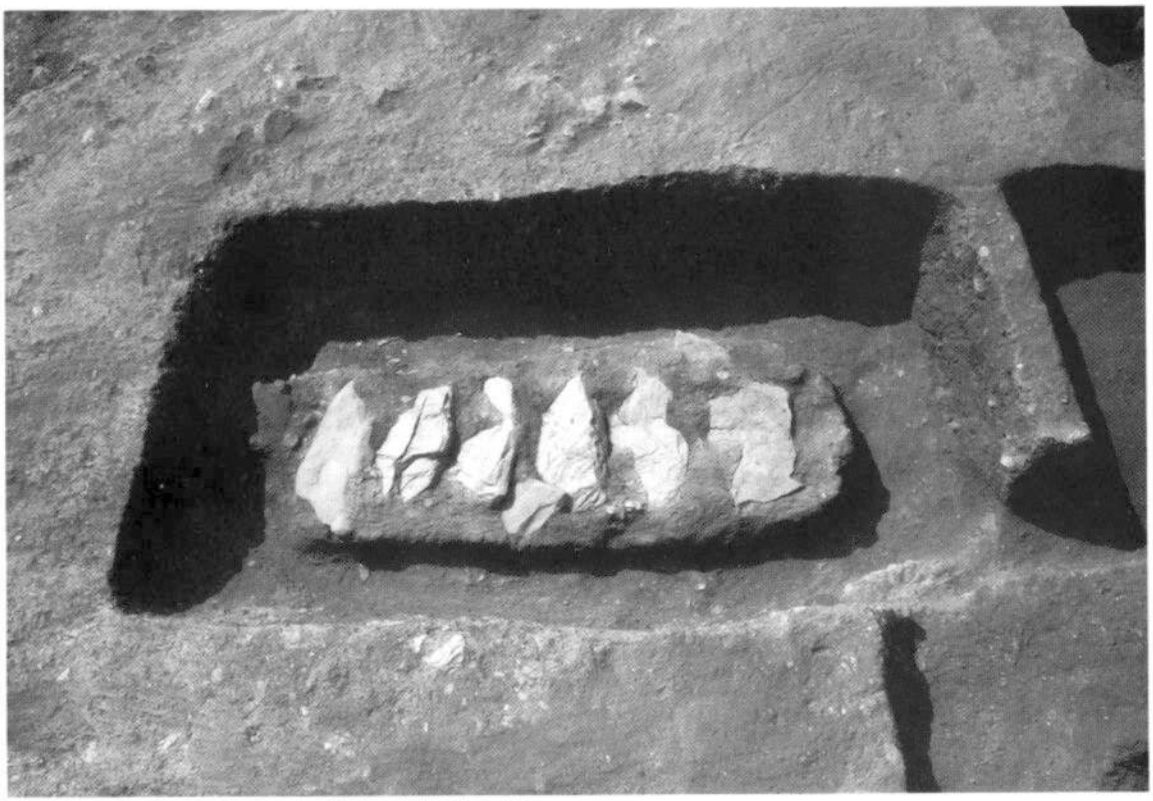
(2)　25号墓(石蓋土壙墓)(北から)



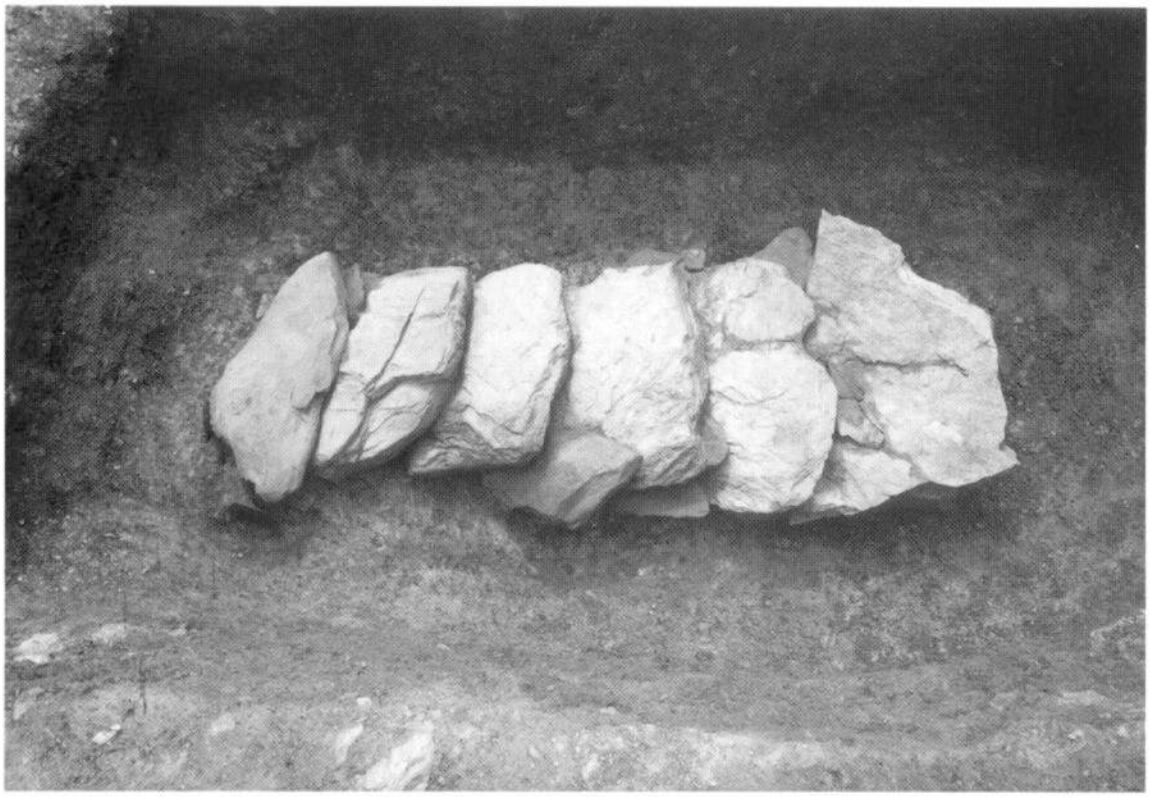
(1)　25号墓石蓋除去後の状態(東から)

(2)　26号墓(木蓋土壙墓)(北から)

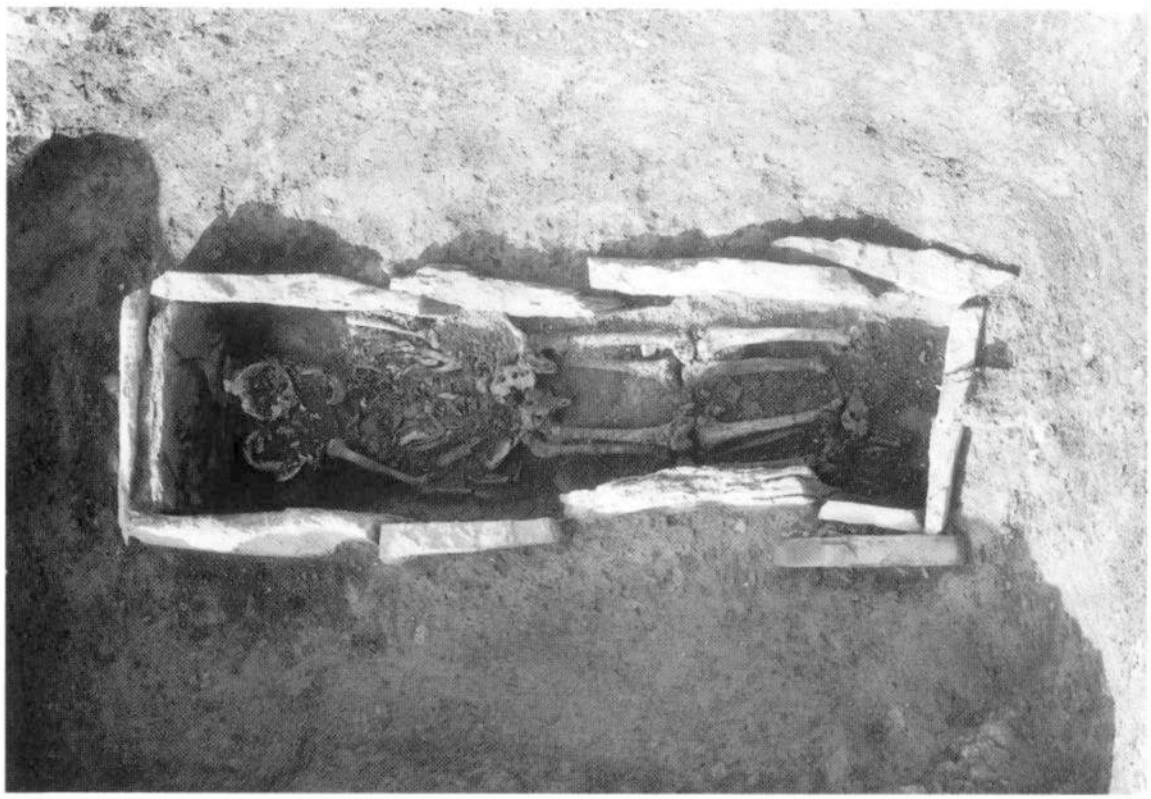
(1)　27号墓(木蓋土壙墓)(南から)



(2)　28号墓(箱式石棺墓)目張粘土の状態(北から)

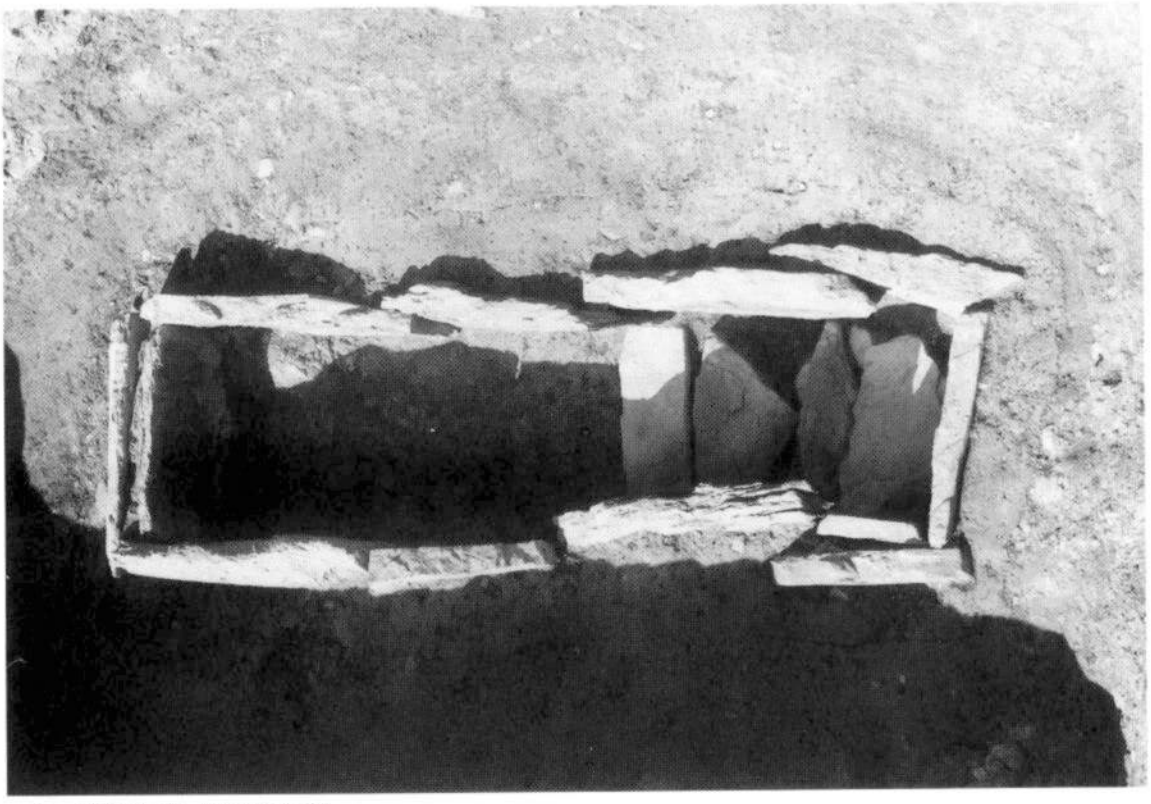


(1)　28号墓(箱式石棺墓)目張粘土除去後の状態(北から)



(2)　28号墓石蓋除去後と人骨出土状態(東から)

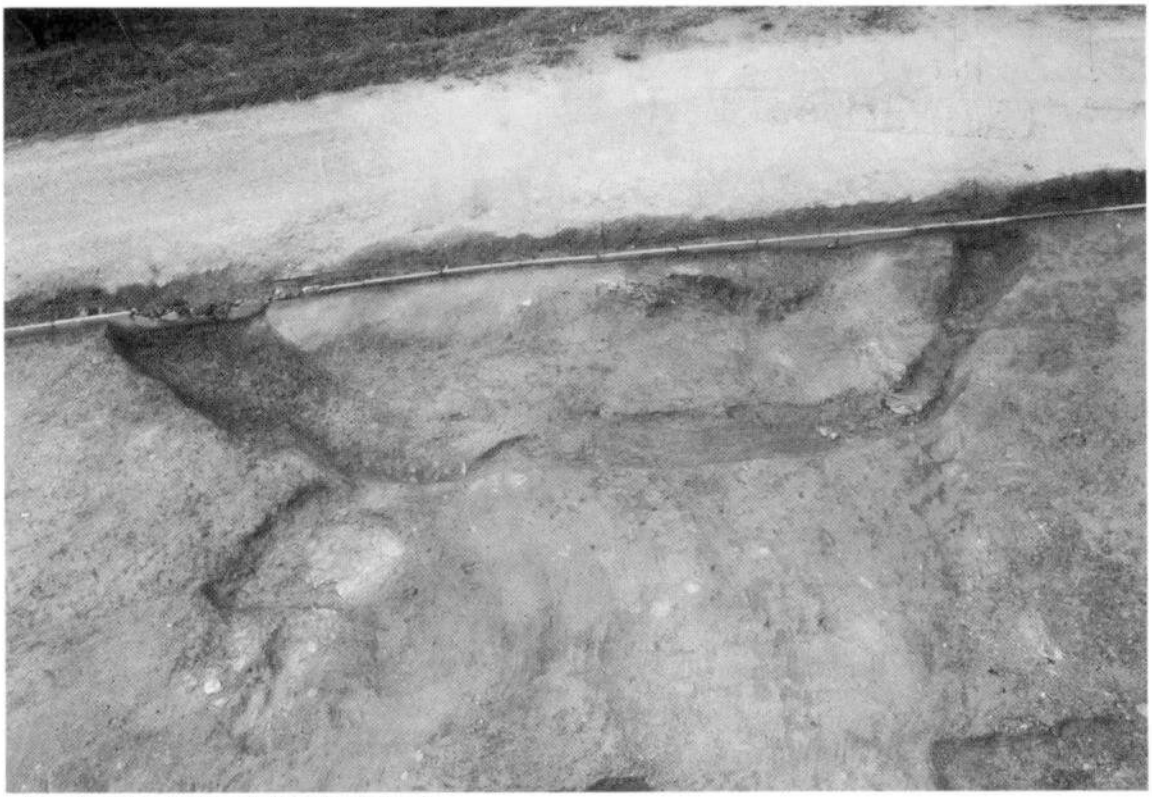
(1)　28号墓内鉄器出土状態



(2)　28号墓人骨除去後の石棺

(1)　29号墓(木蓋土壙墓)(北から)

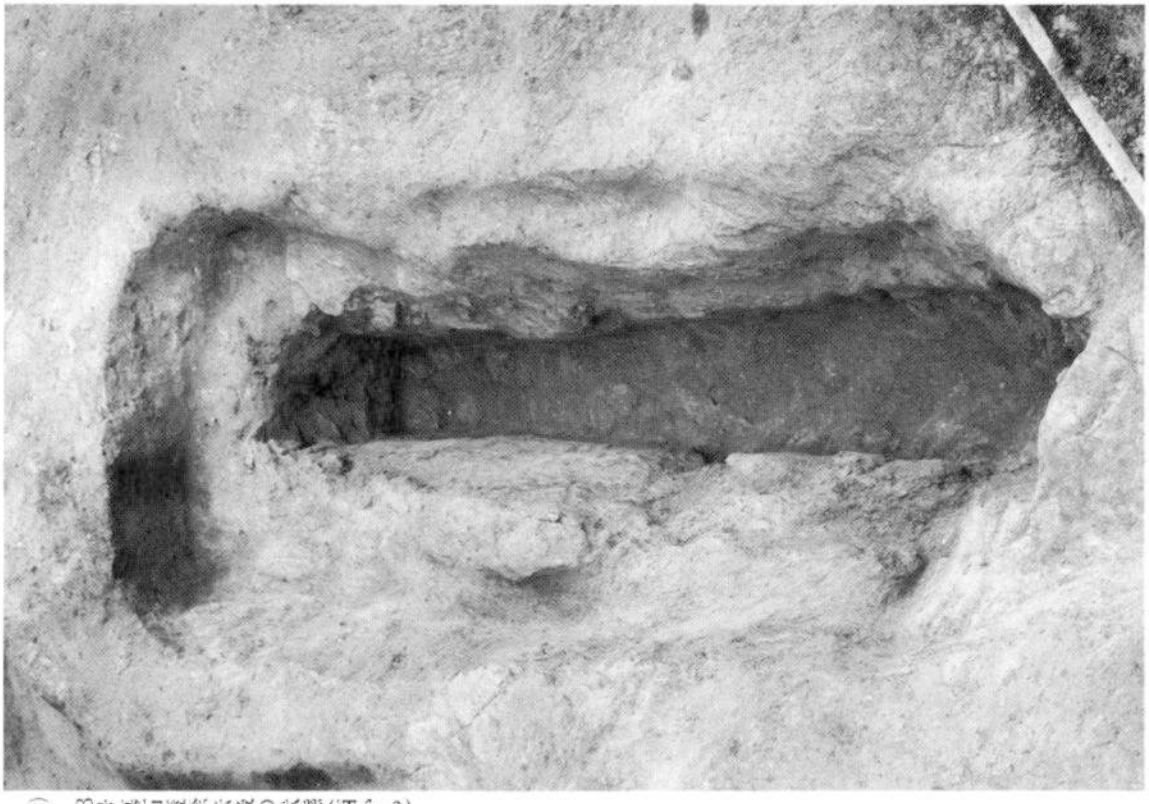
(2)　30号墓(木蓋土壙墓)(東から)



(1)　31号墓の周溝(主体部消滅)(東から)

(2)　32号墓(箱式石棺墓)(北から)

(1)　33号墓(石蓋岩盤刳貫墓)(西から)

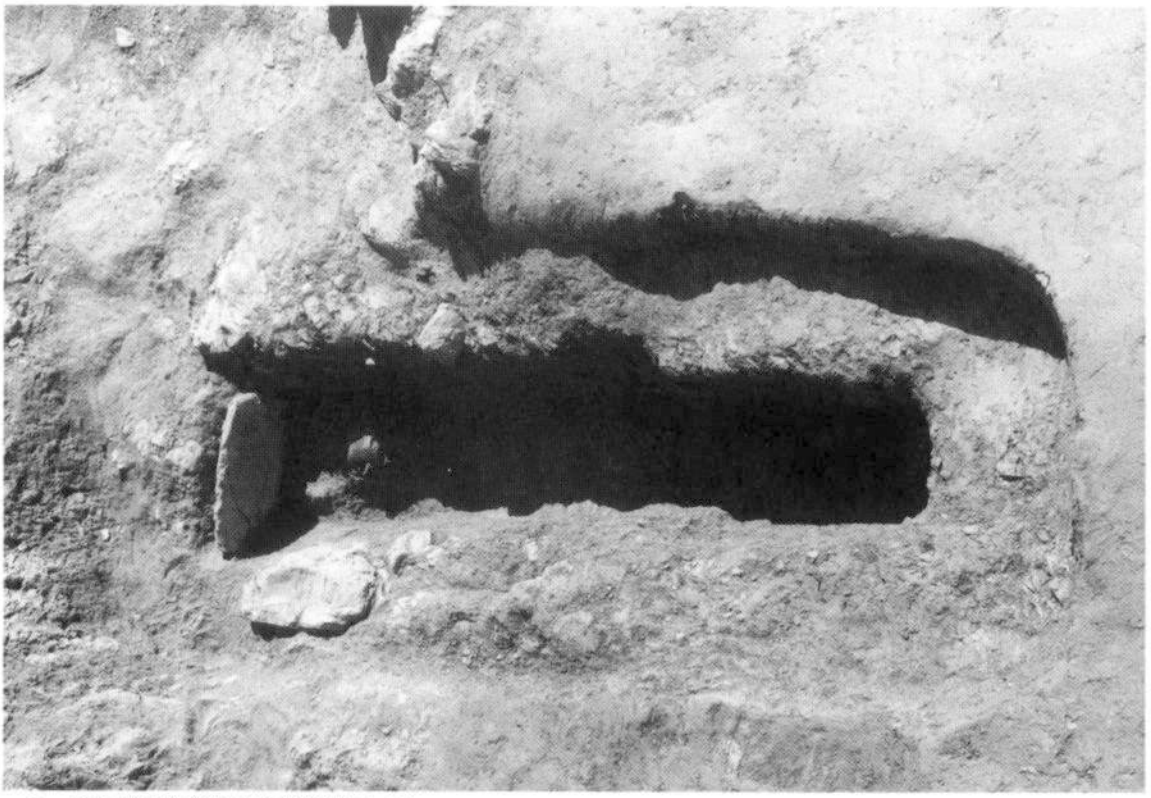


(2)　33号墓石蓋除去後の状態(西から)

(1)　35号墓(石蓋土壙墓)目張粘土の状態(西から)

(2)　35号墓(石蓋土壙墓)目張粘土除去後の状態(西から)

図版42



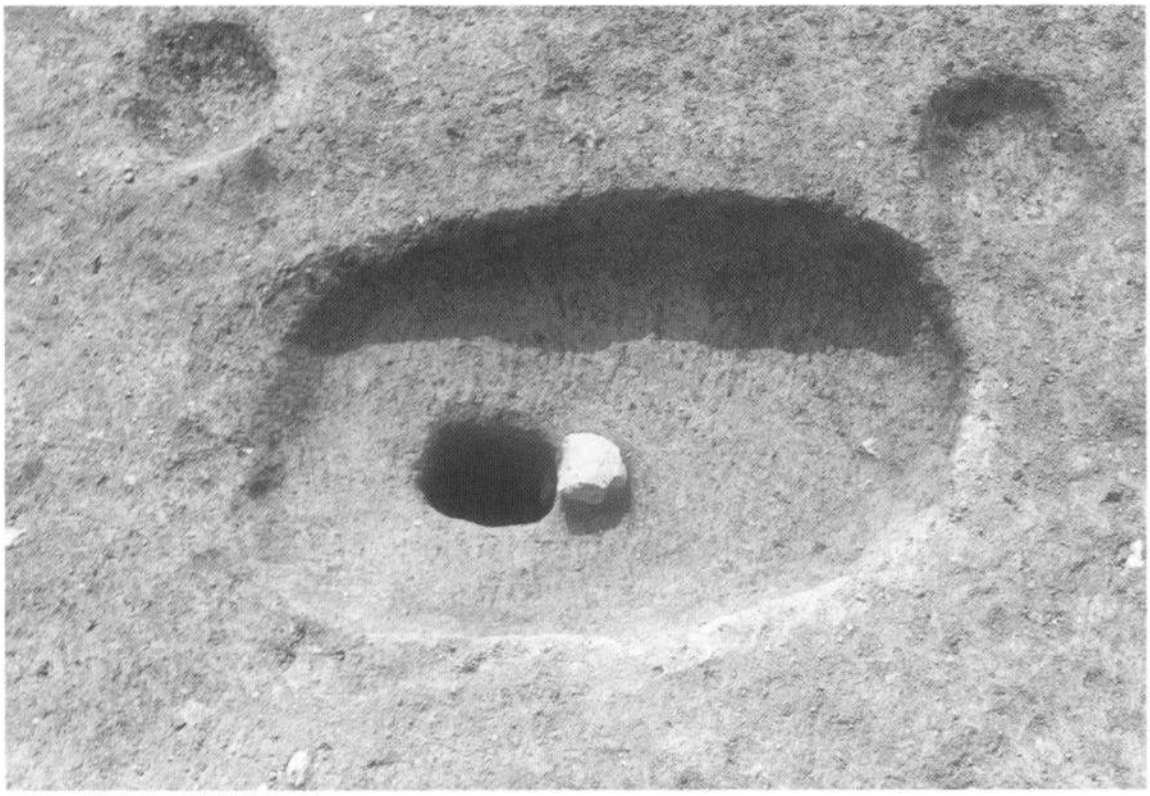
(1)　35号墓石蓋除去後の状態(西から)

(2)　35号墓粘土枕の状態

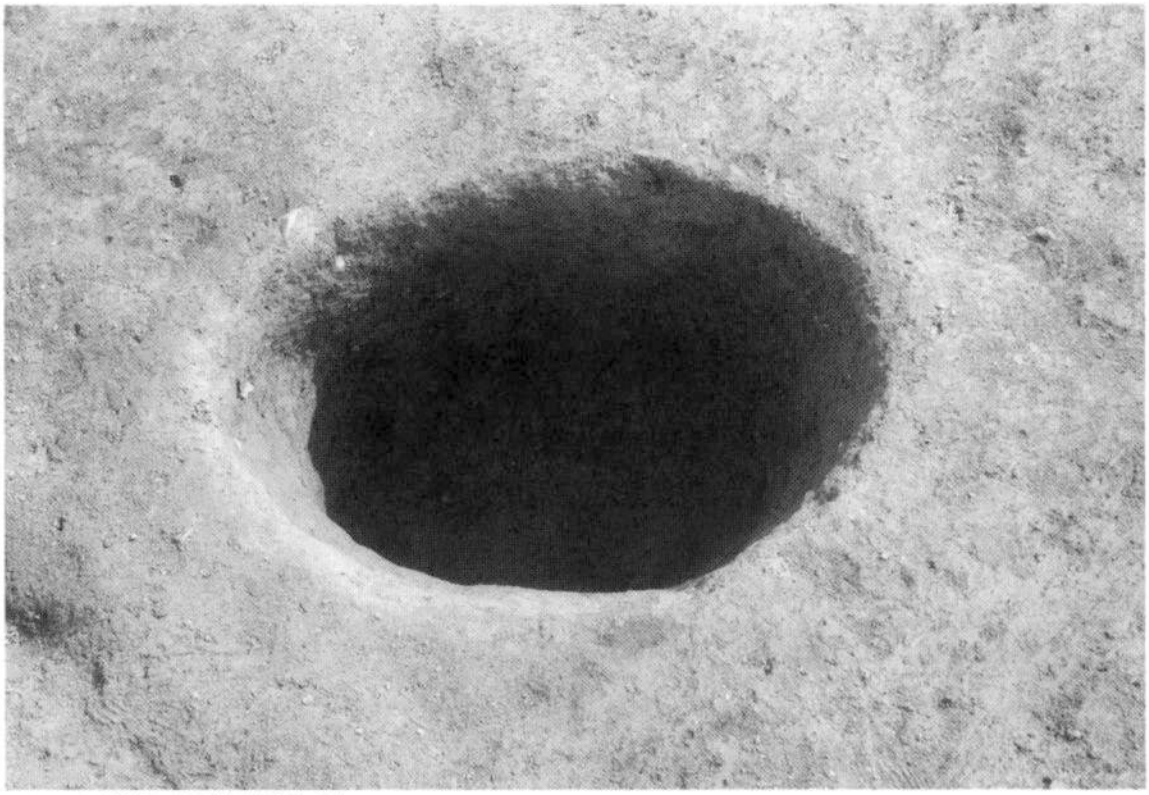
(1) 36号墓(木蓋土壙墓)(西から)

(2) 37号墓(箱式石棺墓)(北から)

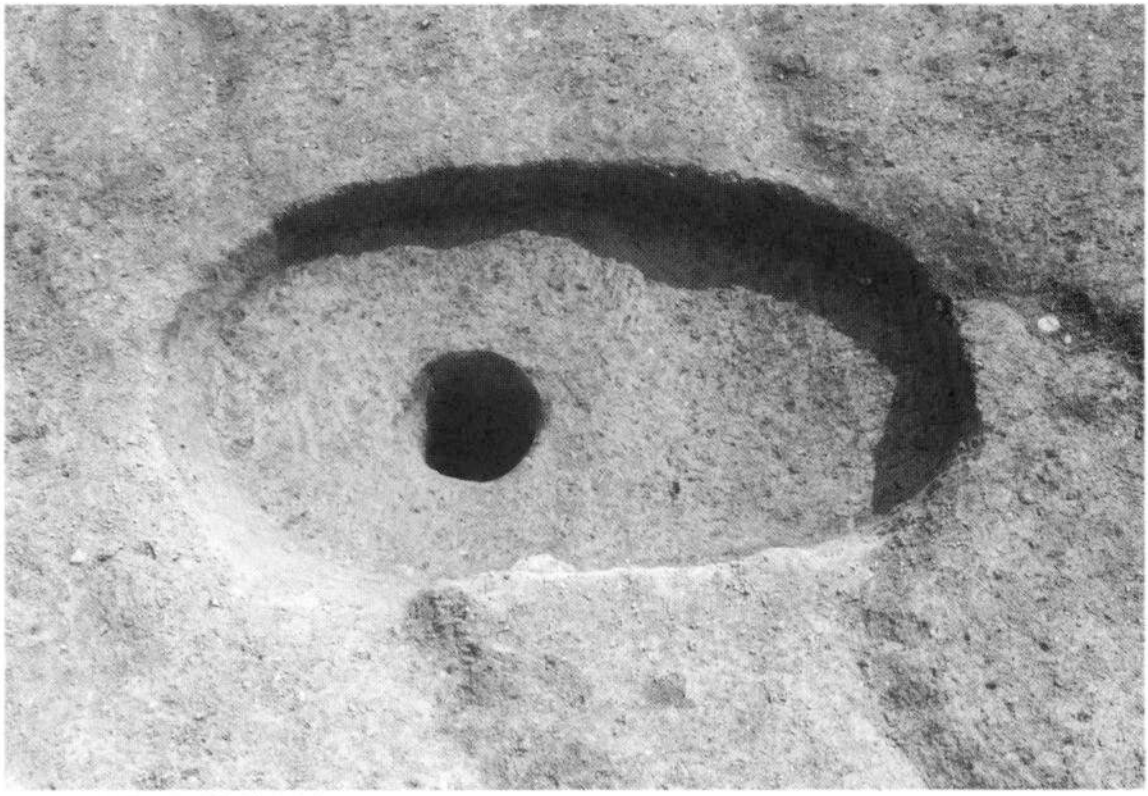
(1)　14号・28号墓西側溝内集石遺構(？)(南から)



(2)　1号落し穴遺構(北から)



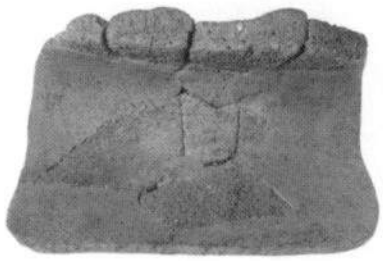
(1)　2号落し穴遺構(北西から)



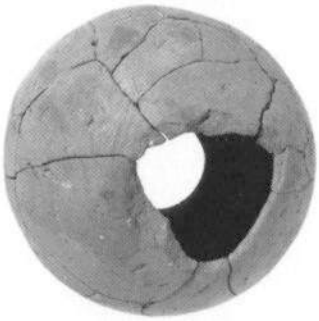
(2)　3号落し穴遺構(北から)

(1) 貯蔵穴と土器出土状態(北から)

(2) 発掘調査風景



4墓

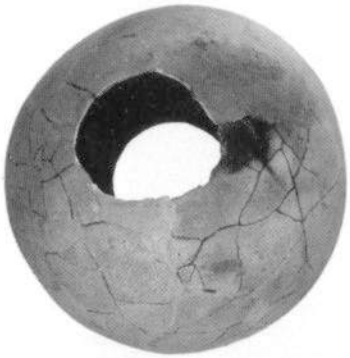


6墓

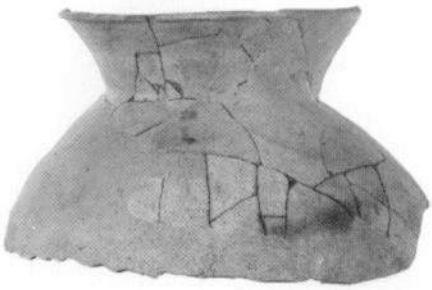
6墓－1

6墓

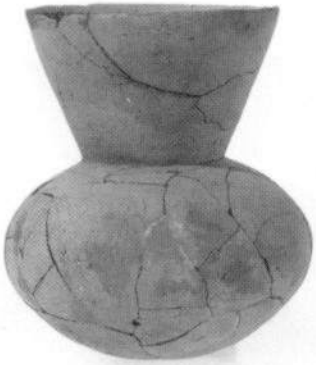
7墓



6墓



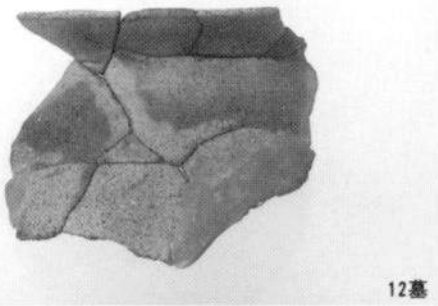
11墓

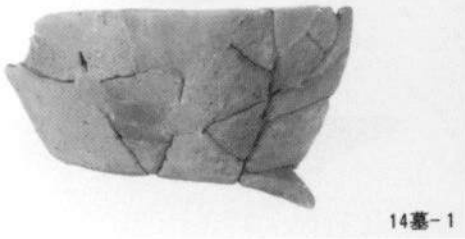


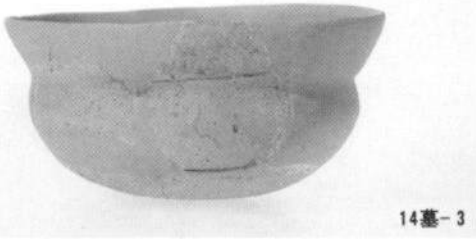
6墓

11墓

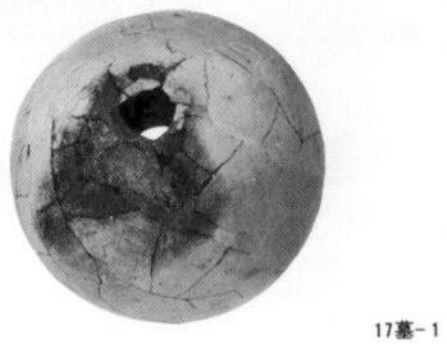
4号・6号・7号・11号墓出土土器


12墓

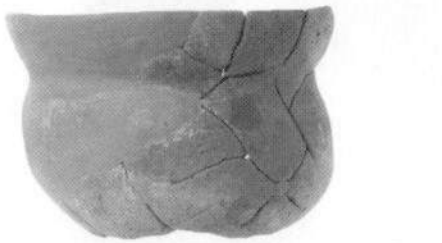

14墓－1

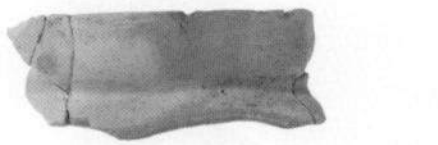

14墓－3

17墓－1

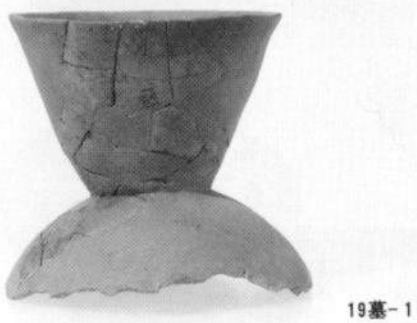

17墓－1

17墓－2

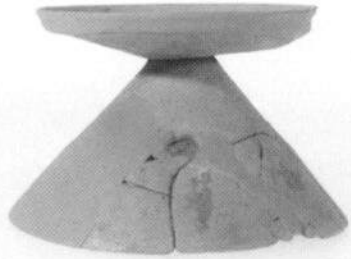

17墓－3


17墓－4

17墓＋19墓


19墓－1

12号・14号・17号(27号)・19号墓出土土器


19墓

20墓

20墓

21墓　24墓

4墓

12墓

17墓

4墓

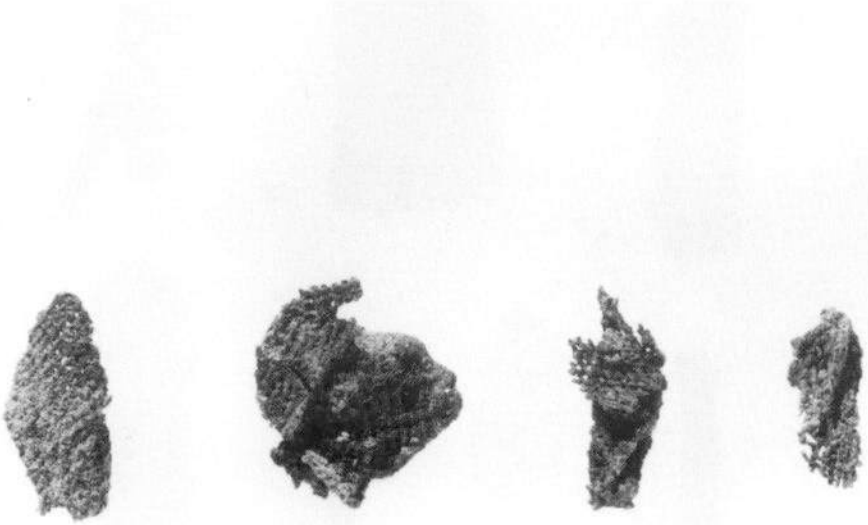
14墓

20墓

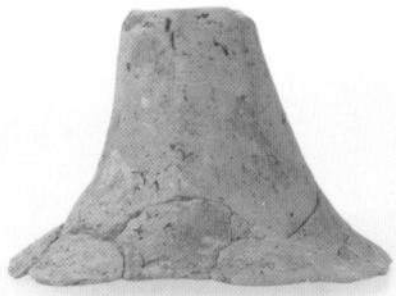
28墓

19号・20号墓出土土器，21号・24号墓装身具，4号・12号・14号・17号・20号・28号墓出土鉄器

(1)　28号墓出土鉄器付着の布(約2倍)

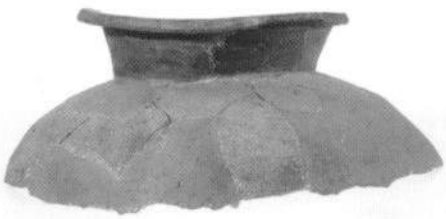


(2)　28号墓出土鉄器付着の布(約2倍)



南斜

西斜



西斜

西斜

南斜

貯

表採

表採

表採

表採

妙見６号・７号墳(？)，貯蔵穴出土土器と表採遺物

妙見墳墓群出土の人骨について

土 肥 直 美
琉球大学医学部解剖学第一講座

はじめに

弥生時代に福岡平野を中心に分布していた面長・平坦・高身長という渡来系の形質的特徴は、古墳時代になると人の移動や混血によってさらに周辺部へと広がっていく（Doi & Tanaka, 1987)。妙見墳墓群は福岡県の南部に位置しており、渡来系の形質がこの地域においてどのような広がりを見せるかは興味深いところである。人骨の保存状態があまり良くないために十分な分析は出来なかったが、以下にこれらの人骨の所見を報告する。

人骨所見

妙見遺跡から出土した人骨は12体で、その内訳は表１に示すとおりである。

表１　妙見墳墓群出土人骨一覧

	男性	女性	不明	計
１号墓		1		1
８号墓	1			1
14号墓	1			1
16号墓	1			1
20号墓		1		1
23号墓	1			1
24号墓			1	1
28号墓	2		1	3
35号墓			1	1

１）１号墓人骨

a．保存部位

後頭部、左側頭部を欠く頭蓋冠と下顎骨片、少量の椎骨片および上・下肢骨片が検出された。また、歯牙は左右の上顎犬歯と右の上顎第一小臼歯が残存している。

b．性別・年齢の推定

保存状態が悪く、性別・年齢の推定は困難であるが、骨質が華奢であることから、性別については女性の可能性が高いように思われる。年齢については、残存する歯の咬耗度がBrocaの１～２度であることから成年と推定した。

c．その他

形質的特徴やその他の所見については不明である。

２）８号墓人骨

a．保存部位

頭頂骨片が少量と、歯牙が遊離した状態で検出された。歯式を以下に示す。この他に下顎歯の破片が残存しているが、同定は困難である。

$\dot{M}^2$	$\dot{M}^1$	$\dot{P}^2$	$\dot{P}^1$	$\dot{C}$	$\dot{I}^2$	$\dot{I}^1$	$\dot{I}^1$	$\dot{I}^2$	$\dot{C}$	$\dot{P}^1$	$\dot{P}^2$	$\dot{M}^1$	$\dot{M}^2$
		$\dot{P}_2$		$\dot{C}$						$\dot{P}_1$			

・ 遊離歯

b．性別・年齢の推定

頭頂骨片が頑丈である点や、表6に示すように歯牙のサイズが大きいところなどは男性の可能性を示しているが、情報量が少ないので確実とは言えない。年齢は歯牙の咬耗度がBrocaの0～1度であることから、若年の可能性が強い。

c．その他

形質的な特徴などは不明である。

3）14号墓人骨

a．保存部位

頭蓋骨、左右鎖骨、胸骨片、上腕骨片、前腕骨片、大腿骨片、寛骨片が残存している。

頭蓋骨は後頭部から頭蓋底部、右側頭部を欠いている。歯牙の咬合形式は鉗子咬合、咬耗度はBrocaの1～2度、歯式は以下の通りである。上顎左小臼歯および大臼歯に齲蝕が認められた。また、全体に歯石の付着が顕著である。

$\dot{M}^3$	M^2	M^1	×	P^1	C	I^2	I^1	I^1	I^2	C	△ P^1	△ P^2	M^1	M^2	／
$\dot{M}_3$	×	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	×	M_3

× 歯槽閉鎖　△ 歯根のみ　・ 遊離歯　／ 破損

b．性別・年齢の推定

頭蓋骨の形状から性別は男性、歯牙の咬耗度がBrocaの1～2度であることから年齢は成年と推定した。

c．形質

表2に示すように、頭型示数（M8／1＝79.0）は短頭に近い中頭型である。顔面部は平坦で上顔高は70㎜、眼窩は中型である。

体部骨の保存状態は非常に悪く、身長その他の所見は不明である。

4）16号墓人骨

a．保存部位

頭蓋冠と四肢骨片が少量残存している。

b．性別・年齢の推定

骨片が頑丈である点や前頭骨の形状から性別は男性、頭蓋骨の縫合の状態から年齢は成年

と推定される。

c．形質

頭型（M8／1＝84.0）は短頭型である。

5）20号墓人骨

a．保存部位

前頭骨片と少量の歯牙が遊離した状態で検出された。歯式を以下に示す。この他に上・下顎歯の切歯片が残存しているが、齲蝕がひどく同定は困難である。

$\dot{I}^1$	$\dot{I}^1$ $M^{\dot{2}}$
M_2 M_1 P_2	$\dot{C}$ M_3

・ 遊離歯

b．性別・年齢の推定

前頭骨片は華奢でサイズも小さいところから性別は女性の可能性が強い。年齢は残存する歯牙の咬耗度がBrocaの2度であることから熟年と推定される。

c．その他

形質的な特徴などは不明である。

6）23号墓人骨

a．保存部位

下顎骨は残っていないが、顔面部を含む頭蓋骨のほぼ右半分が残存している。

残存する歯牙は以下の通りである。

／ ○ × × P^1 ○ ／ ／	

× 歯槽閉鎖　　○ 歯槽解放　　／ 破損

b．性別・年齢の推定

頭蓋骨の形状から性別は男性、歯牙の咬耗度（Broca 2度）や歯槽骨の状態から年齢は熟年と推定される。

c．形質

表2に示すように、顔面部は平坦で上顔高は73mm、眼窩は高型とやや面長である。前頭骨に前頭縫合の痕跡が認められる（表3）。

7）24号墓人骨

a．保存部位

後頭部と下顎を欠く頭蓋骨が残存しており、赤色顔料の付着が認められる。体部骨はほぼすべて失われている。歯式は以下の通りである。

(M³)	M²	M¹	m²	P² P¹	C	I²	I¹	I¹	I²	C	P² P¹	m²	M¹	M²	(M³)
(M₃)		M₁	m₂	P₂ P₁	C	I₂	I₁	I₁	I₂	C	P₂ P₁		M₁	M₂	(M₃)

( ) 未萌出　　・ 遊離歯　　m 乳白歯

b．性別・年齢の推定

混合歯列を形成しており、年齢は未成年、おそらく11～12才であろうと思われる。性別は不明である。

c．その他

その他の所見は不明である。

8）28号墓人骨

1号が葬られた後に、ほぼ同じ位置に2号が重ねて葬られており、人骨は2体分であるように見える。ところが、歯牙の整理をする段階でさらにもう1体分の歯牙が検出された。1号が葬られる前にすでにもう1体分の人骨があった可能性がある。

A．28号墓1号人骨

a．保存部位

頭蓋骨：

頭蓋骨は木の根の侵入のため保存状態は極めて悪い。赤色顔料の付着が認められる。

体部骨：

上半身の骨は腐朽が進み、肋骨片が少量と尺骨遠位端部片以外はほとんど失われている。下肢の骨は比較的よく残っている。残存部位は以下の通りである。左右寛骨片、左右大腿骨、左右脛骨、膝蓋骨、足根骨片。

歯牙：

歯式は以下の通りである。

M²	M¹		P¹	C	I²	I¹	I¹		P¹	
										P₂ M₁

・ 遊離歯

b．性別・年齢の推定

恥骨の形状から性別は男性、歯牙の咬耗度がBrocaの２度であることから年齢は熟年と推定した。

c．形質

歯牙の計測値を表６に示す。下肢骨は頑丈で、脛骨に扁平傾向が認められる。大腿骨最大長からPearsonの式によって求めた推定身長は156.5cmである。

B．28号墓２号人骨

a．保存部位

頭蓋骨：

木の根の侵入のため保存状態は極めて悪く、右側頭骨片、頭頂骨片、後頭骨片、下顎骨片が識別できるのみである。

体部骨：

骨質がもろく保存状態は良好とは言えない。識別できた残存部位は以下の通りである。左右上腕骨、左肩甲骨片、左前腕骨近位部片、肋骨および椎骨片、仙骨片、左右の寛骨臼部片、左右大腿骨、左右肋骨、右腓骨、足根骨片。

歯牙：

歯式は以下の通りである。

／ ／ ／ ／ ／ ／ ／ ／	／ I^2 C P^1 P^2 M^1 M^2 M^3
× × × P_2 P_1 C I_2 I_1	I_1 I_2 C P_1 P_2 × M_2 M_3

× 歯槽閉鎖　△ 歯根のみ　／ 破損　・ 遊離歯

b．性別・年齢の推定

頭蓋骨の乳様特記の発達が良好で、大坐骨切痕角が小さいことから性別は男性、歯牙の咬耗度がBrocaの１～２度であることから年齢は30代位の成年と推定される。

c．形質

頭蓋骨の保存が悪く、頭型や顔面部の形質は不明である。四肢骨は筋付着部の発達が良好で、かなり頑丈な男性であったことを示している。大腿骨にはやや柱状傾向が認められる。大腿骨最大長よりPearsonの式を用いて求めた推定身長は159.9cmであった。脛骨の扁平傾向は認められない。

C．28号墓歯牙

１号人骨、２号人骨のほかに以下に示す歯牙が検出された。おそらく１号人骨に先立って

葬られていた被葬者のものと思われる。

$\dot{M}^3$ $\dot{P}^2$ $\dot{C}$ $\dot{I}^2$ $\dot{I}^1$	$\dot{I}^1$ $\dot{I}^2$ $\dot{C}$ $\dot{P}^1$ $\dot{P}^2$ $\dot{M}^2$
M_1 × P_1 C	$\dot{P}_1$ $\dot{P}_2$

× 歯槽閉鎖　　・ 遊離歯

9）35号墓人骨

a．保存部位

全体に保存状態が悪く、前頭骨および頭頂骨の小片と歯牙が3本残存するのみである。残存する歯牙は上顎右の第2小臼歯と第1大臼歯、下顎左の第1大臼歯である。

b．性別・年齢の推定

性別は不明。歯牙の咬耗度がBrocaの1～2度であることから、年齢は成年～熟年と推定した。

c．その他

保存状態が悪く、身長その他の所見は不明である。

出土人骨の形質的特徴

1）頭蓋骨

14号、16号、23号の男性頭蓋の計測値が得られている（表2）。頭型は14号が短頭に近い中頭、16号が短頭型に属しており、短頭傾向は妙見古墳人の特徴かも知れない。図1は頭蓋最大長、最大幅、長幅示数の関係を示しているが、妙見古墳人は全体にサイズが小さく短頭の傾向を示すことが分かる。

顔面部は保存状態が悪く、2例のみがその形質をうかがえる。上顔示数はいずれも広顔型を示すが、上顔高は70mmを越えており、筑後あるいは南豊前の古墳人の平均値（Doi & Tanaka, 1987）に近い。図2も妙見古墳人が福岡地方の古墳人の平均的な位置にあることを示している。眼窩の特徴も同様に中央に近いところに位置している（図3）。

2）四肢骨および身長

表7は妙見古墳人の四肢骨主要計測値を代表的な弥生人と縄文人のそれと比較したものである。28－2号人骨の上腕の左右差が顕著である。下肢骨は全体的にサイズが小さく華奢である。28－2号の大腿骨に柱状傾向が認められ、28－1号の脛骨に偏平傾向が認められる。

表8は妙見古墳人と他の集団の推定身長を示している。妙見古墳人は低身長である。

以上のように、妙見古墳人の形質は高顔・高身長の典型的な渡来系の特徴ではなく、地理的位置関係を反映して、どちらかというと筑後や南豊前の古墳人に近い、中間的な特徴を示している。

被葬者の関係について

人骨の保存状態が悪く、具体的な血縁関係を推定するには情報が不十分であるが、参考までに被葬者間の歯冠形態の類似度（Q－相関計数）（土肥他，1986）を求めたので紹介しておく。共有する歯牙の数が少ないのですべての人骨について分析は出来なかった。表9からは28号墓に葬られた3体のうち、28－1号は先に葬られていたと思われる28号とも後から葬られたと思われる28－2号とも類似性が高いが、28号と28－2号はそれほど類似度が高くないことが読みとれる。また、これら28号墓の被葬者は24号墓の被葬者とも高い類似性を示しているが、8号や14号墓被葬者との類似度は高くない。

まとめ

福岡県の妙見墳墓群から出土した11体の古墳人骨が出土した。これらは福岡県南部における貴重な追加例である。形質は筑後や南豊前の古墳人に近い特徴を持っているように思われた。推定身長は156.5cmと159.9cmであった。

謝辞

稿を終えるに当たり、人骨調査の機会を与えていただいた福岡県教育委員会の皆さま、特に調査を担当された佐々木隆彦氏に心からの謝意を表します。

参考文献

土肥直美・田中良之・船越公威，1986：歯冠計測値による血縁者推定法と古人骨への応用．人類誌，94(2)：47-62.

DOI, N and Y. TANAKA, 1987: A Geographical cline in metrical characteristics of Kofun skulls from western Japan. J. Anthropo. Soc. Nippon, 95(3): 325-343.

1）中橋孝博・土肥直美・永井昌文，1985：金隈遺跡出土の弥生時代人骨・史跡　金隈遺跡．福岡市教育委員会，43-145.

2）清野謙次・平井隆，1928a：津雲貝塚人上肢骨の人類学的研究，人類誌，43：第3附録.
清野謙次・平井隆，1928b：津雲貝塚人下肢骨の人類学的研究，人類誌，43：第4・5付録.

3）永井昌文，1985：Ⅲ北部九州・山口地方．（シンポジウム；国家成立前後の日本人――古墳時代人骨を中心にして――）．季刊人類学，16(3)47-57.

表2　頭蓋主要計測値

(mm)

		14号	16号	23号
		♂	♂	♂
1	Max. cranial l.	174	177	
8	Max. cranial b.	137	148	
9	Min. front. b.	94	95	
26	Frontal arc		126	
27	Parietal arc		128	
29	Frontal chord		111	
30	Parietal chord		112	
43	Upper facial b.	105	102	
44	Biorbital b.	102		
46	Middle facial b.	104		106
47	Total facial h.	115		
48	Upper facial h.	70		73
51r	Orbital b.(r)	44		42
52r	Orbital h.(r)	35		36
54	Nasal b.	26		
55	Nasal h.	50		54
69	Symphysial h.	30		
69(3)	Mand. body thick(r)	15		
	Mand. body thick(l)	14		
8/1	Cranial index	79	84	
47/46	Total facial index	111		
48/46	Upper facial index	67		69
52/51	Orbital index(r)	79.5		85.7
54/55	Nasal index	52		
Facial flatness				
	Frontal chord	98	96	
	subtense	14.1	14	
	index	14.4	14.6	
	Simotic chord	7.9		5.4
	subtense	2.1		1.1
	index	26.6		20.4
	Zygomaxillry chord	101		
	subtense	26.4		
	index	26.1		

表3　頭蓋非計測的小変異

	1号 ♀		14号 ♂		16号 ♂		20号 ♀		23号 ♂		24号 ?		28-2号 ♂	
Traits	r	l	r	l	r	l	r	l	r	l	r	l	r	l
1 Metopism			-		-		-		+		-			
2 Supra-orbital foramen			-		-	-	-	-	-		-	-		
3 Supra-orbital nerve gloove			-	-		+	-		-		-	-		
4 Accessory infraorbit. foramen			-	-					-		-	-		
5 Transv. zygomatic suture				-					-					
6 Zygofacial foramen absent			-	-					-					
7 Ossicle at the lambda				-										
8 Tympanic dehiscence	+								-				+	
9 Aural exostosis	-								-				-	
10 Parietal notch bone(5mm‹)				-										
11 Epipteric ossicle									-			+		
12 Frontotemporal articulation									-					
13 Multiple mental foramina			-	-									-	-
14 Mandibular torus			-	-									-	-
15 Mylohyoid canal				-										

表4　上肢骨主要計測値表　(mm)

	14号 ♂	28-2号 ♂	
Humerus	l	r	l
5 Max. diam. of mid-shaft		25	22
6 Min. diam. of mid-shaft		18	16
7 Least circumf. of shaft		61	
7a Circumf. of mid-shaft		70	63
6/5 Index of cross-sec.		72	72.7
Ulna			
3 Least circumf. of shaft	36		
5(1) H. of upp. art. surface			37
5(2) H. of hum. srt. surface			26
6 Width of olecranon			21
7 D-V diam. of olecranon			21
8 Height of olecranon			20
11 D-V diam. of shaft	12		
12 Transv. diam. of shaft	17		
11/12 Index of cross-sec.	70.6		

表5　下肢骨主要計測値　(mm)

		28-1号 ♂		28-2号 ♂	
Femur		r	l	r	l
1	Max. length	400	400		418
6	Sagit. diam. of mid-shaft	26		27	26
7	Transv. diam. of mid-shaft	24		24	24
8	Circumf. of mid-shaft	82		80	80
15	Vert. diam. of neck			34	
16	Sagit. diam. of neck			26	
18	Vert. diam. of head				46
19	Sagit. diam. of head				46
20	Circumference of head				145
21	Bi-epicondylar width			78	
6/7	Pilasteric index	108.3		112.5	108.3
(6+7)/1	Robusticity index	12.5			12
Tibia					
1a	Max. length	325			
6	width of lower epiphysis				45
7	Sagt. diam. of lower epiph.	34			36
8	Max. diam. of mid-shaft	31	32	28	28
8a	Max. diam. of nut. foram.	35	36	33	34
9	Transv. diam. of mid-shaft	18	18	21	21
9a	Transv. diam. at nut. foram.	23	22	25	24
10	Circumf. of mid-shaft	78	82	77	78
10a	Circumf. at nut. foram.	95		90	92
10b	Min. circumf. of shaft	72	72	71	70
9/8	Index of cross-sec.	58.1	56.3	75	75
9a/8a	Cnemic index	65.7	61.1	75.8	70.6
Fibula					
2	Max. diam. of mid-shaft			15	
3	Min. diam. of mid-shaft			10	
4	Circumf. of mid-shaft			43	
4a	Upp. min. circumf. of shaft			38	
3/2	Index of cross-sec.			66.7	

表6　歯冠計測値表

(mm)

	8号 ♂?		14号 ♂		24号 ?		28-1号 ♂		28-2号 ♂		28号 ?	
Maxilla	*r*	*l*	*r*	*l*	*r*	*l*	*r*	*l*	*r*	*l*	*r*	*l*
MD-diameter												
I1	8.8	8.9	8.7	8.8	8.5	8.5	8.2	8.2			8.1	8
I2		7.3	7.4	7.5	6.5	6.5	6.1			6	6.4	6.4
C			7.2	7.3	7.5	7.4	7.5			7.3	8.1	8
P1	7.4	7.4			7.1	7	7.3	7.1		7.4		7
P2	6.8	6.9			6.8	6.7				6.9	7	6.7
M1		10.3	11.1	11.1	10.7	10.7	10.4			10.8		
M2		9			9	9.2	9.5			9.4		
BL-diameter												
P1	9.7	9.6			9.3	9.4	9.3	8.9		9.1		9.2
P2	9.2	9.3			8.7	9				8.8	9	8.9
M1		11.3	11.9	12.2	11.3	11.6	11.6			11.9		
M2		10.8			11.4	11.4	11			11.2		
Mandible												
MD-diameter												
I1			5.6	5.6	5.2	5.2			5	5		
I2			6.1	6.1	5.8	5.9			5.6	5.8		
C	7.1		6.8	6.7	6.5	6.5			6.2	6.6	7.2	
P1		7.1	7.3	7.3	7	7					7	7.1
P2	6.8		7.5	7.4	7.2	7.2		6.9	7.1	7.1		7.1
M1			12.7	12.5	11.6	11.9		11.8			12	
M2			9.8			11.4						
BL-diameter												
P1		8.2	7.9	7.5	7.3	7					7.8	7.5
P2	8		8.7	8.5	8	8		8.4	7.7	7.6		7.9
M1			11.4	11.3	10.6	10.7		11			11	
M2			11.5			10						

表7　四肢骨主要計測値の比較　(mm)

		妙見 28-1 ♂		妙見 28-2 ♂		金隈弥生1) I ♂		津雲縄文2) I ♂	
Humerus		r	l	r	l	N	Mean	N	Mean
5	Max. diam. of mid-shaft			25	22	12	23.6	20	23.7
6	Min. diam. of mid-shaft			18	16	12	17.1	20	17.7
7	Least circumf. of shaft				61	14	63.6	21	64.7
7a	Circumf. of mid-shaft			70	63	12	68.3	19	69.2
6/5	Index of cross-sec.			72	72.7	12	72.7	20	74.6
Femur									
1	Max. length	400	400		418	11	438.3	16	418.2
6	Sagit. diam. of mid-shaft	26		27	26	33	29.5	20	28.9
7	Transv. diam. of mid-shaft	24		24	24	33	27.8	20	25.5
8	Circumf. of mid-shaft	82		80	80	33	90.6	20	86.6
15	Vert. diam. of neck			34		4	35.3	20r	31
16	Sagit. diam. of neck			26		3	28	19r	25.2
18	Vert. diam. of head				46	3	46.7	21r	44.7
19	Sagit. diam. of head				46	2	47.5	19r	44.4
20	Circumference of head				145	1	148	14	144.6
21	Bi-epicondylar width			78		8	79.8	10	79.5
6/7	Pilasteric index	108.3		112.5	108.3	33	106.3	20	113.2
(6+7)/1	Robusticity index	12.5			12	11	13.4		
Tibia									
1a	Max. length	325				7	339.7	10	343
6	width of lower epiphysis				45	6	52.8	9	50.2
7	Sagt. diam. of lower epiph.	34			36	5	37.6	14r	36.3
8	Max. diam. of mid-shaft	31	32	28	28	31	31	21	31.9
8a	Max. diam. of nut. foram.	35	36	33	34	25	37.1	19	34.7
9	Transv. diam. of mid-shaft	18	18	21	21	31	22.4	21	19.7
9a	Transv. diam. at nut. foram.	23	22	25	24	25	26	19	21.5
10	Circumf. of mid-shaft	78	82	77	78	31	85.1	20	82.5
10a	Circumf. at nut. foram.	95		90	92	25	99.1	19	90.7
10b	Min. circumf. of shaft	72	72	71	70	27	76.7	17	75.6
9/8	Index of cross-sec.	58.1	56.3	75	75	31	72.5	21	62.4
9a/8a	Cnemic index	65.7	61.1	75.8	70.6	25	70.5	19	62

1) 中橋他(1986　2) 清野・平井(1928)

表8　推定身長の比較　　(cm)

妙見28-1号	156.5	
妙見28-2号	159.9	
北部九州・山口古墳人3)	162.8	(N=40)
金隈弥生人1)	162.7	(N=17)
津雲縄文人2)	159.9	(N=13)

表9　歯冠計測値から求めた被葬者のQ一相関係数

	UI2CP1M1M2	UI1I2CP1	UI2CP1P2	UI1I2P1P2M1M2	UI1I2CM1	UI2P1M1M2
	LP2	LP2M1	LCP2	LCP1P2	LI1I2CP1P2M1M2	LP2
8号：24号				-0.32		-0.43
8号：28-1号						-0.47
8号：28-2号						-0.39
14号：24号					0.35	
24号：28-1号	0.68	0.79				0.65
24号：28-2号	0.83		0.86			0.8
24号：28号		0.66	0.26			
28-1号：28-2号	0.78					0.77
28-1号：28号		0.71				
28-2号：28号			0.35			

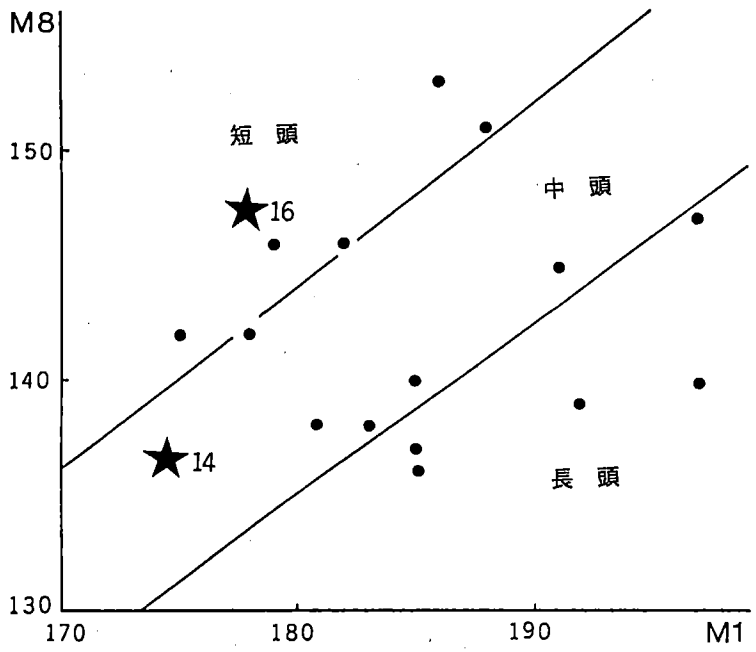


図1　頭蓋最大長、最大幅、長幅示数の比較
★妙見古墳人　●福岡地方の古墳人

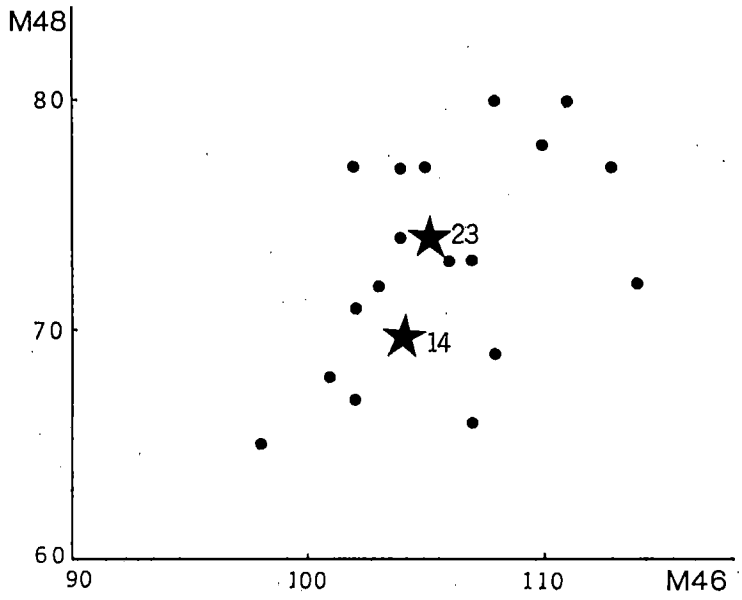


図2　中顔幅、上顔高、上顔示数の比較
★妙見古墳人　●福岡地方の古墳人

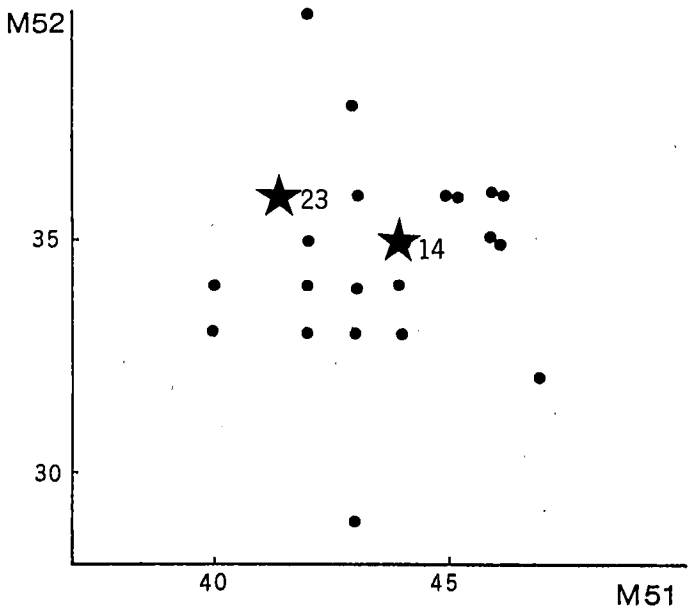


図3　眼窩幅、眼窩高、眼窩示数の比較
★妙見古墳人　●福岡地方の古墳人

14号墓人骨（男性）

左上：16号墓人骨（男性）

右上：23号墓人骨（男性）

左下：24号墓人骨

Ⅲ　発掘調査の記録

2　堤古墳の調査

小松原・堤古墳の調査

1．はじめに

小松原堤（Komatubara Tsutsumi）古墳は、福岡県朝倉郡朝倉町大字菱野字堤588-2番地と小松原775-1番地に所在する。九州横断自動車道建設に伴う工事用道路を設置する際に発見され、1983年９月13～22日に発掘調査された。

この古墳は、横断道本線用地内の妙見古墳群調査区の西方向約150ｍにあり、原の東遺跡調査区の南南東約150ｍの位置でもある。

発見時の状況

古墳が発見されたのは、もともと柿畑につづく農道になっていた部分で、工事用道路建設に伴って取付く農道を拡幅・地下げしたためで、第27地点の長島遺跡・第29地点の原の東遺跡を調査中の９月８日に工事施行業者から「石棺らしい石がある」と連絡があった。現地では、

第99図　堤古墳周辺地形図（1／1,500）

散水用に埋設された塩ビ製パイプが露呈するまで掘り下げられていたが、蓋石とみられる石が少し動いて隙間を生じていて、隙間からは内部が赤色に染まっているのと頭蓋骨などが存在することが確認された。石棺ないし石室であることは確実であった。

このため、道路公団朝倉工事区長および工事施行業者と協議し、現状保存するにしても発掘調査を実施すべきであるとの確認に至り、調査の間は工事を中断することとなった。とりあえず土嚢で仮覆いをし、農道利用者の承諾を取り付けるとともに、調査のスケジュール調整を図ることにして、緊急に発掘調査する運びとなった。

調査担当　福岡県教育庁文化課　調査第二係長　栗原　和彦
主任技師　小池　史哲
調査補助員　日高　正幸
小田　和利

実施にあたり、工事施工の株式会社塩見組と担当の後藤良一氏の協力を得た。

9月13日　蓋石を露呈させて清掃する。蓋石は一部崖面に潜るが、崖面の土層を観察する。清掃終了後、写真撮影する。
9月14日　蓋石を実測した後、蓋を開ける。竪穴石室であることが分かる。
9月15日　石室内の清掃作業を実施する。
9月16日　石室内の写真撮影をした後、人骨等の出土状況を実測し始める。
9月18日　出土状況の実測終わる。
9月19日　石室の実測をする。
9月20日　実測作業を終了する。
9月22日　土嚢を石室内に詰め込み、蓋をして覆う。

工事は、取付道路の傾斜角度でやや急傾斜になったが、石室を破壊せずに埋め込みで舗装処理してもらった。

2．遺構と遺物

1．墳丘

柿畑に造成されている部分は平坦で、工事用道路掘削崖面を観察しても周溝や墳丘の痕跡は分からない。石室付近の農道崖面で観察するかぎりでは、標高55.60m位に黄褐色粘質土の地山とその上に黒ボクの堆積がみられ、南側には明灰褐色砂質土の盛土が10cm前後の厚さにみられるものの、その上は30～40cm厚さで全体に畑地開墾土が覆っている。

2．主体部

主体部の掘方は、西側が柿畑の下で不明だが、東西方向に主軸をとる隅丸長方形プランで、検出面では長さ205cm＋α、幅175cmの広さ、上縁での幅180cmを測り、深さは120cm前後であろう。上部は黄褐色粘質土だが、下半分は灰褐色の片岩質風化岩盤の地山に掘り込まれている。埋土の土層を観察すると、地山を掘削した土をそのまま埋めて戻したようだが、内側に再掘削した痕跡がみとめられ、この部分は掘方より一回り小さく黒色粘土を含む埋土がみとめられる。

主体部は、石棺系の竪穴式石室で、４枚の蓋石で覆われている。西側から２つ目の蓋石の北寄りで、蓋石より約５cm浮いた位置から鉄鋤先が出土した。

蓋石をはじめ石室を構成する石材は、緑色の片岩で、蓋石には大きめの石が用いられている。東側から２つ目の蓋石が最も大きく、長さ130cm、幅60cm、厚さ10cm程の大きさであり、最も小さな３つ目の蓋石は長さ90cm、幅40cm、厚さ10cm弱の大きさである。蓋石の隙間は小さな石で充填され、黄褐色粘土の目張りもみられたが、蓋石の上では埋土と区別しがたい状態であった。

石室内法は、長さ190cm、東側幅65cm、西側幅52cm、東側高さ65cm、西側高さ70cmの大きさで、上縁側は僅かに内側に迫り出し気味になっている。

石室は現地に保存されることになったため、裏込めや控積み内部の状態は確認していないが、石室上縁の面には扁平石が多数みられる。

基底部は長さ45～65cm、幅30～40cm、厚さ10cm弱程の扁平石を、両小口各１枚、両側壁に各４枚を立て並べているが、北壁の一部で隙間を補った部分がみられる。基底部石の上は、５・６段扁平石で横積みないし小口積みされていて、西小口は５段だが東小口では４段で一番上の石は一回り大きな扁平石が用いられている。扁平石の隙間には漆喰状の白っぽい粘土で目張りされている。床面には敷石などの施設はみられない。

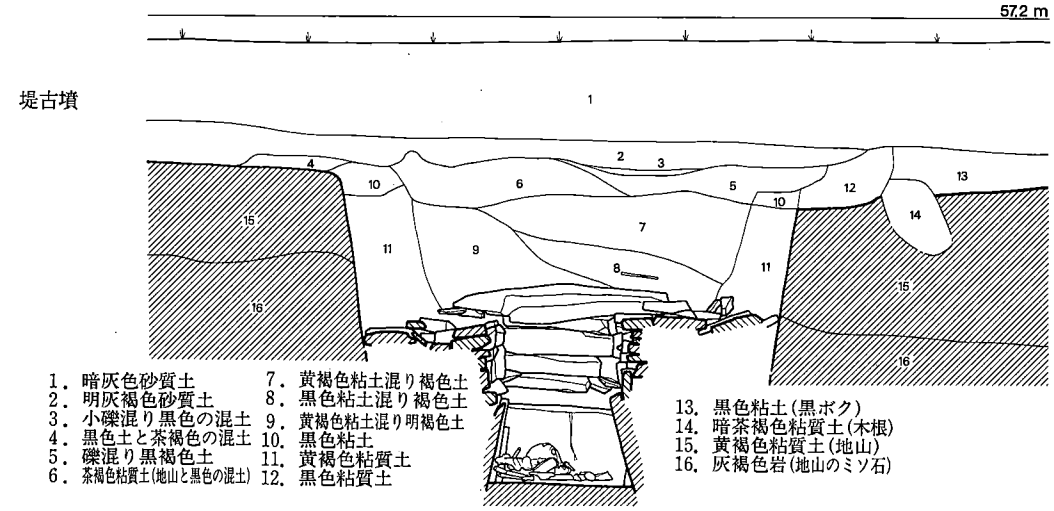
なお、石室内全体に赤色顔料が塗布されていて、石室内部に相当する蓋石内面にも顔料が付着していた。

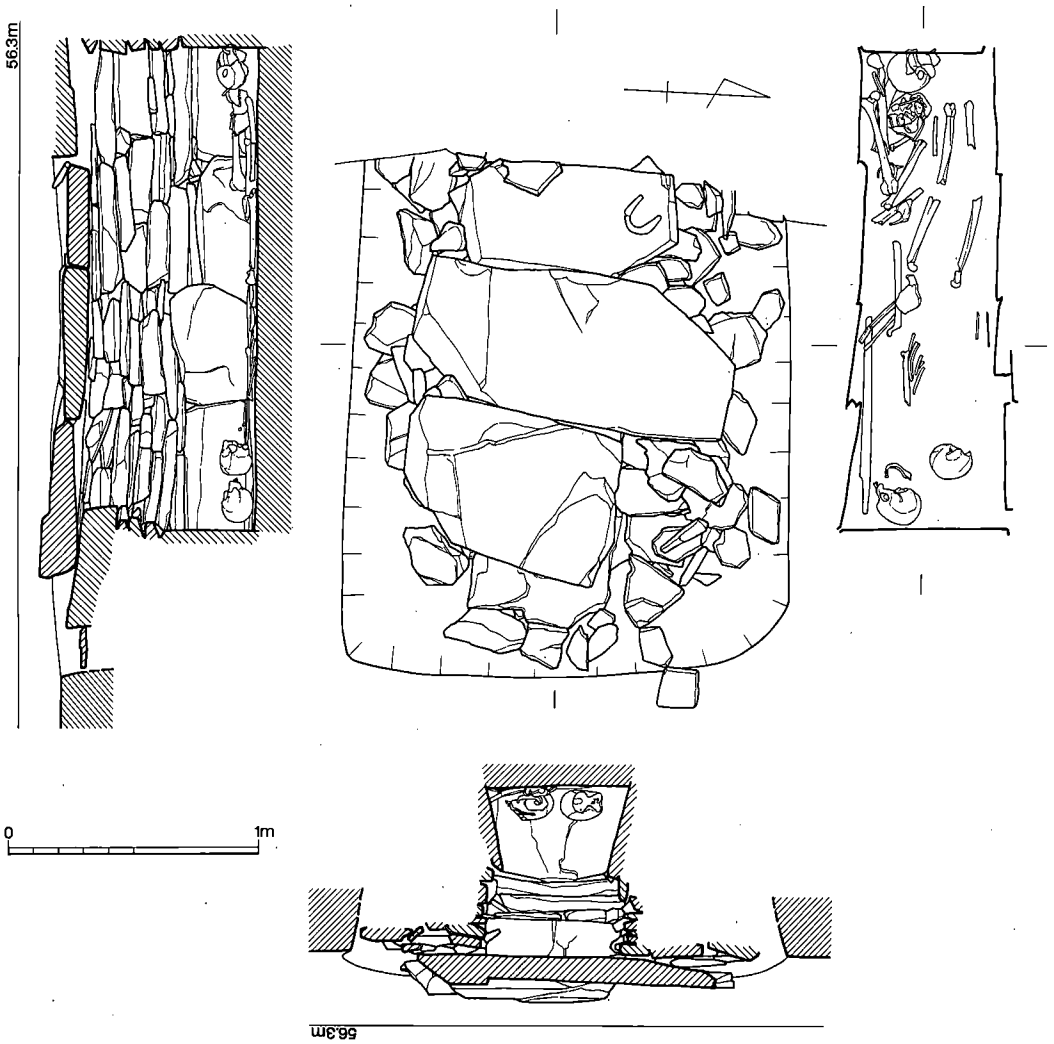
3．遺物出土状況

主体部掘方内からは、前述したように蓋石のやや上から鉄鋤先が出土し、そのほかに蓋石の北側埋土から須恵器片が１片出土している。

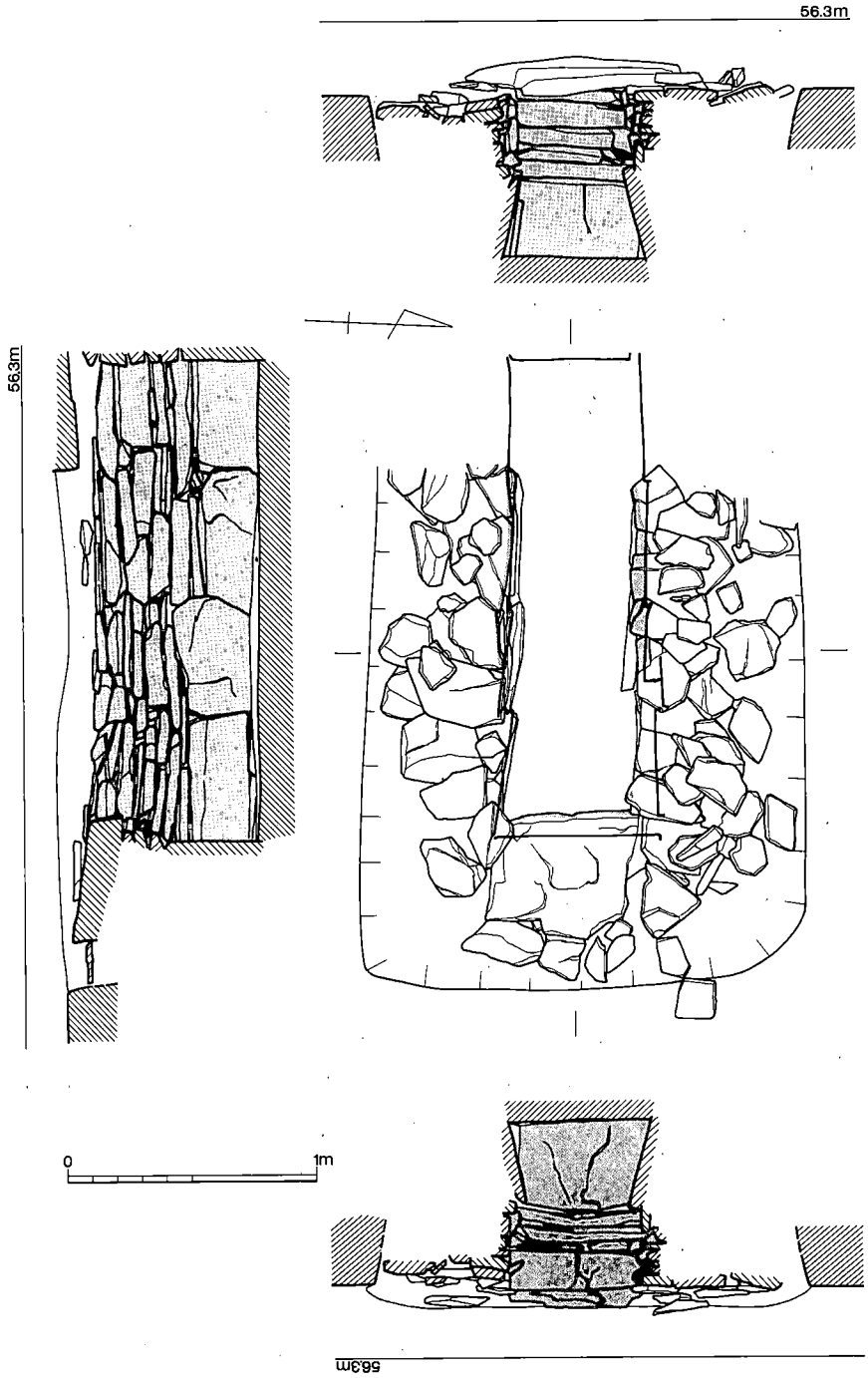
石室内では、３体分の頭骨がみられた。西側小口部に１体分の頭骨（１号人骨）と東側小口部に２体分の頭骨（北側が２号人骨・南側が３号人骨）があり、四肢骨なども検出されたものの中央部での残り方はやや悪い。また、南側壁の東小口側で鉄刀１本が出土した。

堤古墳



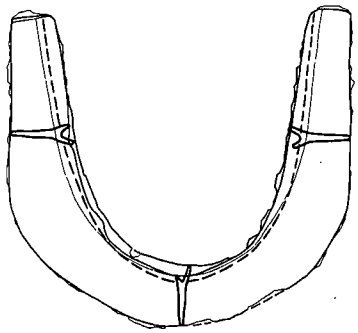


第100図　石室実測図　1（1／30）

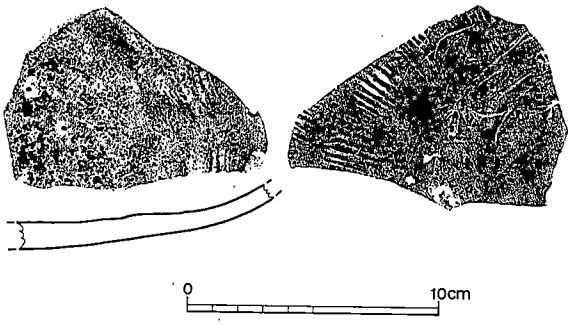


第101図　石室実測図　2（1／30）

第102図　出土鉄製品実測図1（1／4）



第103図　出土鉄製品実測図2（1／3）



第104図　出土土器拓影図（1／3）

1号人骨は、頭蓋骨が小口壁の南寄りに接しているものの下顎骨はその東側にあり西を向いている。また頭骨の南側に大腿骨の腰骨側端があるなど不自然な配置になっていて、石室内南西隅に集骨された可能性が高い。

2号人骨は、小口壁・北側壁から離れた位置に、頭蓋骨があり北側を向いた状態であるが、その西脇に歯冠が数点みられる。

3号人骨は、小口壁に頭頂部が接して、顔面は南側を向き、下顎骨はその西側脇にある。　中央部には上腕骨・肋骨・腰骨・大腿骨などがあるものの完全には揃わない。また、南側壁に接して前腕らしい骨があり、下に鉄刀の先端部が重なる。

鉄刀は、3号人骨の顔面に柄部分があり、刃を南側に向け、壁と平行に置かれている。

4．出土遺物（図版6－b、第102～104図）

1は、石室内から出土した全長78.3cmの鉄刀である。刃部は長さ68.1cm、幅2.8～3.0cm、厚さ0.6cmで、関部の幅は3.4cmを測る。柄部は長さ10.2cm、幅2.0～2.4cm、厚さ0.6cmを測る。刃部はやや内反りで、両刃の先端部には微

かに鏑がみられる。柄部では基部端から3cm余りのところに目釘穴が1孔みられるものの、関側には不明である。目釘穴の脇には近くに2mm径の紐状のものを巻き付けた痕跡が10余条分みとめられる。また関側には木質が錆着している。刃部にも鞘とみられる木質の錆着が顕著にみとめられ、関部付近では片面で1cm弱の厚みを有している。また、鞘口とみられる部分には一部直交する方向の木質もみとめられる。

2は、蓋石の少し上で出土したU字形の袋部をもつ鋤先である。刃部の側縁は基部側から7.5cm程の長さに最大幅を保ち、ここから先端側の刃部は半円形になる。袋部側は基部側から緩やかな弧を描いて狭まるので、平面的には刃部は角のあるU字形をなすことになろう。長さ12.6cm、幅14.5cm、厚さ0.9cmを測る。刃部幅は、基部側端で1.7cm、先端部で2.4cm、角張った部分の最大幅は2.7cmと3.3cmである。使用時の偏りに起因すると推定されるが、袋部の減りは、図示した面のほうが僅かに進んでいる。なお、刃の厚みは概ね0.3cmを測る。袋部では木質の錆着などはみられない。

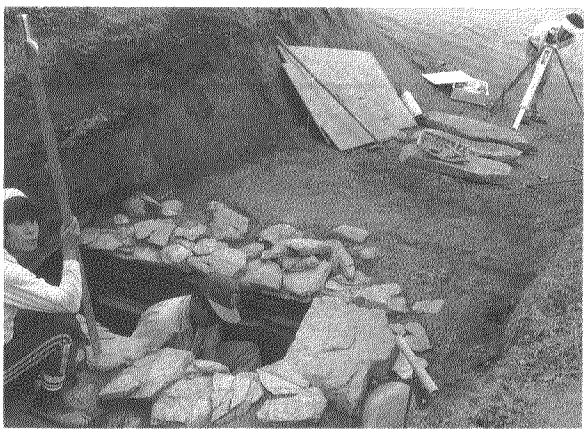
3は、主体部掘方内の石室より北側で出土した、須恵器片で甕の底部付近の破片であろう。外面は平行叩き痕とナデ痕がみられ、内面は平行叩き痕を僅かに残すがナデ調整され、自然釉が付着している。器壁の厚みは0.6cm～1.0cmとやや薄めであろうか。胎土に石英・長石などの砂粒を含み、暗青灰色に焼成されている。

3．おわりに

小松原堤古墳は、墳丘の規模などは不明だが、主体部の石室から3体の人骨と鉄刀1点、蓋石上から鉄鋤先1点、墓壙内から須恵器片1点が発見された。

石室は、石棺系竪穴式石室であり、甘木・朝倉地方では5世紀前半から中頃前後にみられる。そのなかでも、控積みを有する石棺系竪穴式石室であることからして、比較的古い様相を示していると言えよう。

鉄刀は、先端部が両刃で僅かながら鏑がみられることから、剣の特徴を有する。関部付近ではわずかに内反りになる刀の特徴を具備するので、刀の範疇に含めたが、剣の類に含めることも可



第105図　調査風景

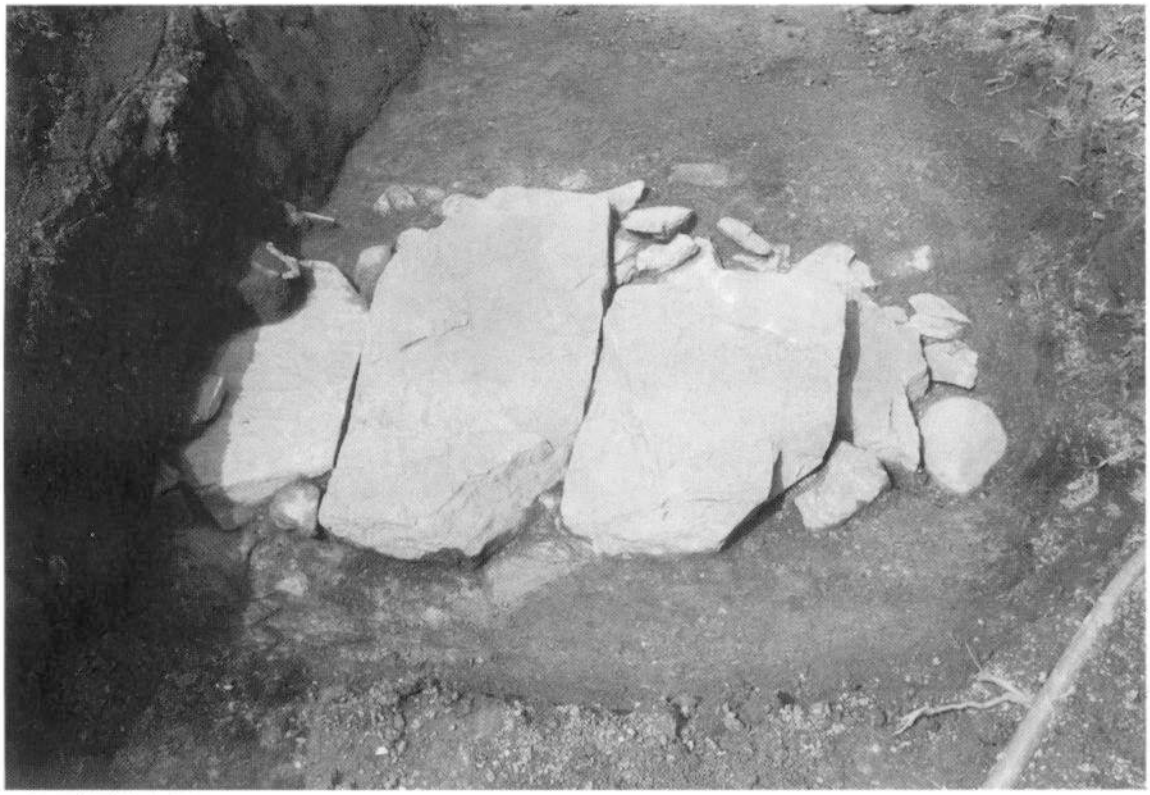
能である。鉄剣としては、甘木市池の上４号墳や、柿原Ｈ群Ｄ－１やＩ群Ｃ－５などで出土例があり、いずれも５世紀前半の比較的早い時期に考えられている。

鉄Ｕ字鋤先は、甘木市に所在する池の上・古寺墳墓群や柿原遺跡群、あるいは宗像郡津屋崎町宮司井手ノ上古墳などの例からみて、池の上Ⅳ式期には副葬品として多用されている。小松原堤古墳では墓壙内の蓋石上に副葬されることから、石室構築あるいは初葬時よりも後出することは明白である。

ところで、石室内から発見された人骨は、後述するように１号が熟年男性、２号が成人女性、３号人骨が熟年女性と分析されている。出土状況から、人骨には片付け行為がみうけられ、１号と２・３号人骨に時期差が想定される。大分県・熊本県地方の箱式石棺墓や家形石棺墓には合葬例が多数発見されているが、石棺系竪穴式石室に追葬が確認されることは注目される事実である。初期の横穴式石室である竪穴系横口式石室が、追葬を意識した施設であることは問題ないとしても、竪穴式石室は本来個人墓として成立した施設で、追葬を前提としないにも拘らず、追葬行為がなされたのは何故であろうか。また、石室内法で、東側が僅かながらも幅広であり、通常的には東側が頭位と判断されよう。しかし、１号の熟年男性人骨は西南隅に頭蓋骨を向けて片付けられ、後に葬られたのは近縁関係にあると判断される女性である。熟年男女と成人女性の組み合わせからは、単純にみて、熟年男性の死後に急速に没落した家族関係を想像させるが、副葬品の貧弱さはこれに起因するかもしれない。また、追葬の間隔が比較的短かかったこと、墓道などを含めて、埋葬後に蓋石の位置を的確に把握する示標が存在していたことの可能性を考えたい。

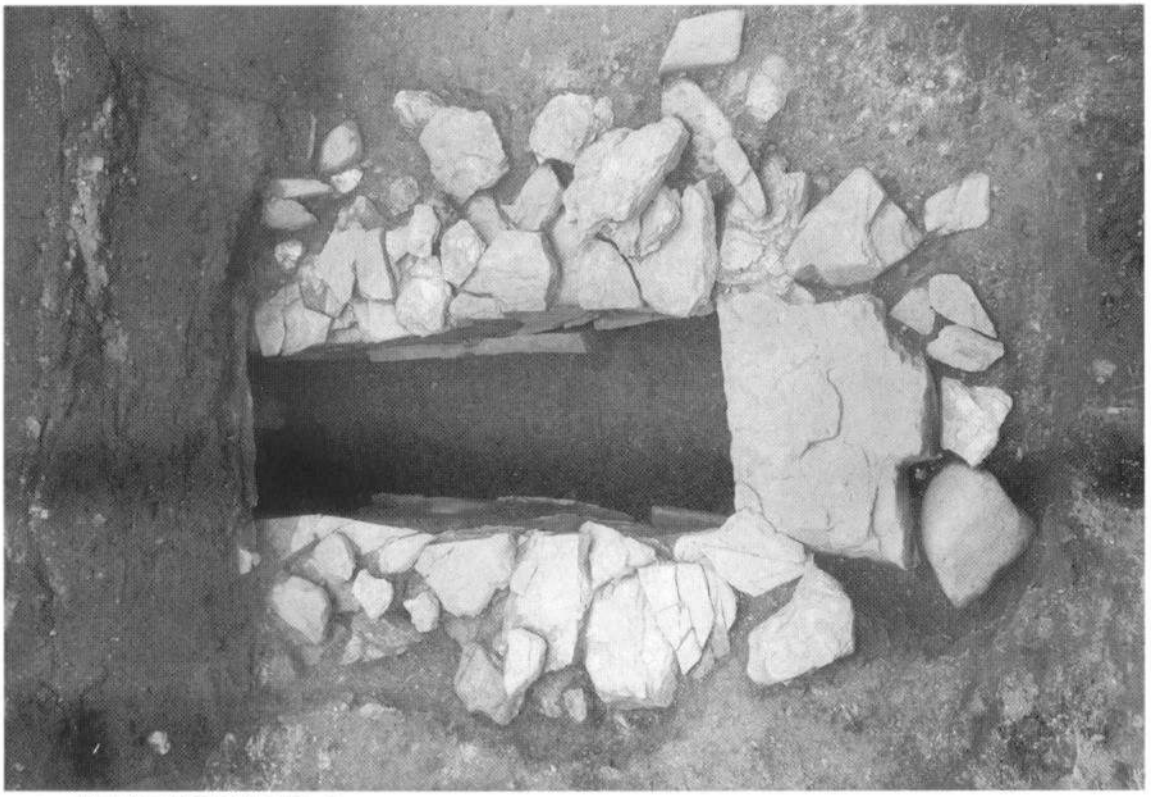
甘木市教育委員会1979・83　池の上墳墓群・古寺墳墓群Ⅱ　甘木市文化財調査報告第5・15集
福岡県教育委員会1984・86　九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告4・6
津屋崎町教育委員会1991 宮司井手ノ上古墳　津屋崎町文化財調査報告書第7集

a　調査前の状況



b　蓋石露出状況

a　蓋石除去後の石室(南から)



b　蓋石除去後の石室(東から)

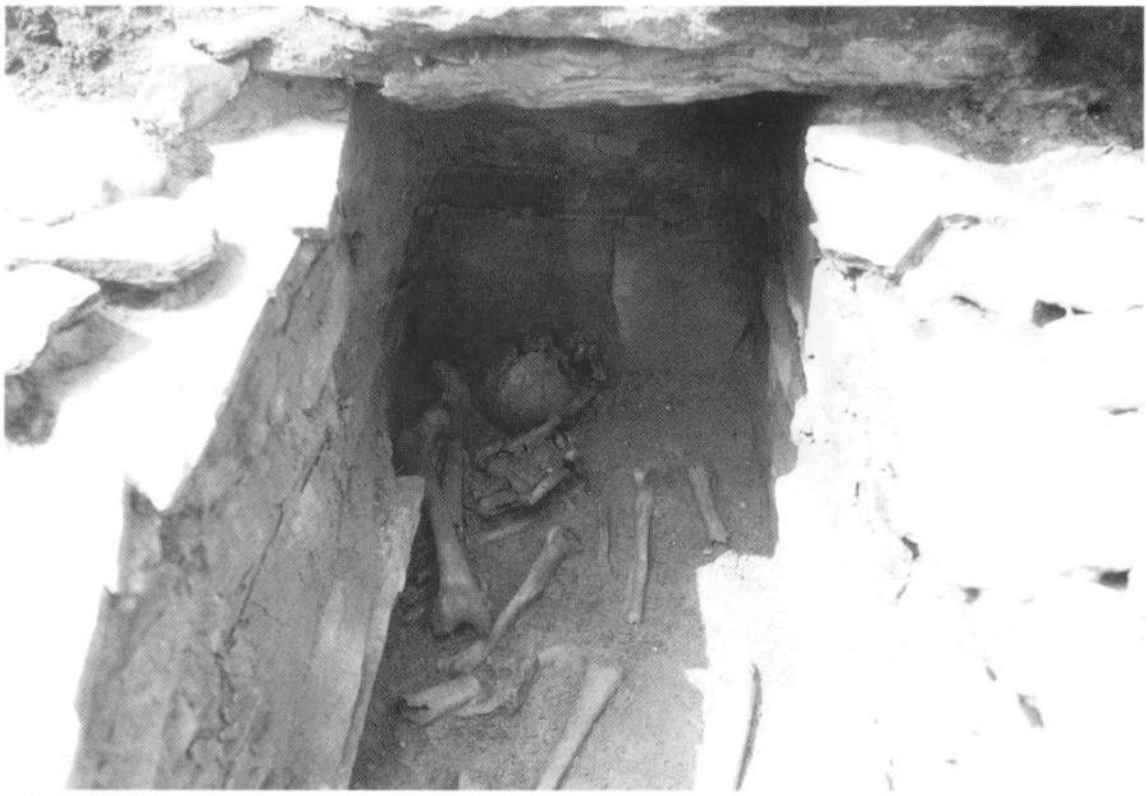
a　人骨出土状況(東から)

b　人骨出土状況(西から)

a　石室南壁

b　石室北壁

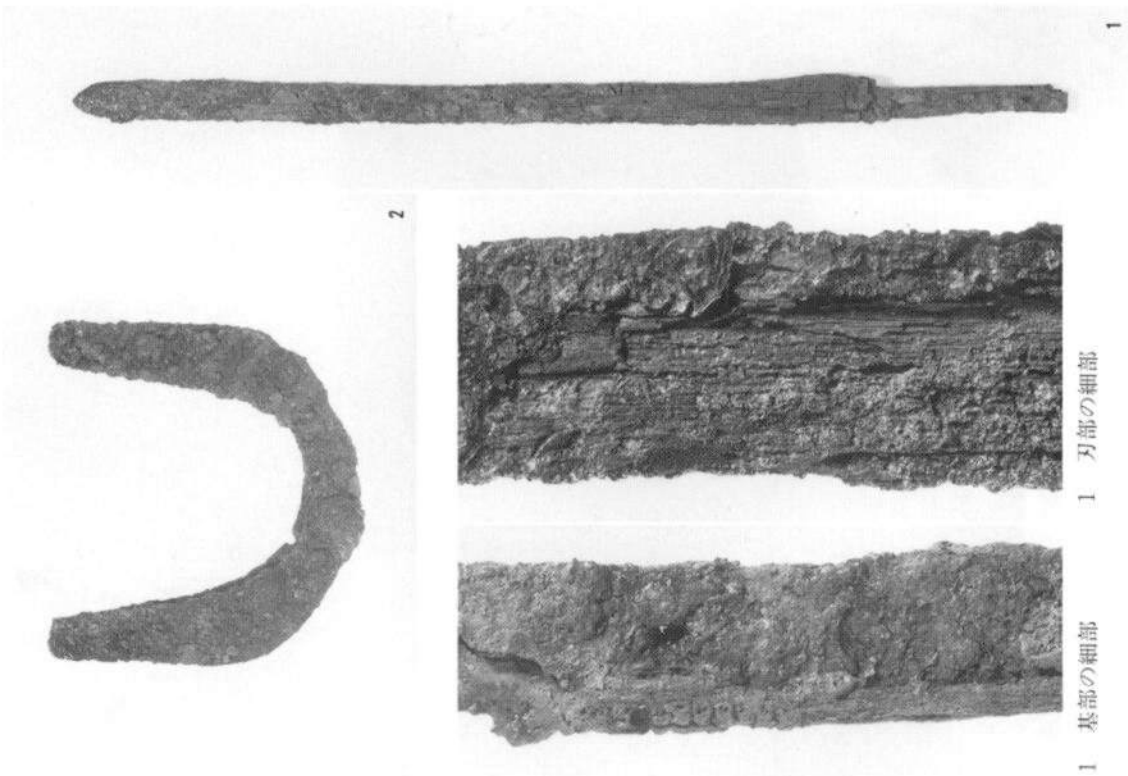
a　石室東壁



b　石室西壁

図版57

a　遺物出土状況



1　基部の細部

1　刃部の細部

b　出土遺物

小松原堤古墳出土の人骨について

土　肥　直　美
琉球大学医学部解剖学第1講座

はじめに

古墳時代は北部九州を中心に流入した渡来系の遺伝子が周辺部へと広がっていった時代である（Doi & Tanaka, 1987）。福岡県朝倉町小松原堤古墳から出土した人骨はこのような古墳時代における形質の地域性を知る上で貴重な資料である。以下に人骨の所見を報告する。

人骨所見

3体の人骨が検出されている。それぞれの人骨の所見は以下の通りである。

1）1号人骨（男性・成年～熟年）

3体の出土人骨の中では最も良く残っている方であるが、全体的には骨質がもろ保存状態は良好とは言えない。

a．保存部位

頭蓋骨は右側頭部と顔面部に破損が見られるが、比較的良く残っている。上顎の歯槽部は破損されており、上顎の歯牙は検出できなかったが、下顎骨および下顎の歯牙は良く残存している。歯式を以下に示す。歯の咬耗度はBrocaの1～2度である。

○ M_2 M_1 P_2 P_1 C I_2 I_1	I_1 I_2 C P_1 P_2 M_1 M_2 ?

○　歯槽解放　　?　不明

体部骨もほぼ全身のものが残存しているが、体幹、右上腕、手足骨の残りは悪い。

b．性別・年齢の推定

四肢骨のサイズ、筋付着部の発達の程度などから、性別は明らかに男性である。年齢は歯牙の咬耗度（Brocaの1～2度）から、30代後半から40代前半くらいと推定される。

c．形質

表1に示すように、頭型（M8／1）は短型（80.3）に属している。四肢骨は全体にサイズが大きく（表4・5）、筋付着部の発達も良好である。大腿骨はやや柱状傾向を示すが、脛骨の扁平性は認められない。大腿骨最大長（414mm）からピアソンの方法によって求めた推定身長は159.1cmで、それほど高くない。

2）2号人骨（女性・成年）

a．保存部位

顔面部を欠く頭蓋骨が残存している。また多数の歯牙が遊離した状態で検出されている。歯牙の咬耗度はBrocaの1～2度、歯式は以下の通りである。

$\dot{M}^3\ \dot{M}^2\ \dot{M}^1\ \dot{P}^2\ \dot{P}\ \dot{C}\ \dot{I}^2\ \dot{I}^1$	$\dot{I}^2\ \dot{P}^1\ \dot{M}^2$
$\dot{M}_3\ \dot{P}_2\ \dot{P}_1\ \dot{C}$	$\dot{P}_2\ \dot{M}_2$

・ 遊離歯

体骨部はほとんど失われているが、骨整理の段階で識別された骨片が2号人骨のものであるとすれば、大腿骨片、脛骨片が残存していることになる。

b．性別・年齢の推定

頭蓋骨の特徴は女性である。年齢は歯牙の咬耗度（Brocaの1～2度）から成年と推定される。

c．形質

頭蓋骨と四肢骨の計測値をそれぞれ表1と表5に示す。頭蓋骨のサイズは小さい。脛骨が本人骨のものとすればかなり頑丈である。脛骨の扁平性は認められない。

3）3号人骨（女性？・熟年）

a．保存部位

前頭骨、頭頂骨、後頭骨のほぼ右半部が残存している。顔面部はわずかに右眼窩から鼻部周辺が残っているだけである。歯牙の咬耗度はBrocaの2度、歯式は以下の通りである。

$\dot{M}^2\ \dot{C}\ \dot{I}^1$	$\dot{I}^1\ \dot{C}\ \dot{P}^1\ \dot{P}^2\ \dot{M}^2\ \dot{M}^3$
$\dot{P}_2\ \dot{C}\ \dot{I}_2$	$\dot{I}_2\ \dot{C}\ \dot{P}_1\ P_2\ M_1$ × ／

× 歯槽閉鎖　・ 遊離歯　／ 破損

体骨部はほとんど原位置にあり、本人骨が最終埋葬の被葬者であることを示している。しかし、上半身の保存状態は悪く、左上腕骨と肋骨片が少量残っているだけである。下半身の保存状態は比較的良好である。残存部位は、左寛骨片、左右大腿骨、左右脛骨、左腓骨片、足根骨片である。

b．性別・年齢の推定

頭蓋骨の骨質は薄く眉弓の発達も弱いことから、頭蓋骨の特徴は女性の可能性を支持している。しかし、大腿骨体のサイズは津雲縄文人男性の平均値（清野・平井、1928）に匹敵し、男性としても矛盾は無いように見える。しかし、性差の出やすい大腿骨頭のサイズが小さいことなどを考慮し、性別は女性？としておきたい。

年齢は歯牙の咬耗度（Brocaの２度）から熟年と推定した。

c．形質

頭蓋骨と四肢骨の計測値をそれぞれ表１と表５に示す。大腿骨は筋付着部の発達も良く頑丈である。縄文人のような柱状傾向は認められない。

人骨の形質的特徴

計測および観察の結果を表１～５に示す。最も保存状態の良かった１号人骨について形質的特徴を見てみると、図１に示すように頭蓋の形態は短頭型に属している。上腕骨の計測値に関しては代表的な縄文人や弥生人のそれとほぼ変わりがなかった（表６）。大腿骨は短く頑丈でやや柱状傾向が認められるが、脛骨の偏平性は見られない。表７は推定身長を他の集団と比較したものである。小松原堤１号は津雲縄文人の平均値に近く、低身長である。

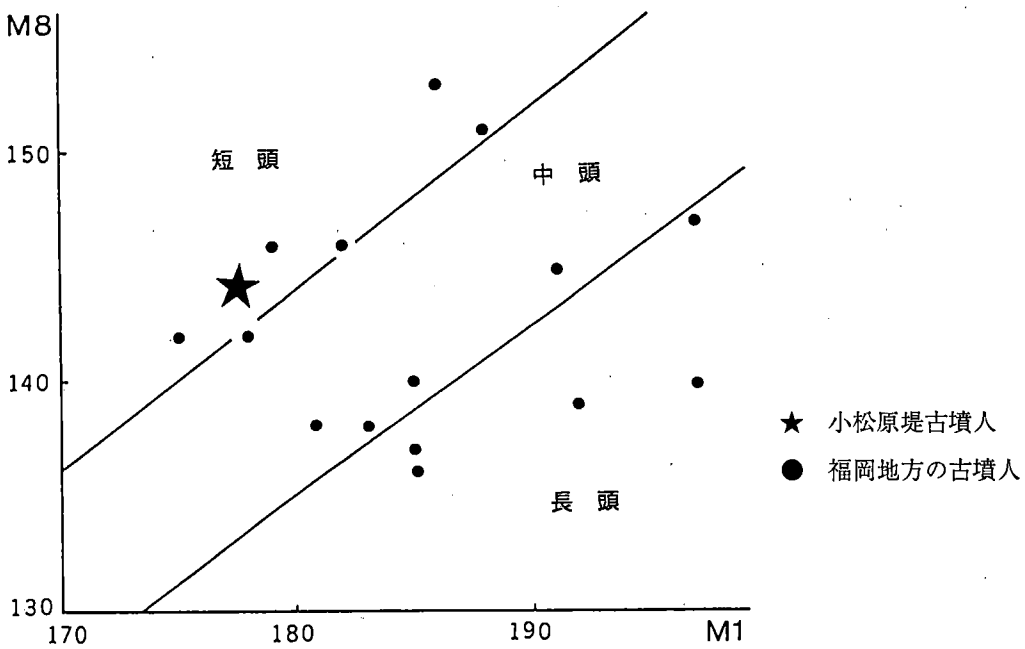


図１　頭蓋最大長、最大幅、長幅示数の比較

表1　頭蓋主要計測値　(mm)

		1号人骨 ♂	2号人骨 ♀	3号人骨 ♀?
1	Max. cranial l.	178	169	186
5	Naso-basilar l.		95	
8	Max. cranial b.	143		
9	Min. front. b.		93	
12	Max. occip. b.		103	
17	Basi-bregmat. h.		125	
25	Medio-sagit. arc		346	
26	Frontal arc	122	114	
27	Parietal arc	137	120	
28	Occipital arc		112	
29	Frontal chord	108	102	
30	Parietal chord	123	108	
31	Occipital chord		96	
43	Upper facial b.		99	
65	Bicondylar b.	132		
66	Bigonial b.	105		
68	Mandibular l.	79		
69	Symphysial h.	29		
69(3)	Mand. body thick(r)	16		
	Mnad. body thick(l)	15		
70r	Ramus h.(r)	71		
71r	Ramus b.(r)	38		
71l	Ramus b.(l)	39		
8/1	Cranial index	80.3		
71/70	Ramus i.(r)	53.5		
Facial flatness				
	Frontal chord		92	
	subtense		15.4	
	index		16.7	

表2　頭蓋非計測的小変異

		1号 ♂		2号 ♀		3号 ♀?	
	Traits	*r*	*l*	*r*	*l*	*r*	*l*
1	Metopism	-		-		-	
2	Supra-orbital foramen		+	-	-	-	
3	Supra-orbital nerve gloove			-	-		
4	Zygofacial foramen absent		-				
5	Ossicle at the lambda	-		-		-	
6	Os incae	-		-			
7	Biasterionic suture(10mm<)		-	-	-	-	
8	Sagital sinus gloove left			-			
9	Hypoglossal canal bridging	-	-	-	-		
10	Jugulara foramen bridging			-	-		
11	Asterionic ossicle			-	-		
12	Occipitomastoid ossicle			-	-		
13	Tympanic dehiscence	-	-	-	-		
14	Aural exostosis	-	-	-	-		
15	Parietal notch bone(5mm<)		-	-	-		
16	Epipteric ossicle				-		
17	Frontotemporal articulation				-		
18	Multiple mental foramina	-	-				
19	Mandibular torus	-	-				
20	Mylohyoid canal	-	-				

表3　歯冠計測値　(mm)

	1号 ♂		2号 ♀		3号 ♀?	
Maxilla	*r*	*l*	*r*	*l*	*r*	*l*
MD-diameter						
I1			8.8			
I2			7.3	7.4		
C			7.6		7.9	
P1			7.7	7.7		
P2			7.5		7.4	
M1			10.2			
M2			9.8	10	9.8	10
BL-diameter						
P1			10	10.1		
P2			9.6		10	
M1			11.1			
M2			11.4	11.8	12.2	12.1
Mandible						
MD-diameter						
I1	6.1	5.9				5.1
I2	6.3	6.3				
C	6.9	6.8	6.3			6.7
P1	7	7	7.3			7.3
P2	7.2	7.2	6.9	7.1	7.8	7.8
M1	11	11				12.1
M2	11.1	11		10.7		
BL-diameter						
P1	7.6	7.6	7.5			8.4
P2	7.9	8	7.7	8.1	9	9
M1	10.4	10.3				11.1
M2	10	10.4		10.1		

表4　上肢骨主要計測値　(mm)

		1号 ♂
Humerus		
5 Max. diam. of mid-shaft	l	24
6 Min. diam. of mid-shaft	l	17
7 Least circumf. of shaft	l	63
7a Circumf. of mid-shaft	l	69
6/5 Index of cross-sec.	l	70.8
Ulna		
3 Least circumf. of shaft	r	39
11 D-V diam. of shaft	r	14
12 Transv. diam. of shaft	r	17.5
11/12 Index of cross-sec	r	80
Radius		
1a Capit.-tub. distance	l	33
3 Least circumference	l	46
4 Transv. diam. of shaft	l	19
4(2) Transv. diam. of neck	l	14
5 D-V diam. of shaft	l	12
5(2) D-V diam. of neck	l	17
5/4 Index of cross-sec.	l	63.2

表5　下肢骨主要計測値

(mm)

	1号 ♂		2号 ♀		3号 ♀?	
Femur	r	l	r	l	r	l
1 Max. length	414					
6 Sagit. diam. of mid-shaft	30	31			27	28
7 Transv. diam. of mid-shaft	28	28			26	27
8 Circumf. of mid-shaft	92	92			85	87
9 Subtr. transv. diam. of shaft	35	35				31
10 Subtr. sagit. diam. of shaft	27	26				24
13 Upper width	98	98				
15 Vert. diam. of neck	34	33				
16 Sagit. diam. of neck	27	27				
17 Circumference of neck	103	100				
18 Vert. diam. of head	47	47			40	
19 Sagit. diam. of head	47	46				
20 Circumference of head	150	148				
6/7 Pilasteric index	107.1	110.7			103.8	103.7
10/9 Platymeric index	77.1	74.3				77.4
(6+7)/1 Robusticity index	14					
Tibia						
8 Max. diam. of mid-shaft	32	32		30		
8a Max. diam. of nut. foram.	36	36		33		
9 Transv. diam. of mid-shaft	26	24		22		
9a Transv. diam. at nut. foram.	29	29		25		
10 Circumf. of mid-shaft	90	88		82		
10a Circumf. at nut. foram.	101	103		93		
10b Min. circumf. of shaft		79		73		73
9/8 Index of cross-sec.	81.3	75		73.3		
9a/8a Cnemic index	80.6	80.6		75.8		

表6　四肢骨主要計測値の比較

(mm)

	小松原堤 1号 ♂		金隈弥生1) l ♂			津雲縄文2) l ♂	
Humerus	r	l	N	Mean		N	Mean
5 Max. diam. of mid-shaft		24	12	23.6		20	23.7
6 Min. diam. of mid-shaft		17	12	17.1		20	17.7
7 Least circumf. of shaft		63	14	63.6		21	64.7
7a Circumf. of mid-shaft		69	12	68.3		19	69.2
6/5 Index of cross-sec.		70.8	12	72.7		20	74.6
Femur							
1 Max. length	414		11	438.3		16	418.2
6 Sagit. diam. of mid-shaft	30	31	33	29.5		20	28.9
7 Transv. diam. of mid-shaf	28	28	33	27.8		20	25.5
8 Circumf. of mid-shaft	92	92	33	90.6		20	86.6
9 Subtr. transv. diam. of sha	35	35	30	33.3		19	30.4
10 Subtr. sagit. diam. of shaf	27	26	30	26		19	24.8
13 Upper width	98	98	4	93.5	18r		90.9
15 Vert. diam. of neck	34	33	4	35.3	20r		31
16 Sagit. diam. of neck	27	27	3	28	19r		25.2
17 Circumference of neck	103	100	3	104.3	19r		94.4
18 Vert. diam. of head	47	47	3	46.7	21r		44.7
19 Sagit. diam. of head	47	46	2	47.5	19r		44.4
20 Circumference of head	150	148	1	148	14		144.6
6/7 Pilasteric index	107	111	33	106.3		20	113.2
10/9 Platymeric index	77.1	74.3	27	78.6		19	81.7
(6+7)/1 Robusticity index	14		11	13.4			
Tibia							
8 Max. diam. of mid-shaft	32	32	31	31		21	31.9
8a Max. diam. of nut. foram.	36	36	25	37.1		19	34.7
9 Transv. diam. of mid-shaf	26	24	31	22.4		21	19.7
9a Transv. diam. at nut. forar	29	29	25	26		19	21.5
10 Circumf. of mid-shaft	90	88	31	85.1		20	82.5
10a Circumf. at nut. foram.	101	103	25	99.1		19	90.7
10b Min. circumf. of shaft		79	27	76.7		17	75.6
9/8 Index of cross-sec.	81.3	75	31	72.5		21	62.4
9a/8a Cnemic index	80.6	80.6	25	70.5		19	62

1) 中橋他(1986　2) 清野・平井(1928)

表7　推定身長の比較　(cm)

小松原堤1号	159.1	
北部九州・山口古墳人3)	162.8	(N=40)
金隈弥生人1)	162.7	(N=17)
津雲縄文人2)	159.9	(N=13)

被葬者の関係について

一つの埋葬施設から複数の人骨が出土した場合、被葬者がどのような関係にあったかということは興味深い問題である。本遺跡の場合、被葬者の構成をみると、1号は男性で年齢は40歳前後位、2号は20代～30代の女性、3号は40代位の女性である。1号は3号の足元にすべての関節が離れた状態でまとめられている。2号は3号埋葬時に頭と四肢を別々に左右に片づけたものと思われる。2号の関節も離れた状態である。したがって埋葬順位は1号→2号→3号の順である。但し、人骨取り上げ時の所見によると思われるが、3号頭蓋が中央に横たわる体部骨に対応するとされている点については、図面や人骨の状態を見た限りでは2号頭蓋に対応する可能性も否定できないように思われる。

いずれにしても、以上の所見から3体それぞれの埋葬時期にはかなりの時間的開きがあったことが推定される。被葬者の年齢構成を考えると、2世代、あるいは2号と3号の頭蓋骨と体部骨との対応が逆であったとすれば3世代だったことになる。

歯冠計測値（歯種の組み合わせは上顎犬歯・第2小臼歯・第2大臼歯、下顎第1小臼歯・第2小臼歯）から求めた2号と3号被葬者の類似度（Q－相関計数）（土肥他，1986）は0.65で比較的高い値を示した。1号被葬者については歯の残りが悪く、同時に分析することは出来なかった。2号と3号の間はかなり近い血縁関係であったことが予想される。

まとめ

福岡県朝倉町の小松原堤古墳から出土した3体の人骨について報告した。被葬者の構成は成年～熟年の男性、成年の女性、熟年の女性？である。人骨の保存状態はあまり良好とはいえない。男性人骨の推定身長は159.1cmであった。

謝　辞

稿を終えるに当たり、人骨調査の機会を与えていただいた小池史哲氏をはじめとする福岡県教育委員会の皆様に心からの謝意を表します。

参考文献

土肥直美・田中良之・船越公威，1986：歯冠計測値による血縁者推定法と古人骨への応用．人類誌，94(2)：47-62.

DOI, N. and Y. TANAKA, 1987: A Geographical cline in metrical characteristics of Kofun skulls from western Japan. J. Anthropo. Soc. Nippon, 95(3): 325-343.

1）中橋孝博・土肥直美・永井昌文，1985：金隈遺跡出土の弥生時代人骨．史跡　金隈遺跡．福岡市教育委員会，43-145

2）清野謙次・平井隆，1928a：津雲貝塚人上肢骨の人類学的研究，人類誌，43：第3附録.
清野謙次・平井隆，1928b：津雲貝塚人下肢骨の人類学的研究，人類誌，43：第4・5付録.

3）永井昌文，1985：Ⅲ北部九州・山口地方．(シンポジウム；国家成立前後の日本人――古墳時代人骨を中心にして――)．季刊人類学，16(3)47-57.

堤古墳人骨

堤古墳人骨

報告書抄録

フリガナ	キュウシュウオウダンジドウシャドウカンケイマイゾウブンカザイチョウサホウコク
書　名	九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告
副書名	朝倉郡朝倉町大字菱野所在妙見墳墓群・堤古墳の調査
巻　次	
シリーズ名	九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第２９集
編集者名	佐々木隆彦　・小池史哲
編集機関	福岡県教育委員会
所在地	〒８１２　福岡市博多区東公園７番７号
発行年月日	西暦　１９９４年３月３１日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ミョウケン フンボグン 妙見墳墓群	朝倉郡朝倉町大字菱野字妙見	40442	570251 ～570283	33°22′40″	130°45′12″	19870803 ～ 19880114 ・・・・ 19830913 ～ 19830922	4660	九州横断自動車道建設に伴う事前調査
ツツミコフン 堤古墳	朝倉郡朝倉町大字菱野字堤・小松原	〃		33°22′30″	130°45′			

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
妙見墳墓群	方形周溝墓	縄文時代 弥生時代 古墳時代	落し穴遺構３基 貯蔵穴１基 墳墓群（箱式石棺墓・石蓋土壙墓・土壙墓・石蓋岩盤刳貫墓・木棺墓） 周溝遺構	弥生式土器・石斧 土師器・鉄器（鉇・刀子・鉄斧・鉄鏃）・装身具・須恵器	人骨１１体
堤古墳	古墳	古墳時代	石棺系竪穴式石室	須恵器・鉄刀 鉄鋤先	人骨３体

九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告

— 29 —

平成６年３月31日

発行　福岡県教育委員会

福岡市博多区東公園７番７号

印刷　栄光印刷株式会社

福岡市東区松田１丁目９－30

福岡県行政資料

分類番号 ＪＨ	所属コード ２１３３０５１
登録年度 Ｈ５	登録番号 2